異常快楽殺人症

緋薇鵺 夢月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異常快楽殺人症

【Ｎコード】
Ｎ３５０３Ｗ

【作者名】
緋薇鵺　夢月

【あらすじ】
殺して、何が悪い？

人間というものは面倒だと、常々思う
感情があるから
けど、その感情がなければ、喜びは得られない

面倒だ

異常と狂気と正常と（前書き）

きっと世間は、僕の事を異常だ、狂ってる、殺人鬼等と呼ぶんだろう。
だが、僕は正常だ。狂っていない、異常じゃない
異常なのは周りに溢れてる愚民達の方だ。誰でも僕のようになる可能性を抱いてるのに
まぁ、僕の楽しみが邪魔されなければそんな事はどうでもいい
僕に共感出来るのなら、君も殺してみるといい。とても、気持ちがいいから

でも、世間の愚民共はきっとこう言うよ
異常だ――って

狂ってるとか、善と悪なんて誰が決める？
真っ当に生きようなんて馬鹿のすることだ
僕は、自分の欲に忠実に生きる
それの、何が悪い？

殺して何が悪い？

異常と狂気と正常と

さぁ、始めよう
ゆっくり痛め付けて、いたぶってあげよう
さぁ、殺そう
止められるなら止めてみせるがいいよ
僕の狂気を
でも僕は異常じゃない
狂ってる訳じゃない
狂ってるなんて誰が決める？
僕自身だ
だから、僕は狂ってない
欲望に忠実なだけだ
血が見たい
悲鳴が訊きたい
殺したい

誰でもいいから

何か悪いか？

何が悪いのか言ってみろ

人殺しはいけないとか、ありきたりな答えはいらない

ただ、僕に殺されろ

答えられないのなら、君が死ぬかい？

さて、これから一人の少年の話をしようか　実に滑稽な話を

六月二日　乾　圭織・海洞　捺彦

乾（いぬい）　圭織（かおり）、海洞（かいどう）　捺彦（なつひこ）、免許証を見てみたらこの二人はそういう名前らしい。
乾　圭織は二十二歳、海洞　捺彦は二十五歳みたいだ。
今日の僕の獲物。
二人で手を繋ぎながら歩いているところを、背後からバッドで殴って、勿論、死なない程度に殴って気絶させた。
どんな恐怖に染まった顔を見せてくれるのか、恐怖と苦痛に染まった悲鳴を上げてくれるのか楽しみだ。
どうやっていたぶって殺してあげようか。
一年前に殺したカップルはどうやって殺したんだっけ？
ああ、そうだ。男を女の目の前で散々痛め付けて殺したんだ。女は泣きながら『やめて、やめて！殺さないで、殺すなら私を殺してぇ！』と言っていたっけ。
女の泣き叫ぶ声を聴きながら男を殺すのも、とても楽しかった。気持ちよかった。
男を殺した後で女を散々痛め付けて、陵辱の限りを尽くして、殺したんだ。
そうだ。海洞　捺彦の目の前で乾　圭織を痛め付けるところを見せつけよう。きっと満足させてくれる反応を見せてくれるに違いない。
海洞　捺彦は……まぁ、乾　圭織で飽きたら首を切り裂くなりあっさり殺してあげよう。

「早く起きてくれないかな…？早く痛め付けたくてうずうずしてるんだ」

きっと今僕は、暗い笑みを浮かべてるんだろう。
僕の笑みを見た人間は必ず息を呑み、恐怖の色を露にする。
あの表情は好きだ。邪魔な感情は全て削ぎ落とされ、純粋な恐怖しか存在しないあの表情はたまらない。
恐怖の表情こそ、恐怖から上げる悲鳴こそ、人間の一番美しい表情なんだ。

「おや…？」

乾　圭織の瞼がぴくっと動いた。
いよいよお目覚めだ。
さぁ、始めようか……。
乾　圭織の瞼がのろのろと開く。
焦点が合わないのか、目が泳いでいる。しばらくして、ようやく僕を見た。
最初はきょとんとした顔をしながらも、しばらくして状況を認識したのか、恐怖の色を露にする。

「えっ…誰？何で私、縛られてるの？」

「何でって君を殺すため。彼氏の目の前で痛め付けて、殺してあげる」乾　圭織の顔に触れてみた。顔のラインに沿って指を這わせる。

「いや……触らないで……」

乾　圭織が嫌悪感を露にして顔を背けようとする。
こういう反応は気に入らない。僕に捕まってここに縛られている以

上、僕の物なのだから逆らわれるのは気に入らない。僕の表情の変化に気付いたのか、乾　圭織が怯えたように息を呑んだ。

「君さ、今の状況分かってる？僕に逆らうんなら、彼氏を君の目の前で殺してあげてもいいんだよ？」

その一言が引き金となったのか、触れられても何も言わず大人しくなる。

「何で……殺されなきゃならないの？私達が何かしたの……？」

目に涙が滲んでいる。

「何も。初対面だし。ただ運が悪かったんだよ。僕に捕まったんだから。ゆっくり痛め付けて殺してあげるよ」

乾　圭織の横に座り、覗き込むようにして顔を見る。

髪の毛に触ってみる。肩胛骨まで伸びた栗色の髪は柔らかく、触り心地がいい。

持ち上げ匂いを嗅いでみる。シャンプーのいい匂いがする。

「……っ…」

微かに呻き声が聴こえ、海洞　捺彦を見てみる。海洞　捺彦がゆっくりと顔を上げていた。

意識がはっきりしないのか、焦点が定まっていない。

しばらくしてようやく僕と乾　圭織を見た。

「ふふ……愛しの彼氏がお目覚めみたいだよ」

そう耳元で囁く。

「お前…誰だよ？何で俺と圭織が縛られてるんだよ？」

その質問に乾　圭織の顔を僕の胸に抱き寄せながら答える。

「何でって君の目の前で君の大切な彼女を痛めつけて、殺してあげるためだよ。君は大切な彼女が殺されるところを、そこで見ているといいよ」

「ふざけるな！圭織に何かしてみろ、俺がお前を殺してやる！」

思わず笑ってしまった。

椅子に縛りつけられているのに、どうやって僕を殺すんだろう。

面白くて仕方がない。

「ねぇ、どうやって僕を殺すの？縛られてるのに。それと、その縄は君には切れないよ。すごく頑丈な縄を使ってるから」

さっかから力任せに縄をほどこうとしていから言ってみた。

言ったところでほどこうとするのをやめはしないけど。

まぁいいや。海洞　捺彦はほっとこう。

今は乾　圭織で楽しめばいいんだ。

乾　圭織に覆い被さり、顎を掴み、唇を重ねる。海洞　捺彦が色々と叫んでるけど、気にしない。

舌を入れようとしたら、舌を少し噛まれた。

だからそういう抵抗は気に入らないんだ。

仕方ない。自分が僕の支配下にあるって自覚させてあげよう。

「ねぇ…僕に逆らえば、彼氏がどうなるか……分かってるよね…？」

乾　圭織の髪を弄りながら耳元で囁く。ほんの少しの怒りを込めて。
囁いた瞬間、びくっと身体が震えたのが伝わってきた。もう一度唇を重ねる。舌を入れたら、今度はすんなり僕の舌を受け入れた。歯茎や舌の裏、口腔内を余すとこなく舐める。
唇を吸って、一旦離すと泣いているのが目に入った。
これからもっと酷いことをするのに。
もう一度唇を重ねて舌を入れる。
乾　圭織は泣きながら僕の舌を受け入れる。
さぁ、これからが本番だよ……？

あぁ、どうやって悲鳴を上げさせよう？どうやって恐怖と苦痛にまみれた悲鳴を上げさせよう？
骨を一本一本へし折っていくのもいい。生きたまま腹を切り裂いて腸（はらわた）を引き摺り出すのもいい。
さて、どちらにしよう…？
今は血が見たい気分だから、生きたまま腸を引き摺り出してやろう。
そうと決まればナイフを出そう。
部屋の隅に置いてある机に向かう。
引き出しを開けると、中に納めていた大振りのナイフを取り出す。
今まで三十人以上の血を吸ったナイフだ。
三十人以上の血と恐怖と苦痛の染み込んだナイフ。
このナイフで今まで三十人以上の人間を殺してきた。
ナイフを持って乾　圭織に視線を向ける。
僕の視線に気づいた瞬間、さっきよりも怯えた表情をしている。
あぁ、あの怯えた表情が更なる恐怖と苦痛に歪む瞬間が楽しみだ。
ナイフを持って、微笑みながら乾　圭織に近づく。

「おい…？それで圭織をどうするつもりだよ？やめろよ、俺を殺せよ！なぁ！」

海洞　捺彦は叫ばせておけばいい。どうせ、後で殺すんだから。
乾　圭織の上に馬乗りになる。

「ひっ！？い、いや…それで何をするの…！？」

何をするのって…そんな事分かりきった事じゃないか。
僕はナイフの刃先を舐め、

「何って…これで今から腹を切り裂くんだよ…ああ、服は邪魔になるね」
刃先に服を引っ掛け、見せつけるように切り裂く。
さぁ、これで邪魔な物は無くなった。

「ふふ…ねぇ…腹を切り裂く時、悲鳴を上げられると思う？」

ナイフの刃先を乾　圭織の腹の皮膚につつ、と滑らさせる。
あまりの恐怖に悲鳴すら上げられないみたいだ。
ナイフを腹に押し当てる。皮膚が少し切れたのか、血が滲む。
滲んだ血を指で拭い取って舐める。ついでにナイフに着いた血も舐める。
血の独特な味と香りが口の中に広がる。
そろそろ、腹を切り裂いて腸を引き摺り出そう。
ゆっくりと僕の頭の高さまでナイフを持ち上げる。
ガタガタと震えながらナイフを見ている。
そして、ナイフを一気に降り下ろす。
ぞぶっとナイフが皮膚を切り裂き、血管を破り、内臓に突き立つ、とてもいい感触がした。
そのまま力を込め、股間の辺りまで切り裂いていく。
返り血で顔や服が血塗れになるけど、そんなことどうでもいい。
一旦ナイフを抜くと、血が逆流しているのか、口から血が垂れてい

る。
呼吸も儘ならないのか、とても苦しそうな表情をしている。
切り裂いたところに手を入れる。ぬるっとした血の感触と内臓の暖かさを感じる。
内臓を掴むとゆっくりと、でも乱暴に引き摺り出した。
乱暴に引き摺り出したためか、所々ぶちぶちという音が聴こえた。
びくびくと乾　圭織の身体が痙攣している。
痙攣しているのを眺めながら、ナイフにべったりと着いた血を舐める。
次第に痙攣は弱くなり、ぴくりとも動かなくなった。

「ふふ、あはは……死んだね、死んじゃったね……！あはは、あははははっ！」
殺した後の興奮と余韻が収まるのを待って、海洞　捺彦を見る。ショックが大きすぎたのか、焦点の定まらない瞳で虚空を見つめている。
あーあ…あれじゃあ楽しめそうにないや。楽しめないんならいいや。
さっさと殺そう。
ナイフを持って海洞　捺彦の前に立つ。
何の反応も示さない。
だったらいいや。壊れた玩具なんかいらない。
海洞　捺彦の髪を掴み、首筋がよく見えるようにする。
そこに、ナイフを深々と突き刺す。
引き抜くと、おびただしい量の血が溢れ出す。
なんだか海洞　捺彦の血が美味しそうに見えた。
指で拭い取り舐めてみる。
思ったより美味しくなかった。
あぁ、そうだ。死体処理をしなきゃ。
今日は二人分あるから少し骨が折れるけど、一人増えたくらいどうってことない。

さっさと済ませて帰って寝よう。

次に僕の餌食になるのは誰かな……？次が楽しみだ……。

六月三日　表日常

また朝が来る

朝は嫌いだ

仮面を被り、偽りの“僕”を演じなければならないから

そして、誰も彼もが“僕”に騙される

目覚まし時計のけたたましい音が響く。

うつ伏せのまま手探りで目覚ましを探す。何かが手に触れた。形を探ると間違いなく目覚ましだ。勢いよく手を降り下ろす。

けたたましい音がようやく止まった。

時間を確かめる。午前七時。いつも通り。

ベッドから下り、寝ぼけ眼を擦りながらカーテンを開ける。

気持ちいい日の光が差し込んでくる。ん～っと背伸びをする。

さて、制服に着替えないと。

欠伸を繰り返しながらクローゼットに掛けてある制服を出す。寝間着を一通り脱ぎ、制服に着替える。

時計を見ると七時十三分。僕の部屋は二階にある。そろそろ一階に下りて顔を洗って、朝食を食べよう。

その前に時間割に間違いがないか確かめる。

数学、理解、世界史、音楽、体育、英語、間違ってない。大丈夫だ。
鞄を部屋に置いたまま部屋を出る。
一階に下りるとすぐに母さんに声をかけられた。

「おはよう、鼎（かなえ）」

テーブルには父さんが座って先に朝食を食べている。

「おはよう母さん。顔洗ってくるよ」

洗面所に向かう。
蛇口を捻り、ばしゃばしゃと顔を洗う。
冷たい。眠気覚ましにはぴったりだ。
ふと鏡を見る。男にしては線の細い顔が写し出される。
鏡に写った自分の顔に触れる。

「……」

「鼎、早く食べないと遅れるわよ」

リビングから母さんの呼ぶ声が聴こえる。

「分かってる、今行く！」

素早く歯を磨き、リビングに戻る。
テーブルに座るとご飯のいい匂いが漂ってくる。
ご飯、豆腐とほうれん草の味噌汁、卵焼きに焼き鮭。朝は決まってこのメニューだ。

「そういえば兄さんはどうしたの？」

「那奈瀬（ななせ）なら、大学は今日は昼からと言ってたから、まだ寝てるんじゃないのか」

「ふーん。いいなぁ、ゆっくりで」

僕には三歳年上の大学生の兄、那奈瀬がいる。
背が高く、スタイルもよく、顔つきも整っている。文句のつけようがない。
時計を見る。七時四十二分。そろそろ学校に行く時間だ。
急いで残りを掻き込む。
「そろそろ準備してくる」

「ちゃんと忘れ物ないようにね」

「うん。分かってるよ」

手を合わせごちそうさまです、と言って立ち上がる。
そのまま二階に上がり、忘れ物がないかもう一度確かめる。
よし、忘れ物はない。
そう思った時、シャランと何かが落ちる音がした。
確かめてみると、見慣れないネックレスが落ちている。手に取って眺める。
ああ、そうだ。このネックレス昨日殺した乾　香織の物だ。デザインが気に入ったから持って帰ってきたんだっけ。
丸い輪っかの中に十字架が下げられているデザインのネックレス。
そのネックレスをとりあえず机にしまう。
さぁ、学校に行こう。

僕の名前は杜塚（もりづか）　鼎（かなえ）。高校二年生の十七歳だ。
昼は普通の高校生、夜は――

快楽殺人者に変貌する。
通学路を歩きながら今更ながら自覚するけど、久しぶりに二人分死体処理をしたせいか少しだるい。
でも絶対に見つからない完璧な場所に隠したのだから、だるいのも心地いいくらいだ。

「杜塚ー、おっはよー！」

ばしっと背中を思い切り叩かれた。

「薪沢（まきざわ）…何度も何度も言うけど、朝から人の背中を叩くのやめてよ。それとも、そんな簡単なことも理解出来ないくらい知能低下しちゃったわけ？」

そう、隣で呆けた顔をしてる男は薪沢（まきざわ）　波哉斗（はやと）、何故か一番仲のいい友達だ。

「知能低下って、人のことをサルみたいに言うなよ」

「サルみたいって、薪沢の知能がサル並なのは事実だよ」

「うわ、ひっでーお前。遂にはサル呼ばわりかよ」

「なんならミジンコでもいい」

「ひ、ひどい…ミジンコって…」

はらはらと泣く真似をしながら歩く。

まぁいいや。あんなのはほっといてさっさと　学校に行こう。

「ちょ、杜塚置いてくなよ～」

薪沢が急いで走ってくる。

「生憎、知能がサル並の阿呆を相手にしてる暇はないんだ」

「うわ～、そこまで言うのかお前。流石に傷ついちゃうぞ」

「傷ついたりしないくせによく言うよ」

二人でふざけながら歩いていると、校門が見えた。

今日も一日頑張ろう。

チャイムが鳴り響く。

八時二十五分知らせるチャイムだ。八時三十五分にもう一度チャイムが鳴れば一限目が始まる。

一限目は確か……そう数学だ。

「なぁ杜塚～、一限目って数学だよな?この前の抜き打ちテスト帰ってきちまうよなぁ?」

薪沢が机に突っ伏しながら訊いてきた。

「多分、帰ってくるだろうね」

「あ～そうか～やっぱりそうかぁ。どうしよう俺、ぜってーヤバイよ。死んでるよ～。テストの点数ヤバイって」

死んだ魚の目をしながらぶつぶつ呟いてる薪沢の方がよっぽどヤバイよ。

その時、八時三十五分を知らせるチャイムが鳴った。チャイムが鳴ると同時に数学教師、芹中（せりなか）　勉（つとむ）が教室に入ってきた。

几帳面なのか、授業が始まる時間に遅れたことは一度もない。

「おしゃべりは終わりですよ！委員長、号令」

「きりーつ、礼」

委員長である日比野（ひびの）　奈火魅（なほみ）が、あまりやる気のない声で号令をかける。

皆立ち上がり礼をする。

「着席」

座る時だけは皆早い。

「この前のテストを返します」

周りからえー、とかいろいろ聴こえてくる。

あの抜き打ちテスト、手抜きだからきっと六十点くらいだろう。

他の生徒がテストを見て喜んだり、落ち込んだりするのを眺める。

「次、杜塚」

立ち上がりテストを受け取る。

机に戻りテストの点数を確認する。八十二点。手抜きにしては思ったよりもいい点数だ。

「杜塚～、お前何点……？」

「八十二点」

「すげぇいい点数だな。俺なんて四十二点だぞ」

「ちゃんと勉強してないからだろ」

「そういう杜塚は勉強してんのかよ？」

「しなくてもこれくらいは点数取れるからいいの」

「くあぁー！恨むぜその頭脳！俺の頭とどう違うんだ！」

「やっぱ出来の違いでしょ」

そんなことを話してる内にテスト返却は終わり、テスト問題の解説が始まった。

一限目は解説で終わった。

二限目英語、三限目音楽、四限目世界史と続きやっと昼になる。

「あーやっと昼飯だ～」

「五限目って体育だっけ？」

「なんだよ昼飯もまだ食ってないのに、次の授業の心配かよ？」

次の授業の心配というより、ただ学校が早く終わって欲しいだけだ。

「薪沢みたいに暢気に出来てないからね」

「ひっで。俺はそこまで暢気じゃねーぞ。お前が几帳面なだけだろ」

「几帳面……ねぇ」

几帳面？そうじゃないよ。ただ演じているだけ。

“学校での杜塚　鼎”を。

あの興奮とこの上ない快楽と、それらを混ぜ合わせた満足感を得るために人を殺すには、周りを騙すための仮面を被り、演じ、騙さなければならない。

だから皆、仮面を被った僕に騙されているんだ。

“仮面を被った僕”を“本当の僕”だと信じて。

家族も友達も先生達も、ましてや警察でさえも“仮面を被った僕”に騙されている。

“学校での杜塚　鼎”も“家族の前での杜塚　鼎”も“警察の前での杜塚　鼎”も、全て仮面を被って演じているだけ。

誰も僕が快楽殺人者だなんて疑わない。

警官に何度か、被害者の写真を見せてきて「この人を見なかったかな？」と訊かれたことはあったけど、僕が殺したとは疑わない。

見ていて愉快だ。犯人は目の前にいるのに。

まぁ、散歩は口実で本当の目的は勿論、獲物を狩るためだ。

人気の全くない場所で獲物を待ち伏せして、たまたま通りかかった獲物に背後から襲いかかり、気絶させた後に鞄に詰めて隠れ家の廃墟に運び、そしていたぶって痛め付けて、最後に殺す。

もし僕が快楽殺人者だと知ったら、周りの人間は僕にどんな視線を向けるだろう。

きっと恐怖と嫌悪と蔑みと、色々なものが入り交じった冷たい視線

を向けるんだろう。
どんな視線を向けられようと構わない。僕の邪魔をしないんなら他人に興味はない。
でも、邪魔をするのなら話は別だ。邪魔するのなら、容赦なく殺す。
例え殺し損ねたとしても、いつか必ず殺しに行くよ。
僕は執念深いんだ。
それはそうと、今日はどうしよう？
あまり寝不足気味になるのはよくないし、今日はやめておこうか。
今日はやめておいてゆっくり寝て、明日楽しもうか。
そうしよう。今日はゆっくり寝て、明日存分に楽しもう。
ふふ……なら明日が楽しみだ。

明日はどういう風にいたぶって痛めつけて殺そうか……？
五限目体育、六限目理解と続き、今日の授業は終わった。
学校にいる時間が一番嫌いだ。吐き気がするほど嫌気が指す。
でも、ちゃんと学校生活を送り、普段の生活を送らなければ人を殺せない。
一度でも怪しまれたら駄目だ。
一度でも怪しまれたら人を殺せなくなる。下手をしたら警察に捕まる。
それだけは嫌だ。何としてでも避けないと。
今まではうまくやってきた。まだこの先何年かは大丈夫だろうと思う。
でもいつかはここを離れて別の場所を探した方がいい。
いつまでもこの場所で殺戮を繰り返すのは危険だ。
大学を選ぶ時は遠い場所にある大学を選ぼう。

「杜塚？お前何考えてんの？」

薪沢が僕の顔を覗き込みながら訊いてくる。

「大学行くんなら何処の大学行くか考えてた」

「かー！やっぱお前の考える事は俺達と違うねぇ！」

そりゃあ違うよ。だってどうしたら長い間、疑われずに殺戮を繰り返せるか考えてるんだから。

「じゃあ杜塚、俺用事でこっちから帰るから。また月曜に。じゃあな」

「うん、それじゃあ」

手を降りながら別れる。

そうだ。明日は土曜日。学校等という牢獄に縛られずにすむ。

ふと古本屋が目に止まった。あの古本屋に行ってみよう。探してた本が見つかるかもしれない。

扉を開き中に入る。古い本も色々置いてある。これは期待出来そうだ。

端から端までじっくり見ていく。

「あ、あった！」

本を手に取り確かめる。確かにこの本だ。

レジに持っていく。三十代くらいの男が座っている。

代金の三百二十円を払ってさっさと店を出る。

ようやく見つけた。

タイトルは世界の殺人鬼。

こういう本は参考になるんだ。人の殺し方について。

今日と明日はこの本をゆっくり読むとしよう。
色々と考えていたらいつの間にか家に着いた。

「ただいま～」

「お帰りなさい」

母さんが笑顔で玄関まで出てくる。
学校から配られたプリントを母さんに渡してリビングに入る。
ニュースが流れている。
田村（たむら）　光輔（こうすけ）二十八歳会社員が行方不明。
田村　光輔……？どこかで聴いた名前だな。
顔写真が画面に写し出される。
ああ……あの会社員、二週間前に殺した会社員だ。

「最近行方不明者多いわね。鼎も気をつけてね」

「うん。気を付けるよ」

でもね、母さん。気をつけるも何も、犯人は僕なんだ。
夕食までの間、買ってきた本を読むことにする。
目次を開くと一番目を引くのは切り裂きジャックだ。有名だし。
切り裂きジャックのページを開く。

「……」

あぁ、駄目だ。切り裂きジャックの殺し方じゃ僕は満足出来ない。
確かに腹を切り裂いて腸を引き摺り出したりするのは好きだけど、
いきなり急所を狙って悲鳴を上げさせない、抵抗さえもさせない殺
り方は、恐怖を味わわせ悲鳴を上げさせたい僕にとっては満足出来

ない。
次を探そう。
ヘンリー・リー・ルーカス……これは参考になるかもしれない。
女を散々犯した後にアキレス腱を切って逃げられないようにし、車で轢いたり、拳銃で撃ち殺す。
流石に車で轢いたり、拳銃で撃ち殺すことは出来ないけど、犯した後にアキレス腱を切ったことはあるな。アキレス腱どころか、足首を骨しか繋がってない状態になるまで切り裂いたことあるし。
ディープキスをして舌を噛み千切る。
これは案外したことなかったな。今度試してみよう。
毒殺……はやめとこう。毒殺するのも面白そうだけど、下手をしたら僕自信に危険が及ぶ。
面白半分で使って自分が死ぬとか、間抜けもいいところだ。
うん。やめとこう。

「鼎、夕食出来たわよ」

「はーい、今行く」

本を閉じ、見付からない場所に隠す。
一階に下り、リビングに入ると、那奈瀬がテーブルに座っていた。

「あれ、帰ってたの？」

「部屋で課題やってたからな。気付かなかったんだろ」

「そうかもね」

テーブルに座り、ご飯を食べ始める。

「お風呂沸いてるから、ご飯食べ終わったら入っていいからね」

「うん、ありがと」

ゆっくりご飯を食べる。しばらくしてご飯を食べ終わり、

「ごちそうさまでした。じゃあ風呂入ってくる」

「ゆっくり入ってきてね」

「うん」

食器を片付けてリビングを出る。
さて、風呂に入ろう。
風呂に入る準備するために二階の部屋に戻る。
タンスの引き出しを開け、寝間着と下着を取り出す。
一階に下り、リビングには入らずに廊下の一番奥にある左の扉を開けると浴室だ。
脱衣室に入り、寝間着と下着を洗面台の隣に置き、服を脱ぐ。
全裸になり脱いだ服を洗濯機に入れ、浴室の扉を開ける。
浴室の温かい湯気が流れ込んでくる。
浴室の扉を閉め、シャワーを頭から浴びる。
シャワーの水が排水口に流れていくのを眺める。血と混ざり、真っ赤に染まったシャワーの水が排水口に流れていくのを連想する。
いつもするように口の中を洗う。
いつもなら血と水の混ざった味がするんだけど。
シャワーを止め、髪を洗う。髪を洗い終えた後、身体を洗う。最後に顔を洗い、浴槽に浸かる。
浸かりながら浴槽の縁に頭をもたれさせる。
十分程浸かって浴槽から出る。これ以上浸かってたら逆上せる。

浴室から出てバスタオルで身体を拭き、寝間着に着替える。
ついでに歯を磨く。
脱衣室から出てリビングに入る。

「母さん風呂上がったよ。次誰入るの」

「母さんは後でいいから那奈瀬先に入らせて」

「分かった。言ってくるね」

「うん。お願いね」

二階に上がる。那奈瀬の部屋の扉をノックする。

「兄さん。母さんが先に風呂入ってって」

「あーい、分かった。ありがとな」

「うん。じゃあ僕部屋に戻るから」

「鼎、今日は夜の散歩はしないのか？」

「今日はしない。寝不足気味になるといけないから」

これは本当だ。

「ふーん、そっか。あ、もう戻っていいぞ」

「うん。おやすみ」

部屋に戻る。ベッドに横になる。今日はこのまま寝てしまおう。
布団を被り目を閉じる。

明日、獲物がどんな恐怖と苦痛に満ちた悲鳴を聴かせてくれるのか考えると、なかなか寝付けなかった。
もうすぐ夜になる。
日中は宿題をやった。二時間程で終わったから、残りの時間は今日の殺害方法について考えた。
女ならやはり、犯すのが一番恐怖と屈辱を煽る方法だろう。
男なら、性器を切り取るのもいい。
まぁ、どう殺すかは殺す前に考えよう。
夕食を食べて風呂に入ったら出掛けよう。
あぁ、まだなのに興奮する。
感情も身体もものすごく昂ってきているのを感じる。
あぁ、早く恐怖に染まった顔を見たい。
恐怖と苦痛に染まった悲鳴と断末魔の絶叫を聴きたい。
あの、滴る真っ赤な血を見たい。
でもまだ我慢だ。今はまだ本当の姿を、快楽殺人者の杜塚　鼎を出しちゃいけない。
今はまだ、家族の前での杜塚　鼎を演じなければ。

「ふふ……あはは、あははは……」

僕の本当の姿に誰も気付かないのが面白くて笑いが込み上げてくる。
ほんの少しいい子を演じるだけで、ここまで誰も疑わないなんて。
皆、表の顔を信じすぎだよ。皆の前で見せる顔だけが全てじゃないんだ。
皆の前では見せない、自分だけが知っている自分の前でしか見せない顔が、誰にでもあるはずなんだ。
だから、先生達も同級生も家族でさえも、その人の全てを信じる訳

じゃない。
皆、家族の前で見せる姿と皆の前で見せる姿とは絶対違うんだ。
だから誰も、本当の意味で信じない。
本当の意味で信じられるのは自分だけだ。

「鼎、ご飯出来たわよ」

「はーい、すぐ行くよ」

普段通りの明るい声を出す。
違和感は全くない。上出来だ。
一階に下りる。リビングに入ると父さんが暗い顔をして座っていた。
ああ、思い出した。昨日のニュースで失踪と報じられた田村　光輔、父さんの部下なんだった。
まぁ、だからといって罪悪感も感傷も感じないけど。
声をかけづらいからちょっと気まずい顔をする、フリをする。

「鼎、そんな気まずい顔をしなくていいぞ。すまないな。気遣わせて」

「でも、行方不明になったの父さんの部下なんでしょ？心配だね。早く見つかるといいね」

「ありがとな」
ゆっくりご飯を食べた後、風呂に入る。
湯船に浸かりながら思う。
もし、田村　光輔を殺したのは僕だと知ったらどんな顔をするんだろう。
田村　光輔の殺し方を知ったら、父さんきっと発狂するだろうな。

だって、至るところの骨を折り砕いた後に、死ぬまでの間ずっとナイフを何度も何度も身体に突き刺したんだから。

「ふふ……あははっ」

獲物が死ぬ瞬間を思い出すと、自然と笑いが漏れる。
さて、上がろう。
素早く身体を拭き、服を着る。
自分の部屋に戻り、ドライヤーで髪を乾かす。
しばらくして一階に下り、

「母さん、気分転換に散歩しに行ってくるよ」

「あら、いってらっしゃい。あまり遅くならないようにね。鼎、いつも十二時になっても帰ってこないでしょう」

「ごめんなさい。なるべく早く帰るようにするよ」

「そうしてね。いってらっしゃい」

「うん。いってきます」

玄関の扉を閉める。
家から一歩外に出れば、ここからは快楽殺人者の杜塚　鼎の出番だ。
夜は快楽殺人者の杜塚　鼎の時間。

さぁ、心置きなく殺そう。
六月四日　金守　修

さぁ、心置きなく殺そう

次は誰にしようか？

君に決めた

君にもう選択肢はないんだ

おとなしく、僕に殺されてもらうよ

君はどんな恐怖と苦痛に満ちた悲鳴を奏でてくれるのかな？

抵抗したらどうなるか……分かるよね？

ふふ、逃げられると思わないでよ

絶対に、逃がさないよ……

獲物を探す前に、獲物を気絶させるためのバッドを持ってこないと。

一度廃ビルに戻ろう。

家から廃ビルまでは歩いて二十十五分くらいの距離だ。

ちょっとした山の中に廃ビルはある。

回りに建物はなく、全く人気がない。

廃ビルを隠れ家に選んだ日から、この周りを人が歩いているところを見たことがない。

だからこそ、廃ビルを隠れ家に選んだ訳だけど。

廃ビルが見えてきた。

扉を開け中に入ると、微かな血の匂いが鼻をくすぐる。

あぁ、やっぱりここが一番安心する。一番居心地がいい。
とはいっても、二階はほとんど使っていない。
使っているのは一番奥にある広い部屋と、シャワー室だけだ。
一番奥にある広い部屋に入る。
ベッドと机と椅子があるだけの部屋だ。
この部屋が一番血の匂いが濃い。まぁ、この部屋で獲物を殺してる訳だから当たり前だけど。
ベッドに置いてある制服に手を伸ばす。
洗いきれなかった血がたっぷりと染み込んだ制服。
中学生の頃の制服だ。中学生の頃からあまり身体つきが変わってないから、未だにこの制服を着て殺している。
殺る時は必ずこの制服を着て殺る。
快楽殺人者の杜塚　鼎の正装だ。
壁に立て掛けているバッドを手に持つ。怪しまれるといけないから、鞄の中に入れる。
さぁ、準備は整った。
獲物を狩りに行こう。

近くの公園まで足を運ぶ。
獲物はすぐ見つかる日と、見つからない日がある。
今日はすぐ見つかった。
トイレの近くで男が三人、楽しそうに話している。
服装、髪型、髪色を見る辺り、どうやら不良みたいだ。
不良なら家にもあまり帰らないだろうし、家族もあまり心配しないはず。
失踪しても気づかれ難いはずだ。
よし、あの三人の中の誰かにしよう。
話し終わるのをひたすら待つ。

早く話し終わってくれないかなぁ。焦らされるのは好きじゃないんだ。

十五分待ってようやく話し終わって、三人散り散りになる。好都合だ。

誰にしようかな…？よし、真ん中にいた金守　修と呼ばれていた男にしよう。

僕は気づかれないように、金守　修の後を追いかける。

強く吹いた風が、木々を揺らした。

怪しまれないように金守　修の後をつける。

周りに誰もいないか確かめる。よし……誰もいないみたいだね。

鞄からバッドを取り出す。

足音を立てずに金守　修のすぐ後ろに近づく。

そしてバッドを振り上げ――

後頭部を殴りつける。

一発で倒れてくれて助かるよ。

一発で倒れない獲物が五人に一人くらいはいるんだ。

もう一度殴りつける時、加減を間違えて撲殺しちゃう時があるんだよね。

最近はもうそんなヘマをしないけど、一発で倒れてくれた方が助かる。

うまく脳震盪を起こしたみたいで、起き上がってくる気配はない。

バッドを鞄に直し、金守　修を鞄に詰める。

うまく手足を折らないと、なかなか入らない。

持ち上げてみると案外軽い。

廃ビルまで早足で戻る。

いくら人気がないといっても、万が一ということがある。警戒するに越したことはない。

山の入り口でもう一度周りを見渡す。誰もいないみたいだ。

それからしばらく歩き、廃ビルが見えてきてほっとする。
廃ビルの中に入って、金守　修を一番奥の部屋に置いてあるベッドに寝かせる。
机の中から縄を取り出す。
今日は……後ろ手に縛ろうか。ついでに足も縛る。
さぁ、これで準備万端だ。

「ふふ、さぁ……楽しませてよ金守　修」
どうやって楽しもうか？
楽しむ方法はいくらでもある。
恐怖と苦痛を味わわせる方法はいくらでもあるんだ。
ああ、目玉を抉り出すのはどうだろう。
この前目玉を抉り出した風俗嬢は、とてもいい悲鳴を聴かせてくれた。
抉り出した目玉は美味しかったなぁ。
金守　修にも同じことをしようか。
とても痛いから、心地いい悲鳴を聴かせてくれるだろうなぁ。わくわくする。
さて、起きる前にナイフを用意しよう。
机の引き出しからナイフを取り出す。
一昨日新しく乾　香織と海洞　捺彦の血を吸った愛用のナイフ。
ナイフを蛍光灯の光にかざす。蛍光灯の光を反射して、鈍い光を放つ。
ナイフの刃先を舐め、

「ふふ……もうすぐ新しい血を吸わせてあげるよ……」

金守　修に視線を戻す。
いつの間にか起きてたみたいで、縄を外そうと躍起になっている。
無駄なのに。

「やぁ、目が覚めたみたいだね」

ナイフを持って近づく。

金守　修は怯えた顔で僕を見ている。

「ひっ……来るな、来るなぁ！嫌だ、助けてくれ、なんでもするから……」

あぁ、この表情だ。余計な感情を全て排除した恐怖の表情。

たまらない。ぞくぞくする。

これからどんな悲鳴を聴かせてくれるのか、わくわくする。でも、命乞いは気に入らない。

ざわざわと血が騒ぐ。

ものすごく興奮してくる。身体も感情も限りなく昂ってくる。

唇が更につり上がるのを感じた。

僕の表情を見て、金守　修は声にならない悲鳴を上げる。

ベッドに上り、わざとゆっくり近づく。

金守　修は悲鳴を上げながら、縄をほどこうと必死になる。

とてもいい反応だ。悲鳴が耳に心地いい。

もっと恐怖に染まった表情が見たくて、わざとベッドにナイフを突き立てた。

「ひっ……！？」

金守　修は突き立てたナイフを目を見開いて見つめる。

金切り声を上げながら、僕から少しでも離れようと身体を捩る。

面白くて頬に指を這わせてみる。

ただ頬に指を這わせただけなのに、磨り潰されるような悲鳴を上げる。

楽しくて仕方ない。

目に手を伸ばす。
ぎゅっと目を閉じられた。
まぁ、目に手を伸ばされたら、反射で閉じるのは当たり前だよね。
でも、抵抗は気に入らない。
ベッドに突き立てていたナイフを抜くと、柄をしっかり握り、金守修の腕に突き刺した。

「あ〝あ〝ぁ〝あぁぁあ！」

耳に心地いい悲鳴だ。
ナイフを抜くと、思ったより血が溢れ出した。
ナイフに着いた血を舐める。

「嫌だ、助けてくれ……死にたくない……」

……そんな命乞い、どうでもいいんだよ。聴き飽きた。
お前のその命乞い、あの女に似ててイライラするんだよ。

『嫌……死にたくない……』

ああ、思い出したじゃないか！
……駄目だ。あんな女のことを思い出して熱くなるな。冷静になれ。
ゆっくりと呼吸を繰り返す。なんとか落ち着いた。
ナイフを脇に置き、金守　修の顎を掴む。
右目の瞼を親指と薬指で閉じられないように押さえる。

そこに人差し指を捩じ込み……
ぶぢゅ……

「う〝あ〝あ〝ぁあああぁああ！」

ずるり、と目玉を引き摺り出す。視神経らしきものも一緒に出てきた。
眼窩から血が垂れる。
それを眺めながら引き摺り出した目玉を口に入れる。
噛むと血が溢れ出してくる。
目玉ってなんだかゆで卵の白身の食感に似てる気がする。
しばらく目玉を噛みごくん、と飲み込む。
案外美味しかった。
金守　修は残った左目だけで、震えながら僕を見る。

本番は、これからだよ……？
わざと頬にナイフをつつ、と滑らせる。
最早、空気が漏れるような悲鳴を上げるだけだ。
さっきから何か言ってるけど、何を言ってるのか分からない。
きっと命乞いだろう。
最初から殺すつもりなんだから助けたりしないよ。
左手を掴み、掌にナイフを突き刺す。
突き刺したまま、ナイフを左右に動かし傷口を抉る。

「あ〝ぁぁあああぁ！」

「はは、あははははっ……！」

あぁ、楽しくて愉しくて仕方ない。
そろそろ本番といこうか。
金守　修を無理矢理うつ伏せにさせる。
暴れるから首を掴み、強引に力づくで押さえつける。

「嫌だ……死にたくない……助けてくれ……」

「うるさいなぁ……少し黙っててよ」

服を切り裂いていく。うっすらと日焼けした肌が露になる。
人差し指で背中を撫でる。
今まで以上に震えているのが伝わってくる。
うっそりと笑う。
ナイフをしっかりと握り、背骨を避けてナイフを二センチくらい刺す。
そのまま腰までゆっくりと切り裂いていく。
腰まで切り裂いて一旦ナイフを抜く。
切り裂いたところから血が背中を伝い、ベッドに染み込んでいく。
切り裂いた皮膚をつまみ、そこにナイフを宛がう。
ゆっくりとナイフを動かし、皮膚を剥いでいく。
ある程度剥いだところでナイフを置き剥いだ皮膚を掴むと、力任せに引き剥がす。

ぶぢぶぢぶぢ……！
皮膚と血管がぶちぶちと千切れる音と感触が伝わってくる。
肉の剥き出しになった背中にわざと爪を突き立て、引っ掻く。
爪の間に肉の破片が入り込む。
そのままにしておくと気持ち悪いから、歯で取り除き飲み込む。
もう悲鳴さえ上げられないのか、痙攣だけを繰り返す。
もうそろそろ死んじゃうかもしれないな……。まぁいいか。
痙攣するのを眺めながら残りの皮膚を時間をかけてゆっくりと剥いでいく。

「あれ……？」

いつの間にか痙攣どころか、ぴくりとも動かなくなったのに気付く。

「おーい、死んじゃった？」

死んだか確かめるためにナイフを背中に突き立てる。

何の反応も示さない。

「あーあ、死んじゃったかぁ。もう少し楽しむつもりだったんだけど……まぁいいか、楽しめたし……ふふ……あはは、はは……あはは、あはははははっ！」

笑いが込み上げてきて仕方ない。

殺した後の興奮とこの上ない快楽と、それらを混ぜ合わせた満足感がぞくぞくと背筋を駆け抜けて全身に回っていく。

しばらくの間興奮と快楽と満足感に浸る。

それらが過ぎ去るのを待つ。

ようやくそれらが過ぎ去って落ち着きを取り戻す。

ふぅ、と息を吐く。

あぁ、死体処理をしなきゃ。

これくらいなら、すぐ済みそうだ。

一時間かけて死体処理を終わらせる。

死体がなくなって、僕が殺したという証拠がなくなってほっとする。

ベッドに座り、壁にもたれる。

身体を見ると全身血塗れだ。

殺す時よりも死体処理をする時が、一番血で汚れる。

頬を触るとぬるっとした感触が伝わってくる。

この感触だ。この感触に全身を包まれている時が一番心地よくて、気持ちよくて、安心する。

手を天井に伸ばす。気持ちいいくらいの赤が手を包んでいる。
手を口に運び、指に着いている血を舐める。
金守　修の血は今まで殺してきた不良の中では一番美味しかった。
もう少しこのままでいたいけど、あまり帰りが遅くなって怪しまれるといけないから、そろそろ血を洗い流そう。
億劫だけど立ち上がる。
立ち上がりナイフを持ってシャワー室に向かう。
脱衣室に入り、バスタオルと家から着てきた寝間着が置いてあるか確認する。
二つともちゃんとある。
制服を脱ぎ、全裸になる。
洗うために制服とナイフを持ってシャワー室に入る。
洗面器に水を溜め、制服を洗う。血がべっとりと着いていて、水洗いだけじゃ絶対に落ちない。
血が染みついている方が好みだから、落ちなくても別にいいけど。
洗い終わって適当に絞り、隅の方に置く。
シャワーを浴びる。ザーっという音と共に血が洗い流されていく。
血と混ざり、真っ赤に染まった水が排水口に流れていく。
口の中をゆすぐ。血の味も一緒に洗い流されていく。少し残念だ。
それにしても、今日は嫌な事を思い出したな。
あの女だけは未だに許せない。絶対に許さない。許してたまるか。
あれだけいたぶって痛めつけても、まだ足りないくらいだ。
あっさりと死にやがって。お前らは僕を騙したくせに。僕の気持ちを弄んだくせに。
まぁいいさ。最後は苦しんで死んで逝ったんだから。
まぁ、お前らにひとつだけ感謝するとしたら、人を信じると馬鹿をみる、人を信じたら裏切られるってことを教えてくれたことに感謝してやるよ。
さて、身体を洗おう。
掛けてあったタオルを取り、身体を洗う。

しばらくして血がちゃんと落ちているか確かめる。
よし、ちゃんと落ちているみたいだ。
ナイフを洗う。

「ふふ……金守　修で三十三人目…」

そう、金守　修で三十三人目。まだまだ殺すよ。
ナイフの血も落とし、制服をもう一度洗う。今度はきちんと絞り、シャワー室を出る。
バスタオルで身体を拭き、服を着る。
脱衣室を出て、奥の部屋に戻る。
元々掛けてあった制服をハンガーから外し、洗った制服を掛ける。
乾いている制服をたたみ、ベッドの真ん中に置く。
ナイフを机に直す。時計を見ると午前二時十八分。
思ったより時間かからなかったみたいだ。
そろそろ帰ろう。
部屋を出る前にもう一度部屋を見渡す。
染み込んだ血は仕方ないけど、拭き取れる血は一滴残らず拭き取れているみたいで満足する。
さぁ帰ろう。
扉を開けると満月が見えた。月は好きだ。特に満月は。
満月を光を浴びて帰ろう。

二十五分かけて家に帰る。
音を立てないように鍵を開け、扉をそっと閉める。
靴を脱ぎ、足音を消して廊下を歩く。
脱衣室の洗面台で歯を磨いた後、部屋に戻る。
午前三時九分。目覚ましを九時に設定する。

布団に潜り込む。
目を閉じる。

夢を見た。
七年前・七月八日　きっかけ

夢を見た

七年前の、僕が快楽殺人者となるきっかけとなった夢を

きっとほとんどの人間が『こんなことがきっかけとなるのか?』と
思うだろうね

僕にとっては充分なきっかけ

何をするにも、君達にもきっかけがあるはずだよね?

何がきっかけとなるのか分からない

何がきっかけとなるのか人それぞれなんだから
七年前の、僕が快楽殺人者となるきっかけの事件の夢を見た。
あの日の事は今でも鮮明に覚えてる。
きっとあの日にあんな物さえ見なければ、僕が快楽殺人者になる事
はなかったのだと思う。
今更もしも、きっとも、ないのだろうけど。
あの日まで僕もただの子供だったんだ。

自分の中に、どんな闇と狂気が潜んでいるか知らない子供だったんだ。
自分の中にどんな闇と狂気を抱え込んでいるのか気付いていない子供。

あの日はいつもと変わらずに始まった。
あの日はいつもと同じように見せかけて始まったんだ。
あの日、那奈瀬は友達と遊びに出掛けて、僕は母さんと、母さんの友人の鈴波（すずなみ）　璃依（りえ）と一緒に近くのレストランまで食事しに行ったんだ。
何を食べたかまでははっきり覚えてないけど。
それから公園に行ったんだ。
僕は蝶を追いかけたり、いろんな虫を探して遊んで、母さん達は話に花を咲かしてた。
蝶を追いかけるとか、思い出すとかなり恥ずかしい趣味だ。
まぁ、今も変わらないけど。
それは置いといて、蝶を追いかけて、母さん達から見えにくい一番奥の茂みを掻き分けた時だ。
あるものが僕の目に飛び込んできた。
それはあまりにも非現実過ぎて、最初それが何なのか理解出来なかった。
しばらく動けずにいたけど、やっと脳が理解出来るようになって、急いで母さんを呼びに行く。

「母さん、急いでこっち来て！」

腕をぐいぐい引っ張る。

「かなちゃん？どうしたの？そんなに急がなくても…」

「いいから！」

母さんを奥の茂みまで引っ張る。

茂みを掻き分け、あまりに非現実過ぎるそれを指差す。

「母さんあれ、何？」

その瞬間、二人分のひっ、と息を呑む音が聴こえた。

もう一度それに視線を戻す。

そこに無造作に落ちているそれは、女性のバラバラに切断された死体――

瞳孔が開きどんよりと濁った瞳が、僕を見ているように感じた。

母さん達が「警察に電話しなきゃ」と騒いでるのを感じながら、僕は死体にじっと見入る。

なんだろう。あの死体に凄く惹かれる。

心臓がどくどくと激しく脈打ち、呼吸が浅く荒くなってくる。

今まで感じたことがないほど、興奮してくる。

興奮……？

そうだ、僕はあの死体を見て興奮してる。

だってあの死体から目を背けずに、むしろ惹かれてじっと見入ってるのがその証拠じゃないか。

母さんが僕の前にしゃがむ。

「かなちゃん、可哀想に。怖かったでしょう。さ、あっちに行きましょ」

「うん……」

母さんは僕に死体が見えないように立ち上がり、死体の見えない位置まで手を引く。
ちらりと死体に視線を向ける。
この感情を口に出してはいけない。
一度でも口に出したら、奇怪なものを見る冷たい視線を向けられるに決まってる。
だってあの死体を見て綺麗だ、と思ったんだから。

僕の中でぱぁん、と何かが音を立てて割れた音がした。
割れたところから、黒くてどろりとしたものが溢れ出してくるのを感じた。
この黒くてどろりとしたものは何？
これは僕の中にずっと潜んでた、僕が抱え込んでた狂気？
じゃあ、これだけどす黒いのは、それだけ闇の深い狂気だから？
ああ、そうか。今粉々に砕け散って割れたのは、この黒くてどろりとしたものを塞き止めておく“壁”だったんだ。
“壁”がなくなったから、この黒くてどろりとしたものが溢れ出して来たんだ。
塞き止めておくための“壁”がなくなったんだから、際限なく溢れ出してくるに違いない。
僕の心を狂気で染め上げようとするに違いない。
僕は、僕の中にずっと潜んでたこの狂気を暴れださないようにずっと抑え込まなきゃいけないんだ。
じゃないとこの狂気は必ず人に牙を剥く。

僕も、ああいう風に人を殺してみたいと思ったんだから。
しばらくして警察が来て、現場検証が始まった。
サスペンスで見る現場検証そのものだ。

母さんは死体を発見した経緯を警察に話している。
ベンチに座ってそれを眺める。

「鼎君大丈夫？顔色悪いよ」

鈴波　璃依が僕の顔を覗き込みながら訊いてくる。

「うん、大丈夫。おばさんこそ大丈夫？」

「おばさんは大丈夫じゃないな～。鼎君の方が大丈夫みたい」

そりゃあね、大丈夫といえば大丈夫だよ。
だってあの死体を見て綺麗だって思ったんだから。
きっとこの感情を誰も理解出来ない。
目の前で警官がしゃがみ込んだ。

「やぁ、私は澱沼（おりぬま）　瑛士（えいじ）っていうんだ。君は杜塚　鼎君でいいかな？」

澱沼　瑛士か。年齢は三十代前半に見える。耳くらいの長さの髪に、誠実そうな顔つきをしている。

「辛いことを訊くけど、死体を見つけた時のことを話してくれるかな？」

「あの、僕、蝶を追いかけて遊んでたんです。奥のあの茂みを掻き分けたら、あの、バラバラの死体が…」

どうしよう。あの死体を思い出したら興奮してくる。興奮して、うまく言葉が話せなくなる。

「ごめんね。もういいよ。それだけ訊けたら十分だから」

俯いて地面をじっと見る。
この人も鈴波　璃依も僕が怖がってると思ってるんだ。
違うのに。僕はあの死体にどうしようもなく惹かれるんだ。
あの死体を見て人を殺してみたいと思ったんだ。
人を殺してみたいなんて思っちゃいけないのに。
どうしたらいいんだろう。分からない。
このままだったら、僕は狂気に覆い尽くされてきっと人を殺す。
この狂気が暴れださないようにするにはどうしたらいいんだろう。
この狂気が怖い。

「かなちゃん、璃依、警察の人がもう帰っていいって。さ、帰りましょ」

「そうね。帰りましょ。死体がある場所にいたくないわ」

僕の目の前に伸ばされた母さんの手を握る。
結局、家に着くまで一言も喋れなかった。

こんな恐ろしい狂気に気づかなかったらよかった。
あの死体を見なければ、こんな恐ろしい狂気に気づかなくて済んだのに。
家に着く。
靴を脱ぎリビングに行こうとしたら、

「かなちゃん、大丈夫？夕食まで部屋で寝てきたら？夕食になったら起こしてあげるから」

別に眠くはないけど、一人になりたい気分だから母さんの言う通りにする。

「うん。じゃあ、部屋で寝とくね」

「夕食には起こすからね」

「うん。ありがと」

二階に上がり、自分の部屋に戻る。扉をぱたんと閉め、ベッドに倒れ込む。
仰向けになり、手を天井に伸ばす。
なんだか疲れた……。
それなのに興奮がまだ収まらない。
これからどうしたらいいか考えないと。
この狂気は押さえつけて溜め込んでいくのは危険だ。
かといって発散させることも出来ない。
まぁ、考える時間はいくらでもあるか。
なんだか眠くなってきた。
目を閉じる。

「ん……」

窓から射し込んでくる朝日が眩しい。
布団を頭まで被って目が光に慣れるのを待つ。
数分してやっと目が慣れてきて、何時だろうと思って時計を見る。
午前六時八分。
今日が日曜日であることを考えると、起きるにはかなり早い時間だ。

九時まで寝ておこう。
ふと、夢の内容を思い出す。

「珍しいなぁ、七年前の夢を見るなんて……。そういえば僕、最初は人を殺すことが怖かったんだっけ……？」

今となっては、なぜ怖かったのか全く分からない。理解出来ない。
一度でも人を殺したら狂気を止められなくなるから？
警察に捕まりたくなかったから？
別にどうでもいいや。過去のことなんて振り返ったってどうにもならないんだから。
もう一度寝よう。
目を閉じる。

今度は夢を見なかった。
六月五日　表日常

そっか、今日は那奈瀬の誕生日なのか

忘れてたよ

はっきり言って家族の誕生日だろうが興味ないんだけどな

仕方ないか……
安眠を妨害する目覚ましのけたたましい音がする。
気持ちよく寝てたのに。目覚ましを黙らせる。

それにしてももう九時か。
欠伸を繰り返しながらベッドから出る。
カーテンを開け、窓を開ける。
六月にしては冷たい空気が入り込んでくる。
ぼ～としながら、しばらく冷たい空気に当たる。
なんとか目が覚めてきた。着替えよう。
タンスを開け服を出す。
寝間着を脱ぎ、黒のTシャツにGパンというお決まりの服に着替える。
お決まりというか私服といったら、黒のTシャツにGパンしか持ってない。
選ぶのもめんどくさいし、黒は好きだから他の服なんかなくても充分だ。
お洒落だかなんだかに時間を割くなんて、気が知れない。
一階に下り顔を洗い、リビングに入る。

「おはよう、母さん」

「おはよう鼎。今日は何の日か分かる？」

母さんが嬉しそうに話す。母さんがこういう風に訊いてくるってことは、今日は何か特別な事がある日ってことだ。
今日は何があるんだっけ……？
あっ……。

「兄さんの誕生日だ……」

そう言うと、母さんは嬉しそうに笑う。

「そう、今日は那奈瀬の誕生日よ。今日夜の予定はないわよね？」

「ないよ。大丈夫」

「今日母さん頑張るわよ。鼎も楽しみにしててね」

「うん。楽しみにしてるよ」

ああ、今日は那奈瀬の誕生日なのか。
はっきり言って家族の誕生日だろうが興味ないんだけど。
そもそも他人に興味ないんだ。興味があるのは自分だけ。
今日も獲物を狩るつもりだったんだけど、仕方ないか。今日はやめにしよう。
表面上だけは祝ってあげるよ。
夜になるのをひたすら待つ。
それにしても誕生日か。
誕生日なんて祝うことに意味はあるのかな。僕には誕生日を祝う意味が分からない。
生まれた日を祝ってどうするんだろう。
本当にただ、その日に生まれたってだけじゃないか。
自分の誕生日ですらどうでもよくて忘れてる時があるのに。
まぁ、気持ちとしては祝うつもりは更々ないけど、家族の前での杜塚　鼎を演じなきゃならないんだから、表面上だけは祝ってあげよう。
はぁ……めんどくさい。
思ってもないことをいつも以上に偽って言葉にしなきゃならないのか。
まぁいいさ。
時計を見る。もうそろそろ母さんが呼びにくる時間だな。

「鼎〜、下りてきて。出来たわよ」

「は～い」

さて、めんどくさいけど家族の前での杜塚　鼎を演じよう。
リビングに入る。
母さん本当に頑張ったんだな。普段食卓に出ない物がたくさんある。
那奈瀬は先に座ってて、座るように手招きしてくる。

「鼎さっさと座れよ。今日は食べるぞ～」

「うん。母さん本当に頑張ったんだね」

「そりゃあそうよ。一年に一度しかない大切な日なんだもの。父さんいないのは残念だけどね」

そっか、父さんは今日出張なんだっけ。

「ま、父ちゃんは仕方ねぇよ。父ちゃんの分まで俺が食べるから心配しなくていいって」

「あら、太るわよ」

「太る料理作ってんの母さんだけど」

「嫌なら食べなくていいわよ？」

「いや、食べさせていただきます」

二人の会話を聴きながら笑う。勿論表面上だけ。
その日は最後のしめに、ケーキを食べて終わった。

六月六日　如月　薫・尾行

さぁ、言ってごらんよ

骨を折られるなら何処がいい？

右腕？左腕？

指を一本づつ折っていく？

右足？左足？

それとも肋骨？

君は何処から折られたい？

「終わった……」

やっと学校が終わった。これで牢獄から解放される。

清々しい気分だ。

「杜塚～、帰ろうぜ」

「悪いけど、今日は用事があるから一人で帰るよ」

本当は用事じゃないけどね。

薪沢は見るからに残念そうな顔をする。相変わらず表情豊かだね。

僕には無理だよ。

「う〜、そっか。じゃあ仕方ねぇか。んじゃまた明日」

「じゃあね」

薪沢が手を振ってきたから僕も振り返す。

さて、駅まで行こう。

駅に着く。下校時間とあって駅構内は学生で溢れてる。

さて、どちらに行こうか。

右に行くとホテルや高層ビルが多い。

左に行くと住宅街。

右に行こう。もしかしたら格好の獲物候補が見つかるかもしれない。

信号を右に曲がる。あまり歩かない内に、高層ビルやホテルが多くなる。

勿論、高校生の姿はない。こんな所に用のある高校生なんていないだろう。

の、はずなのに、三十代くらいの男と一緒に歩く女子高生を見つけた。

なんだか見覚えがある。

「あれは……如月（きさらぎ）　薫（かおる）……？」

そうだ。クラスは違うけど、同じ二年の如月　薫だ。

どうして三十代くらいの男と一緒に歩いているんだろう。

父親とか？違うか。親子なら顔が似てなさすぎる。なら、恋人？だとしたら結構年離れてるな。

それか……援助交際？……可能性はあるな。

二人には見えない位置で、二人を観察する。
楽しそうに話ながら周りを気にし出す。
周りに誰もいないことを確認したのか、如月　薫は男の首に腕を回し、顔を近づける――

あぁ、それ以上はやめろ。
見たくないのに、目が釘付けになる。

二人の顔が近づき、そして、唇を重ね合わせた――

それから長い間、お互いの唇を貪るような口付けが続く。
ようやくお互いの唇を離す。
そして男は鞄から財布を取り出し一万円札を二枚、如月　薫に手渡した。
ふーん……、やっぱり援助交際なんだ。これからラブホテルでも行って本番か？
毎日違う男と寝てるのかな？
だとしたら何日か尾行でもしようか。
どうなるのか楽しみだ。今日は帰ろう。
午後九時三十六分。僕は薄暗い自分の部屋で写真を眺める。
写真といってもただの写真じゃない。如月　薫のように尾行して、不倫現場や援助交際の現場を収めた写真。
如月　薫は明日から尾行して写真に撮るけどね。
ふふ……楽しみだ。
もうひとつ、机からある物を取り出す。
僕の餌食となった獲物達の免許証や保険証。学生証もある。
獲物の身元を証明する物を集めるのが好きなんだ。言わばコレクションだね。
たまに免許証も保険証も持ってない獲物がいるけど、その時は仕方ないから諦める。

獲物が持っていた鞄や鞄の中に入っている物は、近くのマンションのごみ捨て場に他のごみと混ぜて捨てる。まぁ、現金はもったいないから貰っていくけど。
免許証や保険証を見ていく。たまにこんな人間殺したっけ？と疑問になる獲物がいる。免許証がここにあるんだから殺したんだろうけど。
一通り見て、ゴムで束ねて机の引き出しの奥に隠す。
写真は、少し分厚い本のページを真ん中だけくり貫いた中に収め、本棚に直す。
僕の部屋に人が入るのはあまりないけど、見つかり難いように用心するに越したことはない。
もう一度引き出しを開け、デジカメを取り出す。
デジカメを学校指定の鞄に入れる。
ふふ……明日はどんな写真が撮れるかな……？
でも、僕は本当は不倫や援助交際をする人間が一番嫌いなんだ。許せない。
理由？理由は追々分かるよ。
不倫や援助交際をしてる人間はどんな理由であれ、どんな人間であろうと真っ先に殺したくなる。
だから如月　薫も最後まで付き合ってもらうよ。
さて、今日はもう寝よう。
電気を消し、布団に潜り込む。
目を閉じる。
今日は早く起きて早めに学校に来た。
如月　薫のロッカーがどこか知るためだ。
ロッカーの近くで怪しまれないように如月　薫が来るのをひたすら待つ。

なかなか来ないな…。もう八時二十五分になるぞ。
ほとんどの生徒が教室に戻り始めてるのに。
おや…？やっと来た。
さぁ、君のロッカーの場所を僕に教えて？
如月　薫は慌てて上履きに履き替える。
ふーん…右から八番目、下から三段目が君のロッカーか。
ちゃんと覚えたよ。
楽しみにしててよ。君に恐怖をプレゼントしてあげるから。
さて、教室に戻ろう。

「杜塚、何処行ってたんだよ」

「別に。少しぶらぶらしてただけ」

これで学校での準備は出来た。
くすくす……楽しみだ。
授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響く。
ふふ……学校を一歩でも出たら始まりだ。

「杜塚～、また明日な」

「うん。じゃあね」

薪沢には今日も用事があるからと言ってある。
教室を出て如月　薫を探す。
いたいた…
前からちょうど如月　薫が教室から出てきた。
目の前を通るけど、素知らぬ顔ですれ違う。

後を付ける。
見失わないように注意して靴に履き替える。
もう少しで学校の敷地を完全に出る。
学校さえ出てしまえば、僕にとっては無法地帯も同じ。
好きなように行動出来る。
さぁ、始めようか。
如月　薫。
如月　薫の後を怪しまれないように付ける。
付かず離れずに。
僕の尾行に全く気付いてないみたいだ。
駅を通りすぎ、昨日と同じビルの密集地に入る。
あるビルの前で立ち止まった。
僕も木の影に隠れて立ち止まる。
あそこで男と待ち合わせかな…？
如月　薫は人待ちが嫌いなのか、イライラとした様子で頭を掻く。
デジカメを取り出し、電源を入れる。
五分ほど経って、一人の男が如月　薫に近づく。昨日の男とは別の男だ。
四十代くらいの男。
如月　薫は男に気付くと、イライラした様子は微塵も見せずに男に笑顔で手を振る。
如月　薫は男の首に手を回し口付けを交わす。
その様子をデジカメに収める。
口付けが終わると男は一万円札を四枚、如月　薫に手渡した。
その様子もデジカメに収める。
それにしても、よく四万も手渡すな。その前に、援助交際なんかしてる女なんか、よく抱けるよ。抱く男の気も知れない。
そんな腐敗した身体なんか抱いたら、こっちまで腐る。
ふん……まぁ、抱きたい男は抱けばいいさ。僕の知ったことじゃない。

如月　薫と男が歩き出した。僕も追いかける。
きっとラブホテルだろうな。
しばらく歩いて二人であるホテルに入っていく。
入っていくところもデジカメに収める。
ホテルの看板を見ると【ハルマゲドン】と書いてある。
ハルマゲドンって確か、新約聖書ヨハネの黙示録にある、善と悪の最終戦争じゃなかったっけ？
何を思って店名にしたんだろ。
まぁ、ラブホテルでこれから本番ってことは、少なくとも三時間は出てこないだろうな。下手したら一晩中。
今日はこれで打ち止めにしよう。そこまで待つほど、僕は気が長くないんだ。
帰ろう。
午後十時二分。いつものように薄暗くした部屋で、デジカメで撮った写真をパソコンで確認していく。
ふふ……よく撮れてるみたいだ。
これをプリントアウトしよう。
サイズを写真サイズにして、印刷ボタンを押す。
印刷し終わって仕上がりを確認する。
本当によく撮れてる。満足いく仕上がりだ。
写真を封筒に入れ、鞄に入れる。
ふふ……本当に明日が楽しみだなぁ。
待っててよ、如月　薫。お前に相応しい恐怖をプレゼントしてあげる。
さて、寝ようか。
おやすみ。
今日も早くに起きて早めに学校に来た。
封筒の中身をもう一度確認する。
昨日撮った写真が間違いなく入ってる。
周りに誰もいないか確認する。

誰もいない。やるなら今だ。
如月　薫のロッカーを開ける。なんだこの上履き。興味なくて見てなかったから分からなかったけど、ポスカか何かで派手に落書きしてある。
正直こんな風に落書きする神経が分からない。上履きの生地は白だからいいんじゃないか。
まぁそんなことは置いといて、封筒を鞄から取り出す。
封筒を上履きの下に置く。上履きの下に置いておけば、否応なしに気づく。
ロッカーを閉める。
ふふ……これを見て、どんな表情を見せてくれるかなぁ？
如月　薫が来るのを待つ。やっぱりなかなか来ないな。
まぁいいさ。いくらでも待つよ。見たい表情を見せてくれるまでは。
期待通りの表情を見せてくれるかな。
もうすぐ八時二十五分になる。
ああ、来た来た…。
如月　薫は慌てた様子でロッカーを開け、上履きを取り出す。
封筒が床に落ちた。
如月　薫は封筒を手に取り、中身をみる。
あぁ、この瞬間がたまらないんだ。
早く見せてよ、恐怖の表情を。
中身を見た如月　薫は驚いた表情をした後、封筒を取り落とした。
落とした拍子に、写真が地面に散らばる。
如月　薫は写真を見られまいと必死に掻き集める。
写真を拾い終わって立ち上がった時、如月　薫は恐怖の表情を滲ませていた。
あぁ、その表情が見たかったんだ。

ふふ、誰かに見られてる気分はどうだい？
まだまだ、こんなものじゃ終わらせないよ。
もっともっと恐怖をプレゼントしてあげる。
この後、如月　薫はどんな行動を取るのかな。
全部僕が見ててあげる。
本当に楽しみだなぁ。
ふふ……。
学校が終わって、尾行を開始する。どうやらビルの密集地に行くみたいだ。
あの写真を見たばかりなのに、今日もやるのか？
如月　薫が昨日と同じ場所に立ち止まる。
僕も昨日と同じ木の影に隠れて監視する。
しばらくして男がやって来た。また別の男。
神経疑うよ。あの女どんな神経してるんだ。
また見られるかもしれないとは考えないのか？
僕だったら絶対無理だ。
しかも、口付けの瞬間や現金の手渡しの瞬間をその場所で撮られたっていうのに、堂々とやってのけるなんて。
今日も撮らせてもらったよ。
ラブホテルに入るところまで一部始終撮ったよ。
ふふ、これで十分。
明日も楽しみにしててよ。
薄暗くした部屋で、今日撮れた写真をプリントアウトしていく。
ふふ……今日もよく撮れてる。
いきなり、部屋の扉が開いた。

「鼎、母さんが風呂入れって」

「分かった。ありがとう」

「じゃあ、俺寝るわ。おやすみ～」

「おやすみ」

扉を閉め、那奈瀬の姿が見えなくなる。

危なかった…。

シャツを捲り、背中からベルトに挟んだ写真を出す。

本当に危なかった。隠すのが後一瞬でも遅れてたら、見られるところだった。

見られたら言い訳出来なくなる。

写真を封筒に入れ、鞄に入れる。

明日も楽しみだ。

さて、風呂に入ろう。

今日も八時二十五分まで如月　薫を待つ。

しかし昨日はあの写真を見た後で、あの男とやったのか？だとしたらいろんな意味で神経図太いな。

まぁ、いくら図太くてもああいうことをしたら流石に神経参るだろうね。

楽しみだな。

あ、来た。

ロッカーを勢いよく開ける。そして手が止まった。

封筒を開け、恐る恐る中身を見る。

表情が変わった。驚いてる驚いてる。

まさか本当に今日は入ってないと思ったのか？

こんなところでやめるはずがないじゃないか。

世間一般ではこういうのをストーカーって言うんだっけ？僕はああいう女が嫌いだからやってるんだけど。

嫌いだからこそ、楽しい。

如月　薫がキョロキョロと周りを見る。

誰もいないとみたのか、封筒をごみ箱に乱暴に投げ捨てた。

忌々しげに封筒を見つめ、唾を吐きつける。
酷いじゃないか。折角綺麗に撮れたのに。
あぁでも、勿論恐怖の表情の方が見たいけど、忌々しげなあの表情も面白いかも。
さて、流石にそろそろ教室に戻ろう。
「なんだ、今日も用事か。杜塚そんなに毎日何してんの？」

「調べもの。色々と調べることがあるんだ」

勿論、嘘だ。

「ふ～ん。ま、頑張れ。俺は気楽に学校生活を送る」

「じゃあ、僕は行くよ。また明日」

「おー、調べもん頑張れ」

教室を出て如月　薫が出てくるのを待つ。
今日はどんな行動を取るのかな？そろそろ流石に恐怖を感じる頃のはずなんだけど。
ふふ、浮かない顔をして出てきた。
お前のその顔が見たかったんだよ。
今日もお前の行動を一部始終見ててやるよ。
尾行を開始する。やっぱりビルの密集地に行くみたいだ。
でも、流石に警戒してるのか、昨日と違う場所を歩く。
なるほど、さっきの電話は男に落ち合う場所の変更を連絡してたのか。
如月　薫が立ち止まる。
僕も、建物の影に隠れる。
デジカメの電源を入れる。

男が来た。どうやら最初に見た三十代の男みたいだ。
あんな女なんかによく金を渡してセックスなんてやるな。
考えただけで吐き気がする。
おや…？ふーん……流石に学習したんだね。
周囲を気にしながらラブホテルに行く道を歩く。
不安そうに周囲をキョロキョロしている。
ふふ、その不安そうな表情が僕を興奮させるんだ。
五分程歩いてラブホテルに入る。
へぇ、金の手渡しはラブホテルでやるんだ。
写真を撮られないための対策のつもりかなぁ？
そろそろ追い討ちをかけようか。
写真の比じゃないよ。別にお前が行動するのを待つ必要はないんだ。
完全に僕が主導権を握ることになる。
そして如月　薫、お前は僕の影に怯えるがいいさ。
早めに家に帰って準備をしよう。
これからが本番だよ、如月　薫。
「なぁーんだ、学校も携帯会社もセキュリティって甘かったんだ。
こんなに簡単に入り込めるなんて」

学校と携帯会社、両方から如月　薫の個人情報を探し出す。
つまりはハッキング。
ついでに言うとハッキングした事実が発覚してもいいように、家からじゃなくネットカフェからハッキングしている。
指紋も採取されてもいいように革手袋をしている。
あ……やっと見つけた。如月　薫の住所と携帯番号とメールアドレス。
へぇ、如月　薫って僕の住所の近くに住んでるんだ。
ハッキングなんてしなくても、もっと簡単な方法があったと思うけど、ハッキングした方が面白い。
如月　薫の個人情報を携帯に保存していく。

さぁ…準備は整った。
始めようか。
今まで以上の恐怖をお前にプレゼントしてやるよ。

ふふ…始めよう。
保存した如月　薫の携帯に電話する。
……なかなか出ないな。男とやってる最中なのか？
あんな不安そうな表情しておいてよくやれるな。
お前には金と性欲しかないのか？
これ以上僕をイライラさせるなよ。

《もしもし、だぁれ？》

やっと出た。出るのが遅すぎるんだよ。イライラさせやがって。
まぁいいさ。電話に出たんだから。

《もしもし？誰って訊いてんだけど》

何も喋らない。喋るつもりはない。

《あんた誰よ。切るわよ？》

そろそろ本当に切るな。切られる前に僕から切る。
さて、次はメール。

〈僕は見ているぞ〉

これで送信。ふふ…どんな表情でこれを見るのかな？
ちなみにこの携帯は僕のじゃない。
如月　薫が警察に行かないとも限らない。携帯の電波で発信地や誰

の携帯なのかが分かるって言うし、用心するに越したことことはない。
この携帯は最近僕の餌食になった金守　修の携帯。
他人の携帯を使えば僕が疑われることはない。
もう一度メールを送ろう。

〈僕は見ているぞ。今日の相手の三十代の眼鏡をかけた男とは何回目？〉

ふふ、如月　薫も流石にこれをずっとやられたら参るかなぁ？
これをやって参らなかった獲物はいなかったけど。
そういえば、一年半前に不倫現場を尾行した主婦は面白かったなぁ。
ポストに不倫写真を入れたら、夫が不倫写真を見て夫婦喧嘩が始まったんだ。
僕は庭に潜んで、夫婦喧嘩の一部始終を眺めてたんだ。結局その夫婦は離婚したけど。
その後、僕がその主婦をどうしたか、分かるよね？
どうしたかは君の想像に任せるよ。
さてと、そろそろ出ようか。用事は済んだし。
受付に行き、料金の千五百円を払う。
外に出て時計を見る。十時三十六分。思ったより時間経ってないな。
もう一度電話してみようか。携帯をポケットから出し、如月　薫の番号を押す。
……。
やっぱりなかなか出ないね。今度は電話に出ないつもりかな？
そっちがそのつもりなら、僕もお前が出るまでかけ続けるよ。
もうそろそろ一分は経つかな。やっと出た。

《もしもし…？》

はは、声が震えてる。なんだ、まだ始めたばかりなのにもう怯えて

るの？
お前はやり甲斐がありそうだよ。

《もしもし…、誰よ、あんた誰なのよ》

勿論、答えない。
そんなこと聴いて答える馬鹿はいないと思うけどね。
電話を切る。そしてメール。

〈ねぇ、今日の相手の三十代の眼鏡かけた男とは何回目？いつも何万もらってるの？〉
ふふ…これを見てどういう行動を取るのかな。
これでまだ男とやれるようなら、相当神経図太いけど、今の様子からいったら無理そうだね。
金だけもらって家に帰るんじゃないかな。次の約束をして。
そんな気がするよ。
そうしてくれたら嬉しいんだけどね。
とりあえず家に帰って次の準備をしよう。

「ただいま」

「お帰り～」

リビングから那奈瀬の声だけ聴こえてくる。
そうか…母さんと父さんは演劇見に行ってるんだっけ。

「鼎、ご飯いいのか？」

「後で食べるよ。ちょっと仕上げなきゃいけない物があるんだ」

「そっか。頑張れ～」

自分の部屋に入り、扉を閉める。
パソコンの電源を入れる。如月　薫の写真が保存してあるファイルを開く。
全ての写真をプリントアウトしていく。
全部で三十八枚。少し大きめの封筒に入れる。
さて、明日どうなるかな。
楽しみだなぁ。僕は今、如月　薫の家の前にいる。
ちなみに今は午前七時十八分。今日は六時に起きたんだ。このために。
写真の入った封筒を出す。これを見て喜んでくれるかな。
封筒を如月家のポストに入れる。
誰が最初に封筒の中身を見るかなぁ？
母親とか父親なら面白いのに。
楽しみだなぁ。本当に。
ふふ……。

建物の影に隠れて如月家の様子を観察する。
まだ誰も出てこない。
朝の支度で忙しい時間帯だから仕方ないか。
あ……やっと誰か出てきた。
なんだ……如月　薫か。母親か父親を期待したのに。
それより、やっぱり家に帰ってたんだね。
如月　薫がポストを開ける。
なんだか残念。母親か父親が写真を見つけて如月　薫を問いただす画を期待したのに。
まぁ、仕方ないか……。諦めよう。
如月　薫の手が止まる。恐る恐るポストに手を伸ばす。

ふふ、写真の入った封筒を見つけたみたいだね。
あれは間違いなく写真の入った封筒だ。
恐る恐る中身を見る。
あ、封筒を服の中に隠した。家族に見られないため？
凄く不安そうな、怯えているような表情をしている。
あぁ、ぞくぞくする。その表情がたまらないんだ。
もう少し、付き合ってもらうよ。
如月　薫。
さて、早速メールだ。
今の行動が筒抜け、なんて君なら怖いでしょう？

〈写真どうだった？綺麗に撮れてたでしょう？そういえば服に隠してたね。家族に見られないため？家族は知らないの？援助交際してること。何も知らないなんて可哀想だね。君の両親〉

送信。
これを恐怖に怯えながら見るのを期待するよ。
それはそうと如月　薫、学校に行くかなぁ？
行ってくれなきゃ困るんだけど。
時計を見る。七時四十六分。もう少しだけ待つか。
十分ほど待って如月　薫が出てきた。
あぁ、本当に僕を興奮させる表情をしてるよ。
そのまま壊して壊して、壊し尽くして殺したくなる。
でも、お前があの女に似てないとは限らない。
今までの行動は、あの女に似てる。
これで喋ることまで似てたらどうしようかな。
壊す前に、怒りに任せて殺しちゃうだろうな。別にそれでもいいけど。
さて、如月　薫の姿は見えなくなった。
学校のロッカーに写真が入ってなくてほっとするかな？

ふふ、今日はロッカーじゃなくて、お前の家のポストにもう一通、封筒を入れておくよ。
もう一通入れておけば、お前の両親が見つけるだろう？
見つけたら、両親はどう思うかなぁ。お前を問いただすかな。
それは学校が終わった後、ここに来れば分かる。
ぜーんぶ、見てやるよ。
一部始終、ね……。
さぞや、見物だろうなぁ……。
授業終了のチャイムが鳴り響く。
ふふ、今から面白いものが見られる。
どんな画が見られるかなぁ…。

「杜塚、お前楽しそうだな。何かあったのか？」

「もうすぐで調べものが終わって完成するんだよ」

「何が完成するんだ？」

「それは秘密」

「ふ～ん、ま、いいけど。頑張れ」

「ありがと」

薪沢と別れる。さて、如月　薫だ。
あぁ、今朝よりはほっとした表情をしてるなぁ。でも、家に帰ったら地獄が待ってるよ。
地獄を作ったのは僕だけど。
自分の娘が援助交際をしてるなんて知ったら、どう思うだろうな。
僕だったら許せないな。相手の男皆殺しにするね。

ま、僕が恋愛して結婚して子供を作るなんてあり得ないから、想像することと自体無意味だけど。
おやぁ、今日はおとなしく家に帰るんだ。
僕としては好都合だけど。
家族はどんな顔をして如月　薫を待ってるのかな？
今日も男と寝てるのか、とか心配してるのかな？
如月　薫が家の中に入る。
姿が見えなくなったのを確認して、如月家の前に立つ。
さぁ、お楽しみはこれからだ。
家の中、どうなってるかな。
庭の方に回る。これくらいの塀なら飛び越えられそうだ。
周りに誰もいないか確認する。誰もいないね。
塀から少し離れる。助走をつけ、塀を飛び越える。
あまり音を立てずに静かに着地出来て満足する。
ここら辺の家は木とか隠れる場所が多くて助かる。
さて、家の中の様子がよく見える場所はどこかな。
ここならよさそうだ。木の側に背の高い植物が密集していて、隠れるには最適。
見つからないように背を低くして、家の中を観察する。
あぁ……やってるやってる……。
言い争ってる。窓が閉まってるから、何を言ってるのか聴こえないけど、僕がポストに入れた写真を母親が如月　薫に見せながら、問い詰めてる。
見ていて凄く楽しい。如月　薫のあの泣きそうな表情、ぞくぞくする。たまらない。
必死に言い訳しようとしてるけど、写真に写ってるのは紛れもなく自分自身なんだから、言い訳出来ないよねぇ。
あはははははっ！本当に楽しいよ、如月　薫！
本当に楽しくて愉しくて仕方ない！
このまま壊して殺してしまいたいけど、まだ我慢だ。

まだ最後の仕上げが残ってる。
さて、と……そろそろ帰ろうか。
見つからないように気をつけながら木を上り、塀の外へ出る。
誰にも見られていない。

「ふふ……はっ……あはは、あははははっ！」

小声で笑う。
本当にいいもの見させてもらったよ。人の家の不幸は見ていてたまらない。
本当にたまらないよ。楽しくて楽しくて飽きない。
すごく、愉快だ。
ふふ……明日、最後の仕上げをしよう。
今日はその準備。
本当に楽しくて愉しくて興奮が収まらないよ。
ふふ……最後の仕上げだ。
写真をプリントアウトして、封筒に入れる。
そして明日、ある所のポストに入れる。
これが終わったら、いよいよ本番。一番の楽しみ。
壊して、殺そう。
最終的には、殺すことが一番の楽しみなんだ。
今までのは余興。
あぁ、楽しみだなぁ。如月　薫はどんな悲鳴を上げて、鳴くんだろ。
そうだ、電話してみようか。
何を言うのか面白そうだ。
携帯を取り出し、如月　薫の番号に電話する。

《もしもし…》

案外早く出たね。しかも涙声。泣いてたのかなぁ？

《もしもし…あんた、写真を入れた奴…？なんであんなことするのよ！家族にはバレたくなかったのに！》

援助交際なんかするお前が悪いんじゃないか。
家族にはバレたくなかった？都合のいいこと言うなよ。
まだ何か言おうとしたから、電話を切った。
まだあんなこと言うなら鬱陶しいから。
メールにしよう。

〈家族にはバレたくなかった？随分と都合のいいこと言うね。援助交際なんかするお前が悪いんじゃないか〉

送信。
おや、返事が帰ってきた。

〈私が援助交際しようと、あんたには関係ないでしょ！〉

ふーん、そう来るか。
確かにそうかもね。でも、

〈僕の目についたのが悪かったんだよ。御愁傷様〉

送信。電源オフ。
そういえば、封筒をあそこに入れて警察沙汰になったら、指紋採取ってするのかなぁ？
警察沙汰になるか疑問だけど。
一応写真も封筒も、指紋を拭き取っておこう。
革手袋を嵌めて指紋を拭き取る。
これくらい拭き取れば大丈夫だろう。

写真を封筒に戻す。
さぁ、明日は最終劇だ。
　学校に来た。今の時間なら教師もまばら。
やるなら今だ。
革手袋を嵌め、封筒を取り出す。
封筒を学校のポストに入れる。
ふふ……これを教師が見たら、如月　薫どうなるかなぁ？
良くて謹慎処分、悪くて退学処分だろうなぁ。
まぁ、学校も悪い評判立たしたくから、警察には言わないか。
心配する必要なかったかな。
学校も所詮そんなもの。
さて、と……後は教師が如月　薫を呼び出すのを待つだけ。
謹慎処分か退学処分、どちらになるかな？

もうすぐ八時二十五分になる。
廊下で如月　薫の様子を見る。
昨日の泣きそうな様子は微塵も見せず、クラスメイトと楽しそうに喋っている。
階段から担任の教師が来た。
ふふ……いよいよだ。

「如月、ちょっと来てくれるか」

「え……？はい……」

ふふ、戸惑ってる。
どうなるかなぁ？
楽しみだなぁ……。
もうすぐ授業が終わる。

どうやら如月　薫は家に帰されたみたいだ。
一限目が始まる前に荷物を持って帰ったから。
謹慎処分か退学処分、どっちになったのかな。
まぁ、電話をすれば分かることだから、焦らなくてもいい。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。
今日は掃除当番じゃないからすぐ帰れる。

「杜塚、なんか楽しそうだな。この前言ってたやつ、完成したのか？」

「まだだよ。でも、明日には完成するんだ。だから楽しみなんだよ」

「そっか。じゃあ明日までは一人で帰るのか。終わったら俺に付き合えよ」

「分かってるよ。じゃあ」

「おー、じゃあな」

薪沢に手を振り、さっさと学校を出る。
しばらくして、携帯を取り出し如月　薫に電話をかける。
おや、すぐ出た。

《なんてことするのよ！この変態！ストーカー！おかげで退学になったじゃない！》

へぇぇ、退学処分になったんだぁ。

よかったよ。最悪な結果になって。謹慎処分じゃやっぱり面白くないから。

《なんか言いなさいよ！なんでこんなことするのよ！》

なんでこんなことするのかって？
お前が援助交際なんかしてるからだよ。
僕の目についたのが運のつき。

《酷いわよ！私になんか恨みでもあるの！？》

酷いって？何が酷いんだ。やるならとことんやるよ。とことん不幸に貶めてやるよ。当たり前じゃないか。
電話を切る。

〈明日の夜十時に大駁公園（おおぶち）に来い。そしたら教えてやるよ〉
六月十二日　如月　薫

ふふ、君はいい悲鳴を聴かせてくれるね

すごく興奮するよ

もっといたぶりたくなる

うん？何を言っているのかよく分からない

もっとはっきり言ってよ

ああ、でもそんな酷い状態じゃ、はっきり声なんて出ないか

ほら、耳を近づかせてあげるから言ってごらんよ

何？助けて？

何言ってるの。助ける訳ないだろ

君は僕の玩具として死ぬんだよ

まだ死なないでよ。まだ楽しむんだから

もっといたぶってあげる

君は分かってないなぁ……

そんな恐怖と絶望が入り交じった瞳が、更に僕を興奮させるんだよ

僕を興奮させる君が悪いんだよ

もっと悲鳴を上げさせてあげるよ……

後四十分で十時になる。今日は土曜日。

今までゆっくりしてた。

如月　薫、公園に来るかなぁ？

来るよね、必ず。

どうやっていたぶってあげようかなぁ……？

どんな悲鳴を上げるのかなぁ。

想像するだけで興奮する。

あぁぁ……、本当に興奮してきてたまらない。身体がものすごい昂

ってきてる。
このまま絶頂まで達しそうだ。
世間の人間には理解出来ないかもしれないな。
いたぶって殺すことが性的興奮でもあるなんて。
だってほら、ただ想像しただけでこんなに勃起してる。
少し触っただけでかなりぞくぞくくる。
誤解のないように言っておくけど、いくら僕でも援助交際してる女なんか犯したくない。
興奮するといっても、殺人という行為に対して性的興奮を覚えるんだ。
死んでもあんな女なんかに、性的興奮なんか覚えてたまるか。
さて、そろそろ家を出ようか。
引き出しからスタンガンを取り出す。
いつもと違って不意をつけないから、機動性を考えて今日はスタンガンを使おう。
人を気絶させるに十分な電圧に設定する。
スタンガンをポケットに入れ、玄関に向かう。

「あら、鼎今日も散歩？」

「うん。行ってくるね」

「いってらっしゃい。気をつけてね」

「はーい」

玄関の扉を閉める。
さぁ……快楽殺人者の杜塚　鼎の時間だ。
本当の僕の姿を剥き出しにしよう。
大駁公園に来た。まだ如月　薫は来てないね。

この大駁公園は廃ビルに近くて、如月　薫を運ぶのに便利だから、ここを選んだんだ。
時計を見る。九時四十四分。ちょっと早かったな。
まぁいいか。さて……と、木の影にでも隠れておこうか。
姿が見えなかったらなんて言うか面白そうだ。

「……？」

遠くから人影が近づいてくる。
目を凝らしてみる。あの身長、あの髪型、如月　薫に間違いない。
案外早く来たね。それほどご立腹とか？
木の影に隠れて如月　薫を観察する。

「来たわよ！出てきなさいよ、この変態！どうせいるんでしょ！」

いるよ、勿論。どうせなら、もっとこっちに来てくれないかなぁ。
ふふ、来た来た。

「隠れてるの！？早く出てこいって言ってんだよ、変態野郎！」

大声出さなくていから、さぁ、そこで後ろを向いて？
飛び出してスタンガンで気絶させてあげるから。
やっと向いた。スタンガンをポケットから出す。
やるなら今だ。
木の影から飛び出し、全速力で如月　薫に向かって駆け出す。
流石に音に気づいたのか、僕を見る。
今更気づいても遅いけどね。
抵抗する間を与えずに、腹にスタンガンを押しつける。
一瞬びくっと痙攣して、僕の腕の中に気絶する。
ふふ……。

どうやっていたぶってあげようかなぁ……。
どうやって壊してあげようかなぁ……。
ふふふ……。
如月　薫をベッドに縛りつける。
ふふ……準備万端。ナイフも用意した。
これで後は、如月　薫が目を覚ますのを待つだけ。
でも、スタンガン使ったから、いつもより待たなきゃ駄目かなぁ？
さっさと起こしちゃおうか。
さて、どこを切ろうかな。
太ももにしよう。スカートだから切りやすいし。
つつ、とナイフを太ももに滑らせる。
滑らせたところに、赤い筋が浮かぶ。
もう一度同じところにナイフを滑らせる。何度も何度も。
次第に身体が反応するようになる。
最後に、ナイフを思い切り滑らせた。

「あ〝あ〝ぁ〝あぁぁ！いたぁい！」

ふふ、痛いよね。そりゃあ痛いよねぇ……。
太ももを思い切り切ったんだから。血が溢れてる。
でも、この女の血を舐める気はしない。

「やぁ、如月　薫。はじめましてじゃないけど、はじめまして。僕が誰か知ってる？」

「知らないわよ、あんたなんか！いいからこれ外しなさいよ！」

外すわけないじゃないか。これから楽しむのに。

「外してよ！なんで私がこんな目に合わなきゃなんないのよ！それ

とも何？あんたも私を抱きたいの？」

……。

今、この女、なんて言った？

抱きたい？お前を、僕が？

ふざけるなよ。誰がお前みたいな腐敗した女なんか抱くか。

それ以上何も言うなよ。あの女を思い出して、おかしくなりそうだ。

「抱きたいの？お金をくれるんなら、抱かれてあげるわよ？」

あぁぁあああぁぁあっ！

黙れ！黙れ、黙れ！！

あの女と同じことを言うな！

あぁぁあああぁぁ！うるさい！うるさい！！

何も思い出すな！どうして出てくる！どうしてあの女の言葉がまだ、

僕の記憶から消えない！

「どうしたの？私を抱きたいから、こんなことしたんじゃないの？」

あぁぁあああ……本当に、うるさい……。

これ以上僕を怒らせるなよ。

ナイフを如月　薫の首に押しつける。

「いい加減黙れよ……。僕がお前を抱きたい？いい気になってんじゃねぇよ、淫乱女が。これ以上そんなこと言ってみろ、爪の間に針ぶちこんで生爪剥がすぞ」

あああああ……耳の奥で、チリチリ音が鳴ってる。

マズイなぁ……。ここまで来たら止められそうにないや。

あーあ……最近は少し落ち着いてたのに。

僕は案外、すごく凶暴な部分があるんだ。

だからコントロールしようとしてたのに。

最近は本当に落ち着いてたのになぁ。
まぁいいさ。僕を怒らせるお前が悪いんだ。
たっぷりいたぶってやるよ。

「さぁ、たっぷりいたぶってやるよ。まずはどこからいこうか？」

「い、いや、助けて！死にたくない！」

僕が聴きたいのは、命乞いなんてつまらないものじゃないんだよ。
僕が聴きたいのは、恐怖と苦痛に満ちた悲鳴。
だから、たっぷりと悲鳴を上げさせてやるよ。

「お前が一番傷つけたくない場所はどこだ？」

「そ…そんなこと訊いて、どうするのよ…」

うるさいなぁ。さっさと答えろよ。
ナイフを首に突きつける。

「いらないことは言わなくていいんだよ。さっさと答えろよ」

「か、顔……」

顔、ね。
にんまりと笑う。
ナイフを目に、二センチくらい突き刺す。

「あ〝あ〝あ〝ぁ〝あ〝ぁ〝！！いやぁあああぁぁ！」

あはははははっ！

そう！その悲鳴だよ！僕が聴きたかったのは！
あはははははっ！

「痛い？そりゃあ痛いよね！あはははははっ！もっとその悲鳴を上げさせてやるよ！」
「さぁ、次は何処がいい？たーっぷりいたぶってやるよ」

頬にナイフを滑らせ、笑いながら言う。
あぁ、もう楽しくて楽しくて止まらない。止められない。
これからどうしようかなぁ？どうやしてやろうかなぁ？
女なら、胸とか傷つけられるの嫌うかな？
この女なら嫌いそうだなぁ。乳首を切り落としてやろうか。
服を切り裂いていく。

「や、やめて……助けて、なんでもするから……」

「へぇ、なんでも？生憎、僕はお前をいたぶって殺すことしか考えてないよ。あえて言うなら、僕の玩具になって死ね」

そう言ったら、明らかな絶望の色が瞳に浮かんだ。
あぁぁ……その絶望の色もたまらない。
今は凶暴さが顔を出してきて、ものすごい興奮してるから、余計たまらないよ。
あはは……本当にたまらない。乳首を切り落としてやろう。
切り落とそうとして、ナイフを胸に当てる。

「いや……いやぁ、やめて……助けて、殺さないで……」

泣きながら命乞いをしてくる。
命乞いは気に入らないけど、その泣き顔はそそる。

胸にナイフを滑らせる。
皮膚が切れて血が滲み出し、赤い筋が浮かぶ。
胸を掴み、ナイフを真横に滑らせた。
「あ〝あ〝あ〝あぁあぁぁっ！」

切り落とした胸の一部を、床に落とす。
べしゃっと床に落ちる音が耳に心地いい。
切断面から、脂肪と筋組織らしきものが見える。
切断面に爪を立て、ぎりぎりと爪をめり込ませていく。

「いぎゃあああぁあ！」

あはは。本当そういう悲鳴はたまらないよ。たまらなく好きだ。

「やめ、て……やだ…ぁ…私が、何をしたの……？あんたには…何もしてない、じゃない……」

まだそんなこと言うのか。
あの女も同じこと言ってたよ。
私が何をしたの？あんたには何もしてないじゃない。あんたが勝手に舞い上がってただけでしょ、って！
ふざけるな！最初に関わりを持ったのはどっちだ！？お前じゃないか！
僕は最初お前を信じたんだ！
信じたのに、裏切ったのはお前じゃないか！
あの女も、一番身近で一番信じてたあの女も！
僕を裏切ったじゃないか！
許さない、許さない！
如月　薫！お前はあの女の代わりになって死ね！

ナイフを、

胸から離し、

怒りと憎しみを込めて脇腹に突き刺す。

「あ〝あ〝ぁ〝あ〝あぁああ！」

「決めた。お前はこれからたっぷりいたぶって殺した後に、バラバラに解体してやるよ。解体して、ごみ捨て場にでも置いてやる。そして、彼氏を殺人犯に仕立て上げてやる」

「そ…そんなこと、出来る訳…」

「残念だけど、殺人犯に仕立てあげるなんて簡単に出来るんだよ。物的証拠さえあれば、警察は簡単に騙されてくれるんだよねぇ。例えば、お前の血がべったり着いたナイフを、彼氏の部屋に置いておくとかね」

そう、物的証拠さえ発見されれば警察なんて簡単に騙されてくれる。血がべったり着いたナイフを、援助交際の相手の松栄（まつざか）　哲也（てつや）の家に置いておけば、警察は松栄　哲也を容疑者として逮捕するに違いない。

もしもの時のために、愛用のナイフじゃなくて予備のナイフを使っていてよかったよ。

愛用のナイフだったら愛着があるから、捨てるに捨てられない。

後、革手袋もしといてよかったよ。

なんとなしに、左腕にナイフを突き刺す。

「あ〝あ〝ぁ〝あああ！」

同じ場所に何度も突き刺す。
そのうちに、左腕がボロボロになる。筋が切れて、骨が見えている所もある。

「おねが……助けて…」

「助ける訳ないだろ。さっきも言ったじゃないか。僕の玩具になって死ね」

悲鳴を上げるのに疲れたのか、瞳に涙を溜めて、助けを求めるように僕を見る。
そんな瞳で僕を見たって無駄だよ。余計僕を興奮させて、凶暴にさせるだけだ。次は何処にしようかな。
この女が顔の次に大切な場所っていったら……やっぱりあそこかな。
一旦立ち上がり、如月　薫の足元にもう一度しゃがむ。足を閉じられないように身体を割り込ませ、スカートを捲り上げる。

「や、やだ…何すんのよ…」

「何って、顔の次にお前の大切な場所っていったらここだろう？膣にナイフを入れたら、どうなるだろうなぁ？」「な、何言ってんのよ……やめてよ…」

やめないよ。やると決めたらやるんだ。
ふふ……やったことないから楽しみだ。
ショーツは邪魔だから切り裂く。
このナイフは愛用のナイフより小振りで、刃渡り十一センチくらいだけど、膣なんかに入れたらかなり痛いだろうなぁ。
痛いどころじゃないだろうね。
どんな悲鳴を聴かせてくれるのかなぁ。

かなりぞくぞくするよ。
ナイフを膣に宛がう。

「や、いやあぁぁあ！やめてよぉ！やだあぁ…」

ああぁ……ほんと興奮するよ。身体が昂って仕方ない。
このまま射精出来そうな勢いだよ。
でもまだ我慢だ。
ナイフを膣に少しずつ入れていく。
徐々に、徐々に……。
その度に血が滲み、如月　薫の悲鳴が酷くなっていく。
その度に、僕の興奮も極限まで高まっていく。
あぁ……ほんとたまらないよ……。このまま射精してしまいたい。
ふふ、最後の楽しみは最後まで取っておこう。
刃の部分を、膣の中に一気に入れる。

「あ〝あ〝ぁ〝あぁぁあ！！」

ふふ……あはは、あはははははっ！
あはははははははっ！

本当にたまらないよ、如月　薫！
その悲鳴！邪魔な感情を全て削ぎ落とした、恐怖と苦痛に染まりきったその表情！
まさに僕が唯一愛する、人間の一番美しい姿だよ！

あはははははっ！

「たまらないよ、如月　薫！痛いよなぁ？そりゃあ痛いよな！あはははははっ！」

もっとだ。もっとその悲鳴を僕に寄越せ！膣の中でナイフを少し動かす。

「ひ、あ〝、あ〝あ〝あ〝ぁ〝あああっ！」

凄まじい悲鳴を上げる。股関は既に血塗れ。これじゃあ、もう使い物にならないだろうね。

あはははは…っ。いい気分だよ。

ここで何人の男をくわえてきたのさ？

十本の指じゃ足りないくらいくわえてきたんだろう？

最後に僕がズタズタに壊してやるよ。もう壊してるけどねぇ。

一気にナイフを引き抜く。

「あ〝あ〝あ〝ぁ〝あ〝あ〝……！」

おやおやぁ、もう悲鳴さえ上げられなくなってきた？

もっと楽しませろよ。

足を切りつけていく。ズタズタに。見るからにもう二度と、歩けないくらいに。

腕も同様に切りつけていく。

切りつけていく度に、悲鳴は弱々しくなり、次第に虫の息程度の悲鳴しか上げられなくなる。

もう楽しめそうにないな。まぁいいか。十分楽しんだし。

「……おね…が……助け……て…」

にぃ、と笑い、如月　薫の耳元で囁いてやる。

「助けないよ。ここでお前は死ね。バイバイ、さよなら、淫乱女。

地獄にでも堕ちてろ」

ナイフを振りかざし、心臓目掛けて突き刺す。

ドスッ突き刺した瞬間、如月　薫の身体が痙攣する。
ナイフを抜き、もう一度突き刺す。
人の身体にナイフを突き刺すって、なんでこんなに気持ちのいい感触がするんだろうね。
また抜き、また突き刺す。四回、五回、六回、七回……。
返り血で血塗れになる。
口の中に血が入り、じわり、と血の味が広がる。
あぁ、やっぱり不味いなぁ。今更そんなことどうでもいいけど。

「あは……あはは…あはははははははははっ！あははははははっ！！」

目を閉じて、天井を仰ぎながら笑う。

「あはははは……あ～、たまんない。笑いながらイッちゃったよ」

下半身に手をやる。触ってみると、ぬるっと濡れている感触が伝わってくる。
先端を触ると、射精したばかりで敏感になってるのか、かなりぞくぞく来る。
なんだか二回目もイケそうな勢いだ。
まぁ今はいいか。処理はいつでも出来る。
今は死体処理が最優先。
いつも使ってる斧を使って、さっさと解体してしまおう。部屋の隅に壁に立て掛けてある斧を手に取る。

初めてこの斧を使った時は重かったけど、使い始めて一ヶ月もしたら重さに慣れるものだね。
今は片手でも扱える。
如月　薫の死体を眺める。
あの女共もこういう風に壊して、殺したんだっけ。
初めて人を殺したのはあの二人だったな。
いや、三人か。
女二人に男一人。計画を立てて一人ずつ……。
一人は、計画を立てたけど計画通りにいかなかった。
まぁ、結果的にはうまくいったからいいけど。
まぁ、今はそんなことどうでもいいや。
解体しよう。
ベッドから下ろすために死体を掴み、床に落とす。
あぁ…如月　薫、血塗れになったその姿の方が美しいよ。
斧を振りかざし、右腕目掛けて降り下ろす。
血飛沫が舞いごり、と音がして斧が止まる。
やっぱり一発で骨を断ち切るのは無理か。
もう一度振りかざし、降り下ろす。
骨が断ち切られ、斧が床にがつん、と当たる。
左腕も同様に解体する。
足は長いから、膝と股関節に分けて解体する。
最後に首。うつ伏せの状態にして、足で胴体を押さえつけて首に斧を降り下ろす。
首も案外切り難い。二回に分けて解体する。
これでいい。ごみ捨て場で拾った大きな黒い鞄に詰めよう。
ほんとなら、この後の処理の仕方が違うけどね。
まだいつもの処理方法言ってなかったっけ？
まだ内緒にしておこう。その方が面白いだろう？
鞄に死体を詰めていく。
そうだ。内臓を少し引き摺り出しておこうか。

その方がインパクトありそうだし。
ナイフを掴み、腹を切り裂く。手を入れ、内臓を引き摺り出す。
そのまま鞄に詰める。
これで解体作業終了。
さて、シャワーを浴びて最後の仕上げといこう。僕は今、松栄　哲也の家の前にいる。
如月　薫の携帯を調べたら、やっぱり松栄　哲也が一番親交が深かったみたいだ。
住所は前々から調べてあったから、見つけるのに苦労はしなかった。
如月　薫の死体を詰め込んだ鞄は、この近くのごみ捨て場に置いてきた。
見つかりやすいようにファスナーを全開にして、手だけをわざと鞄から見えるようにして。
朝になれば必ず見つかる。
扉をノックする。反応はない。ドアノブを回したら、開いた。
無防備だねぇ。僕にしたら好都合だけど。
周りを見渡す。誰かに見られたら今までの計画が全部水の泡だ。
誰もいない。扉を開けて中に入る。

「何この部屋……。散らかり放題だし、埃くさいし…最悪…」

松栄　哲也の部屋は、人が住む環境とは言い難い。
食器さえも片付いてないし、ゴミはそこかしこに散乱してる。
ここ三年くらいは掃除してないような有り様。
念のためにスリッパ持ってきといてよかった。
土足のままじゃ、足跡で誰の靴なのか分かるっていうしね。
用心するに越したことはない。
スリッパを履いて部屋に入る。床に足を下ろした途端、埃がぶわっと舞い上がる。
ほんと最悪……。マスクも持ってくるんだった。

この部屋で呼吸するなんて嫌気がさす。
さっさと用事を済ませて帰ろう。
ズボンを捲り、その下から新聞紙で包んだナイフを取り出す。
そして、携帯。勿論、如月　薫の物を。僕の指紋は完全に拭き取って、血を付着させといた。
どこに隠そうかな。普通にタンスでいいか。
ゴミの山を崩さないように、慎重に歩く。
少し躓いただけでも、雪崩を起こしそうだ。
やっとタンスに辿り着き、タンスを開ける。

「これは……ふ～ん…そういうことか…」

タンスの中には、色とりどりの髪の毛。
色や長さによって、髪の毛用のゴムでまとめてある。結構な量だ。
ふふ……なるほどね。松栄　哲也だったんだ。
最近連続して起きてる、女性を襲って外傷は負わせずに、髪の毛だけを切っていく犯人は。
これは好都合。如月　薫殺しの容疑も簡単に期せられる。
指紋を残さないように革手袋もしてるから、僕が疑われることはない。
ナイフを髪の毛の上に置き、タンスを閉める。
さて、さっさと帰ろう。
それにしても、松栄　哲也は何をしてるんだろう。
他の女と援助交際とか？だとしたら随分と性欲がお強いようで。
まぁ、僕には関係ないからいいけど。
周りに誰もいないことを確認して、松栄哲也の部屋を出る。
後は……携帯はもう用がないから捨てるか。
携帯を取り出し、地面に落とす。
落とした携帯を思い切り踏みつける。
足を退けると携帯は粉々に破壊されている。普通に捨てたんじゃ、

もしかしたら調べられる可能性があるかもしれない。
破壊すれば、この携帯のデータは調べられることはない。
破壊した携帯を掴み、近くの川に捨てる。

「最後に役に立ったよ。バイバイ金守　修」

これから松栄　哲也がどうなるのか楽しみだな。
さて、帰って寝よう。六月十三日　表日常

あーあ、死んじゃったか

でも楽しませてもらったよ

さて、さっさと処理しよう

え?処理の方法?

訊きたいの?訊かない方がいいんじゃない?

仕方ないなぁ、＊＊るんだよ

＊＊の部分にいろいろな言葉を当て嵌めたら、いつか答えに行き着くよ

まだ完璧に教えてあげない

教えていいかな、と思った時に教えてあげるよ窓から差し込んでく

る日の光で目が覚める。
そして携帯の着信音。誰だろう。こんな時間に。
携帯の通話ボタンを押す。

「もしもし…」

《よ、杜塚。今日暇か？》

薪沢か……。お前がこんな時間に電話かけてくるって、あれしかないよな。

「まぁ、用事はないけど…何？」

《今日俺に付き合え》

やっぱり。だと思ったよ。
まぁ、今日は違う意味でも用事はないから、付き合ってやるか。

「分かったよ。何時にどこで待ち合わせ？」

《いつも通り、十二時に駅前で待ち合わせ》

「オッケー分かった。じゃ、十二時に」

《おー、じゃあな》

「じゃあ」

通話を切る。今日はゆっくりしとこうと思ってたけど、まぁいいか。
断る理由もないし。

服を着替えて朝食を食べて、さっさと準備しよう。もうすぐで十二時になる。
薪沢はまだ来ない。あいつ、自分で呼び出しておいて、また遅刻するつもりか。
いつものことだからいいけど。

「杜塚〜、わりぃわりぃ。家出んの遅れた」

へらへら笑いながら来た。

「八分四十五秒の遅刻。きっちり十二時に来れない訳？」

「あはは…すまん。てか、毎回毎回よく遅刻時間数えてられるな」

「暇潰しにはなるからね。それより、さっさと行くよ」

さっさと歩き出す。

「で、どこ行くの？」

訊いたら、薪沢は南の方を指差し、

「そりゃデパート。服とか買いたいんだよ」「服？まさか、またTシャツ買うの？」

「うん。ダメか？」

「駄目じゃないけど…」

薪沢のTシャツに書かれている文字を見る。

黒い生地のTシャツ。
胸のところに大きく、『ビバ妄想族』の文字。

「……」

どこでこんなTシャツ手に入れてくるのかな。

「どうした？」

「いや……ちょっと後ろ向いて」

「？はいよ」

後ろを向く。背中には、『俺の心臓を貫いてくれ！』の文字。
よくこんなTシャツ着てこれるよね。
そんな奴の隣を歩いてる僕も、周りから見たらイタイ人間に見えるのかな。
まぁ、今更どうでもいいけど。
そういえばこの前見た時は、胸に『喧嘩上等』、背中に『本当に喧嘩仕掛けて来ないで！優しく抱き締めて！』の文字が書いてあったっけ。

「ねぇ、またそんなふざけたTシャツ買うの？」

「ふざけてねぇ。買うの」

「ふーん…」

そんなことを喋っている内に、服売り場に着く。
なんかふざけたTシャツ売ってるし。

いつの間にこんなTシャツ売り始めたんだろ。

「お、これいいんじゃね？杜塚、どう思う？」

Tシャツを見せてくる。胸に『敵は何処だ！？』、背中に『ここだぁ！』、と書いてある。

「いや、こっちの方がいいんじゃない？」

Tシャツを広げて薪沢に見せる。

背中には何も書いていないけど、胸に『馬鹿もここまでくれば芸術だな』、の文字。

「それは俺に、お前は馬鹿だと言いたいのか？」

「違うの？」

「いや、もういいです。馬鹿呼ばわりは悲しくなるけど、そのTシャツ気に入ったから一緒に買う」

「買うんだ」

Tシャツを薪沢に渡す。

レジに持っていって、本当に二枚とも買って戻ってきた。「なぁ、昼飯食った？」

「いや、朝だけ」

「じゃあ昼飯食おうぜ」

「うん」

地下に下りる。食べ物を見た途端に、腹が空腹を訴えてきた。
何食べようか。

「杜塚何食べんの？俺はラーメン食う」

「僕は牛丼とラーメンとチキンカレーと、デザートにイチゴパフェ食べる」

何故か沈黙が支配する。
隣を見ると、薪沢が僕をじっと見ている。

「何？」

「お前、ホントにそんだけ食べれんの？」

「食べれるよ。まだ少ないくらい」

鞄を置いて、財布だけ持って買いに行く。
しばらくして注文した料理が全て出来て、テーブルに運ぶ。
薪沢が唖然と料理と僕を見る。

「相変わらずというか…一段と食べる量増えてねぇか？」

「そう？変わってないと思うけど」

「よくそんだけ食べて太らねぇよな」

「体質じゃない？」

食べながら話す。

「そして食べる速さが異常に早いよな」

「そう？普通だけど」

「既にラーメン完食してんじゃん。俺なんてまだ半分しか食ってねぇぞ」

「薪沢が遅いだけじゃない？」

そんなことを話してるうちに、牛丼を食べ終わる。
薪沢が唖然としてる。
そんなにびっくりすることかなぁ。
お互いしばらく静かに食べる。
チキンカレーも食べ終わり、デザートのイチゴパフェを一分で食べ終わる。
全てを二十分で完食。

「うん。美味しかった」

「ホントに食べやがった」

「これくらい誰でも食べれるでしょ？」

「いや、ぜってぇ無理」

「ふーん…？」

そういうものかな。そういえば母さんも父さんも、那奈瀬もあまり食べないな。
僕くらいか。

「次、どこ行く?」

「じゃあ、ゲーセン」

「ゲーセンね。じゃ、行こ」UFOキャッチャーをする薪沢をじっと見る。
景品は生キャラメル。
なかなか取れない。

「だぁ!また失敗した!」

「これで何回目?ちょっと貸して」

薪沢を横に退かし、百円を入れる。

「薪沢さ、下ろす位置が悪いんだよ。前すぎたり後ろすぎたり。これなら、真ん中より一センチ後ろを狙えばすぐ落とせる」

喋りながらボタンを押していく。
寸分の狂いもなくキャッチャーが景品を掴む。
そして狙い通りに落ちる。
取れた景品を薪沢に渡す。

「はい」

「すっげ、どうやったらこんなすぐ取れるんだ?」

「逆にどうして取れない訳？」

「誰でも杜塚みたいに、どこを狙えば取れるかなんて見極められねぇって」

「そういうものかなぁ？」

「そういうもんだって」

「そう。他に取って欲しい物があるなら取るけど？薪沢に任してたらお金の無駄」

「じゃあ、あれ取って。スティッチの巨大ぬいぐるみ。妹に取ってこいって命令されたんだよ」

「分かった」

そのまま、景品を計十三個僕が取った。
僕の物が四個で、薪沢が九個。
総額千九百円。「いや～楽しかった。ありがとな杜塚」

「うん。次呼び出す時は遅刻しないようにね」

「なるべく気をつけるけど、あまり期待するなよ」

「そう言うと思ったよ」

わざとらしく溜息をつく。

「まぁいいや。また明日」

「お〜、じゃ、また明日な」

手を振って別れる。時計を見ると四時五十六分。
一旦帰るとして、今日はどうしようかな…。
昨日十分に楽しんだし、今日はゆっくり寝ようか。

「……？」

駅の方を振り返る。
気のせいかな。今、誰かに見られてた気がしたんだけど。
多分気のせいだろう。
帰ろう。

「ただいま」

「お帰りなさい。今日は楽しかった？」

靴を脱ぎながら話す。

「それなりに。また遅刻されたけど」

「あら、また？」

「あまり気にしないようにしてるけどね。何か甘いものある？」

「テーブルにロールケーキ置いてあるから、それ食べて」

「ありがと」

リビングに入り、テーブルに座り、テレビのチャンネルを変える。

「ふふ……うまくいった…」

テレビではニュースをやってる。

如月　薫のバラバラ死体のニュースを。

容疑者として、松栄　哲也の名が挙げられている。

松栄　哲也は警察の職務質問を振り切り、逃走したらしい。如月　薫の殺害容疑は、自宅で発見された如月　薫の血が着いたナイフと携帯が決め手になったみたいだ。

それと同時に大量の髪の毛が見つかり、連続していた髪切り魔の容疑者としても、警察に追われている。

本当、警察って騙すの簡単だなぁ……。

ロールケーキを一口かじる。

僕は証拠を残さない。警察なんかに捕まったりしない。

僕を捕まえたければ、捕まえてみせるがいい。

いくらでも、相手になってあげるよ。六月十五日　とある教師の視線

僕がどうして人を殺すのかって？

今更そんなこと訊くの？

殺したいから殺すんだよ

理由なんかない
理由なんかいらない
殺したいから殺すだけ
理由が必要なら、殺したいから殺す、それが理由だよ
じゃあ訊くけど、人はどうして人を殺しちゃ駄目な訳？
戦争とかで国そのものは人を大量虐殺するくせに、どうして人を殺すなって言うの？
誰か答えられる？
ーとある誰かの視点ー
教科書の問題を説明しながら、非常に虚しくなる。
後ろでガヤガヤとうるさい生徒のせいだ。
私が分かりやすく説明してやっているというのに。
真面目に聴いているのは数人だけ。
その中でも熱心に聴いている生徒の一人に目をやる。
絹糸のような綺麗な黒髪。
憂いを帯びたぱっちりとした瞳。
透き通った色白の肌。
白魚のような細い指。
百六十二センチという、男の子にしては小柄で華奢な容姿。
全てが芸術作品のようではないか。
私は、男の子にしか欲情出来ない性異常者だ。

あの子は、私の求める全てを兼ね備えている。
あの子を、私の物にしたい。
あの子の身体に触れたい。あぁ、あぁ、あの子を私の物にして、閉じ込めたい。
あの子を、犯したい。
あの子の身体は、いったいどんな感触がするのだろう？
犯したら、どんな鳴き声を上げるのだろう。
あぁ、あの子が欲しくてたまらない。
私の心をここまで虜にするあの子の名は、

杜塚　鼎。ばっと振り返る。

「……」

まただ。また、どこからか視線を感じる。
学校からずっとだ。
誰かが、僕を見ている。ストーカーのように。
まさか僕がストーカー被害に合ってる？
いや、まさか。でも……また、あの時のように……。
いらないことを思い出すな。
あれは、思い出しちゃ駄目だ。絶対に。
でも、似てるんだ。
ずっと追いかけてくる視線。その視線はねっとりとしていて…。

「……っ…」

ぎゅっと腕を掴む。
大丈夫。もう、二度と、あんな目に合うことなんかない。
でも、もし、またあんな目に合ったら？
嫌だ……。あんな目に合うのだけは、絶対に嫌だ。
更に、ぎゅっと、腕を掴む。
そこで、身体が僅かに震えていることに気づく。

「大丈夫……視線なんて、気のせい……」

全速力で走る。走る僕を見ている視線を感じるなんて、気のせい。

気持ち悪い。

ーとある誰かの視点ー

あぁ、あの子が走り去ってしまった。
私の視線に気づいてるようだ。
一昨日、あの子が友達と一緒にいるところを見つめていた時も、あの子は私の視線に気づいた。
気づかれぬようにしていたのに。
あの子はとても敏感なようだ。
やはり、あの子は格別。今までの子とは違う。
容姿はいかによかろうと、中身が駄目な子が多かった。
あの子は成績も、生活態度も共に素晴らしい。
あの子は私に相応しい。
あの子の身体に触れたい。
あの子の匂いを感じたい。
あぁ、どうしてもあの子が欲しい。

無理矢理にでも、あの子を私の物にしたい。
あぁ、止まらない。止められない。
私の感情は既に暴走している。あの子を手に入れないと、治まらない。
あの子以外では、駄目だ。
ずっと、あの子を見つめていた。
あの子を見た時は、衝撃を受けた。
私の求める全てを兼ね備えたあの子。
あの子……いや、鼎。君は私にこそ相応しい。
そろそろ、あの子を手に入れるために、行動するとしよう。
愛しているよ、鼎……。部屋のカーテンを閉める。
あの視線が、僕をずっと見つめているようで、気持ち悪い。

“怖い”

久しぶりだ。“怖い”、なんて感情は。
まだ僕にも、恐怖を感じる心が残ってたんだ。
あの視線がたまらなく“怖い”。
あの視線は、あの時の視線と似てるから。
ねっとりとしていて、僕を捕まえて離さない。
あの時の視線と、同じ視線。
あの男は、いないのに。僕が、殺したのに。
なのに、それなのに。

“怖い”

あの視線が、“怖い”。

誰？

僕を捕まえて離さないあの視線は、誰？
怖くて怖くて仕方ない。
獲物を狩りに行く気にさえならない。
外に出れば、あの視線が追ってくる。

「嫌だ……なんで僕を見つめるの……あぁぁあぁっ……！嫌だ嫌だ……！なんで……なんで、あの男と同じ視線で僕を見つめるの……！嫌だ…見つめないで……あああぁぁあぁっ…！」

震える身体を掻き抱く。
怖い。怖くてたまらない。
どこまでも僕を追ってきて離さない。
ねっとりと僕を絡め取って離さない。
蜘蛛の糸のように、囚われたら、蜘蛛に食われるまで逃れられない。

お願いだから僕を見つめないで……！

ーとある誰かの視点ー

あの子の家の前まで来た。
不審に思われないように、建物の影に隠れる。
あの子の部屋はカーテンが閉められていて、中が見えない。
姿を見せてはくれないだろうか。
姿を見るだけでも、この身体は興奮する。
あの子を手にしたら、どれ程の興奮を味わえるのだろうか。
それにしても、あの子はもう姿を見せてくれないのだろうか。
今日はもう寝てしまったのか。
そうだとしたら仕方ないが。

仕方ない。帰るとしよう。
どうせ、三日後にはあの子が手に入る。
おやすみ、鼎。よい夢を……。「……っ…！」

また、あの視線だ。
外に、いる。僕を見つめてる。
怖い。嫌だ。見つめないで。
なんで僕を見つめるの。なんで僕なの。
なんで僕ばかり！
布団を頭まで被る。
まだあの視線を感じる。お願いだから早く帰ってよ。
帰って！

「はぁっ……はっ……ぁ…」

あの時のことを思い出してしまいそうで、呼吸が乱れてくる。
その瞬間、あの視線が、消えた。
ほっと息を吐く。
でも、あの視線は明日もきっと僕を追ってくる。
どうすればいいのか分からない。
考える前に、疲れた。
今日は、もう寝よう。あれから三日経った。
もうすぐで全ての授業が終わる。
あの視線のせいで、なんだか疲れた。
学校の中でも、時々あの視線を感じる。
あの視線は、学校関係者？教師？
あの時と同じ視線を向ける誰か。
目的も一緒？あの男のように、僕を……。
嫌だ……嫌だ嫌だ嫌だ！！
あんな目に合うのは二度とごめんだ！

誰だ。僕を見つめるのは誰だ！
殺してやる。見つけたら、真っ先に殺してやる！

「……っ…！」

まただ。また、あの視線。
怖い。あの視線が、怖い。
誰だ。
一番疑わしい人物は目の前にいる。
気づかれないように、目だけでその人物を見る。
数学教師の、芹中　勉。教科書の問題を解説しながら、あの子を見る。
あの子は今日も美しい。
今日こそ、行動に移そう。
古典的で、誰もが思いつく方法だが、睡眠薬で眠らせるのが最良のやり方だろう。
ドラマでクロロホルムを染み込ませたハンカチを、口と鼻を押さえ吸引させて気絶させる、という場面をよく見るが、あれは出鱈目（でたらめ）もいいところだ。
クロロホルムで人を気絶させることなど、まず無理だ。せいぜい気分が悪くなる程度。
クロロホルムには毒性があり、肝臓や腎臓に多大な影響を及ぼす。気絶させる程吸引した暁には、癌になり死亡するのが関の山だろう。しかも、皮膚に触れれば爛れてしまい、最悪の場合火傷のような跡が残ってしまう。
口や鼻にクロロホルムを押しつければ、見るも無惨に口と鼻が腫れ上がり、爛れてしまうだろう。
全く、嘘も甚だしいところだ。
あの子を最もらしい理由で呼び出し、睡眠薬を溶かした飲料を飲ませよう。

そして、私の自宅であの子を、存分に味わおう。
ああ、授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。
さぁ、行動するとしよう。

「杜塚、悪いが放課後私の所に来て、資料の片付けを手伝ってもらえないか？」「杜塚、悪いが放課後私のところに来て、資料の片付けを手伝ってくれないか？」

帰る準備をしていたら、芹中　勉がそう言ってきた。
僕を見つめるあの視線、芹中　勉が一番疑わしい。
だからといって確証もない。もし芹中　勉があの視線の人間なら、僕に何かするつもりだろうけど、もし違ったら恥をかくのは僕だ。
ここは仕方ないから手伝うか。

「分かりました。準備が終わったら資料室に行きます」

「すまないな。助かるよ」

あぁ、これでもし芹中　勉があの視線の人間だったら、芹中　勉は僕を捕らえるつもりなのかな。
怖い。またあんな目に合うんじゃないかと思うと、怖くてたまらない。
でも、行くって言ってしまったから、一応は行かないと。
大丈夫。芹中　勉はあの視線の人間じゃない。大丈夫……。

「じゃ、薪沢。そういう訳だから先に帰っといて」

「分かった。じゃあな～」

手を振り薪沢と別れる。北館にある資料室に向かう。

資料室の扉の前で、一度呼吸を整える。

「……っ…、大丈夫…」

資料室の扉を開ける。

「先生、いますか？」

「ああ、来たか。すまないね。そこの資料を片付けてほしいんだ。私はこちらを片付けるから」

芹中　勉はなぜか歴史研究部の顧問を務めている。
その資料の片付けを手伝うみたいだ。
資料の片付けに二十分かかった。「助かったよ。ありがとう」

芹中　勉が笑いかけてくる。

「いえ、これくらいは。でも、資料を集めるなとは言いませんが、集める度にちゃんと片付けた方がいいですよ。集めるだけで、自分だけでは片付けられない程になるまで溜め込む。先生の悪い癖です」

片付けを手伝うのはこれが初めてじゃない。
これまでに十回以上は手伝ってきた。

「はは。片付けようとは思うんだがね、なかなか行動に移らないんだよ」

「それが駄目なんですよ。いつか資料に潰されますよ」

「そうだな。気をつけるようにするよ。紅茶でも飲むかい？」

「じゃあ、はい……」

資料の片付けを手伝う時、芹中　勉はいつも紅茶を僕に薦めてくる。
いつもなら警戒せずに済むけど、今日は違う。
芹中　勉が一番疑わしい人物である限り、警戒した方がいい。

「はい。今日はダージリンだよ」

「ありがとうございます」

コップを受け取り、コップの底を見る。沈殿物は……ない。
中身をほんの少し、口に含む。苦味は……ない。
睡眠薬は入ってないのか？

「難しそうな顔をして、どうかしたのか？紅茶に何か入っていたか？」

「あ、いえ。いただきます」

芹中　勉は紅茶を飲んでいる。睡眠薬入りなら、飲まないよね。
これで飲まなかったら怪しまれる。味に異常は感じられない。
警戒のし過ぎなのかなぁ？

ーとある誰かの視点ー

あぁ、鼎が紅茶を飲んだ。
睡眠薬が入っていないか確認していたが、そんな簡単に発見出来ない睡眠薬を使ったのだよ。

私はこの睡眠薬に慣れてしまったから、飲んでも眠りはしない。
効果が現れるまで、後十分。「杜塚は卒業したら大学に行くのか？」

「はい。そのつもりです。まだ、どこの大学に行こうか決めてないですけど」

半分程飲んだ紅茶を見つめながら喋る。

「杜塚の成績ならどの大学にも行けるさ。阪大でも目指したらどうだ？」

「考えてみます」

なんだろう。なんか、違和感を感じる。
まるで、時間を稼ぐために話してるように感じる。
さっきから時計をしきりに見て、時間を気にしてるのも変だ。
いつから時間を気にしてる？
……僕が、この紅茶を飲んだ時からだ。
飲んでからゆうに八分は経っているはず。
まさか……！

「先生、そろそろ帰ってもいいですか？」

芹中　勉は一度俯き、顔を上げる。
そこには、学校で見せる教師の目は微塵も失せ、代わりに獲物を狙う、獰猛（どうもう）な肉食獣の目が、爛々と輝いている。

「なんだ。気づいてしまったのか？」

「……！」

まずい。早く、早く逃げないと。
芹中　勉が立ち上がり、近づいてくる。
「逃がさないよ、鼎」
「――――！」
嫌だ。僕を名前で呼ぶな。
早く、逃げないと、また僕は……。
逃げようとして、いきなり視界が歪み、まともに立っていられなくなる。壁に手をつき、やっとのことで身体を支える。
「……ぁ…」
まずい。こんなに早く効きはじめる、強力な睡眠薬だったなんて。
立つことさえ出来なくなって、床に倒れる。
芹中　勉が、僕を見つめている。
油断するんじゃなかった……。馬鹿だ、僕は……。
目を開けているのさえ、辛くなってくる。
目を閉じたらいけないと分かってても、意思に関係なく瞼が下がってくる。
意識を失う前に見えたのは、不気味に微笑みながら僕を見る、芹中勉――。
ーとある誰かの視点ー
「あぁ……やっと、手に入れた」

眠っている鼎の頬に触れる。
あぁ、なんと触り心地のいい肌なのだろう。
髪に触れる。やはり、触り心地のいい髪だ。柔らかく、絹のような髪。
やはり、この子は天の作りし芸術作品なのだ。
鼎を抱き抱える。
さぁ、自宅に連れ帰って、存分に鼎を味わい可愛がってやろう。

「愛しているよ、鼎……」

ーとある誰かの視点ー

自宅に着き、鼎をベッドに寝かせる。
恐らく、抱いても抵抗出来ないと思うが、万が一抵抗されてもいいように、縄で両手を縛っておいた。
ああぁぁ……興奮して仕方ない。
下半身に血液が集中して、はち切れんばかりに勃起している。
この子の身体はどんな感触がするのだろう。
あぁ……早く、この身体に、はち切れんばかりに勃起した私のものを埋め込みたい。
早く目覚めてくれないだろうか。
あの睡眠薬は即効性があり、なおかつ効き目が切れるのも早い。二時間程度で切れる。そして、もうひとつの効果が魅力的だ。
もうそろそろ目覚めるはずなのだが……。
ああ、鼎の瞼が微かに動いた。
いよいよだ……。「……ぅ…」

のろのろと目を開ける。
薄暗く、見慣れない部屋だ。

どこだ、ここは……？
記憶を辿る。目が覚める前に僕は……。

「……！」

そうだ。僕は芹中　勉に睡眠薬を飲まされて眠ってしまったんだ！
起きようとして、身体に全く力が入らないことに気づく。
手首を見ると、縄で縛られている。
嫌だ。怖い。僕は、また、男に犯されるの……？
嫌だ、嫌だ、怖い……。
なんで、なんでまた、あんな怖くて嫌な思いをしなきゃいけないの……？
右を見る。

「――――！」

不気味に微笑む芹中　勉が、すぐ傍にいた。「やっと目を覚ましてくれたね……、待ちわびたよ」

芹中　勉の手が、伸びてくる。僕の頬に触れる。
嫌だ、触るな。あの男と同じ手付きで、触るな。

「嫌…だ、触る、な……」

身体に力が入らない。声さえも満足に出せない。

「ああ、声が出ないだろう。あの睡眠薬はね、目覚めてから三時間は、自由に身体を動かせない効果があるんだよ。魅力的だろう？」

三時間……？三時間もこの男の好きなように、身体を弄ばれるのか？

嫌だ、そんなの嫌だ！
なのに、いくら動かそうとしても、身体は動かない。

「そんな顔をしなくてもいい。痛くないように、優しく抱いてあげよう」

「……っ…！嫌だ…、離せ…！嫌だ……！」

芹中　勉の指が、僕の唇をなぞる。
遂に、僕の身体に覆い被さってきた。
僕の顎に指を添え、顔を近づけてくる。
抵抗したいのに、身体が動かない。それが、すごくもどかしい。
芹中　勉の唇が、僕の唇に触れる。舌が、入り込んでくる。暴君のように、口腔内を撫で回す。
早く終わってほしい。それだけを思う。
やっと唇が解放される。
芹中　勉は微笑みながら僕を見る。
僕は睨みつけることしか出来ない。シャツのボタンを外される。全て外して、胸を触られる。
胸の突起したものを、舐められる。
突起をついばむように軽く吸った後、全体を口に含まれる。

「……！」

なんで、なんで身体は勝手に気持ちよくなるの。
なんで身体は感情を裏切るの。
嫌なのに、本当に嫌なのに。
指と舌が突起を執拗に撫で回す。
首筋を、執拗に舐められ、刺激される。
その度に、寒気が走る。快感、と言い換えてもいいかもしれないほ

どの。
あの時と同じだ。僕の身体を熱く、ねっとりとした舌と指が這いずり回る。
身体は感情を裏切って勝手に昂っていく。
何もかもが嫌だ。
思えば、あの男さえ現れなければ、あんなことにならずに済んだんだ。
あの男さえいなければよかったんだ。
せめて、あの人だけでも、殺さずに済んだんだ。
あんな風に恨まずに、殺さずに済んだんだ。
でも、今更後悔はしない。許しはしない。

「そろそろ、本番といこうか」

「――――！」

嫌だ、嫌だ！それだけは嫌だ！

「嫌だ、それだけは……嫌…だ…離、せ……離して…」

ズボン越しに、わざと異様に昂った芹中　勉のものが、下半身に押し当てられる。

「――――！」

目尻に涙が溜まり、流れていくのを感じた。

「うあぁぁぁぁぁぁあっ！」ズボンと下着を脱がされる。
じっと、下半身を見られる。
気持ち悪い。

「君のここはこうなっているのか……可愛いものだ」

芹中　勉の手が、僕のものに触れる。
そして、排泄器官としてのみ使われるところに、指を這わせられる。
芹中　勉が何かを手に取り、中から透明なゼリー状の液体を手に出し、伸ばし始める。

「このローション、催淫剤のような効果もあるのだよ。催淫剤といっても、少し気持ちよくなる程度のものだがね。痛いのは嫌だろう？」

痛い方がいい。
そんなことされて気持ちよくなるくらいなら、痛い方が全然ましだ！
指が中に入ってくる。本来なら、受け入れるはずのない器官に人の指を感じて、圧迫感と気持ち悪さを感じる。
身体さえ動けば、この男を蹴飛ばして、殺してやるのに。
指が執拗に中を撫で回す。ぐるり、と中の襞を一周するように動いた。
ぎゅっと唇を噛む。なのに、力が入らない。
撫で続けられて、それがある一点で止まる。そこをぐっと押されて、無意識のうちに声が漏れた。

「ぅ……」

ぞわっと、背筋を寒気が走る。
嫌だ、気持ち悪い。
そう思っても、身体は快感を訴えてくる。
嫌なのに。強姦されて気持ちよくなるなんて、絶対に嫌なのに！

「段々と開いてきたね」

言うな！そんなこと！

「そろそろいいかな」

そう言って指を抜いた。けど、次に来るのは……。

今までとは質、量、ともに違うものが押し当てられる。

もう、諦めるしかないのか。このままこの男に犯されるのを、受け入れるしかないのか。

なら、せめて、早く終わって欲しい。

「あぁ、そんな顔をしなくていい。最初は痛いだろうが、すぐによくなる」

芹中　勉が僕の耳元で、そう囁いた。全てが終わって、余韻に浸りながらベッドに座る。

鼎の身体は、思った以上に極上だった。

ひとつ意外だったのは、鼎でも泣くのだ、ということ。

泣いているところも可愛かったが。

学校では常に冷静沈着で、表情らしい表情を見たことがなかったから、てっきりこの子は泣くことはないと、勝手に思っていたのだが。

表情を見せるといえば、薪沢という生徒の前だけだ。

薪沢の前だけ、鼎は表情を見せる。

ほんの少しの変化とはいえ、笑顔を見せる。

なぜ、薪沢の前だけなのだろう。

気になるが、今考えることではない。

鼎の頬に手を伸ばす。

「嫌だ……！触るな…！あぁぁぁあっ…！！」

私が触れようとした途端、鼎が半狂乱になって叫び、暴れようとする。
そんなに嫌だったのか？私はこんなに鼎のことを愛してるというのに。
私が抱いてきただいたいの子は、二回目からは喜んで抱かれる子ばかりだったのに。
仕方ない。ゆっくりと、快楽と私の愛を、鼎の身体に刻みつけるとしよう。
今日のところはこれ以上は無理だろうから、寝るとしよう。
鼎に近づく。
半狂乱になって暴れようと構わない。
どちらにしろ、抵抗出来ないのだから。
鼎の頬に触れる。悲鳴のような声が、鼎の口から漏れる。
額に、軽くキスをする。

「おやすみ、鼎……」「はぁ…はっ……ぁ…」

呼吸が激しく乱れている。
気持ち悪い。ただひたすらに、気持ち悪い。
この気持ち悪さを早くどうにかしたい。
なんで、なんで。こんな、嫌なことばかり……！
どうしてなんだよ……！
泣くのは後だ。
あの男はどこかに行った。
身体も少しずつだけど、動くようになってきた。
逃げるなら今だ。「はぁ……はぁ……」

ただひたすらに走る。よかった。芹中　勉の住所を調べておいて。
調べてなかったら、いくら家の近くでも迷うところだった。

あの後、縄を無理矢理ほどいて逃げてきた。
芹中　勉は寝ていたから、簡単に抜け出せた。
頑丈に縛られていたから、逃げることはないと油断したんだろう。
まだ睡眠薬の効果が完全に切れてないのか、身体にあまり力が入らない。
疲れた…。
一旦立ち止まる。力が抜けて、膝をつく。
身体を掻き抱く。気持ち悪い。気持ち悪くて仕方ない。
膝にぱたり、と何かが落ちる。膝がほんの少し濡れている。
そこでやっと、ずっと泣きながら走っていたのだと気づく。

「……ぅ…うぅっ……うあぁぁぁぁぁっ！」

やっとの思いで家に着く。
家全体が暗い。誰もいないのか？
鍵を開ける。中に入ると、人の気配はない。
あぁ……そういえば、父さんと母さんはどこか忘れたけど、出かけるって言ってたな…。
那奈瀬は、大学で課題だっけ…。

「はは……本当…こういう時に限って、誰もいないよね…。あの時もそうだったよね…。あの時は本当に助けて欲しかったのに……誰も…気づいてくれなかったよね…。薪沢は気づいてくれたのに…どうして家族は気づいてくれないの？」

暗闇に向かって呟く。今更期待はしない。
家族なんて所詮幻想。とっくに壊れてる。壊れたまま、なんとか今まで壊れていないように見せかけて、繕っていただけ。

いつか壊してやろうか。あの時みたいに。
どうせ最初から壊れてるのなら、修復出来ないくらいに粉々に壊してやろうか。
いつか。

芹中　勉、お前は殺してやる。
明日にでも。
今日は風呂に入って寝よう。
疲れた……。六月二十日　芹中　勉

僕には分からない
“愛”って何？
“絆”って何？
そんなもの、簡単に壊れてしまうのに
壊されてしまうのに
僕には分からない
とっくの昔に忘れてしまったから
とっくの昔に捨てたから「おはよう鼎。今日は大丈夫？」

リビングに入ると、母さんが心配そうに訊いてきた。

「うん。大丈夫。今日は行ける」

昨日は学校を休んだ。身体がすごくだるくて、痛かったから。
まだ少しだるいけど、休むほどじゃない。

「はい、朝ごはん。昨日はびっくりしたわよ。学校を休んだことがない鼎が、いきなり休むんだもの。本当に大丈夫？無理してないわよね？」

「うん。本当に大丈夫だから」

ねぇ母さん。本当に僕のことがそこまで心配？
母さんも父さんも、本当は僕のことなんか気にしてないくせに、体裁を保つために無理に心配しているようにしか、僕には思えない。
実際昔はそうだったから。
いや、昔は近所の目も気にしてなかったか。
母さんはどうか知らない。でも父さんは、仕事と母さんにしか興味ないんだろう？
僕のことなんか、本当はこれっぽっちも気にしてないんだろう？
僕にはもう、信じるなんて無理だ。信じられない。
人を信じることなんて出来ない。

「ごちそうさま。そろそろ行ってくる」

鞄は玄関に置いてある。後は学校に行くだけ。

「いってらっしゃい。気を付けてね」

「いってきます」

リビングを出て、玄関で靴を履いて外に出る。
学校に行けば芹中　勉に会う。どんな顔をして僕を見るか楽しみだ。
芹中　勉、昨日は無理だったけど、今日こそ殺してやる。

―芹中　勉の視点―

教科書の説明をしながら、鼎を見る。
昨日は驚いたよ。逃げないように頑丈に縛ったのに、ほどいて抜け出したのだから。
昨日は休んでいたが、身体が痛かったのかい？
最初は痛くても、すぐに快楽に変わるというのに。
現に、可愛く喘いでいたではないか。
泣きながら、悲鳴のような喘ぎ声を上げていたではないか。
気持ちよかったのだろう？
気持ちいいのに、認めたくなかったのか？
問題なのは、鼎を簡単に手に入れられなくなったということだ。
どうするか。
生徒にはばれないように、鼎に視線を向ける。芹中　勉が僕を見ている。
それに気づいて、周りには気づかれないように芹中　勉を睨む。
睨んでるのに、芹中　勉は何を思ったのか、微笑んだ。
気持ち悪い。何を考えてるのか分からないから、気持ち悪い。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。
これで今日の授業は終わった。
芹中　勉が僕に近づいてくる。

「杜塚、放課後資料室まで来てくれないか」

「いいですよ。ちょうど、僕も先生に用事がありますから」僕と芹中　勉、二人で資料室に入る。

「昨日は驚いたよ。あんなに頑丈に縛ったというのに、ほどいたのだから」

「あぁ、あれですか。よくも頑丈に縛ってくれましたね。ほどくのに十分もかかりましたよ」

芹中　勉は椅子に座る。僕は立ったままでいる。

「あれを十分でほどいたのか。それほど嫌だったのかい？」

「ええ、嫌ですよ。あれは僕の感情も、家族も、運命も何もかもを狂わせて、ぶち壊したんですから。まぁ、家族は最初から壊れてましたけど」

あんなことがなければ、僕が本当の快楽殺人者の道を辿ることはなかったんだと思う。

破壊衝動を抱えつつも、周りの人間となんら変わりない子供でいたのかもしれない。

違うか。あれは、偶然にも重なった不幸の中のひとつにすぎない。

どう転んでも僕は人を殺して、快楽殺人者の道を辿ってる。

「それじゃあ、君は一度…」

芹中　勉が驚いてる。

「それ以上は言わないでくださいよ。聴くだけで虫酸が走る」

「杜塚は私に報復したいのかね？」

「……」

報復と言っても、あんたが考えてるものは絶対違うよ。
僕はお前を殺したい。
おとなしく、僕に殺されろ。

「先生、ついてきて欲しい所があるんですけど、いいですよね？」

―芹中　勉の視点―

鼎についてきて欲しい場所があると言われ、黙ってついて行く。
まだ夕方だというのに、全く人気がない。
このような場所は初めてだ。
先程から三十分は歩いているが、いったいどこに行くのだろう。僕の後を黙ってついて来る。
目的地は勿論、廃ビル。
近くまで誘い出して、スタンガンで気絶させて、抵抗出来ないように縄で縛って、そして殺そう。

「どこに行くんだい？」

「もう少しで着きますよ。先にこの道を登ってください」

廃ビルに繋がる山道を指差す。
黙って登り始める。僕も後に続く。

鞄からスタンガンを取り出す。気付かれていない。
あぁ、廃ビルが見えてきた。
そろそろいいかな。
芹中　勉が廃ビルを見て立ち止まる

「あそこなのか？杜塚がついて来て欲しいと言った場所は？」

「そうですよ。あそこで僕に殺されてください」

「何？」

スタンガンのスイッチを入れる。
若干距離があるから走る。
僕の方を振り返る前に、スタンガンを脇腹に押しつける。
軽く痙攣を起こして、地面に倒れた。
これから奥の部屋に運んで縛りつけて、たっぷりいたぶって殺してやる。ベッドに縛りつけて、後は芹中　勉が目覚めるのを待つだけだ。
机の引き出しからナイフを取り出し、眺める。
今まで殺してきた獲物の血を、たっぷりと吸い込んだこのナイフ。
ちゃんと手入れしてあるから、未だに切れ味は鋭く衰えていない。
刃先を舐める。
いろんな血の味がする。
そういえばこのナイフ、どうやって手に入れたんだっけ。
間違いなく買ってはいない。
あぁ、なぜかゴミ捨て場に落ちてたのを拾ったんだ。刃渡り十五センチの大振りのナイフ。

「……っ…」

微かな唸り声が聴こえ、後ろを振り向く。
芹中　勉が目を覚ました。
さぁ、始めよう。

ナイフを持って近づく。

「やっと目が覚めましたか。待ちわびましたよ」

「ここはどこだ？そのナイフで、私に何かするつもりかね？」

「ええ。今からこのナイフを使って、先生をたっぷりいたぶって殺すんですよ。先生は僕の身体を好きに弄ったんですから、僕だって先生を好きに弄ってもいいでしょう？だから、おとなしく僕に殺されてください」

ナイフを胸に、服の上から滑らせる。
芹中　勉もやっぱり、命乞いをするのかな。
命乞いされたって助けやしないけど。

「……くくっ……はは…」

芹中　勉を見る。笑っている。
何が面白いのか、笑っている。

「ふはは、あはははははははっ！」

「何が……おかしい…！」

気持ち悪い。何が面白いんだよ。
これから殺されるっていうのに、なんで笑っていられる？

「ははははは……だってそうだろう！これが笑わずにいられるかね！？あははははは！形は違えど、君と私は同類な訳だ！さぁ、存分に私をいたぶって殺してくれたまえ！君になら喜んで殺されよう！君に殺されるなら本望だよ！」

ぞっとする。なんで、そんなこと言えるんだよ。

気持ち悪い。

「だったら……望みどおり、たっぷりいたぶって殺してやる…！」

あぁ、なんだかイラつく。

芹中　勉が僕に殺されることを喜んでるからだ。

なんで喜んぶんだよ。僕はお前が恐怖に怯え、悲鳴を上げる姿が見たいのに。

まぁいい。楽しめなくてもいい。

お前が望んだんだ。殺してやる。

腕にナイフを深々と突き刺す。

「ぐっ……！」

悲鳴さえ上げないのか。今まで殺してきた獲物なら、腕にナイフを突き刺したくらいで悲鳴を上げてるのに。

ナイフを抜き、同じ場所にもう一度突き刺す。

「……っ…！…遠慮してるのかね？もっといたぶってくれていいのだぞ？思いつく限りの残酷な方法で殺してくれたまえ。私は喜んでそれを受け入れよう」

そんなに言うんなら、与えてやるさ。

耐え難い苦痛を。

芹中　勉、僕は僕の方法で、お前を犯してやる。

「いいんですね？きっと気絶するくらい痛いですよ」

「いいさ。私に耐え難い苦痛を与えてくれたまえ」

本当にいいんだな？嫌と言っても僕はやるけど。
芹中　勉の足の間に、身体を割り込ませる。
脱がせるのが面倒だから、ズボンを切り裂く。
その下から、異様に興奮した芹中　勉のものが、露になる。

「先生、僕にこんなことされて、興奮してるんですか？」

「ああそうさ。興奮してるのだよ。これが興奮せずにいられるかね？」

普通は興奮しないよ。普通なら命乞いしてる。
どうでもいいけど。
男ならここが一番、苦痛を感じる場所だ。
芹中　勉のものを掴み、ナイフの刃先を少し突き刺した。突き刺すのを何度も繰り返す。
次第に血塗れになり、ズタズタになる。
なのに、芹中　勉は呻き声を上げ、少し苦痛の表情を覗かせるだけだ。
痛くないのか？おかしいんじゃないのか。
本当に苛つく。
これ以上やっても不満が募るだけだ。
お前をいたぶったって満足出来ない。
もういい。止めを指してやる。
止めを指す前に、脇腹にナイフを突き刺す。

「ぐぅっ……！」

やっぱり、僕が欲しい悲鳴はくれないのか。
イライラする。何がなんだか分からない感情が沸き上がってくる。
怒りか、はたまた悲しみか。
ナイフを腹に突き刺す。そして切り裂いていく。
なのに、悲鳴を上げない。
芹中　勉を見ると、笑ってる。
僕以上におかしいんじゃないのか？狂ってるんじゃないのか？
なんで笑ってるんだよ。僕の欲しいものを、なんでくれないんだよ。
もういい！
腹に何度もナイフを突き刺す。
次第に虫の息程度の呼吸しか聴こえなくなる。
それなのに、笑ってるんだ。
無意識のうちに、ぎりっと歯軋りをする。
心臓に突き刺すために、ナイフを振りかざす。
それを見ても、笑っている。
芹中　勉が声はほとんど出ていないけど、唇を動かす。

「……っ…！」

この期に及んで、まだそんなことが言えるのか。
どうして、あの時欲しかった言葉を、お前が言うんだよ。

「さよなら、先生」

ナイフを心臓目掛けて突き刺す。
芹中　勉は最後にこう言った。

愛しているよ　鼎虚しい。
殺した後に必ずやって来る興奮も、快楽も、満足感もない。
虚無感。
ただ、虚しい。なんで虚しいのかも分からない。
様々な感情がごちゃ混ぜになっている。
笑いたいのか、泣きたいのか分からない。
あぁ……死体処理をしなきゃなぁ…。
そろそろ死体処理の方法、教えようか。
解体した後、食べるんだよ。
さっきまで血が通って、生きてた肉体は生でも食べられる。
食べられる部分は全て食べる。
食べられない骨は斧で粉々に砕いた後に、中身の見えない袋に詰めて、ゴミ捨て場のゴミの中に混ぜて捨てる。
この方法なら、死体が見つかる心配はないだろう？
どこかに埋める方法もあるけど、埋めたら掘り返される心配がある。
だから、食べるんだよ。
さっさと死体処理を済ませよう。

夜道を歩く。
死体処理を一時間半で済ませて、シャワーを浴びて、今しがた粉々に砕いた骨をゴミの中に捨ててきた。
ふと、立ち止まって夜空を見上げる。
雲が月を隠し、ぼんやりとしか月の姿が見えない。

雨が降りそうで、降らない。
あの日も、こんな夜だった。
初めて人を殺した、あの夜も。
まるで僕を闇に引き摺り込むように。
暗い闇が、拡がっていた。
僕は自ら、暗い闇の中に堕ちたんだ。
何もかもが信じられなくなって。
もう何も、感じたくなくて。

少し、昔話をしようか。
僕が快楽殺人者になるまでの話を。

下らない話だ。

二年三ヶ月前・七月一日　そして、僕は快楽殺人者になった（前書き）

そして、僕は快楽殺人者になる
何もかもが信じられなくなって
何も感じたくなくて

狂ってしまえば何も感じなくて済む

そう思って

お前達のせいだ

人は簡単に変われない？人は簡単に変われる？　変われるし、変わ
れないさ

二年三ヶ月前・七月一日　そして、僕は快楽殺人者になった

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響く。
チャイム鳴った途端、皆一斉に下校の準備を始める。
僕は日直だから学級日誌をつけて担任に渡してから、鞄に教科書や筆記用具を詰める。
正直、家には帰りたくない。
でも、帰るしかない。
憂鬱しか感じない。

「杜塚、そんな難しい顔してどうしたよ?」

薪沢が元気よく話しかけてきた。
薪沢が羨ましい。明るいのは、家族間が良好だからだろうから。
僕の家族なんて……。

「お前さぁ、なんか最近暗い顔してんの多くなったよな。なんかあったのか?」

「別に。何もないよ」

そう、他人に言うことは何もない。

「薪沢、部活でしょ?早く行った方がいいんじゃない」

「そうだな。じゃあ、また明日な!」

「うん。じゃあね」

元気よく手を振ってきたから、振り返す。
帰りたくないけど、帰ろう。

「ただいま……」

帰ってくる返事はない。今日もいないのか。
リビングに入ると、母さんがいた。
化粧をしてよそ行きの服を着ている辺り、今日もどっか行くのか。

「あら、お帰りなさい。母さん今日も夜遅くなるから。夕飯は冷蔵庫にあるからね」

僕のことなんか見ずに言う。

「うん……ありがと」

聴いていたのか分からないけど、母さんは僕の横を素通りして玄関に向かう。
毎日毎日、どこに出かけるんだろう。
化粧を念入りにして、服もおしゃれな物を着て。
父さんも二年前くらいに、仕事が成功してからあまり家に帰ってこない。
兄さんも、毎日友達のところで寝泊まりしてる。
家には、僕一人だ。
だから、家にはあまりいたくない。

一人は、寂しいから。「着替えよ……」

とりあえず着替えよう。二階の自室に入る。
Tシャツとジーパンに着替えてテレビをつけるけど、視線はそっちに行かない。ただ、なんとなくつけているだけ。

……昔はこんなんじゃなかった。

父さんの仕事が忙しくなって家を空けがちになったのが、およそ二年前。
その頃から、徐々に家族の空気がおかしくなってきたんだ。
それ以前が、ドラマに出てくるような理想の家庭という訳じゃなかったけど、それでも、楽しいことがあれば会話が弾んだし、皆で笑い合ったし、父さんが一月も帰ってこないということもなかった。
確かに父さんの仕事が成功してお金は手に入ったけど、喜ぶ気には到底なれない。
兄さんは、喜んでるけど。
テレビ画面の中で笑い声が起こる。
なんだか、一人ぼっちで立っているような気持ちになった。
昔はそんなこと思ったことなかったのに。
母さんがいて父さんがいて兄さんがいて、僕がいた。少なくとも、家の中は安心出来る場所だったのに。
今は、僕しかいない。
気の置けない友達が一人でもいれば、こんなこと思わないのかな……。
家庭があれば満足だったんだ、昔は。
車のエンジン音がした。窓の外を見ると、車がガレージ停まったみたいだ。
珍しく父さんが帰って来たらしい。
昔なら嬉しかっただろうけど、今は顔を合わせてもなんだかぎこちない顔しか出来ない自分が、嫌だった。「おかえり」

一階に下りて、父さんに声をかける。

「ただいま。久しぶりだな。元気にしてたか？」

「うん。元気だよ」

本当に、父さんは僕のことを気にしてるんだろうか……。

「母さんと那奈瀬はどうした？」

「母さんも兄さんも出掛けてる」

「そうか。皆で食べようと思って寿司を買ってきたんだが。仕方ないな。二人で食べるか」

「うん…」

父さんには言えないけど正直、気まずい。

仕事が順調にいってるのか、父さんは機嫌がよかった。
お酒を飲んで、寿司を食べながらにこやかに話すその姿は若々しい。
父さんの方が母さんよりも三つ年上のはずなのに、父さんの方が若々しく見えるくらい。
ほとんど父さん一人が話す。確かに寿司は美味しいけど、やっぱり気まずい。

「やはりここの寿司はうまいな。今度から出前を取ることにするか」

「うん……そうだね」

父さんの声と僕の相槌が対照的なのに、父さんはそんな齟齬にも気づかないで、上機嫌に笑っている。

「どうだ、学校の方は」

……何が起こっても父さんが何かしてくれる訳じゃないのに。家庭そっちのけで仕事に行くくせに。

「うん、楽しくやってるよ」

「そうか。それはよかった」

……本当は関心もないくせに。

僕はいつからこうなったんだろう。内心と出る言葉のずれは激しく、本心を言葉に出すことはまずない。

それは家族だけじゃなく、誰に対してもそう。

「どうした？元気がないな」

「そう？なんでもないよ」気づかれないように、そっと、溜息を吐く。

本当に最近は家族だけじゃなく、幼馴染みの薪沢に対しても本心をさらさない。嫌気が差す。

「鼎」

いきなり、父さんが真面目な声で呼んだ。

「何?」

「仕事が忙しくて家に帰れないことは、済まないと思っているんだ。これじゃあ一家の主として失格だろう。だからな、鼎に対して出来ることはしてやりたい」

思わず父さんの顔を見る。さっきと違って真面目な顔をしてる。

「だからな…」

「うん」

「鼎の口座にとりあえず二十万振り込んでおいた。これで当分は不自由ないだろう?」

どうだ、と父さんは笑う。

どうして……どうして分かってくれないんだろう…。

もしかしたら、ってそう思ったのに。また昔みたいに、家族が一緒に、ってそう思ったのに。

父さんの考えはそうじゃなかった。

少しでも期待した僕が馬鹿みたいじゃないか。

お金なんて欲しくない。そんな物が欲しいんじゃない。

そんな物では埋め合わせることが決して出来ない何か、その何かが欲しいのに。

僕以外は、誰も、欲しくないのかな……。

「どうした?二十万くらいでは足りないか?」

少し不安そうな顔になる。でも、気にしてるのは金額の多寡(たか)だけに

過ぎない。僕の気持ちなんて気にしてないんだ。
諦めて、少し笑う。

「ううん、ありがとう」

「そうか。よかった」

父さんが安心したように笑う。父さんにとってはいいことなんだろう。
無意識のうちに、溜息を吐いた。

―薪沢　波哉斗の視点―

宿題に集中出来ねぇ。幼馴染みの杜塚のことが、どうしても頭をよぎる。
あいつが、寂しそうに笑うからだ。
きっと、家族のことで悩んでんだろうな。
絶対、あいつは無理してる。
なんでもない、って言って笑う時こそ、あいつが無理してる時だ。
少しくらい、思ってることを言えばいいのに。
言われても、俺は何も出来ねぇけどさ。
でも、口にするだけでも違うと思うんだ。
いくらでも聴いてやるのに。
やっぱ俺じゃあ、頼りねぇのかな。
寂しそうに笑うから、気になるじゃねぇか。
あいつは優しくて、傷つきやすくて、騙されやすい奴だから余計気になる。
自分の中に溜め込んで、外に出そうとしない。
なぁ杜塚、あまり溜め込みすぎると、いつかパンクして取り返しの

つかないことになるぞ。
そうなる前に、誰でもいいから思ってることを言えよ。
言えるんなら、家族に言った方がいいと思うけどな。
でも、お前の性格を考えたら、家族に言えないんだろ？
本当は寂しくて寂しくてたまらないのに、口に出せないんだろ？
俺に出来ることがあったら、いくらでもしてやるのに。夕食を食べた後、父さんはまた仕事に行った。
本当に仕事ばっかり……。
やっぱり、本当は、僕のことなんか気にしてないんだ。どうでもいいんだ。
ねぇ、家族なのに、どうしてこんなに遠く感じるの？
手を伸ばしても、届かない。
言いたいことはたくさんある。でも、言葉にしてしまえば、壊れかかっていたとしても、かろうじて繋がってる家族の繋がりさえも、壊れてしまう気がして、怖くて、言葉に出来ない。
ねぇ、手を伸ばして、いつか届くと、信じ続けていいのかな……。
その時、玄関の扉が乱暴に開いて、閉まる音がした。
一階に下りる。母さんが、帰ってきた。
服装も髪型も乱れて、泥酔して、帰ってきた。

「あ～、鼎、ただいま～。あはは、飲み過ぎちゃった」

……母さんのこの姿を見るのは、嫌いだ。
こんな人じゃなかったのに。

「大丈夫？ちゃんと歩ける？」

「あはは、大丈夫～」

立ち上がって千鳥足で歩く。全然大丈夫じゃない。

下手したらこけて、どっかに頭をぶつけそう。
母さんの手を取って、リビングに連れて行く。そのまま、ソファーに座らせる。

「大丈夫？水でも飲む？」

「そうね～、持ってきて～」

冷蔵庫を開けて、中から水を出してコップに入れる。

「はい」

「ありがと～」

コップを受け取り一気に飲み干す。

「母さん、父さんが帰ってきたよ」

そう言ったら、母さんは嫌そうに顔を歪めた。

「ふん、あんな奴。帰ってきて何するのよ。ただご飯食べて、自分の自慢するだけじゃない。私の話なんか聴かないくせに。あんな奴、いっそ死んでくれた方がせいせいするわ」

……やめてよ。お願いだから、僕の前でそんなこと言わないで。

「僕、もう寝るね。おやすみ」

「あら、そう？おやすみ～」

自室に戻って、ベッドに潜る。
寝るには早いけど、寝てしまおう。
眠ってる間だけは、何も感じずに済むから。何も考えずに済むから。
目を閉じる。目尻から、涙が流れるのを感じた。
はっとして頬も触る。濡れていた。
気づかないうちに、涙が流れていたらしい。

……母さんは、僕が泣いていたのも、気づいてくれなかったんだ…。
目覚ましの音で目を覚ます。
また、朝が、今日が来た。
朝は嫌いだ。どんなに辛くても、苦しくても、悲しくても、容赦なく今日という日が来たことを、突きつけるから。
カーテンを開ける。いっそ腹が立つくらいの快晴が広がってる。
空がどんなに晴れてても、僕の心が晴れることはない。
昨日の母さんの『いっそ死んでくれればせいせいするわ』と、いう言葉が耳から離れない。
昔は仲のいい夫婦だったのに。今は、冷えきってる。
なのに、父さんはそれに気づいてない。
母さんはきっと、父さんと離婚したらお金に困るから、離婚しないだけなんだ。
母さんと父さんの溝を埋めるなんて、きっと絶望的。
もう、無理なのかな…。

制服に着替えて一階に下りる。

「おはよう、鼎。よく眠れた?」

「うん。大丈夫」

今日は機嫌がいいみたいだ。
機嫌が悪いと、起きてこないから。
朝食がちゃんと並べられてるのも、久しぶりな気がする。
座って黙々と食べる。機嫌がよくても、母さんは父さんの愚痴を溢すに決まってるから。
あんな愚痴は聴きたくない。
母さんが父さんのことを嫌いなのは知ってる。でも、今は家族じゃないか。
家族なのに、ああいう風に罵るなんて悲しいじゃないか。
僕だって、父さんに言いたいことはたくさんあるよ。でも、罵りたいんじゃない。
ただ、気づいて欲しいだけ。
僕のいないところでは仕方ないよ。でも、お願いだから僕の目の前で、父さんを罵るなんてやめて。
締めつけられるように、痛むから。
どこが痛むのか、何が痛むのか、分からなくなったけど。「なぁ杜塚、今日これから暇か？」

今日の授業が全て終わって帰る準備をしてたら、薪沢がそう訊いてきた。

「暇だけど、何？」

「ちょっと十分くらい残ってさ、ここを教えて欲しいんだよ」

薪沢が数学の教科書を取り出して、教えて欲しいという場所を指差す。
確かここ、前にも教えなかったっけ？

「薪沢ここさぁ、前にも教えたよね？分かりやすいように丁寧に、教えたはずなんだけど」

「マジごめん！また分からなくなったんだよ。教えてくだされ！」

教えて欲しいのに、ふざけるのはどうかと思うけど。

まぁいいか。どうせ帰ったって僕一人なんだし。

「ノート貸して。何度も口で説明するのも面倒だから、ノートにまとめる」

「いいのか？ありがとう杜塚！」

薪沢からノートを受け取って、大切な部分をまとめていく。

十分くらいで終わった。

「ありがとう杜塚。マジ助かった」

帰り道を薪沢と二人で帰る。

「いいよ。それで理解出来なかったら、薪沢の理解力が皆無ってことだからね。次は僕もお手上げだからね」

「分かった……なんとか分かるようにする」

本当に薪沢は表情がよく変わるなぁ。見てて飽きない。

「……？」

ふと、後ろを振り返る。誰もいない。今、視線を感じたんだけどなぁ。

気のせいなのかな？

「杜塚？どうした？」

「なんか今、視線を感じた気がしたんだけど……気のせいかな」

「気のせいじゃね？」

「そう……だね、そうだよね」

最近いろいろと神経が参ってるから、敏感になってるだけだよね。きっと。「でもさ、気のせいじゃなかったらどうするよ？」

そんな気味悪いこと言わないでよ…。

「考えたくないなぁ…」

「あり得るぜ？学校の女子とか。お前、密かに女子に人気あるの知らねぇだろ？」

「知らない。僕が？まっさかぁ。僕のどこがいい訳？」

笑って手を横に振る。僕が人気あるなんて信じられない。からかわれてるだけだ。

「嘘じゃねぇよ。本当に人気なんだぜ。可愛いって」

可愛いなぁ…。これでも一応男なんだけど。なんだか複雑…。

「可愛いねぇ…。僕、男なんだけどなぁ」

「お前さぁ、自分の顔、理解してねぇだろ？同じ男の俺でも思うぞ。お前は絶対、可愛いに分類されるって」

自信満々で言うことじゃないよ、それ。

「ねぇ、十五歳の男子に可愛いはないよ。あまり嬉しくない」

「ま、そりゃそうだな。補足として、学校のホモ共にも人気なんだぜ？」

それを聴いて一気にぞわっと鳥肌が立った。

「やめてよ！冗談だよね、それ！？」

僕の通ってる学校には、なぜかホモと呼ばれる人種が多い。

「いや、これがマジなんだよ。密かに杜塚を食っちゃおうって奴がいるから、気をつけろよ？」

「あ～やだやだ。気持ち悪い。鳥肌が収まんないよ。どうしてくれるの」

少し恨みを込めて睨んでやる。

「なんだ、あいつのこと思い出したのか？」

にやにやと面白そうに笑う。他人事だと思って。
他人事だけど。
一度だけゲイに付きまとわれたことがある。
かなりしつこかった。いくら断ってもしつこく迫ってくるし。
挙げ句の果てが襲われかけるし…。
薪沢が助けてくれたからよかったけど……助けが来なかったらどうなってたか。
トラウマだよ…。
その後、そのホモは引っ越したから、今はどうしてるのか知らない。

「じゃあ杜塚、今日はありがとな～。また明日！」

「うん、また明日」

手を振って別れる。
……さて……嫌な日常に戻ろう。「……！」

視線を感じて振り返る。
誰もいない。けど、確かに視線を感じる。
誰かが僕を見てる。
ねぇ薪沢、気のせいじゃなかったみたいだよ。
じっと僕を見つめて、離さない。
姿を見せずに、じっと見つめてくる。

怖い……。

嫌だ。怖い。
あの視線、ねっとりとしてて僕を離そうとしないから、怖い。
嫌だ。僕を見つめないで。

全速力で走る。まだ僕を見つめてる。
あまりいたくないけど、早く家に帰ろう。
あの視線にずっと晒されるよりましだ。

「ただいま……」

返事はやっぱり返ってこない。
もうどっか行ったのかな…。
さっきの視線、家に入るまでずっと追いかけてきた。
馬鹿なことをしちゃった。あの視線の誰かに、家の場所を教えるようなものだ。
なんで僕を見つめるんだろう。
怖い。誰か大人で、相談出来る人がいたらいいのに。
寂しくて、怖くて、どうしてこんな思いばかりしなきゃいけないの？
誰か助けてよ……。リビングに入って電気を着ける。
そしたら、母さんがソファーに座っていた。

「母さん？電気も着けずに何してるの？」

のろのろと僕を見る。
僕を見るその目から、覇気も生気も感じられない。
そして、すぐさま視線を足下に戻す。
何があったんだろう。

「何かあったの？」

「あの人が帰って来たのよ。それで喧嘩したの。本当になんなのよ、あいつ。金を持ってなかったら今頃離婚よ！金を持ってることに感

謝するのね！」

怒りを露にして、叫ぶように言う。
泣きそうになるのをこらえて、唇を噛む。
そんなこと、聴きたくない。
ねぇ、いつからそうなったの？
仲がよかったはずなのに。
父さんが仕事ばっかりで、家庭のことなんかそっちのけだから、腹が立つの？
それとも、何か別の理由があるの？
気づかれないように、溜息を吐く。
これじゃあ、僕の話なんか訊いてくれそうにない。
訊いても、相槌するだけに決まってる。相談にならない。
黙ってリビングを出る。
母さんは一度も、僕に視線を戻すことはなかった。

ベッドに横になる。何もする気が起こらない。
このまま、離婚になっちゃうのかな…。
ふと、窓から外を見る。ほぼ満月まで満ちた月が見えた。
その時、視線を感じた。あのねっとりとした視線。

「……！」

嫌だ。まだいるの？なんで帰ってくれないの。
怖い、嫌だ、見つめないで。
これ以上、僕を追い詰めないで。
怖くて、布団を頭から被る。
もう嫌だ。こんな思いばかりもう嫌だ。

助けて。
誰か助けて…。最初に視線を感じた日から、もう四日くらい経つ。
あの視線は毎日、僕を追ってくる。
いくら逃げようとしても、僕を捕まえて離さない。
どこまでも追ってくる。
もう嫌だ。なんで僕を見つめるの。
怖くて怖くて仕方ない。
いつか、あの視線に喰われてしまいそうで怖い。
蜘蛛の糸に絡めとられた獲物が、必ず蜘蛛に喰われてしまうように、
いつか喰われてしまいそうで、怖い。
今日は土曜日。学校は休み。
一日家にいよう。外に出たら、あの視線が追ってきそうで怖い。
その時、携帯が鳴った。薪沢の着信音じゃない。
誰だろう。
携帯を開くと、渡部（わたなべ）　真美（まさみ）と出ている。
渡部さんはクラスは違うけど、同じ中学三年の同級生だ。
最初に声をかけてきたのは渡部さんだ。そしてなぜか、携帯番号と
メールアドレスを交換した。
たまに僕を遊びに誘ってきたりする。
携帯に出る。

「もしもし」

《もしもし、杜塚君？あのね、今日空いてる？》

「空いてるけど、どうしたの？」

《数学と英語でね、分からないところがあるの。杜塚君、数学も英

語も得意でしょ？教えてもらえないかなぁと思って。私がそっち行くから》

「いいよ、僕が渡部さん家に行くから。途中まで迎えに来てくれる？渡部さん家どこにあるか知らないし」

《本当？ありがとう！じゃあ駅に待ち合わせでいい？》

「うん、分かった。じゃあ、また後で」

《ありがとう。じゃあね》

通話を切って携帯を閉じる。
渡部さんには悪いけど、ちょうどいい気晴らしにはなる。
さて、出かける準備をしよう。きっと、この時に全ての歯車が完全に狂ったんだろうね。
最初から、軋んで狂い始めてた歯車が、この時に完全に壊れて、狂ったんだよ。
この時に違う選択をしてれば、また別の未来があったんだろうね。
どっちにしろ、明るい未来なんてないけど。
駅に着いた。渡部さんはまだ来てない。

「早く来すぎたかな…」

それから十分くらい経って、渡部さんが来た。

「ごめ～ん。遅くなっちゃった。待った？」

走って来たのか、息を切らしてる。

「ううん。僕もさっき来たばかりだから」

「そう？ならよかった。じゃ、早速行こ」

「うん」

何かいいことでもあったのかな。すごく機嫌がよさそうに見える。

二十分くらいして、渡部さん家に着いた。

「渡部さん家、大きいね」

僕の家もそれなりに大きいけど、渡部さん家は他の家と比べても大きい。

「さ、入って入っ　て」

「あ、うん。お邪魔します」

「あ～、頭パンクしそう。杜塚君、休憩しない？」

「うん。そうだね。休憩しよっか」

「じゃあ、飲み物持ってくるね。お茶とジュースどっちがいい？」

「僕はお茶でいいよ」

「分かった。ちょっと待っててね」

渡部さんが部屋から出る。
あれから一時間半くらいは経つ。
いつの間にか結構時間建ったな。
言ったら悪いけど、渡部さん、分からないとこ多すぎだよ…。連立方程式とか一次関数とか証明とか、高校受験に出てきそうなものばかり分からないなんて。
もう少し詳しく説明した方がいいかなぁ。
渡部さんが戻って来た。

「はい、お茶。よく冷えてるからおいしいよ」

「ありがとう」

コップを受け取る。

「……？」

底に何か沈んでるけど、なんだろう？ティーバッグのカスかな。それにしてはなんか白い感じがするけど。
一口飲む。気にする程でもないけど、後味がなんか苦い。

「ねぇ杜塚君、私、受験ヤバイかなぁ？」

「ん～、数学は少し、ヤバイかもだね…」

「やっぱりー！杜塚君、もうちょっと詳しく教えて！」

「うん。分かった」「あ～、終わったー！杜塚君ありがとね」

「うん。分からなかったらまた言ってくれていいから」

言いながら目を擦る。
なんだろう……さっきから異様に眠くて仕方ない。
早く帰った方がいいかな。これ以上眠くなったらまずいし。

「杜塚君？どうかした？」

「あ…いや、ちょっと眠いだけだから大丈夫」

そう言ったら、渡部さんの唇が少し笑ったように見えた。
気のせいだよね？

「少しじゃなくてさ、すごく眠いんじゃない？」

「なんで、そんなこと聴くの？」

「だって、さっき睡眠薬入れたから」

睡眠薬……？睡眠薬って、あの不眠症の人が眠るために使う、あの睡眠薬？
どうして……？

「なんで、僕に……？」

あぁ、駄目だ。身体を支えるのが辛くなってきた。身体を支えきれない。
ソファーに身体をもたれさせる。
目を開けているのも、辛い。
眠っちゃいけない。でも、容赦なく意識が奪われていく。
渡部さんが僕の耳元で、嬉しそうに囁いた。

「だって、彼が杜塚君の身体が欲しいって言うんだもん。ごめんね。彼におとなしく抱かれてあげて？」

抱かれてあげてって、どういう意味？

彼って、誰？

僕に、男に抱かれろって言うの？

嫌、だ。助けて、誰か…。

あぁ、そうだった。助けてくれる家族なんて、いないんだった…。

もう、意識が……。

意識を失う瞬間に、目尻から涙が流れていくのを感じた。

―渡辺　真美の視点―

やっと杜塚君が眠った。

ごめんね？睡眠薬なんか飲ませちゃって。

でもね、援助交際してる彼が杜塚君を欲しいって言うんだもん。

連れてきてくれたら十万もくれるって言うんだもん。

実際杜塚君、男の子にしては身長も低くて華奢だし、何より可愛いもんね。

男の子と分かってても、抱きたくなるのかもね。

ごめんね？私のために犠牲になってね？

彼を呼びに行こ。「んっ……」

ふと、目を覚ます。

見慣れない部屋だなぁ…。いつの間に寝たんだろ。

あれ…？なんで僕……、寝てたんだっけ……？

覚めきらない脳で必死に記憶を辿る。

「そうだ、僕……睡眠薬飲まされて…」

腕を見るとベッドに縄で、頑丈に縛られてる。
ほどこうとしてみるけど、ほどけないように縛られてるのか、びくともしない。
焦りばかりが募る。
渡部さんは僕に、彼におとなしく抱かれてあげて、って言ってた。
つまり、眠らされてる間に、その“彼”が来ているに違いない。
ほどけてよ、お願いだから。なんでほどけてくれないの。
嫌だ。嫌だよ。男に犯されるなんて嫌だ。
なんで、なんでこんな目に合わなきゃいけないの？
こんな目に合わなきゃいけないようなことを、僕がしたの？
してないじゃないか。ただ、望んだだけじゃないか。
昔のように、仲のいい家族に戻りたいって、望んだだけじゃないか……！
それの、何がいけないの？

その時、ドアが開いた。

「――――！」

渡部さんと、見知らぬ男が入ってきた。

「起きた？ごめんね。騙しちゃって」

悪びれた様子もなく、微笑みながら言ってくる。
男が近づいてくる。

「嫌だ…来ないで！」

叫んでも無駄だって分かってる。

「怖いのか？怖いだろうな。俺の視線をずっと怖がって避けてたもんな」

「えっ…？」

今、なんて言ったの？

俺の視線をずっと怖がって避けてたもんな…？

「じゃあ、あなたが……ずっと僕を……？」

「そうさ。お前の身体を抱いてみたくてな。お前は、あの人と同じ感触がするのか？」

あの人と同じ感触ってどういうこと？

あの人って誰？

男が僕に覆い被さってくる。

シャツを脱がせられる。男の舌と指が、僕の身体を這いずり回る。

「や……嫌……離して、やあぁぁあぁっ！！」

どれだけ叫んでも、這いずり回る舌と指は止まらない。

嫌だ、このままだったら僕は……。

「やだぁっ！離して！うあぁぁぁあぁぁっ！！」「……はぁっ……はっ…はっ……」

震える身体を掻き抱く。呼吸が乱れて酸素をうまく吸い込めない。

痛い……。

「はぁっ……ぁ……ぅ、ぅうぅ……」

涙が止まらない。

なんで、なんであんな怖くて、痛くて、嫌な思いをしなきゃいけないの？

「杜塚君、大丈夫？」

渡部さんの手が、触れようと伸びてくる。

「触るな！近づくな！」

「ごめんね？だってね、杜塚君を連れてきたら十万もくれるって言うんだもん」

十万……？それじゃあ、僕は、金のためにあの男に売られたっていうのか？

金なんかのために！

どいつもこいつも、金ばかり！

「はい。杜塚君のバッグ。彼がね、終わったから帰っていいって」

何も言わずに鞄をひったくってこの家から出る。

早く家に帰って風呂に入りたい。あの男の感触や唾液が、身体に残ってるから。

身体が、痛い……。

何かが、痛い……。家に着いてすぐに風呂に入って、念入りに身体を洗った。なのに、あの男の感触だけが、まだ抜けない。

気持ち悪い。

痛い、身体中が、痛くてたまらない。

“痛い”。

痛いのは、身体だけ？
胸の奥が、痛くてたまらないのは、気のせい？
どこが痛いのか分からない。
何が痛いのか分からない。
どうして、助けてくれる家族がいないの？
ふと、鞄に見慣れない封筒が入っているのが見えた。
なんだろうと思って、封筒を開ける。

「……っ…、ふざけるな…！」

封筒の中には、十万が入ってた。
これで、何も言うなってことか？
力を込めて握ったせいで、封筒がぐしゃぐしゃになる。

「ふざ……けるな……、ふざけるな！」

封筒を床に叩きつける。

「ふざけるな！僕は、こんなものが欲しいんじゃない！金なんかいらない！僕は、金なんかなくてもよかったんだ！金なんかなくてもいい、平凡でも、ささやかなことで笑えた、昔のように仲のよかった家族が欲しかっただけだ！昔のように仲のよかった家族に戻りたかっただけだ！それの、何がいけないんだよ！」

虚しい静寂に吸い込まれていく。
叫んでも、誰にも届かない。

痛いのはどこ？
痛いのは何？
分からない。いつの間にか、分からなくなった。
ぺたん、と床にへたり込む。

「うあぁぁぁあああぁぁっ！！」今日は月曜日。学校は休んでる。
電話してないけど。
何もする気が起こらない。
昨日はたまに水を飲んだり、トイレに行ったりする以外は、何も食べずにずっと寝てた。
母さんは、僕がこんな状態でも気にならないみたいだ。
様子を見に来ることもなかったから。
しかも、昨日の昼に出掛けてから帰ってこない。もうすぐで四時半になる。
やっぱり、僕のことはどうでもいいんだな。
胸の奥が痛い。怪我した訳じゃないのに。
なんでこんなに痛いのか分からない。
どうやったら、この痛みは消えるんだろう。
どうしたら、楽になれるんだろう。
これ以上、こんな思いをするのは嫌だ。
その時、インターホンが鳴った。
誰だろう。無視しとこうかな……。
また鳴った。二回三回としつこい。
仕方ない。出るか。すぐ帰ってもらえばいいことだ。
ベッドから出て玄関に向かう。
扉を開ける。

「薪沢……」

ー薪沢　波哉斗ー

「杜塚、お前、何かあったのか？」

何かあったとしか思えねぇ。

泣きながら、疲れきった顔をしてる。

もしかして、自分が泣いてることに気づいてねぇのか？

「別に。何もないよ。少しだるいだけ」

「嘘吐くなよ！何もなかったんなら、なんで泣いてんだよ！」

はっとしたように、頬に触る。

驚いてるってことは、気づいてなかったんだな。

「これ、は……」

この期に及んでまだ言い訳するのかよ。

なんで何も言ってくれねぇんだよ。

「何があったのか言え。言うまで、帰らねぇからな」

そう言ったら、諦めたように溜息を吐いた。

「分かったよ……。話すから、中に入って」

言われて中に入る。薪沢に一昨日あったことを、全て話し終えた。

すごく驚いてる。当たり前か。

話したんだから、もういいよね。帰ってくれるよね。薪沢には悪いけど、今は一人でいたい。

「警察には行ったのか？」

「警察？なんで？」

何言ってるんだろう。どうして警察が出てくんの？

「だって、こんなのレイプじゃねぇか！警察に行って話した方がいいって」

「警察が何をしてくれるっていうの？あいつらを、裁いてくれるの？警察に行ったって何もしてくれないよ」

「そんなの、分からねぇじゃねぇかよ！」

あぁ、イライラする。なんでそんなに食い下がるんだよ。

警察が、何をしてくれるっていうんだよ！

「行ったって無駄に決まってる！僕は子供で、あっちは大人なんだ！あいつらに、うまくあしらわれて終わりに決まってる！家族でさえ何もしてくれないのに、他人に何が出来るっていうんだよ！」

「でも、行ってみないと分からねぇだろ。だから」

もういい。もういいんだ。

家族でさえ何もしてくれないのに、他人に期待はしない。

家族にも、もう期待しない。それでいいじゃないか。

「帰れよ！もういいから！お願いだから、もう帰ってよ！」

そう言ったら、薪沢が悲しそうな顔をした。
何か言おうとしたけど、言葉が見つからなかったのか、結局何も言わなかった。

「じゃあ……帰るぞ」

「うん」

薪沢を見送って鍵を閉める。

「ごめん、薪沢……。僕のことは気にしなくていいから……、本当は、薪沢が心配してくれたのは嬉しかったよ。でも……、僕なんかのために、薪沢を巻き込みたくないんだ……」

涙が止まらない。
胸の奥が痛くてたまらない。薪沢が帰ってから、ベッドに横になる。
いつの間にか空は暗闇に包まれてる。
そういえば、昨日から何も食べてない。流石にそろそろ何か食べた方がいいかな…。
部屋から出てリビングに向かう。
鍵が開く音が聴こえた。扉が乱暴に開かれる。
母さんだった。
慌てた様子だけど、その様子じゃあまた出掛けるんだね。

「あ、鼎、すぐ出掛けるからご飯は適当に食べといてね」

「うん……」

小走りで自室に向かう。
覗いてみると、服や化粧道具を大きめの鞄に詰め込んでる。

泊まり掛けか……。三日くらいは帰ってこないな…。
自室に向かう。
考えたくないけど、不倫の二文字が浮かぶ。
今まで考える度に振り払ってきた言葉。

部屋に入る。

違うよね。不倫なんかじゃないよね。
せめて、それくらいは信じていいよね。

服を着替える。

母さんには悪いけど、尾行しよう。
尾行して、不倫じゃないと確かめよう。
そうすれば、不安のひとつは消える。
ねぇ、母さん。不倫なんかじゃないよね？
せめて、それくらいは信じさせてよ。

玄関に向かう。

母さんが玄関を出たところだった。
僕も鍵を閉めて家を出る。
どこかに向かう母さんの後ろ姿は、嬉しそうに見えた。母さんの後をつける。
どうやら駅に向かうらしい。
全然、僕の尾行に気づいてない。
ねぇ、嬉しそうにどこに行くの。
やっぱり家族より、そっちの方が大切なの？
僕は、寂しくてたまらなかったのに。一人は嫌だったのに。
母さんは、それを知ってるはずじゃないか。

それでも、そっちの方が大切なんだね。
母さんが立ち止まった。
僕も建物の影に隠れて立ち止まる。
しばらくして、嬉しそうな顔をして手を振り出し始めた。
母さんの視線の先に目を向ける。

「――――――！あ、あぁ……」

母さんの手を振る先には、あの男が、いた。
僕を犯したあの男。
母さんは嬉しそうにあの男に駆け寄る。

「嘘……だ……、嘘だって、言ってよ……」

母さんは男に抱きつき、口付けを交わす。
僕が見ているのも知らないで。

「あ、あぁ……」

僕の中で、かろうじて形を保っていた何かが、壊れる音がした。鍵を開けて家の中に入る。
どうやって家まで帰って来たのか覚えてない。
二階に向かい部屋に入り、ベッドに倒れ込む。
最悪だ……。信じてたものが、悉く（ことごとく）裏切られる。
胸の奥が、痛くてたまらない。

「ねぇ、母さん……、僕は、その男に犯されたんだよ……。それを知ってて付き合ってるの……」

不倫だけの方がまだよかった。

よりによって、不倫相手があの男なんて。
どう見ても、深い仲。
ねぇ、自分の息子を犯した男に、抱かれてるんだよ。
それを知ってて、抱かれてるの。
腕に痛みが走る。
腕を掴む手に力が入り過ぎて、爪が皮膚を傷つけたみたいだ。
ほんの少し、血が滲む。
涙が滲む。
もう、嫌だ……。
なにもかも、嫌だ……。

「あああぁぁあああぁぁっ!!」ふと、目を覚ます。
どうやら、いつの間にか寝てたらしい。
枕が濡れてる。寝ながら、泣いてたのか。
今まで起こったこと全てが夢だったら、どんなにいいだろう。
あの男さえいなければ、母さんが今みたいになることはなかったのかな。

「あぁ……そうか……、あの男の言ってた“あの人”って、母さんだったんだ……」

そう考えれば辻褄が合う。
はは……、不倫相手の息子に欲情するって、どんな神経してんだよ。
僕がどれだけ怖くて、痛くて、傷ついたと思ってるんだ！
僕を犯した後、母さんを抱いたんだろう？
あんな男に抱かれる母さんも、神経疑うよ。
信じてたのに……。どれだけ、傷ついたと思ってるんだよ……。
ねぇ、何を信じればいいの？
それとも、信じていいものは、もうないの？
ふと、車が止まる音がした。

窓から覗くと、父さんの車が止まってる。
期待しないって思ったけど、やっぱり期待してしまう。
ねぇ、話を聴いてよ。せめて、話くらい聴いてくれるよね？
一階に下りると、父さんは玄関で靴を履いてた。ねぇ、もう行っちゃうの？少しくらい、話を聴いてよ。お願いだから。

「父さん……」

「ああ、鼎。悪いな。すぐ行かなければならないんだ。すぐ帰って来るからな」

そう言って家を出る。
伸ばしかけた手を、下ろす。
すぐ帰って来るって、いつ？
帰って来ないくせに！
なんで、なんで気づいてくれないんだよ！？
僕が泣いてるのに、なんで気づいてくれないんだよ！
僕を見たじゃないか。僕の顔を見たじゃないか。
なのに、なんで気づいてくれないんだよ！
ぺたん、と床にへたり込む。

「もう……いい……、もう、嫌だ……」

こんな思いばかり、もう嫌だ。

「もう……疲れた……」

どうしたら、楽になれる？

「いっそ、壊れてしまえば……楽になれるのかな……」

そうだ、壊れてしまえ。

「いっそ、狂ってしまえば、楽になれるのかな……」

そうだ、狂ってしまえ。

そうさ、壊れてしまえ。狂ってしまえ！
これ以上何も感じなくて済むように。
傷つかなくて済むように。
壊れてしまえば、狂ってしまえば、何も感じなくて済む。
傷つかなくて済む。
壊れてしまえ、狂ってしまえ。
壊れるために、狂うために、復讐を。
あの三人に、復讐を。
短絡的発想とか知るか。
苦しみから逃げてるとか知るか。
殺人が罪とか知るか。

殺してしまえ。

「まずは、渡部　真美。お前からだ」復讐するにしても、警察に捕まらない方法を考えないと。
まずは殺すために、人気の少ない場所か、民家から離れた廃墟を探さないと。
これにはうってつけの廃墟がある。
家から四十分くらい歩いた小さな山の中に、ぽつんとひっそりと建っている、忘れ去られた廃墟。
元々は事務所として使われていたらしい。
中さえ綺麗に掃除すれば、十分使えるはず。

あそこなら昼間でさえ人通りが少ないし、夜なら人気なんてゼロだ。
殺害場所はあそこでいい。
殺す方法はどうしようか。
あっさり殺すんじゃつまらない。
ゆっくりと、じわじわと苦痛を与えて、いたぶって殺してやる。
ナイフだったら、ゆっくり苦痛を与えて、いたぶれるかな。
切りつけて血を流させて、出血によって命が流れていく恐怖を、味わわせてやろうか。
命がじわじわと削られて、死が向かってくるのを味わえばいい。
殺害道具はナイフにしよう。
調達しないと。
最後に、渡部　真美をどうやって誘き寄せようか。
直接電話したら怪しまれそうだし。
あぁ、そこまで頭いい訳じゃないから、適当な理由をつければきっと来るな。
援助交際をしてるんなら、金を渡すフリをすれば、飛びついてくるに決まってる。
待ってろ、渡部　真美。お前を殺してやる。
いたぶって散々苦しめて、殺してやる。
僕がおとなしく黙ってると思うなよ。
ずっとひた隠しにしてた、僕の中の凶暴な破壊衝動を、存分に解放してやる。
さぁ、準備を始めよう。早速準備に取り掛かろう。
まずは廃墟を使える状態にしないと。
箒とかバケツとかは、ゴミ捨て場から拾ってこよう。どうせ捨てるんだし。
しょっちゅう落ちてるしね。
雑巾だけ持って行こう。
洗面所に行って雑巾を持ってくる。
流石に雑巾をそのまま鞄に入れる気にはなれないから、ビニール袋

に入れて鞄に入れる。
さて、箒とバケツを探しに行こう。

「ん～……、ここにもないのか……。しょっちゅう落ちてるのに。人が欲しい時に限ってないなんて」

近くのマンションのゴミ捨て場を三ヶ所見たけど、なかなか見つからない。
こういう時に限ってないなんて。

「……？」

奥の方で何かが光ったのが見えた。
ゴミを退けてみると、ナイフが落ちてた。
拾って眺める。
刃渡り十五センチくらいのナイフ。刃こぼれしてないし、綺麗だ。
少し手入れすれば、十分使える。
思わぬ収穫だね。買わなくて済む。
ナイフを鞄に入れる。
後は箒とバケツを探すだけ。
家から持ってきた方がよかったかな。
まぁいいや。ゴミ捨て場はいくらでもあるし、すぐ見つかる。
次の場所に行こう。「やっと見つけた」

六ヶ所目のゴミ捨て場で、やっと箒とバケツと見つけた。
今思えば、家から持ってきた方が確実によかったよね。時間かかることもなかったし。
さて、廃墟に向かおう。

廃墟の扉の前に立つ。扉は思ったほど劣化してない。
開けて中に入る。
流石廃墟。埃や蜘蛛の巣やらですごい。
一歩足を踏み出すだけで、埃がすごい舞い上がる。
鞄に鼻と口を覆える布は入ってたかな。
作りは至ってシンプルだね。
二階に続く階段と、シャワー室と奥に部屋があるだけだ。
奥の部屋に入る。意外と広い部屋だ。
机と椅子が部屋の隅にぽつんと置かれてて、何故かベッドが置いてある。
折り畳み式のベッドだ。使えたら使おう。
閉じてあったから広げてみる。
違和感なく広げられた。
錆び付いてもないし、十分使える。
鞄の中に布が入ってないか探す。
あった。これで埃は防ぎきれないけど、ないよりはマシ。
さて、掃除に取りかかろう。

多分三時間くらいかけて、ようやくこの部屋と廊下と、シャワー室の掃除が終わる。

「やっと終わった……。これで十分使えるね」

どうしても取れない汚れは仕方ないけど、埃や蜘蛛の巣は全部取った。

そういえばシャワーって使えるのかな。
廃墟だし使えないかぁ。
まぁ、確かめるだけ確かめよう。
シャワー室に入り、蛇口を捻る。
しばらくして茶色い水が出てきた。
しばらく流していると茶色い水は出なくなり、透明な水が出てくる。
触ってみると温かい。

「まさか使えるなんて。好都合だけど。ちゃんと管理されてないのかな」

まぁ、そんなことはどうでもいいけど。
蛇口を閉める。
これで大体の準備は整った。
後は、渡部　真美を呼び出すだけ。
明日の夜、決行しよう。
善は急げってね。
人を殺すのはどんな感覚がするのか、楽しみだ。朝になる。
学校はどうしようか。行く気にならないし、休んでしまおう。
渡部　真美に電話でもしてみようか。
携帯を鞄から取り出して、通話ボタンを押す。
すぐに出た。

《もしもし。杜塚君、どうしたの?》

普段通りの声。僕をあんな目に合わせたことを、なんとも思ってないんだな。
まぁいいさ。僕の怒りと憎悪を、存分にぶつけて味わわせてやる。

「今日、夜空いてる?」

《空いてるけど、何？》

「ちょっとさ、今日の九時に、大駁公園まで来てほしいんだけど、大丈夫？」

《いいけど、なんの用事？》

「来てくれたら教えてあげる」

この女なら、別に金なんか口実にして誘き寄せなくても、こう言えば簡単に引っ掛かってくれるんだった。

《ん～、分かった。九時だよね》

「うん。待ってるよ」

通話を切る。

本当に楽しみに待ってるよ。午後八時十三分。そろそろ家を出てもいい時間だ。

日中はナイフの手入れと、スタンガンを手に入れてきた。

バッドで殴ったりしてもいいけど、怪しまれるといけないからね。

スタンガンの方がコンパクトだし、隠しやすい。

人を気絶させる程度の電流だから、これくらいかな。

鞄に入れる。

さぁ、準備は整った。

出掛けよう。

大駁公園に着く。
時計を見ると八時四十七分。少し早く来ちゃったな。
まぁいいか。十分待ったらいいだけだし。
十分なんてすぐだ。

九時になる。渡部　真美が来た。

「いきなり呼び出してどうしたの？あ、やっぱりあのこと怒ってる？」

……、この女、イライラする。
自分ばかり可愛くて、周りがどんなに傷つこうが、なんとも思ってないんだな。
あんな目に合わされて、怒らない奴がいると思うのか？

「そりゃあ、少しはね」

本当は腸が煮えくり返って仕方ないけど。

「本当にごめんね。お金なしで杜塚君に抱かれてあげるから、それで許してくれる？」

この女、何ほざいてんだ？
お金なしで僕に抱かれてあげる？
何ふざけてんだよ。
お前みたいな女、誰が抱くか。散々いろんな男に抱かれたくせに、抱いたらこっちまで腐る。
お前に性欲なんてこれっぽっちも感じない。

そんな男ばっかりだと思うなよ。

「ついてきてほしい場所があるんだ。いいよね」暗い夜道を歩く。
本当に人の気配が全くない。
ちらりと後ろを見る。おとなしくついて来てる。
廃墟に続く山道に着く。

「ここ入るの？」

少し不安そうな顔をして聴いてくる。
まぁ、実際夜のこの山は不気味だしね。
僕はなんとも思わないけど。

「うん」

僕が歩き出すと渋々ついて来る。
いつスタンガンで気絶させようか。
逃げられたら終わりだし。
廃墟が見えてきた。
まぁ、この女隙だらけだし、いくらでもチャンスはあるか。

「何あれ？こんなとこにこんなの建ってるなんて知らなかった」

僕の前に立って廃墟を眺める。
馬鹿だなぁ。僕の前に立つなんて。
僕に、どうぞ襲ってくださいって言ってるようなものだよ。
鞄からスタンガンを取り出す。
スイッチを入れる。瞬間、バチバチと火花が散る音が響く。
渡部　真美がその音に気づいて、振り返る。
気づくのが遅いけどね。

腹に押しつけたら、びくっと身体が震えて、地面に倒れる。
スイッチを切って、鞄に直す。
部屋に運んで、縄で縛りつけて、目を覚ますのを待とう。
さぁ、いよいよだ……。わざと薄暗くした部屋で、渡部　真美が目覚めるのを待つ。
手首をベッドに頑丈に縛りつけた。
目が覚めたら、最初にどんな反応するかな。
どんなことを言うのかな。
まぁ、イライラするようなことばかり言うんだろうけど。
どうやっていたぶってやろうか。
その時の気分で決めよう。
鞄からナイフを取り出す。
手入れして研いだから、切れ味は上がってる。
後ろで、声が聴こえた。
さぁ、始めよう……。「やぁ、目が覚めた?」
声をかけてみる。きょとんとしてる。
まだ状況の把握が出来てないらしい。
縛られてることに気づいて、手首を見る。
「え?何これ?杜塚君、なんで縛るの?」
「なんで?自分で考えてみたら。分からない?」
渡部　真美の目が泳ぐ。記憶を探ってるのか。
「もしかして、縛ってやるのが好きなの?」
あぁ、お前のことだからそう言うと思ったよ。

「残念。僕はお前なんか死んでも抱きたくない。目的は復讐だよ」

まだナイフは見せない。

「復讐？なんで私が復讐されなきゃいけないの？」

この女、本気で言ってるのか？

お前は金のために僕を騙して、あの男に売ったくせに！

「ねぇ、本気で自分は悪くないと思ってるの」

「私はあいつが連れて来て欲しいって言ったから、連れて行っただけじゃない！私は悪くない！恨むなら、あいつを恨んでよ！」

あぁ、うっさいなぁ……。

イライラする。イライラしてるのに、頭が妙に冷めてるのは、なんでだろう。

「ねぇ、最初から彼氏の所に連れて行くつもりで、僕に声をかけたの？」

なんでそんなこと聴くんだろう、って表情で僕を見る。

本当に殺されるとは思ってないんだろうな。

「そうよ。悪い。杜塚君だって、私に声をかけられて嬉しそうだったじゃない」

あぁ、そう。普段女子と喋ったことあまりないから、少しは嬉しかったよ。

今思えば、虫酸が走るけど。「私だってあいつのお願いがなかった

ら、あんたなんかに声をかけなかったわよ！それに気づかなかったあんたも悪いわよ！あんた一人で舞い上がってたんじゃないの！？さっさとこれ外しなさいよ！」

黙れ……。黙れ黙れ黙れ！
うるさいうるさいうるさい、うるさい！
寂しかった時に声をかけられたから、嬉しかったんだ！
それの、何がいけないっていうんだよ！
もういい。もう何も信じない！何もかも信じない！
人間なんて信じない！
信じられるのは自分だけだ！

「そう。最後にそれを聴けてよかったよ」

あぁ、まだ僕の中に僅かでも迷いがあったんだな。
おかげで吹っ切れたよ。これで、心置きなく殺せるから。

「これで、君を心置きなく殺せる」

ナイフを渡部　真美の首に突き付ける。
初めて、恐怖の表情を見せた。
ナイフではなく、僕の目を見て。「や、やめてよ……。本当に殺すつもりじゃないよね……？」

怖がってる。すごく怖がってる。
さっきまでのあの威勢はどうしたんだよ。
ほら、もっと言いたいこと言ってみろよ。

「残念だけど、最初から君を殺すつもりで呼び出したんだよ。今度は僕が、君を好きなようにいたぶってやる」

ナイフを頬に這わせる。

「やあぁぁ！ごめんなさい、ごめんなさい！なんでもするから！殺さないで！助けて！」

なんて耳障りな命乞い。更に半狂乱になって叫び出した。

これが悲鳴なら、心地よく聴こえるのかな。

「誰が助けるかよ。苦しんで死ね」

そう言ったら、ますます半狂乱になって叫ぶ。

耳障りだ。イライラして仕方ない。

立ち上がって、渡部　真美の腹を蹴りつける。

苦しそうに咳を繰り返す。

思い切り蹴りつけたから当たり前か。

どうやっていたぶってやろうか。

爪……。爪をナイフで剥がしてやろうか。

どれほど痛がるのかな。

左の掌を掴んで親指を動かせないように指で固定して、ナイフの刃先を爪の間に宛がう。

「やだ！やめてよ！」

色々叫ぶけど、無視する。

ナイフを爪の間に潜り込ませる。

潜り込ませながら、中でナイフをぐりぐりと動かしてみる。

凄まじい悲鳴を上げる。

あぁ、これだ。苦痛によって上げる悲鳴。苦痛と恐怖に歪む表情。

僕が求めてたのは、これだ。

ナイフを根元まで一気に潜り込ませてナイフを抜き、根元しか繋がってない剥がれかかった爪を、無理矢理引き千切った。「あ〝あ〝あ〝ぁ〝あぁぁあっ！」

悲鳴。苦痛に苛まれた凄まじい悲鳴。

あぁ、ぞくぞくする。興奮してくる。

もっと聴きたい。

爪を全て剥がしていく。ゆっくりと、時間をかけて。

指の爪を全て剥がし終わった時には、僕の手も血塗れになっていた。

少しも気持ち悪いと思わない。むしろ、このぬるっとした感触が気持ちよく感じる。

ふふ……。人を痛めつけるって、こんなに気持ちがいいんだ。

足の爪も剥がしてやろう。

足を掴んだら、足をばたつかせて抵抗してきた。

うっとうしいなぁ。おとなしくしろよ。

言葉じゃ半狂乱になって叫ぶだけだから、ナイフで突き刺すのが手っ取り早いか。

しっかりと握って、ナイフを太股に突き刺す。

皮膚を破り、血管と筋組織をぶづぶづと断ち切って潜り込むこの感触。

すごく気持ちいい。

悲鳴を上げて、少しおとなしくなる。

足の爪を時間をかけて、剥がしていく。

全て剥がし終わって、渡部　真美の顔を見てみる。

涙で酷い顔になってる。僕が見ているのに気づいて、助けを乞うような眼差しを向けてくる。

助けないよ。まだまだいたぶってやる。

だから、あっさり死ぬなよ。さて、どうやっていたぶってやろうか。

至るところを切りつけて、じわじわと追い込んでやろうか。

うん。そうしよう。

少しだけ力を込めて、ナイフを足に食い込ませ、這わせる。
ぶづぶづと、皮膚と多少の血管が破れていく。
それを、足の至るところに繰り返していく。
切りつける度に悲鳴が上がる。
切りつける場所がなくなったから、今度は腕に。
腕も同じように切りつけていく。
悲鳴は上がるけど、なんだかさっきまでよりも弱々しくなってきた。
意識も朦朧としてるのか、焦点が定まっていない。
まさか、もう限界？もっと楽しませてよ。
目にナイフを少し食い込ませてみる。
やっぱり悲鳴が弱々しい。
もうそろそろ限界なのか？
もう少し楽しみたいのに。
そう思いながら脇腹にナイフを突き刺して、中でナイフをぐりっと動かして肉を抉る。
悲鳴が上がらない。

「あれ……？」

確かめてみると、いつの間にか心臓が止まって、呼吸もしてない。
ショック死かな？出血もよく見れば酷いし。
あーあ、死んじゃったかぁ……。「なんだ、案外あっさり死ぬんだな。人間って」

もう少しいたぶってやりたかったのに。
まぁ、死んでしまったのは仕方ない。

「死んだのか。僕が殺した」

不思議と恐怖とか、そんなものはない。

むしろ……。

「はっ、はは……あはははは……、あはははははははははっ！」

笑いが込み上げてきて仕方ない。
恐怖なんてこれっぽっちも感じない。
心の底から沸き上がってくるのは、今まで感じたことがないくらいの興奮、快感。そして、それらを混ぜ合わせた満足感。
どうしよう。楽しすぎて笑いが止まらない。

「あはははははははははははっ！なんだ、なんだ！そうだったんだ！
あはははははっ！僕は壊れた訳じゃない、狂った訳じゃない！最初から、こうだったんだ！僕は、これでいいんだ！
あはははははははははははっ！！」

笑いすぎて腹筋が痛い。
あぁ、今まで感じたことのない興奮と快感。爽快だよ。
すごく気持ちいい。最高だよ。
また、味わいたい。
復讐だから、死んだことに余計興奮を感じるのかな。
許さないよ。死んだとしても。
絶対に許さない。

「次は母さん……、いや、杜塚　早苗。お前だ」

僕はお前なんか母親と認めない。「あ～……そういえば、死体処理の方法、考えるの忘れてた」

一番重要なことなのに、忘れるなんて。

殺すことだけに集中し過ぎて、忘れてた。
どうしようか。
一般的なのは土に埋めることだろうけど、掘り起こされる心配がある。
かといって、他にいい方法が思いつかない。

……。

……。

人間って、食べられるのかな……。
今でも人間を食べる風習が残ってる村があるくらいだし、食べられないことはないはず。
まぁ、美味しくはないだろうな。
食べちゃえ。
あ、骨はどうしよう。いくらなんでも、骨は食べられない。
骨って粉々に砕いて燃やしたら、灰になるのかな？
骨は粉々に砕いて、他のゴミに混ぜてばれないかどうか、試してみようか。
食べる前に、食べやすいように解体しよう。
確か、蜘蛛の巣だらけの掃除道具に紛れて斧や鎌があったな。
本当にここ、なんの事務所だったんだろう。
どうでもいいけど。
斧を取りに部屋を出る。シャワー室の隣にある扉を開ける。
かなり埃臭い。仕方ないけど。
掃除道具を避けて、斧を見つける。
持ってみると、結構重い。扱えないことはないけど。
扉を閉めて、斧を引き摺って部屋に戻る。
壁に斧を立て掛ける。渡部　真美をベッドから下ろそう。
手首の縄をほどいて、床に落とす。
血塗れになり、絶望と苦痛と恐怖に染まった表情を見下ろす。

なんて、美しいんだろう。
生きてる姿よりも、死んで血に染まった姿が、美しい。
絶望と苦痛と恐怖に染まった表情が、余計美しく見せてるんだ。
あぁ、人間は絶望と苦痛と恐怖に染まった表情が、一番美しいんだ。
だらだらとただ生きてる人間の姿ほど、醜い。
復讐が終わっても、殺し続けよう。
僕自身の欲望を満たすために。
人間の恐怖と絶望と苦痛を搾取するために。
さて、さっさと解体して食べてしまおう。斧を振りかざす。やっぱり重い。重さで腕が震える。
腕を狙って一気に振り下ろす。肉を断ち、骨にごりっと当たる感触が伝わってきた。
血飛沫が辺り一面に舞う。
僕にも飛び散る。顔と制服を血が染める。
制服を着てきたのは失敗だったかな。まぁいいや。兄さんのを借りればいい。
顔に着いた血に触れる。ぬるっとしていて、すごく気持ちいい。

「あは、あはは……」

あぁ、僕は今、不気味に笑ってるんだろうな。
唇が三日月型に歪んでるのを、感じる。
舐めてみる。当然、鉄の味がする。
美味しくもなんともない。
個人によって、血の味は違うのかな。
まぁ、どうでもいいけど。
もう一度振りかざして、振り下ろす。
力が足りないのか、骨が断ち切れない。
もう一度振り下ろす。
ようやく断ち切れ、床にがつんっと音を立てて当たる。

案外人体解体って難しいな。思ったより時間かかりそうだ。
同じように片腕、足、胴体、首を切断する。
解体に四十分もかかった。
床も壁も、僕の全身も血塗れ。
今更だけど、いろんな男に抱かれた身体を、今から食べるんだよな。
今更だけど、気持ち悪くなってきた。
でも、仕方ない。
死体が発見されるよりマシだ。
さて、食べてしまおう。血塗れの床に座る。
さて、どこから食べよう。
柔らかい部分は後で食べて、固そうな部分から食べるか。
腕を掴む。切断面を噛んでみる。
歯が肉に食い込むにつれ、血が溢れてくる。
溢れた血は顎を伝い、膝と床にぽたぽたと滴る。
なんだ、人間の肉って案外簡単に噛み千切れるんだ。
食べるのは苦労しないで済みそうだ。
これくらいなら食べきれる。
固くならない内にさっさと食べよう。

「……食べた」

食べきった。全身が解体した時よりも血塗れになってる。
濃厚な血の匂いが、僕の脳を刺激してきてたまらない。
全身が血に包まれて、すごく気持ちいい。
これが渡部　真美の血じゃなかったら、余計気持ちいいんだろうな。
後は、骨を砕くだけ。
骨を一ヶ所に集める。
このままだったら飛び散って仕方ないな。確か、ネットみたいな物

があったはず。
一旦部屋を出て、掃除道具の中から網目の細かいネットを見つける。
これなら、少しは飛び散るのを軽減出来るかな。
戻って骨をネットにくるむ。
斧を持ち、力を込めて骨に振り下ろす。
骨が砕かれる音と、ひび割れる音が響く。
このネット結構頑丈だな。斧を振り下ろしたのに、切れてない。
同じことを繰り返す。骨が粉々になるまで、斧を何回も振り下ろす。

「これくらいでいいかな」

見るからに骨はぼろぼろ。
袋に入れてどこかの家庭のゴミに混ぜとけば、骨ということがほとんど分からない。
机の引き出しを開ける。袋ないかな。
一番下の引き出しを開ける。
あった。黄色いごみ袋。これに入れよう。
ネットをごみ袋に入れて、骨を振り落とす。
引っ掛かって取れない骨は手で取り除く。
死体処理はほとんど終わった。
後は、この部屋を掃除して、シャワーを浴びて、骨をゴミに混ぜて、帰ろう。バケツに水を溜めて持ってくる。
さて、掃除しようか。
雑巾を床に置いただけで、雑巾が血の色に染まる。
これだけの血の量だし、当然か。
一度洗っただけで、水が濃い血の色でいっぱいになる。
何回も水を変えないと仕方ないな。
たまに水を変えながら、黙々と床と壁を拭く。

掃除が終わり、シャワーを浴び、服を着替え、後は骨を処分するだけ。
血塗れになった制服は洗ったけど、やっぱり血を洗いきれなかったから、ここに置いておく。
あの制服は、人を狩る時の正装にしよう。
骨の入った袋を鞄に入れて、部屋を出る。
外の扉を開けて、ふと空を見る。
雲が月を隠し、月の姿がぼんやりとしか見えない。
雨が降りそうで、降らない。
月の光がぼんやりとしか届かないから、薄暗い。
どうやら月も、僕を見捨てたらしい。
堕ちるとこまで堕ちろということか。
あぁ、堕ちてやるさ。どこまでも。
光が一切届かない暗い闇の底まで、堕ちてやる。
骨を捨てて、さっさと帰ろう。

骨を近くのマンションのゴミ捨て場に混ぜて捨ててきて、家に着く。
電気が着いてる。誰かいるのか。
ドアを開けて中に入る。
リビングを覗いてみると、兄さんの那奈瀬がいた。「……帰ってたの」
声をかけてみる。なんで帰って来たのかは、分かってる。
「鼎、父さんも母さんもいねぇのか？」
「いないよ。見たら分かるでしょ」

あぁ、なんかイライラする。
今の兄さんは嫌いだ。高校に入って悪い友達と付き合って、金がなくなればこうやって帰って来て金を要求する。

大嫌いだ。大嫌いだ。
確認するように心の中で、大嫌いだ、と繰り返す。
そうする度に、何かがキリキリと痛み出す。
何が痛いのか、なんで痛むのか、分からないのに、痛い。

「父さんから金、もらってねぇの？」

金を渡さなかったら不機嫌になって、僕に八つ当たりしてきたこともある。
流石に暴力はなかったけど、言葉で。
あぁ、あの男が勝手に入れた十万を渡してやる。
あんな金、いらない。使いたくもない。
手元に置いたら、吐き気がする。

「持ってくる。十万もあれば十分でしょ」

「あぁ。てか、父さんお前に十万以上の金渡してんのか」

それがどうしたんだよ。まともに家に帰って来ない上に、問題起こしたりするからだろ。
金は渡すから、さっさとどっか行ってよ。
今の兄さんの姿は、見たくない。大嫌いだ。
二階の自室の引き出しから、十万の入った封筒を持ってくる。

「はい」

「サンキュー。父さんにはうまく誤魔化しといてくれ」
その前に、気にしないよ。父さんは。
「お前、なんか雰囲気変わった？」
僕をじろじろ見てくる。
そりゃあ、人一人殺したんだから、雰囲気も変わるんじゃない？
その上、母さんとその不倫相手も殺そうと思ってるんだから。
「別に、気のせいじゃない？」
「ふーん、ま、いいけどな。じゃあな」
返事はしない。
玄関が閉まる音がする。出ていったか。
家族でさえ、これなんだ。
こんなの、もう家族じゃない。
人間なんて、信じない。「……」
窓から差し込んでくる朝日が眩しい。
時計を見ると九時四十八分。
学校、もう始まってるな。
いいや、行かなくて。めんどくさい。
人間がたくさんいる場所に、今はいたくない。
前とは逆だな。人を殺す前と、殺した後の感情が。
前は家に一人でいるのが寂しくて、学校に行ってたのに。
今は、人間なんて信じられなくて、人間が嫌いになって、行きたくない。

でも、なんなんだろう。
吹っ切ったはずなのに、胸の奥がちくりっと、まだ痛んでる。
もう傷つかないように、何も感じずに済むように、そう思って渡部真美を殺したのに。
これから、母さんと不倫相手を殺そうと思ってるのに。なのにどうして、胸の奥がまだ痛む？

分からない。ふと、目を覚ます。
……また寝てたのか。
喉が渇いた。水を飲みに下に下りよう。
部屋を出て一階に下りる。

「……？」

リビングから灯りが漏れてる。誰かいるのか。
誰がいたってどうでもいいけど。
扉を開ける。

「母さん……」

母さんがいた。覇気が全く感じられない。
あの男と何かあったのか。
母さんが、ばっと僕を見る。
なんだろう。目だけが爛々と輝いていて、気持ち悪い。

「鼎……、母さんとちょっと出掛けない……？」

「え……？うん……分かった。ちょっと着替えてくる」

「すぐ着替えてくるのよ」

なんなんだ。気持ち悪い。
とりあえず着替えよう。
自室に戻って服を着替える。
あの目、気持ち悪い。なんだか狂気じみていて。
……念のため、折り畳み式ナイフを持っとこう。
何が起こるか分からない。
リビングに戻る。

「着替えてきたよ」

「そう。じゃあ行きましょ」

そう言うとさっさと玄関に向かって、靴を履いて出る。
僕も靴を履いて鍵を閉める。
母さんの後ろ姿が、不気味に見えた。無言で歩く。どこに行くつもりなんだろう。
あまり来たことのない場所だ。人通りも少ない。
周りに、誰もいない。
なんでこんな所に僕を連れ出したんだろう。
公園に入る。僕もついて行く。
突然、立ち止まった。

「ねぇ……鼎」

「何……？」

「母さんね……好きな人が出来たの」

「そう……」

知ってるよ。そんなこと。
わざわざ、それを言うためにここまで来たの？
違うよね。絶対。
母さんを見たくなくて、母さんに背を向ける。
母さんのあんな姿を見るのは嫌だ。

「母さんね、あの人と別れて、その人と一緒になりたいの」

「うん……」

知ってるよ。それも。
身体が震えてる。
どうして？
涙が出そうなのは、どうして？
吹っ切ったはずじゃないか。
なのに、僕は、まだ、母さんを……。
母さんが近づいてくる気配がする。

「その人にね、言われたの」

ちらりと母さんを見る。ポケットから、何かを取り出そうとしてる。

「家族を殺せたら、一緒になってやるって」

「……っ！」

ポケットから何か光る物を取り出して、僕に向かって振り下ろす。
とっさに避ける。

「……っ…！」

避けたけど、遅かった。右腕が切り裂かれてる。
押さえるけど、深く切り裂かれたのか、血が止まらない。
母さんを見る。目が狂気の色で爛々と輝いてる。
本気で、僕を殺すつもりだ。
ナイフを、僕に向けてきた。母さんが完全に理性を失った、狂った目で僕を見つめ、奇声を上げながらナイフを振り下ろしてくる。
避けながら、泣きたくなってきた。
なんで、こんなに悲しくなるんだろう。
一度は吹っ切ろうとしたのに。殺そうと思ったのに。
なんで、こんなに未練があるんだよ。
でも、もう仕方ないや。殺さないとこっちが殺される。
あんな男のために殺されるなんて、ごめんだ。

避けるのをやめて、動きを止める。
母さんがナイフを振り上げ、向かってくる。
一歩、踏み出す。

ドスッ

「あ……？」

母さんが訳が分からないと言うような目で、腹を見る。
ナイフが深々と、腹を貫いている。
僕が突き刺したナイフが。
ナイフを振り上げようとしたから、力ずくで胸まで切り裂いてナイ

フをぐりっと動かして、傷を抉る。
ここまでしたら、もう助からない。
ナイフがカランッと落ち、母さんの身体が脱力する。
母さんの体重が僕にかかる。
重力に任せて、母さんの身体と一緒に地面に倒れる。

「かっ……、し……」

何か言ってるけど、聴き取れない。
恨めしそうな目で、僕を見つめている。母さんの身体を退かす。
朦朧とした目をして、浅く早い呼吸をしながら、何かに必死に手を伸ばそうとする。
手の先にある物を見る。
ナイフだ。そんな状態なのに、それでも、あの男のために、僕を殺したいの？
そんなに、僕が邪魔だったの？
僕は、母さんのことが好きだったのに。信じてたのに。
一度は本気で殺そうと思っても、こんなに未練が残るくらい好きだったのに。
なのに、母さんにとって僕は、邪魔で邪魔で仕方なかったんだ。
あの男との仲を引き裂く、憎悪の対象でしかなかったんだ。
息子でも、殺したい程憎い存在だったんだ。
涙が滲んで、頬を流れていく。
母さんがいつの間にか、ぴくりとも動かなくなっている。
身体を眺める。自分の血と、母さんの血で赤く染まっている。

「あはは……僕がずっと欲しかったものは、最初からいくら望んでも、手に入らなかったんだ……」

父さんにとって僕は、いてもいなくても同じ存在で、母さんにとっ

ては憎むべき存在だったんだから。

「あはは……本当に、もういいや……」

殺すことの楽しみを、気持ちよさを知った後なんだ。
二人も殺した後なんだ。
もう、戻れない。戻る必要はない。
殺す快楽を、思う存分貪ってやる。

「僕は、快楽殺人者になってやる。堕ちるとこまで、堕ちてやる。
殺して、何が悪い」それはそうと、母さんの死体どうしよう。
こんな所で解体して食べるなんて無理だしなぁ。
このままほっといて、誰かに発見されて、警察が来るとして、僕は疑われるのかな。
うまく演技すれば、疑われないかな。
あの不倫相手の男が疑われればいいのに。
あぁ、いいこと思いついた。
あの男は、そうやって殺してやろう。
あぁ、どっちにしたって死体処理出来ない訳だし、このままでいいか。
母さんの持ってたナイフだけ、持って帰ろう。
折り畳み式だから、ポケットに入れて持って帰れる。
死体を振り返る。

「バイバイ、さよなら、杜塚　早苗」

家に着いて、血塗れの服をバレないようにゴミに混ぜて、血を洗い流す。

家に着くまでに、よく人と会わなかったものだな。
まぁ、好都合だけど。
傷口に風呂の湯がしみて、痛かった。
傷口は血の量に比べて、あまり深くは切り裂かれてなかった。
普通なら病院で見てもらった方がいいだろうけど、なぜこんな怪我をしたのか絶対に聴かれる。
嘘を吐いて怪しまれるのはごめんだ。
消毒してガーゼを当てて、包帯を巻くだけの簡単な手当てをする。
化膿したらその時だけど、まぁ大丈夫だろう。
そんなことより、警察だ。
まぁ、これも来たら来たでその時か。
今日はもう寝よう。
なんだか疲れた。「ふぅ……」

溜息を吐く。
今日の昼、警察が来た。勿論、母さんのことで。
犬の散歩をしてた主婦が、母さんの死体を発見したらしい。
母さんがどうか確かめるために、警察署まで行った。
まぁ、母さんしかあり得ないんだけど。
僕が殺した訳だし。
警察は、息子の僕が殺したとは思わないのかな。
疑われないのなら、それでいいけど。
警察署に着いて、霊安室に通された。
そこにいたのは、やっぱり母さん。
「母さん」と言いながら、涙を流して迫真の演技をしてやったよ。
しばらくして父さんがやって来た。
「早苗？」と言いながら、母さんの身体にしがみついて泣いてたけど、馬鹿馬鹿しくて見てられない。
今まで散々ほったらかしにしてたくせに。
不倫してたことも、知らないんだろう。

それとも、知っててわざとほってたとか？
母さんの身体にしがみついて泣くのも、わざとらしく見えるよ。
父さんが警察にいろいろと訊かれてたけど、きっと事情聴取ってやつだろう。
今日はそれだけで帰された。
帰りは父さんの車で帰った。
運転する父さんの顔を見た時、さっきまであんなに取り乱してたのが嘘みたいに、落ち着いてた。

ねぇ父さん。父さんが嬉しそうな表情をしてるように感じたのは、気のせいじゃないよね。警察署から帰った後、父さんはまた仕事に向かった。
普通なら、自分の嫁が死んだら仕事どころじゃないのに。
やっぱり、嬉しそうに見えたのは、気のせいじゃないんだな。
まぁ、どうでもいいか。

鞄から携帯を取り出す。
渡部　真美の携帯を。
あの男の情報を得るために、持ってきたんだ。とても役に立ったよ。
あの男の名前は弓沢（ゆみさわ）　浩次（こうじ）。
三十二歳で、何をしてるのかは知らない。
そして、渡部　真美が僕を案内したあの家は、弓沢　浩次の物だと分かった。
はは、弓沢　浩次はずっと僕が罠にかかるのを、息を潜めて待ってたって訳か。
今度は僕が、お前を罠に嵌めてやる。
母さんを殺した罪を、擦りつけてやるよ。
弓沢　浩次にメールを送る。

〈明日、そっちに行ってもいい？〉すぐ返事が帰ってきた。

〈いいぞ。何時に来る？〉

くすっと笑う。馬鹿だなぁ。なんにも知らないで。

渡部　真美は死んだのに。まぁ、知らなくて当然だけど。

捜索願いとか家族は出したのかな。

しょっちゅう家出とかしてるとしたら、帰ってこなくても心配しないで捜索願い出されてないかも。

まぁ、どうでもいいか。

失踪したことが分かっても、殺されたかどうかさえ警察には分からないんだから。

死体は絶対に見つからない。

絶対に見つからない場所に、僕の胃の中に隠したんだから。

さて、返信しよう。

〈じゃあ、九時くらいに〉

すぐに返事が帰ってくる。

〈分かった。待ってるぞ〉

返信する。

〈うん。楽しみにしてる〉

携帯を閉じる。

さぁ、明日で復讐劇が終わる。

最高の終わらせ方を考えよう。目覚ましの音で目を覚ます。

目覚ましを止めて起き上がる。

午後三時。今日も学校は行かなかった。
今日で復讐を終わらせる。
殺す前に、色々と聴き出そう。
母さんとなぜ、そういう関係になったのか。
一緒になるつもりだったのか。
僕が襲われたことを、母さんは知っていたのか。
家族を殺せたら一緒になってやると、本当に言ったのか。
あんな男だ。訊けば本当に殺されると思わずに、調子に乗って喋るに違いない。
あの男の言葉は全て、僕の神経を逆撫でするようなものばかりだろうけど。
まぁいいさ。最後には一思いに死んでもらうんだから。
鞄の中身を確認する。
スタンガンに縄、そしてナイフ。指紋を残さないための革手袋。
これだけあれば十分。
夜が楽しみだ。
そういえばまともに何も食べてない。
何か食べよう。夜になって、弓沢　浩次の家へと向かう。
駅を通りすぎ、左に曲がり、住宅街に向かう。
九時前だから、まだちらほらと人通りがある。
人通りがあるけど、あの男の家の玄関の周りは高い塀と木に囲まれているから、例え人が通ったしても気づかれない。
革手袋を嵌める。
弓沢　浩次の家の前に立つ。
いよいよだ。

インターホンを押す。

《入れ》

門の扉を開け、中に入り玄関の前に立つ。
スタンガンを取り出し、スイッチを入れる。
バチバチと音を響かせ、火花が散る。
玄関が開く。
弓沢　浩次が僕の姿を見て、驚きに目を見開く。

「お前……！？」

相手は大人。単純な力では敵わない。素早く腹にスタンガンを押しつける。
痙攣を起こして、あっけなく倒れる。
弓沢　浩次を中に引き摺って玄関を閉め、鍵をかける。
これから中に運んで、縛って、始めよう。

死の恐怖を、存分に味わって死ね。弓沢　浩次を部屋の中に引き摺る。
人間って不思議だね。こういう状況の時、普段出ないような力が出るんだから。
さて、縛ろう。
縄を鞄から出す。
あっ……このまま縛ったら縄の跡残るかな。
縄の跡が残ったら困る。
タオルとか布を当てて縛ったら、跡が残らないかな。
分からないけど、タオルでも当てて縛ろう。
タオルを探す。両手両足、四枚必要だ。
洗面所ならタオルあるかな。
洗面所でタオルを探す。引き出しを開けると、タオルが詰まってる。

四枚、持っていく。
弓沢　浩次は気絶したままだ。まだ、起きる気配は全くない。
腕にタオルを二枚当てて、後ろ手に縛る。
足もタオルを二枚当てて、縛る。
あまりきつく縛っていない。かといって、ほどけないように縛った。
これで縄の跡が残ったら仕方ない。
縛り終えたし、起こそうかな。
目覚めるのを待つほど、僕は気が長くないんだ。
腹を渾身の力を込めて、思い切り蹴る。

「がっ……！？」

苦しそうに咳を繰り返す。
弓沢　浩次が僕を見る。
僕は見下ろす。

「お前、これは何の真似だ？」

「何って、分かんないの？抵抗出来ないように縛ったんだよ」

「縛って、どうするつもりだ？」

「復讐。その前に、いろいろと答えてもらう」

「復讐？復讐だと？なんだそりゃ。面白い。その前に聴かせろ。真美はどうした？」

渡部　真美をどうしたかって？それを聴いてくるとは思わなかったよ。

「殺してやったよ。一思いに」「殺した？冗談で言ってるのか？」

冗談？冗談で言ってるように見えるの？
見えてたら、目がおかしいんじゃない？
眼科行った方がいいよ。

「冗談で言うと思ってんの？」

「本当に殺したって言うのか？」

「殺したんだよ。ナイフで爪を残らず剥がして、身体中切りつけて、腹を突き刺して、殺したんだよ」

じっと僕の目を見てくる。
まるで、奇怪なものを見る目で。
なんで僕をそんな目で見る？

「お前、おかしいんじゃないのか？」

おかしい？僕が？おかしいだって？
何がおかしいんだ。僕はおかしくない！異常じゃない、狂ってなんかない！
おかしいのは、お前らの方だ！

「黙れ！僕の質問だけに答えろ！余計なことは言うな！」

あぁ、くそ！いたぶってやりたい！
我慢だ。我慢しろ。傷つけたら、計画通りいかなくなる。

「答えろ。母さんに本当に、家族を殺せたら一緒になってやるって

言ったのか?」

そう言ったらにやり、と笑った。

「言ったさ。まさかあのバカ女、本当に殺りやがったのか?そうだとしたら、傑作だな。ヒャハハハハ!」

ぶちっと、僕の中で何かが切れた音がした。怒りで身体が震える。我慢だ。冷静になれ。

そう思っても、抑えきれずに腹を蹴る。

「余計なことは言うなって言ったはずだ。聴こえなかったのか?」

「はっ、これが笑わずにいられるかよ!あの女、つくづくバカだな!俺にしちゃ都合のいい女ってだけなのによ。俺の気を引こうとして散々金を貢いでくれたぜ」

母さん、こんな男に金を貢いでたのか。

こんな男のために。

握った拳に力が入る。傷つけたら駄目だ。

僕が訊かなくても色々と喋る。何も言わずに聴いていよう。

「ホント、俺の言いなりもいいとこだ。お前、母親に見捨てられたんだぜ?俺が息子を抱かせろって言ったら、迷いもしないで抱かせてあげるって言いやがった」

あぁ、それ以上何も言うな。

もういい。もうたくさんだ。

それ以上は気がおかしくなりそうだ。

「それで一昨日、離婚するから一緒になってくれって言ってきやがった。一緒になるなんて冗談じゃねぇ。誰があんな勘違いバカ女と一緒になるかっての。それでふざけて家族を殺せたら一緒になってやるって言ったら、ホントに殺りやがった！こりゃ傑作だよ！」

……。

どうやら、我慢の限界が訪れたみたいだ。

頭が沸騰してるように感じる。

なのに、感情は妙なほど、冷えきっている。

足元に置いてある鞄からナイフを取り出す。

弓沢　浩次の髪を掴んで、首筋をよく見えるようにする。

ナイフを首筋の動脈に当てる。

「黙れよクズが。黙ってたら調子に乗りやがって」

弓沢　浩次が初めて、恐怖に顔をひきつらせた。「本当、我慢して黙ってたら好き勝手言ってくれるな。まぁ、僕が訊きたかったこと全て話してくれたからよしとするか」

ナイフを首筋に当てたまま、独り言のように言う。

弓沢　浩次が恐怖を色濃く宿した瞳で、僕の目を見つめる。

「なんだ、怖いのか？さっきまでの威勢はどこ行ったんだよ」

挑発してみる。何か言おうとしたけど、結局何も言わない。

なんだ。これくらいで怯むのか。

つまらない。もっと抵抗してみせろよ。

ナイフを見せただけでこれかよ。さっきまでの威勢は僕をなめてたからか。

まぁ、当然か。中学生に殺されるとは思わないか。

もういいや。聴きたいことは訊けたし、もう用はない。

死んでもらおう。

ナイフを一気に引く。一瞬遅れて、血が噴水のように湧き出る。

何か言ってるけど、何を言ってるのか分からない。

命乞いだろうけど。

どっちにしても動脈を切ったんだから助からない。

流れ出した血で床に血溜まりが出来る。

時間が経つにつれ、弓沢　浩次の息が段々と浅く細くなり、目の光が虚ろになっていく。

僕はただ、弓沢　浩次が死ぬのを眺めながら待つ。

死ぬのは怖いか？じわじわと訪れてくる死を、死の恐怖を存分に味わって、死ね。しばらくして、弓沢　浩次が全く動かなくなる。

血溜まりを踏まないように気を付けて、死んだのか確かめる。

呼吸はない。

首に指を当てて脈を探る。脈もない。

……死んだか。

あぁ、唇が三日月型に歪んでいるのが分かる。

渡部　真美を殺した時と同じ快感、興奮、満足感が押し寄せてくる。

「あはは、あはははははははははははは！」

笑う。笑い続ける。

「あはははははは……あ～、さてと、仕上げといこうか」

その前に、手に着いた血を洗い流した方がいいかな。

でも、洗い流したらルミノール反応が出るかな。
この部屋以外で血の痕跡が出るのは困るし、仕方ない、鞄に入ってるタオルで拭こう。
タオルで血を拭いて、縄をほどいていく。
はまた使うとして、タオルはどこかに捨てよう。
血を踏まないようにして、弓沢　浩次の腕を顔の側に持っていく。
その手に、ナイフを握らせる。
血塗れのナイフを。
革手袋をしてるから、僕の指紋は残っていない。
警察がうまく騙されてくれれば、杜塚　早苗を殺害後、自殺。
だから傷つけられなかったんだ。
自殺のはずなのに、暴行された痕跡があるのはおかしいでしょ。
だから、傷つけなかったんだ。
母さんを殺した後に自殺してもらうために。
状況だけ見れば自殺。
今の杜撰（ずさん）な警察なら、自殺で片付けるに違いない。
弓沢　浩次、お前は杜塚　早苗殺しの罪を被るんだ。
それが、お前に対する僕の復讐。弓沢　浩次を見下ろす。
まさか、一度狙った獲物に殺されると思わなかっただろう？
恨むのなら僕じゃなくて、自分を恨むんだね。
自分の浅はかな行動を。
部屋を見渡す。僕に繋がる痕跡がないか探す。
床も隅々まで見て調べる。
毛髪の一本でも落ちてたら最悪だ。
指紋は大丈夫だ。革手袋をしてるし、死体に着いた指紋も検出される心配はない。
時間をかけてゆっくり探す。
大丈夫だ。僕に繋がる痕跡は残ってない。
鞄に縄とタオルを詰める。
部屋を出ようとして、振り返る。

「バイバイ、さよなら、弓沢　浩次」

地獄にでも堕ちてろ。

さて、帰ろう。

血の着いたタオルを、中身の見えない袋に入れて他のゴミと混ぜて捨てて、帰って来た。

鍵を開けて中に入る。相変わらず誰もいない。

それでもいい。今回のことで、家族でも信じちゃいけないって分かったから。

もう誰も信じない。信じられるのは自分だけ。

僕は、僕のためだけに生きる。

つい数日前の、家族を求めてた僕とはさよならだ。

もう誰も求めない。求めちゃいけない。

僕は、一人でいい。

とりあえず、今日は風呂に入ってさっさと寝よう。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あぁぁぁあぁっ！」

ドスッ　ザシュッ

今日も僕は人間を殺す。

あぁ、悲鳴とナイフを突き刺す感触が気持ちいい。

今日の獲物は女。犯した後に、いたぶり続けた。

でも、もう限界そう。

もういいか。楽しめたし。楽にしてやるよ。
ナイフを心臓目掛けて突き刺す。
ナイフを抜き、また突き刺す。
それを何回か繰り返す。

「あはははははは！何度やっても最高だよ！すごく気持ちがいい！」

そう、すごく気持ちがいい。やめられない。
今日で十三人目。まだまだ殺すよ。
殺し続ける。

さて、死体処理をしよう。

あれから一ヶ月経つ。
父さんは相変わらずだけど、那奈瀬が変わった。
母さんが死んだのがショックだったのか、あれだけ荒れてたのがおとなしくなり、今は荒れてた時の面影がない。
勉強も真面目にやって、大学に行くつもりらしい。
どうでもいいけど。
そういえば今日、珍しく父さんが帰って来るって言ってたな。
僕と那奈瀬、二人に大切な話があるらしい。
なんなんだろう。大切な話って。
あの仕事ばかりの人間が珍しい。
玄関が開く音がした。帰って来たらしい。

「那奈瀬、鼎。下りて来てくれ。話したいことがあるんだ」呼ばれたから、仕方なく一階に下りる。

リビングの扉を開ける。
父さんの隣に、見知らぬ女が座ってる。
母さんよりも若い。
大切な話をすると言って女を連れて来て、なんの話をするつもりだ。
……まさか、な。

「鼎、那奈瀬、座りなさい」

後ろを見ると、いつの間にか那奈瀬が立っていた。
中に入って椅子に座る。

「この人は甲田（こうだ）　彩菜（あやな）さん。そして、この二人は私の息子の那奈瀬と鼎だ」

父さんが僕達を紹介すると、甲田　彩菜という女が僕達に微笑んできた。

「よろしくね。那奈瀬君、鼎君」

そんなことはどうでもいいから、さっさと本題に入ってよ。
なんとなく、予想はつくけど。

「父さんな、この人と結婚しようと思っているんだ」

……やっぱりか。

「母さんが死んで落ち込んでた時に、彩菜に随分世話になってな。いつの間にか付き合うようになった。それで、結婚したい。お前達は許してくれるか？」

許すも何も、結婚しようがどうでもいい。
でも、母さんが死んだ後に付き合うようになったっていうのは、嘘でしょ？
母さんが死ぬ前から不倫関係にあったんでしょ？
それで母さんが死んだから、好都合と思って結婚って話になったんじゃないの？
父さんが警察署から帰る時嬉しそうだったのは、その人と結婚出来るから嬉しかったんでしょ？
まぁ、父さんが誰と結婚しようとどうでもいい。
僕の楽しみさえ邪魔されなければ、それでいい。僕が口を開こうとしたら、

「俺はいいよ。結婚しても」

へぇ、いいんだ。てっきり反対するのかと思ったけど。

「僕もいいよ」

そう言ったら、二人共嬉しそうな顔をする。

「ありがとう。那奈瀬君、鼎君。これからよろしくね」

結婚すればこの女が母親になるのか。
それすら、どうでもいい。
嬉しそうにしている父さんを見る。
本当、呆れる。馬鹿みたいだ。
僕の身に何があったのか知らないで。
まぁ、いいさ。
僕はこれからも自らの快楽のために殺し続ける。
それだけのことだ。「んっ……」

ふと、目を覚ます。
いつの間にか眠っていたみたいだ。
髪の毛を触ると寝癖が酷い。
直すのに時間かかるな。
そういえば夢を見た。二年前くらいに、初めて人間を殺した時の夢を。

下らない話だったろう？
つまらない話だったろう？
下らなくてつまらない話だけど、これが過去に起こったことの全て。
僕が快楽殺人者になった理由。
今の世の中、僕のような子供はたくさんいるんだろうな。
そんな子供が溢れてる中で、僕は耐えきれなくなって快楽殺人者という道を選んだ。
僕は、弱い。
今の僕は、どうなんだろう。
強くなれたんだろうか。
分からない。
まぁ、どっちでもいいさ。
弱かろうと強かろうと、僕が人間を殺し続けることに変わりはない。

今日も、獲物を探しに行こう。

七月二日　死にたがり・選ぶは何か

僕にも殺さない人間は存在する

自殺志願者

自殺志願者だけは殺さない

なぜかって？

本物の自殺志願者は、殺されることに喜ぶからだよ

僕は悲鳴を聴きたいのに、自殺志願者は笑って喜ぶ

殺したって、満足出来ない

だから、自殺志願者だけは殺さない

―とある誰かの視点―

地面を見下げる。

学校の屋上から。

ここから飛び下りたら、死ねるかなぁ。

今まで色々と試してきたけど、失敗ばかりだった。

手首を切ってみたり、電車に飛び込もうとしてみたりしたけど、なぜか失敗してばかり。

なんでなんだろう。

僕みたいな死にたがる人間は死なないで、生きようと必死な人間ば

かり死ぬのは、なんでなんだろう。
理不尽だ。
両親が死んで、意地悪な親戚に引き取られて、毎日鬱憤の捌け口にされて、学校では友達さえいなくていじめられて。
こんな僕が生きててなんになるんだろう。
ただ呼吸をして、無駄に生きてるだけじゃないか。
酸素を無駄に消費してるだけに感じる。
ごめんなさい。無駄に生きて。
ここから飛び下りて、頭から落ちたら死ねるかな。
飛び下りよう。
ごめんなさい。僕の汚い死体を晒すことになって。
ごめんなさい。僕なんかがのうのうと生きて。
ごめんなさい。
これから、死にます。
さよなら。

一歩、踏み出そうとしたら、

「君、死にたいの?今から死ぬの?」授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。
今から昼食。今日は一人で食べたい気分だから、屋上に行って食べよう。
周りがガヤガヤとうるさい空間で、食べたくない。
本当、こいつらよく飽きないよな。
毎日毎日同じようなことばかり話して、騒いで。
馬鹿馬鹿しい。愚の骨頂だ。
耳障りだ。
学校などという牢獄に、一日の半分を費やされてしまうのだから、

本当に馬鹿馬鹿しい。
勉強だって、教師の下手な授業より、家で一人で勉強してる方がマシだ。
あんな下手な教え方で、よく教師なんか勤まるな。
考えれば考えるほど、馬鹿馬鹿しい。

「杜塚、お前一人で食べんの？」

薪沢が話しかけてきた。

「うん。屋上で食べる」

「そっか。分かった」

薪沢が席に戻って、他の生徒と喋る。
席を立って屋上に向かう。
後ろから、声が聴こえてきた。

「薪沢お前、よくあんな奴と喋れるよな」

「へ？なんで？」

「だってあいつ、気味悪くねぇ？何考えてるか分かんねぇし」

あぁ、なんて耳障りな不協和音。
そりゃあ、お前達みたいな馬鹿共に、僕の考えてることなんか分かるはずがないだろう。
本当に耳障りだ。
教室を出て屋上に向かう。屋上に行くまでの間も、耳障りな不協和音は絶え間なく耳に響く。

本当、お前達が羨ましいよ。
そんなことで毎日騒げる脳が。
屋上に続く階段を上る。
やっと耳障りな不協和音が遠退く。
屋上の扉を開ける。

屋上の縁に、誰か立っていた。

縁に立って地面を見下ろしているのか、俯いている。
自殺、か。
まぁ、どうでもいい。
自殺しようが僕には関係ない。
でも、なんとなく気になった。

……気になった？僕が？他人に興味を持ったっていうのか？

馬鹿馬鹿しい。僕が他人に興味を持つなんて。
そう思いながら目が離せないのは、なぜだろう。
あの背中が、かつての僕に似てるからか。
分からない。なんで、自殺志願者に興味を持つんだろう。
縁に立っていた誰かが動いた。
飛び下りるつもりなのか。

「君、死にたいの？今から死ぬの？」

気づいたら声をかけてた。
ゆっくり僕を振り向く。

―とある誰かの視点―

後ろを振り向く。
これで「やめるんだ！」とかだったら、散々言われてきた言葉だから飛び下りてたけど、「君、死にたいの？これから死ぬの？」なんて言われたのは初めてだから、気になって後ろを振り向いた。
誰だろう。知らない。
襟まで伸びた少し長めの黒髪。
身長は男子にしては低め。
顔は非の打ち所がないほど整っていて、綺麗だ。
カッコいいというより、綺麗。
そして、なんだかすごく独特な雰囲気を感じる。
独特な雰囲気のせいで、近寄りがたく感じる。

「君、二年一組の藤山（ふじやま）　葉月（はづき）だよね」

「え…？うん」

なんで知ってるんだろう。一度も話したことないのに。

「なんで僕のこと知ってるの？」

「なんでって、この学校の全校生徒の名前と顔、覚えてるから」

何かの冗談？全校生徒三百十二人の名前と顔、全部覚えてるっていうの？

「で、君死ぬの？」

「え？あっ……」

どうしよう。さっきまでは本気だったのに。
気分が削がれたなんて言ったら、言い訳だ。
突然、この高さが怖くなった。

「まぁ、死のうがどうしようが僕には関係ないから、どうでもいいけど。飛び下りるなら、飛び下りてくれて構わないよ」

すごく酷い言い様……。こんな人初めてだ。
彼が僕に興味をなくしたのか、反対側の方に行ってしまう。
僕も彼の後についていく。
なぜか、彼にすごく惹かれたんだ。
違うか。彼には僕に興味を持っていて欲しいんだ。
弁当を食べる彼の横に座る。
彼が、僕に視線を向けてきた。

「……死ぬんじゃないの？」

「えっと……今日はやめとく」

「ふぅん……」

「あの……君の名前、教えてくれる……？」

冷たい視線を向けてくる。
どんな暗く深い闇も呑み込んでしまうような、無感動で凍てつく闇を孕んだ視線を。

「僕の名前？僕は杜塚　鼎だよ」弁当を黙々と食べる。
藤山　葉月が隣に座って、僕が弁当を食べるのをじっと見てくる。
何が面白いんだろう。

まぁ、別にいいけど。
そのまま弁当を食べ終わる。
まだ僕を見つめてくる。

「ねぇ、僕を見て何が楽しいの」

そう訊いたら、おろおろとし出した。

「あ……ごめん…。嫌だよね……ごめん」

「僕は一言も嫌とは言ってないよ。僕を見て楽しいの、とは訊いたけど」

「あの、その……綺麗だなって…」

何を言ってるんだろう。綺麗？何が？

「綺麗って何が」

「その、杜塚君が…。細いし、顔も綺麗だし…」

綺麗、ねぇ。外見なんてどうでもいいから気にしたことがない。
まぁ、身長が低いのは否めないくらいか。
休憩の終わりを告げるチャイムが鳴る。

「じゃあ、僕は行くから」

立ち上がると、何か言いたそうにおろおろとする。
きっと、これ以上関わることはないだろうな。

「あ、あの！」

大声で僕を呼び止める。

「何？」

「あの…よかったら、友達になってもらえる？」

……友達？この僕に？

この僕に友達なんて、どうかしてるんじゃないの？

まぁいいか。断る理由もない。

もしかしたら、面白いものを拝めるかもしれない。

「別に。いいけど」

びっくりしたような表情をする。

「あ…ありがとう！」

嬉しそうな表情をした。ぎこちない笑顔。

そうか。藤山　葉月も一緒なのか。

だから、気になったのか。「杜塚、今からさあいつらとゲーセンに行くけど、杜塚も一緒に来ねぇか？」

放課後、薪沢がそう誘ってきた。

薪沢が指差す方をちらりと見る。

男子が三人。あからさまに嫌そうな顔をしてる。

安心してよ。そんな嫌そうな顔しなくても、僕は行かないから。

薪沢もどうして聴いてくるんだろう。

僕が行かないって言うの分かってるだろうに。

「僕はいいよ」

「そっか。分かった」

少し残念そうに三人の方に戻る。
忘れ物はない。帰ろう。

教室を出たら、藤山　葉月がいた。
僕を見た途端、嬉しそうな顔をする。

「何？」

声をかけたら、今度はおろおろとし出した。

「あ、あの……い、一緒に、帰ってもいい……？」

「別に。いいけど」

嬉しそうな顔に戻る。顔にそこまで表情として現れてる訳じゃないけど。
先に歩き出す。
慌てて、後を付いてきた。

―藤山　葉月の視点―

杜塚君の後を付いていく。

段々と人気のない道に入っていくけど、どこに行くんだろう。
周りが畑や田んぼばかりの公園の中に入る。
屋根のあるベンチに迷いなく進む。
段ボールが置いてあるけど、なんだろう？
杜塚君がベンチに鞄を置いて、段ボールの中を覗く。
段ボールの中から、猫が飛び出してきた。
見事に、猫をキャッチする。
よく見ると子猫だ。黒と白の斑模様の毛色をしてる。
包帯を巻いてるけど、怪我をしてるのかな。

「杜塚君、その子猫どうしたの？」

「道端で怪我したまま捨てられてるのを見つけたんだよ。だから、ここで世話してる」

鞄から包帯と薬を取り出した。

「家では飼わないの？」

「母さんが動物嫌いだから」

それなら、仕方ないのかな。

「杜塚君は、猫好きなの？」

「動物が好きなんだよ。猫が特に好きなだけ。人間なんかより、この子達の方がどれほど純粋で綺麗か」

……そっか。杜塚君も人間嫌いなんだ。
学校ではあんなに無表情だったのに、子猫に向ける表情はすごく優

しいもんね。
子猫もすごく杜塚君になついてる。
杜塚君は、子猫を見ながらすごく優しそうに微笑んでる。

あの微笑みを向けられる子猫が、羨ましい。猫に包帯を巻く間、藤山　葉月はじっと動かずに、ただ僕が包帯を巻くのを見つめてくる。
じっと見つめて、何が楽しいんだろう。
まぁ、いいか。
前足に包帯を巻き終わる。
爪の状態を見る。だいぶ治ってきてるみたいで、ほっとする。
最初見つけた時は酷い状態だった。
酷く衰弱して足からは出血して、爪は血管を傷つけるほど深く切られてて。
明らかな虐待。
助かるか心配だったけど、元気になったからよかった。
鳴きながら腹を押してくる。餌が欲しい合図だ。
鞄から餌や水、皿が入った袋を出す。
餌は缶詰め。蓋を開けて、皿に移す。
地面に皿を置く。勢いよく食べる。
水を餌の隣に置く。

「この子、元気になったらどうするの？」

一番困ってることを聴いてきた。

「どうしようか困ってる。一番いいのは、この子をちゃんと飼ってくれる人が見つかるといいんだけど。君は飼えないの？」

「ごめん……。僕の家じゃ虐待されちゃう…」

そう言った後におろおろとし出した。
まぁ、理由はなんとなく分かる。
猫が膝に飛び乗ってきた。
耳の後ろを撫でる。
気持ちよさそうに目を閉じた。猫を段ボールの中に入れる。

「おとなしくしてるんだよ。明日また来るから」

名残惜しそうに鳴いてくる。
でもそれだけで、すがり付いてきたりしない。
頭をもう一度撫でて、その場を後にする。
藤山　葉月が当然のようについてくる。

「猫、心配じゃないの…？」

「心配だよ。子供に苛められるかもしれない。車に轢かれるかもしれない。元の飼い主が見つけて連れ帰るかもしれない。だから、その可能性を少しでも少なくするために、ここで世話してるんだよ」

「そっか…。あの子猫、拾ってくれたのが杜塚君で幸せだね」

本気で言ってるのかな。あの子猫にとって一番幸せなのは、ちゃんと可愛がってくれる飼い主に巡り会うことだと思うけど。
藤山　葉月を見る。
ほんの少し笑ってるけど、寂しそうだ。
ぎこちない笑顔。
かつての僕と、同じもの。

昔を、思い出す。ゆっくりと歩く。まだ、藤山　葉月がついてくる。
家が同じ方向なら仕方ないけど。

「君さ、なんで死のうとしたの？」

なんとなく訊いてみる。

「えっと、その……生きてても意味がないと思って……だから…」

「生きてても意味がないって、どうして？」

そう訊いたら、泣きそうな顔になった。

「両親が死んだ後、意地悪な親戚に引き取られて……毎日のように苛められるの……。学校でも苛められるし……だから、死んだ方が楽だって…」

じゃあ、あの時本気で死ぬつもりだったのか。
邪魔したつもりはないけど、邪魔をした訳か。

「それで、君はまだ死ぬつもりなの？」

藤山　葉月が俯く。まるで、僕の視線から逃げようとするみたいだ。

「分かんない……」

あぁ、本当に弱々しい目をしてる。
ちょっと押しただけで崩れてしまうくらい、ぼろぼろ。
さっきの返答で分かった。

きっと、藤山　葉月は死ぬ。
近いうちに。
僕は、それを見届けよう。あの後、藤山　葉月と別れて帰ってきた。
すごい名残惜しそうな顔をしてたな。
まぁ、嫌いな親戚夫婦のところに帰るんだから、当然か。
確か、苛められるって言ってたな。
藤山　葉月が見たら、僕の今の家族は羨ましく見えるのかな。
実際は、家族らしく見せてるだけだけど。
元々不倫から始まってるんだ。
最初から歪な形で始まったんだから、いつか壊れるに決まってる。
そういえば那奈瀬は、不倫のことは知ってるのか？
まぁ、知ってようが知ってまいが、どうでもいいけど。
そんなことよりも、今日はどうしようか。
今日も行くか。どうせ明日、土曜日だし。
遅くなってもゆっくり寝られる。
一階から僕を呼ぶ声が聴こえる。

ご飯を食べて風呂に入ったら、出掛けよう。
獲物を狩りに。

―藤山　葉月の視点―

杜塚君と別れて、家に続く道をとぼとぼと歩く。
帰るの、嫌だな……。
どうせ、苛められるだけなのに……。
でも、帰らなかったら余計に苛められる。

どっちにしたって苛められる。

杜塚君は、周りの人間とは違う気がする。
なんでそう感じるのか分からないけど。
でも、杜塚君なら、僕を理解してくれる気がする。
どうしてここまで惹かれるんだろう。
飛び下りようとした僕を見つめるあの目を見たからかな。
無感動で冷徹で氷のように冷たくて、奥底に哀しみを隠したあの目を。
杜塚君なら、僕なんかが傍にいても許してくれるかな。
僕は、誰からも疎まれる。
存在が、邪魔。

家が、見えてきた。

―藤山　葉月の視点―

家の扉の前で一旦立ち止まって、溜息を吐く。

どうして、僕はこんな思いばかりしなきゃいけないんだろう。

人間は皆平等とか言うけど、あんなの嘘だ。
皆平等なら、どうして僕はこんな思いをしてるの？
母さんがよく言ってた。
神様は乗り越えられる試練しか与えないって。
それも嘘だ。全然乗り越えられないじゃないか。
そもそも、神様なんて人間の空想が作り出したものじゃないか。
そんなの、僕は信じない。

思いきって扉を開ける。
テレビの音が聴こえる。
靴を脱いで中に入る。居間を覗くと、おばさんがテレビを見てた。

「ただいま……」

一応、声をかける。僕に見向きもしない。
最近は、僕の存在すら無視され始めた。
諦めて、自分の部屋に戻る。
ベッドと机と本棚しかない、殺風景な部屋。

玄関が乱暴に開く音がした。
おじさんだ。一番、会いたくない人。

ー藤山　葉月の視点ー

廊下からドタドタと乱暴な足音がする。

「あんた、また酔って帰ってきたの？医者から酒は控えろって言われてるのに」

「ああん？医者がなんぼのもんじゃい。好きなもん飲んで何が悪い言うねん。葉月はおらんのか！？おい、葉月！」

またか……。お酒くらい自分で買いに行けばいいのに。
溜息を吐く。仕方なく立ち上がる。

部屋の扉を開けて、廊下に出る。

「はい……」

「おう葉月、酒買ってこい！」

「……はい」

おじさんからお金を受け取って、家を出る。
近くの酒屋さんまで、とぼとぼと足を運ぶ。
今日は機嫌がいいのかな。
部屋にいきなり入ってきて、蹴られたりしなかったし。
帰ったら分からないけど。
酒屋さんで日本酒とビールを買って、来た道を戻る。
なんとなく、腕を捲る。
傷だらけの、汚い腕。
最近は、煙草を押しつけられた。
なんで、痛い思いばかりしなきゃいけないんだろう。
僕が何か、悪いことしたのかな。

溜息を吐きながら、家に入る。

―藤山　葉月の視点―

「ただいま……」

「何をぐずぐずしとんねん！さっさと持ってこんかい！」

やっぱりこうなるか……。
こうやって買いに行かせて、遅いって理由つけてねちねち何か言ってきて、暴力を振るうの好きだもんな。

「遅いわ。もっと早く買いに行けんのか?」

「……すみません」

買ってきたお酒をテーブルの上に置く。
おじさんが椅子に座ってふんぞり返っている。
その姿を見る度に、嫌悪感が沸き上がってくる。
醜い顔を更に醜く歪ませて、偉そうにふんぞり返って。
自分が偉いって、勘違いもいいところだ。

「なんじゃいその目は!」

テレビのリモコンを、顔目掛けて投げつけられる。
咄嗟に腕で顔を庇う。
痛いな……。
本当に、嫌になる。
何も言わずに踵を返し、玄関に向かう。

「おい!どこ行くんじゃ!」

おじさんの声を無視して外に出る。
こんな所にいたくない。
どこかに行こう。獲物が起きるのを待つ。
今日の獲物は宮木(みやぎ)　信仁(のぶひと)。二十八歳の会社員。
酔ってたみたいで、自分からぶつかってきたくせに、文句を言ってきた。

散々言ってきたな。
まぁ、散々言わせて満足したところを、背後から襲った訳だけど。

さて……今日はどんな方法でいたぶってやろうか？
皮膚を剥ぐのもいい。
骨を折るのもいい。
あぁ……久しぶりに目隠しをしていたぶってやろう。
何も見えない状態で、何をされるか分からないなんて、きっと半端ない恐怖だろうなぁ。
机の引き出しを開け、布を出す。
宮木　信仁の頭を起こして、布を結ぶ。
目を覚ましたら何も見えなくて、慌てるだろうなぁ。
どんな反応をするか、楽しみだ。

早く起きてくれないかな？なかなか起きない。酔ってたし、尚更かな。
早く楽しみたいのに、こういう時に限って時間が経つのは遅い。
このまま自然に起きるのを待つかどうしようかな。
強引に起こそうかな。
酒も入ってることだし、きっと待ってたら遅くなる。
起こしてしまおう。
手加減なしで腹を蹴る。反動でベッドが軋む。
流石に起きた。身体を折り曲げて咳をする。

「何しやがる！おい、こりゃあなんの真似だ！？」

随分と威勢がいいな。こういう獲物は威勢だけだから、後でどれだけ悲鳴を上げるか楽しみだ。

「何って、腕を縛って目隠しをしたんだよ。分からないの？」

「そういうことを訊いてんじゃねぇよ！なんでこんなことをするか訊いてんだよ！」

「なんでって、分からない？」

まぁ、分かるはずがないか。

「俺が知る訳ねぇだろ！お前、さっきの餓鬼か！？タダで済むと思うなよ！」

うるさいなぁ。どうでもいいことをごちゃごちゃと。

そろそろ、自分がどういう状況に置かれているのか、分からせてやろう。

首筋にナイフを当てる。きっとひんやりした感触に、恐怖が沸き上がってきてることだろう。

「これがなんなのか分かる？ナイフなんだけど、どうなるか分かるよね？これ以上ごちゃごちゃ言うようなら、殺すよ？」

まぁ、どうせいたぶって殺すけどね。ひっ、と息を飲む音がする。

自分が置かれてる状況、分かった？

さぁ、どうする？まだ強がる？命乞い？

「このクソ餓鬼！タダで済むと思うなよ！」

ただで済まないのは君の方だよ。

自分が政治家の息子だからって、何をしても許されるなんて思ってるんだろうね。

僕が教えてあげよう。
絶望と恐怖を。

「タダで済まないのは君の方だよ？今からたっぷり、いたぶってあげる……」

あぁ、興奮してきた……。
心臓がすごく脈打ってる。
ナイフを舐める。

さぁ、狩りの時間だよ……。
たっぷり血を、吸わせてあげる……。凄まじい悲鳴を上げて暴れる。

はは、あはははは！

本当楽しすぎて笑いが止まらないよ。
血を舐める。あぁ、不味いなぁ。
例えるなら、焦げたパンのような味がする。
酒ばっかり飲んでるんじゃないの？
だから血の味まで不味くなるんだよ。
指落とすの飽きたな。
なんとなしに親指を折る。
ごきっと音がして、指が本来とは逆の方向を向く。
あぁ……骨が折れるこの感触も気持ちいい。

そうだ、今日は首を切り裂いて、死ぬのを眺めてやろう。ナイフに着いた血を舐める。
身体が極限まで昂ってきて、不味いのも気にならなくなってくる。
殺す前に、もう少しだけいたぶってやろう。

どうしようかな。

耳を削ぎ落としてやろう。

耳を摘まむ。ナイフを耳に当てる。

何をされるのか分かったのか、やめろと何度も叫んでくる。

構わずにナイフを食い込ませ、滑らせる。

「いぎゃあああああ！」

あぁ、いい悲鳴だ。更に、僕を興奮させてくれる。

がりがりと、削ぎ落とす。

ほぼ、一部の皮とほんの少しの肉しか繋がってない状態になる。

ナイフで落とさずに、手で無理矢理千切る。

ぶちぶちと、肉と皮が引き千切られる感触が伝わってくる。

最後まで残った皮がなかなか千切れない。

仕方なくナイフで切断する。

過呼吸のような息づかいが聴こえてくる。

切断した耳を口に入れる。

耳は少し固い。

噛みながら宮木　信仁を眺める。

目隠しをしてるから分かりづらいけど、目隠しの下は無様に泣いてるんだろな。

いい様だ。

噛んでた耳を飲み込む。

さて、首を切ってやろう。耳の切断面に爪を食い込ませる。

「あ〝あ〝あ〝あぁぁぁ！」

更にぎりぎりと食い込ませて、引っ掻く。

爪の間に肉の破片が入り込む。
普通なら気持ち悪いだろうけど、今はそれすらも気持ちいい。
いつの間にか血塗れだなぁ。
手に着いた血を舐めて、爪に詰まった肉の破片を歯で取り除き、飲み込む。
ナイフを握り直し、首に当てる。
怯えたのが伝わってきた。
つつっと、ナイフを滑らせる。
滑らせたせいで、皮膚が少し切れて血が滲む。
滲んだ血を拭い、舐める。

ナイフを首に突き刺す。ナイフを首の骨に達するまで、深々と突き刺す。
悲鳴が上がるけど、血が逆流してごぼごぼとした音にしかならない。
喉の中で血が溢れて、苦しいだろうなぁ。

「あはは……ねぇ、苦しい？」

僕の方に首を向ける。
可哀想に。目隠しで僕の姿見えないでしょ。
どうせ死ぬんだから、最後に目隠しを取ってあげる。
目隠しを取ったら、虚ろな目で睨んできた。
へぇ……まだそんな気力あるんだ。
ナイフを刺した場所に指を入れて、肉を抉る。
悲鳴はごぼごぼと音になって消える。
これほどの血が流れたんだし、そろそろ死ぬかな。
息づかいもほとんど聴こえない。

しばらくして呼吸と脈を見る。

呼吸も脈もない。瞳孔も開いてる。
死んだか。

「死んだね……あははは、あははははははははは！」「あははははははは……はぁ……ふふ…」

ひとしきり笑う。

「さて……と、解体しよっと」

部屋の隅に置いてある斧を手に取る。
この斧も長いこと使ってるなぁ。
たくさんの血を吸った。
手入れしてあるから、まだまだ使える。
ベッドを壊す訳にはいかないから、死体を引き摺り下ろす。
斧を持ち上げ、死体に振り下ろす。

死体の肉を噛み千切り、噛む度に生肉を噛む生々しい音が響く。
この腕を食べ終われば、後は内臓だけ。
さっさと食べて骨を砕いて帰ろう。「よし……終わった」

骨を砕き終わった。
服に着いた骨の粉塵を払い落とす。
まぁ洗うから気にしなくていいか。
掃除しよう。床も壁も血が飛び散ってる。
この血の飛び散って出来た模様を消すのはもったいないとは思うけど、仕方ない。
腐敗し出したら臭いが酷いから。

部屋を出て、バケツと雑巾を持ってくる。
血を黙々と拭き取っていく。

十分かけて血を拭き取る。
後はバケツの水を捨てて、シャワーを浴びるだけ。
シャワー室に向かう。そこで血の色に染まった水を捨てる。
一旦脱衣室に出て、タオルと着替えが置いてあるか確かめる。
大丈夫だ。
さて、服を脱いでシャワーを浴びよう。ザー、という水の流れる音を聴きながらシャワーを浴びる。
なんとなく右腕を見る。
肩の関節から肘にかけて走る、消えない傷痕。
あの女が僕を殺そうとした時に出来た傷。
あの女がいたという痕跡が、僕の身体に傷痕として残ってるのが、腹立たしい。
傷痕に爪を突き立て、ぎりぎりと引っ掻く。

「は……あはは…」

勿論、痛い。
皮膚を傷つけたみたいで、血が滲む。
シャワーが少し沁みる。
血は洗い流したし、もう出よう。
ふと、思う。両親が違う人物だったら、僕の人生はまた違うものになってたのかと。
まぁ、そんなこと考えても無意味だ。
もしもや、偶然なんてない。
あるのは、必然だけ。

僕が快楽殺人者になったのも、必然。

着替え終わり、片付けを済ませ廃ビルから出る。
空を見上げる。今日は新月か。月が見えない。
あの猫は大丈夫かな。
人間を殺した後に猫の心配なんて、おかしいと思うかい？
僕にとっては拾った猫の方が心配だよ。人間はどうだっていい。
価値観の問題だね。
帰る前に様子を見ていこう。猫がいる公園までゆっくりと歩く。
街灯が少ないから、暗い。
でも、この暗闇は好きだ。
この静けさも。聴こえてくるのは、虫の鳴き声や風の音、木々が風に揺られて葉が擦れあう音。
自然の音しかしない。
人間が発生させる不協和音は聴こえない。
昼は不協和音に溢れ過ぎてる。
脳髄が忌々しい不協和音に犯されそうになる。
だから、この場所で聴く夜のこの静けさは好きだ。
自然の音しか聴こえないから。
公園が見えてきた。

猫のいる段ボールを覗く。気持ちよさそうに寝てる。
何事もなくてほっとする。
名前はつけてない。これ以上愛着が湧かないように。
何が起こるか分からないから。
これ以上愛着が湧いたら、何かあったら悲しくなる。

だから、名前はつけない。
猫が起きた。欠伸をして、僕に気づく。
手を伸ばすと、僕の手にじゃれついてくる。
自然に、笑みが洩れた。

―藤山　葉月の視点―

家を出たのはいいけど、どこに行こう……。
どこにも行くところなんてない。
僕に居場所なんてない。

「はぁ……」

溜息しか出ない。
仲のよさそうなカップルや、家族連れが視界に入る。
母さんや父さんが生きてたら、こんな思いしなくて済んだのかな。
母さんも父さんも、どうせならあの時僕も一緒に連れていってくれればよかったのに。
あの時、横断歩道を家族三人で歩いてたら信号無視した車が突っ込んできて、轢かれたんだ。
母さんと父さんは、病院で死んで僕だけ助かった。
こんな思いするなら、あの時助からなかったからよかった。

「はぁ……」

どうしようかな……。
……あの猫のところに行ってみようかな。
動物は、見てるだけでも癒される。
行ってみよう。

猫のいる公園に着く。
杜塚君がいた。

―藤山　葉月の視点―

杜塚君がいた。
膝に猫を乗せて、喉を撫でてあげてる。
杜塚君が微笑んでる。
猫も嬉しそうに杜塚君にじゃれつく。
どうしよう。邪魔しない方がいい。
帰ろうか……でも、どこに？
居場所と呼べる場所なんか、僕にないのに。
かといって、ここにずっと突っ立ってるのも気まずいし。
どうしよう。
おろおろとしてるうちに、杜塚君が顔を上げて僕を見た。
目が合った。

「君、こんな時間に何してるの？」

「その、家を出てきたの……」

「そう」

それだけ言うと、興味をなくしたように僕から視線を外す。

「杜塚君は、どうして？」

「散歩のついでに様子を見に来ただけ」

こんな時間に散歩なんて、家族の人心配しないのかな。

僕が気にすることじゃないけど。

座ってもいいかな？

隣に座る。杜塚君が一瞬僕を見たけど、何も言わずに視線を猫に戻した。猫を撫でてたら、視線を感じて顔を上げると、藤山　葉月がいた。

僕が見つめると、おろおろとし出して目を泳がせる。

なんでそこまで動揺するんだろう。

睨んだ覚えはないけど。

「君、こんな時間に何してるの？」

声をかけたら、案の定余計におろおろし出した。

「その、家を出てきたの……」

「そう」

視線を猫に戻す。

鼻をつついてやると、びっくりしたような顔をした後に、手に爪を引っ掻けて指を舐めてくる。

「杜塚君はどうして？」

「散歩のついでに様子を見に来ただけ」

正確には散歩じゃなくて、さっき人一人殺してきたんだけどね。

猫が舐めてるこの手は、さっき血塗れだったんだよ。
藤山　葉月が恐る恐る隣に座った。
ちらっと視線を向けて、すぐに猫に戻した。ただ無言で、猫を撫でる。
猫じゃらしを目の前でちらつかせると、喜んで猫じゃらしにじゃれつく。
見ててとても和む。
藤山　葉月がじっと見つめてくる。

「ねぇ、家を出てきたって、どうして？」

まぁ、なんとなく理由は分かるけど。
意地悪な親戚に暴力を振るわれたとか、そんなとこだろうね。

「その……おじさんに物投げられて、それで……」

やっぱりか。僕の場合は、暴力がなかっただけまだマシだったのかな。
育児放棄も十分虐待のように感じるけど。
暴力がないだけまだマシか。
最後に殺されかけたけど。
結果的には僕が殺した訳だけど。
猫が眠そうに欠伸をした。
遊び疲れたかな。そろそろ寝かせるか。
猫を段ボールに寝かせる。
丸くなってすぐに眠りにつく。
僕もそろそろ帰ろう。

「僕、帰るけど」

「あ……じゃあ、僕も一緒に帰っていい……？」

「別に」

何か言おうとしたけど、待たずに歩き出す。
藤山　葉月が慌ててついてきた。無言で歩く。
一切会話はない。別にそれでいいけど。
目の前から車がやって来た。
黒い乗用車。普通に通り過ぎる。
スピードは結構出てたけど。
不自然な息づかいが聴こえて、後ろを見る。
藤山　葉月が地面にへたり込んでる。
両手で口を押さえて、身体をガタガタと震わせてる。

「……大丈夫？」

声をかけると僅かに頷く。
傍にしゃがんで、背中をさする。
しばらくして、ようやく震えが治まった。
相変わらず気持ち悪そうだけど。

「ごめん……。もう、大丈夫」

そんな青白い顔して、大丈夫はないだろうけど。

「杜塚君は、夜は好き？」

いきなり、そんなことを聴いてきた。なんでそんなこと聴くんだろう。
まぁ、いいけど。

「夜？好きだけど、なんで？」

藤山　葉月が深く息を吐く。

「僕……夜が怖いんだ」

「……」

何も言わずに、黙って聴く。

「僕が小学生の時に事故に合ったんだ……。僕と両親で歩いてて、信号無視の車に轢かれて……それ以来、夜が怖いんだ……」

「……そう」

それで、両親が死んで親戚に引き取られたって訳か。

僕も、昔は夜が嫌いだったな。

夜は一人きりで寂しかったのを覚えてる。

「ごめん、つまんないこと話して……」

「別に」

ようやく呼吸が整い始める。

さする手を離して、立ち上がる。

藤山　葉月が立ち上がろうとする。

まだ足が覚束ないみたいだ。見ていて危なっかしい。

手を伸ばす。

僕の手を掴んで、よろよろと立ち上がった。「ごめん……ありがと

う」

「いいよ、別に」

歩きながら喋る。

夜が怖いなら、出なければいいのに。

ああ、そうか。意地の悪い親戚のせいで、家にいるのが嫌なのか。

僕だったらどうするだろう。

今の僕だったら計画を練って、確実に殺してる。

昔の僕なら、やっぱり我慢してただろうか。

……してるな。

ただひたすら我慢して、溜めに溜め込んで、そして爆発させて。

藤山　葉月なら、爆発させるという発想すらなさそうだな。

溜め込んだものを外に出すという発想すら持たずに、死ぬことを選ぶんだろう。

最後の最後で、藤山　葉月がどんな最後を選ぶのか、楽しみだ。

「じゃあ、僕は帰るから」

「うん、今日はありがとう」

藤山　葉月と別れる。

振り向き様、悲しそうな寂しそうな表情が見えた。家に着く。

家族を起こさないように、静かに扉を閉め、鍵をかける。

喉が渇いたな。お茶を飲もう。

そう思ってリビングに向かう。

扉を開け、足が止まる。

「兄さん、まだ起きてたの？」

那奈瀬がいた。テーブルにノートや本を広げてる。
勉強してるのか。

「おー鼎。お前こそこんな時間までどこほっつき歩いてたんだよ。
また猫か？」

那奈瀬がカップラーメンを食べながら、振り向いてきた。

「そうだよ。悪い？」

今まで何回も猫の世話をしてきたことを知ってるから、夜に散歩に
行くのは猫のところに行ってると思ってるらしい。
本当は違うけど。まぁ、そう思わせとこう。

「いんや、別に。どうせなら、飼えば？」

「母さんが嫌がるでしょ」

「母さんなら説得すれば、飼わせてくれるんじゃね？」

そうだろうか。まぁ、やってみるか。

「まだ起きとくの？」

「まだな。課題が終わんねぇんだ」

「そう、おやすみ」

お茶を飲み、自室に戻ってきた。
猫のこと、言ってみようか。
携帯を開く。着信一件。
開いてみると、薪沢からだ。
内容を見る。

〈明日遊べねぇ？〉

というものだった。明日遊べない……か。
どうしようか。確かに予定はない。
今日は土曜。休日で人間がごった返す中を、わざわざ出かけるのもなぁ。
どうするか。
時計を見る。午前三時十分。
薪沢のことだから、今日は土曜だし起きてるな。
メールしてみるか。

〈遊べるけど、何？〉

送信。
二分くらいで、すぐさま返信が来た。

〈遊ぶっていうより、ウマイって噂の、最近出来たラーメン屋があるんだよ。
一緒に行かね？〉

ラーメンか……。かなり魅力的。
いくらでも食べられる。
人間がごった返す中を出かけるのは嫌だけど、食べた後すぐ帰ればいい話だ。

〈行く。そこ美味しいんだよね？〉

〈行ったやつは皆ウマイって言ってるぞ〉

〈じゃあ行く。十二時に待ち合わせでいいの？〉

〈うん。十二時〉

〈分かった。また後で〉

〈おー、またな～〉

携帯を閉じる。
目覚ましを八時に合わせて、布団に潜る。
すぐに睡魔が襲ってきた。目覚ましの音で、夢の微睡みから一気に引き起こされる。

「ん～……」

手探りで目覚ましを探す。
手に何か当たる。形を探ると目覚ましだ。
勢いよく黙らせる。
布団を被って、しばらくそのままでいる。
十分ほど経って、目を擦りながら起き上がる。
窓を開けて、朝日を浴びる。
今日は快晴。雲ひとつない。
着替えて、下に下りよう。
タンスからジーンズとシャツを出す。
寝間着を脱いで、それに着替える。

寝間着を持って下に下り、寝間着を洗濯機の中に入れ、洗面所で顔を洗う。
リビングに行くと、母さんが朝食を並べてた。

「あら。鼎、おはよう」

「おはよう」

椅子に座る。
あぁ、そうだ。猫のこと、言ってみようか。

「ねぇ母さん」

「ん？なぁに？」

「猫、飼いたんだ」

猫と聴いて、やっぱり嫌な顔をした。

「……猫？」

「うん。怪我してて、家で世話したいんだ。……駄目？」

少し考える仕草をする。
僕は返事が返ってくるまで待つ。

「鼎の部屋から出さないんなら、いいわよ」

ようやく返事が返ってきた。

「それなら、飼っていいの？」

「ええ、いいわよ」

凄く嫌そうな顔をしてる。
僕の部屋で飼うんなら、余計な心配はしなくていい。
帰りに、猫を連れて帰ろう。
名前、付けないとな。ご飯を食べた後、しばらくやることがないから自室で読書をする。
時計を見る。九時半。そろそろ出るか。
少し大きめの黒い鞄に財布だけ入れる。
持っていくものは財布だけで十分。
下に下りる。

「母さん。僕、出掛けてくるから」

テーブルを拭いていた手を止めて、僕を見る。

「あら、薪沢君と？」

「うん」

「分かったわ。いってらっしゃい。夕飯までには帰ってきてね」

「うん。いってきます」

さて、駅に行く前にコンビニに寄ろう。
猫の餌を買いに。
きっとお腹をすかしてるだろうから。玄関を出る。太陽が眩しい。
餌だけじゃなくて、水も買って行った方がいいな。

この日差しで脱水症状でも起こしたら大変だ。
とりあえず、コンビニに行こう。

コンビニに着く。
このコンビニは、家から歩いて五分くらいの距離にある。
家から近いから結構便利だ。
猫のまぐろ味の缶詰と水を買い、コンビニを出る。
さて、猫のところに行こう。

公園に着く。
人間はいない。いつも通り。
ベンチに鞄を置いて、段ボールの中を覗く。
僕を見て、元気に鳴いてきた。
餌がほしいみたいだ。
段ボールの側に置いていた皿に缶詰と水を入れて、猫に食べさせる。
食べるのを、じっと眺める。
食べ終わって、僕の膝に乗ってきた。
頭を撫でる。

「名前、決めないとな。どうしようか」

毛色が斑模様だから、まだらとか。

「……まだら。まだらにしよう」

適当すぎるかな。まぁ、いいか。

猫、じゃない。まだらが鳴いた。日が昇ってきて、暑くなってきた。
まだらが蝶を追いかけて遊ぶ。
跳び跳ねてみたり、楽しそうだ。
生ぬるい風が、髪を撫でていく。
なんとなく、胸騒ぎがするのはなぜだろう。
このままだらを、置いていっては駄目な気がする。
立ち上がり、まだらの傍にしゃがむ。
まだらが座ってきょとんと見つめてくる。
とても純粋で、無邪気な瞳。
穢れた僕なんかとは全く比べ物にならない、綺麗な瞳。
飼い主になるのが、僕でいいんだろうか。
後ろから、いきなりガサッという足音が聴こえた。
思わずまだらを抱き抱える。

「あ……杜塚君…驚かしてごめん……」

なんだ、藤山　葉月か。
てっきり、まだらを捨てた飼い主が捕まえに来たのかと思った。飼い主が連れ戻しにやって来るなんて、考えすぎか。
きっともう、死んだものと思ってるはず。
連れ戻しになんてまずない。
けど、万が一、見つけたら？
きっと連れ戻されて虐待されて、今度こそ殺される。

それは、嫌だ。

心底、嫌だ。

いつの間にか僕は、この猫に、まだらに、心底愛着を持ってしまったみたいだ。

こんなに愛着を持つなんて、初めてだ。
今まで何回も、猫を世話してきたのに。
どうしてまだらだけ、こんなに愛着持つのだろう。

「杜塚君どうかした？」

「いや、なんでもない」

時計を見る。十一時二十分。
そろそろ駅に行ってもいい時間帯だ。

「杜塚君、誰かと約束してるの？」

「うん、そう」

藤山　葉月が残念そうな顔をした。

「なんなら、一緒に行く？」

「え？僕が？で、でも……」

「いいよ、別に。あいつなら、文句言わないだろうし」

一瞬、俯き、

「じゃあ、行っていい？」

と、嬉しそうに言った。藤山　葉月を連れていくのはいいとして、
問題はまだら。
どうしようか……。

電車に乗るし、行くのは飲食店だしな。
連れていくのが駄目なのは一目瞭然。
でも、胸騒ぎを無視するのも気が引ける。
万が一、ということがある。

「杜塚君……？」

藤山　葉月に心配そうに呼ばれた。

「……ごめん。行こうか」

大丈夫。きっと大丈夫。
僕の考えすぎだ。
まだらを段ボールの中に入れようとしたら、まだらが嫌がった。
暴れて抵抗してくる。
服に爪を引っ掻けて、離れようとしない。
こんなこと、初めてだ。抵抗なんてしたことなかったのに。
連れていってって、ことだろうか。
……やっぱり、連れていこう。
鞄の中でおとなしくしていてくれれば問題ないし。

「連れていくの？」

「うん。離れないから。この鞄なら、余裕で入るし」

まだらを鞄に入れる。
今度は嫌がらなかった。まだらを鞄に入れる。身体が小さいから、すっぽり収まった。

「おとなしくしててよ」

耳の後ろを撫でる。
まるで返事するかのように、ニャーっと鳴いた。
時計を見る。

「行こうか。あいつより遅れるなんて嫌だし」

「うん、誰と待ち合わせてるの？」

「薪沢って言って、分かる？」

考えるように俯いた。

「ごめん、名前だけじゃ分かんないや……」

まぁ、そうだろうね。違うクラスだし。
そもそも、面識ないはずだし。

「行くよ」

「あ、うん」

僕のすぐ後ろを黙ってついてくる。
まだらは、鞄の中でおとなしくしてる。駅に着く。時計は十一時五十分を示してる。
勿論、薪沢はまだ来てない。
今日はどれくらい遅刻するだろな。

「薪沢君、まだ来てないね」

「いいんだよ。あいつ、遅刻魔だから」

「そ、そう……」

そういえば、藤山　葉月は財布持ってるんだろうか。
心配になってきた。

「ねぇ、電車に乗ってラーメン屋に行くけど、ちゃんと財布持ってる？」

「うん。大丈夫。ちゃんと持ってるよ」

なら安心だ。なんとなく散歩してるだけのイメージがあるから、財布持ってないのかと思った。

「薪沢君、来ないね」

藤山　葉月がぽそっと呟く。

「いいんだよ。いつものことだから。あ、来た」

「え？」

薪沢が来た。『只今絶賛妄想中』という、明らかに痛すぎるシャツを着て。
藤山　葉月も、これには流石に引いたみたいだ。薪沢が息を切らしながらやってきた。

「また遅刻。八分二秒」

「いちいち細けぇなぁ、相変わらず。で、誰？」

薪沢が藤山　葉月を指差す。

藤山　葉月はおろおろと自分の名前を言おうとするけど、声が全く出てない。

激しい人見知りなのか、それとも誰かと喋るのが苦手なだけなのか。

まぁ、どっちでもいいけど。

でも、この場は僕が喋るべきか。

「違うクラスの藤山　葉月。途中で会ったから連れてきた。で、こっちのアホ面は薪沢　波哉斗」

「アホ面って酷くねぇ！？」

「違うの？それか間抜け面？」

「いや……もういいです」

諦めて脱力した。本当、薪沢は弄ってて飽きないな。

藤山　葉月が笑ってるし。

「薪沢、回れ右」

「お、おぉ？」

素直に回れ右をする。

背中に『Cカップ命、誰か揉ませて』の文字。

端に小さく『冗談ですよ？』とある。

藤山　葉月が地味に引いてる。

「こういう奴なんだよ。面白いでしょ」

「うん……そうだね」

笑ってるけど、明らかに顔をひきつらせて引いてる。

まぁ、あれだからね。

薪沢は分かってないみたいだけど。「どうかしたか？」

薪沢が藤山　葉月に話しかける。

「あ、えっと、面白い服だね……」

「面白いけど痛すぎるよね」

間髪入れずに割って入る。

薪沢が服について語り出したら面倒だ。

興味ないのにやたら長いし、必要以上に熱く語る。

何より、痛すぎるのを分かってないのが痛すぎる。

周りの引いた目が分かんないのかな。

まぁ要するに、馬鹿なんだね。

「痛すぎるってなんだよ！？お前今日、いつも以上に酷いぞ！？」

「そう？気のせいだよ」

「……なんかもういいや。とりあえず、行こうぜ」

「うん」

電車に揺られて五分。目的の駅に着いた。
ラーメン屋までは歩いて五分。

「なんか食べてきたのか？」

「朝に少しね。これからいっぱい食べる」

「なんか……杜塚一人で店の売上の半分食いそうだな……」

―藤山　葉月の視点―

……なんなんだろう。この光景。
凄まじい光景が広がってる。
杜塚君の前にはとんこつラーメンと炒飯二杯、それに餃子二十個。
これだけでもすごいのに、既に完食した皿が十皿以上積み上がってる。
ラーメンとか炒飯とかいろいろ。
しかも、食べる早さが凄まじく早い。
この店に入って一時間は経ったけど、この一時間の間に二十皿以上食べる早さが凄い。
ほら、こうしてる間にラーメン完食した。
で、また注文。

「すいません、醤油ラーメンに餃子二十個お願いします」

どんだけ食べるんだろう。

その細い身体の中に、どうやったらそれだけの量が入るの？僕なんて、味噌ラーメン一皿でお腹いっぱいなのに。
あれだけ食べて、太らないのも不思議。
店の人もだけど、他のお客さんも唖然としてるし……。

―藤山　葉月の視点―

薪沢君が「杜塚一人で店の売上の半分は食いそうだな」と言ったのを思い出す。
確かに言える。今なら分かる。
なんなのあの量。
さっきからまた皿が増えてるよ？
もう少しで三十皿越えるよ？
その凄まじくあり得ない量を、なんで無表情で涼しい顔して食べれるの？
なんか、意外すぎる。
まさかこんな大食漢とは思わないよ。
イメージ出来ないもん。
実際見てもまだ信じられないもん。
どうなってんのその胃袋。

「なぁ杜塚、これ食ってみろよ」

「どれ？」

薪沢君が指差す方を見る。
その瞬間、杜塚君が固まった。
僕も見てみる。
激辛レッドラーメン、というラーメンが書いてある。

なんか、すごい辛そう。

「薪沢、これを僕に食べろと？」

「おぅ、食べれるだろ？」

「僕が辛いの大の苦手だってこと、分かって言ってる？」

「おぅ、分かってるぞ。すいませーん、激辛レッドラーメンひとつ！」

「ちょ、馬鹿！何してんの！？」

杜塚君が初めて動揺した。
それだけ辛いの苦手なんだ。
しばらくして問題のラーメンが運ばれてくる。
杜塚君の前に。
杜塚君が、明らかに冷や汗を流しておろおろとしてる。
なんか、本当意外すぎる。
杜塚君が、激辛ラーメンひとつで動揺するなんて。目の前に静かに鎮座する、激辛レッドラーメンという名の敵を睨む。
なんなんだよ、この毒々しい赤。
無理。こんなの無理。
七味唐辛子でさえ、僕にしたら辛いのに。
こんなの食べたら三途の川が目の前に広がるよ。

「薪沢、お前食べろ」

「やだ。もう食えねぇし。お前まだ入るだろ？」

「入ったとしても、これは無理。薪沢が頼んだんだろ。食べろよ」

「だからもう食えねぇって。頼んだのに食わねぇのはもったいねぇだろ？任せた」

任せられてもものすごい困るんだけど。

どうしよう。これ。

本当に無理だって。

匂いだけで無理だって。

藤山　葉月を見る。

勿論、食べてという意味を込めて。

首を横に振りやがった。

く……、僕が食べるしかないのか。

ええい、自棄だ自棄。三途の川でもなんでも見てやる。

ー藤山　葉月の視点ー

「杜塚君……大丈夫……？」

恐る恐る声をかける。

「大……丈、夫」

うん。分かるよ。大丈夫じゃないよね。

顔を少し赤くして、涙目になって机に突っ伏してるんだもん。

机に涙の後が残ってるよ。

大丈夫じゃないよね。

食べてる間が凄かった。

涙を流しながら吐きそうになりながら、たまに咳き込みながら食べ

るんだもん。
そんなに苦手なら、途中でやめればいいのに。
食べ物は残さないのがルールとか？
食べるの手伝おうとしたら、「いや、いい」って目に涙を溜めながら言われたし。
本当に大丈夫かな……。
魂の抜けた人形みたいになってる。あぁ、涙が出てくる。
喉が焼けそうなくらい熱い。実際燃えてるんじゃないかな。これ。
胃がびっくりしてるのか、さっきから食べたものが上がってくるんだけど。
あぁ、マジで死にそう。死にかけた。
一口目からヤバかった。
最初は美味しいんだよ。最初だけは。
後からやってくる辛さが地獄なんだよ。
凄まじく辛かったんだけど。
吐きそうになりながら食べたよ。
途中で三途の川が見えそうになったよ。
薪沢は僕を殺す気か？
途中で藤山　葉月が手伝おうとした時に、食べさせればよかった。
意地で断ったけど、やめとけばよかった。
マジで死にそうになったよ。
やっぱり辛いものは撲滅すべきだと思う。おかわり自由の置いてあるお茶を、残らず飲み干してやっと落ち着く。
それでもまだ、喉の奥に辛いのが残ってるけど。
微妙に残ってるのが気持ち悪い。

「杜塚、今更だが激辛ラーメンの料金は俺が払わせていただきます」

「当たり前だよ。払わなかったら頭かち割るよ？」

冗談だけどね。僕がかち割るなんて言ったら冗談に聴こえない。
それにしても辛いのが残って気持ち悪い。
口直しに何か食べようかな。

「すいません。味噌ラーメンひとつ」

「まだ食うのかよ！？」

「当たり前。口直しにね」

「お前の胃袋って底無し沼だな……」

そんな真顔で言うことかな。
むしろ、なんで皆これくらい食べれない訳？
僕からしたらそっちの方が不思議なんだけど。
味噌ラーメンがきた。
で、五分でスープまで飲み干して完食。
藤山　葉月が軽く引いてる。
まぁ、気にしなくていいや。
その後、料金を払って店を出る。
総額一万八千六百円。
まぁ、これくらい普通か。
うん、よく食べた。

ー藤山　葉月の視点ー

なんか今日は、驚きの連続。
杜塚君があんなに凄まじい大食漢だと思わなかった。
辛いのが滅茶苦茶手ってことも。

なんかぼそっと「辛いものは撲滅すべきだと思う。うん、撲滅すべきだよ」なんて聴こえたし。
その時の顔が真顔だった。
よっぽど嫌いなんだね。いつか本当に辛いもの撲滅同盟なんて作ってそう。
そして最後に味噌ラーメン。
うん。どうなってるんだろうね。あの胃袋。
本当、あの細い身体のどこに入るんだろ。
あれだけ食べて太らないのも、ものすごい不思議なんだけど。
ああ、二万円を涼しい顔して出したのもびっくりだよね。
いいなぁ。あれだけ持ってて。
僕はそれだけもらえないから、ちょっと羨ましい。
そういえば杜塚君、きっと気づいてないと思うけど、満足そうに表情が緩んでる。
いつもの硬い冷静沈着な無表情がどっかに飛んでる。
満足そうなのがすごいひしひしと伝わってくるし。
なんか、本当に人は見かけによらないなぁ。
だってあの杜塚君が食べ物ひとつで、凄く幸せそうな顔してるんだもん。
食べ物ってすごいなぁ。「で、この後どうするよ?」

「考えてなかったの?」

「うん。考えてませんでした」

「考えてないなら、帰るけど。他に特に何もないんでしょ?」

「まぁ、特に何も気になるもんはねぇな」

僕は帰りたいけどね。薪沢、予定考えてなかったんだ。

「それなら帰りたい」

まだらのこともあるしね。
人ごみの中にずっといるのも嫌だし。
まだらが、鞄の中でもぞもぞしたかと思うと、隙間から顔を覗かせた。
まぁ、じっと動かずに我慢していたから、いいか。

「おぉ、この猫かわいー。飼ってんの？」

薪沢がまだらの頭を撫でる。おとなしく撫でられる。

「まぁね」

「まぁ、杜塚猫好きだもんな。この前本屋で、猫の写真集見てた時はちょっとびっくりしたぞ」

それ、今言うこと？ついでに言うと、買ったんだけど。
藤山　葉月がちょっと驚いた顔をしてる。
まぁ、僕が猫の写真集見るとかイメージ出来ないのは、認めるよ。

ー藤山　葉月の視点ー

あの後、結局帰るということになって、帰ってきた。
それにしても、杜塚君が猫の写真集を見る光景、あまり想像出来ないな。

「今日はありがとな。杜塚の食べっぷりには感動した」

「僕は薪沢の頭のネジのぶっ飛び具合に感動したよ」

「……それは、俺が馬鹿だと言いたいんですか？」

「さぁ？」

「うん。いいや。気にしないでおく。じゃあな！」

薪沢君に手を振る。明るい人だなぁ。
僕はああいう風に明るく笑えない。

「君は帰るの？」

杜塚君にいきなり聴かれた。
確かに予定はない。でも、帰りたくはない。

「まだ、帰りたくない……かな」

「そう。僕はちょっとデパートに行くから、ついてきたいのなら、ついてくればいい」

そう言って、歩き出す。
慌てて杜塚君の後を追いかけた。

―藤山　葉月の視点―

杜塚君の後をついていく。
どこに行くんだろう。本屋とか？

杜塚君って難しい内容の本読んでそうだよね。
エスカレーターを下りて二階に着く。
あれ？本屋は三階だよね？本屋に行くんじゃないんだ。
前を見ると杜塚君がある店に入った。
ペットショップに。
杜塚君、動物飼ってるのかな？
確か、母親が動物嫌いだから飼ってないって言ってなかったっけ？
だから、あの猫も飼えないって。
それか、猫の餌を探しに来たとか？
まぁいいや。中に入ろっと。
中に入って杜塚君を探す。
餌のところかな？と、思ったらクッションを見てた。
無表情ながら凄い真剣に。
心なしか、ちょっと目が輝いて見える。
白い生地に、水色の水玉模様が入ったクッションを取る。
それをじーっと、凄い真剣に見る。
見ようによっては睨んでるように見える。
ひとつ頷くと、猫用のトイレの砂も持って、レジに行く。
あの猫、飼えるようになったのかな？ペットショップに入る。
まだらを飼うにしても、そのための道具が全くない。
動物用のクッションとトイレの砂くらい、あった方がいい。
クッションを見る。
いろんな柄があるけど、やっぱりシンプルな方がいい。
やっぱりシンプル・イズ・ベストだよ。
でも、真っ黒や真っ白すぎるのもなぁ。
シンプルな柄が入ってるやつにしよう。
白の生地に雪模様か、白の生地に水玉模様か、どっちにしよう。
雪模様の方を手に取る。
うーん……雪模様はまだらの毛色と合わないなぁ。
水玉模様の方が合うな。

手に取り、眺める。
うん、これにしよう。
トイレの砂を持ってレジに行く。
三千円くらいした。
あ、そうだ。ついでに爪研ぎも買おう。
買って、入り口に行く。
藤山　葉月が待ってた。「杜塚君、この子飼えるようになったの？」

「まぁね」

「名前、決めたの？」

「うん。まだらって」

そういえば、僕に対してあまりおろおろしなくなったな。
どういう心境の変化だろう。
僕に対して親近感を持つようになったとか？
まぁ、どうでもいいけど。

「杜塚君になついてるし、この子にとっても幸せだね」

「だといいけどね」

まだらを飼えるのは純粋に嬉しい。
でも、僕の手はたくさんの血で汚れてる。
ただ世話するだけじゃなくて、飼うんだ。
ただその時だけ世話するだけじゃない。最後まで面倒を見ることになる。
こんなに汚れた手で、純粋で綺麗な命に触れていいのか分からない。
今更すぎるけど。「君、この後どうするの」

「えっ？」

きょとんとした表情を向けてくる。

「僕の用事は済んだけど、君が寄りたい場所あるなら、付き合うけど？」

言いながら、自分で何言ってるんだろうと思う。

用事は済んだんだから、さっさと帰ればいいのに。

自分から付き合うなんて、僕らしくない。

「寄るとこ、ないかな。杜塚君はその子のことだってあるし、早く帰った方がいいよ。その子疲れちゃうよ」

確かに何時間も鞄の中で揺られ続けてたから、疲れさせてるな。

「じゃあ帰るけど、君は？」

「僕も帰る」

鞄からまだらを出して、鞄をベッドに置く。

まだらが部屋を興味深そうに見回す。

至るところを見回して、足でつついたりして遊ぶ。

見ていてとても和む。

下から、母さんが呼ぶ声がした。夕食か。

ドアを出ようとして、まだらがじっと僕を見ているのに気づく。

「おとなしくしてるんだよ。すぐ戻ってくるから」

返事するかのように、にゃおん、と鳴いた。

七月十三日　死にたがり・選ぶは共犯

ふふ……あはは、あはははは！

まさか、こんな結末があったとはね

全く、面白いよ顔がぺしぺしとつつかれる。
その刺激によって、夢の微睡みから一気に意識が覚める。
目を開けると、まだらの顔がすぐ目の前にあった。
にゃー、と鳴いてくる。

「おはよう」

言いながら鼻をつつく。
目を見開いて、びっくりしたような表情をする。
この反応が面白くて可愛くて仕方ない。
鼻を撫でると気持ちよさそうに目を閉じる。
で、鼻をつつくと目を見開く。面白い。
抗議するように鳴いてくる。
頭を撫でてやって、欠伸をしながら起きる。
膝に乗ってきて、腹を押しながら見上げてくる。
机の上に置いてあった缶詰めを、皿に移す。
喜んで食べ始めた。着替えて朝食を食べて、忘れ物がないか調べる。
大丈夫だ。
そういえば今日は午後から雨が降るって予報だから、傘を持って行こう。
まだらが足にすり寄ってくる。
鞄を持って、頭を撫でる。

「おとなしくしててね」
にゃあ、と鳴いた。

「はい、鼎。お弁当」
母さんから渡された弁当を鞄に入れて、靴を履く。
「ありがと。行ってきます」
「行ってらっしゃい。気をつけてね」
「はーい」
笑顔でそう言って、玄関を閉める。

「あ、おはよう。鼎君」
「おはよう。葉月」
朝とはいえ、暑い日差しの中、葉月が待ってた。「今日夕方から雨だっけ？」
「うん、そう」
僕は無表情で答えるけど、葉月は笑顔だ。
あれから笑顔になることが増えた。
心に引っ掛かってたものが取れたからか。

あれが起きるまでは、見ることのなかった笑顔。
本人もあれが起きるまでは、ずっと何かが引っ掛かってて笑えなかったんだろう。

「鼎君？どうかした？」

「いや、葉月って本当は笑顔でいることが多いんだね」

「そう？そうでもないよ」

そんなこと言ってるけど、今も笑顔だよ。

僕と葉月が名前で呼び合うようになったのには、訳がある。
たった数日で葉月の周りの状況が一変した。
それに僕も関わった。
僕と葉月は共通の秘密を共有している。することにした。
だから、名前で呼び合うようになった。
もし、この秘密が暴かれれば僕と葉月は二人共、共倒れになる。
どちらか一方の秘密が暴かれても同じ。
暴かれれば、いずれ一方も倒れることになる。
いわば、運命共同体。
今から話そう。
数日間の出来事を。説明するには、七月六日に起こったことから話した方が分かりやすいだろう。
まさか、こんな結末が待ってたなんて、本当に思いもしなかったよ。

もうすぐ、昼休みになる。
やっと昼だ。周りの不協和音を聴いてると、本当に忌々しい。
教師も教師で、放っておくから余計なめられるんじゃないのか？
今は世界史。説明の仕方に工夫も何もないから、つまらない。
正直飽きる。説明されなくても分かるし。
はぁ……、早く終わってくれないかな。

やっとチャイムが鳴って、昼休みになる。
今日も屋上で食べようかな。
きっと藤山　葉月がいるだろうけど。屋上に行こうと、立ち上がろうとした時だった。

「なぁなぁ、杜塚君よ」

「……」

無言で目だけで、話しかけてきた相手を見る。
中森（なかもり）　孝（たかし）。三組の男子だ。
視線を鞄に戻す。
三組の男子が僕になんの用だ。

「無視か？人が話しかけてんのに無視か？」

うるさいなぁ。なんなんだよ。
お前みたいなちゃらちゃらした奴は大嫌いだ。
茶髪に腰パン。耳にはたくさんのピアス。
そのスタイルがかっこいいと思ってるんだろうけど、見ていて格好悪い。

吐き気がする。何がかっこいいんだか。
これ以上僕に話しかけてくるなという意味で、ぎろっと睨む。
睨んだら、一瞬びくっとした表情を見せて去っていった。
なんなんだ、一体。
まぁ気にすることじゃない。
屋上に行こう。

屋上の扉を開ける。
いつも弁当を食べる場所に座る。
今日は藤山　葉月は来てない。
昨日はまるで、僕が来るのを待ってたみたいに座ってたけど。
まぁ、いなくても別にいいけど。
なんで気になるんだろう。

弁当を食べ終わる。
食べ終わってすぐで行儀悪いけど、トイレに行こう。

―藤山　葉月の視点―

昼休みのチャイムが鳴った。
今日も屋上に行こう。教室の中は居心地が悪い。
僕に向けられる視線が痛い。
とても、冷たく感じる。
僕の被害妄想かもしれないけど、居心地が悪いのは変わらない。
それに、さっさと行かないと僕を苛めるグループに捕まっちゃう。

屋上に行こう。もしかしたら、杜塚君に会えるかもしれない。

「藤山君、ちょっと付き合ってくれよ」

「……」

……しまったなぁ、捕まっちゃった。

腕を捕まれる。

今日は何をされるんだろ……。

バシャッと音を立てて、水に濡れた床に倒れる。

立ち上がろうとしたら、背中を蹴られてまた倒れる。

頭に水をかけられる。

気持ち悪い。トイレの床だから。

三人の男子が、笑いながらずぶ濡れの僕を眺める。

ぎりっと唇を噛む。

悔しい。こんな奴らにいいようにされて。

でも、抵抗しても三人相手に僕の弱い力じゃ敵わない。

休み時間が早く終わるのを願うしかない。

「邪魔なんだけど。どいてくれない？」

思わず顔を上げる。

杜塚君がいた。

―藤山　葉月の視点―

杜塚君が無表情なまま、冷たく暗い視線を三人に向ける。
最後に僕を見る。なんだか、ほんの少しだけ冷たさが和らいだのは気のせいかな。
中森君が杜塚君に近づく。

「見て分かんねぇのか？今ちょっと取り込み中なんだよ。お前も一緒にしてやろうか？」

中森君が杜塚君の手首を掴む。
その瞬間、杜塚君の目の色が変わった。
ぞっとするほどの暗い瞳。視線だけで人を殺せそうなほど、暗い。

杜塚君に、殺されたいな……。

中森君が杜塚君を引っ張ろうとする。
でも、杜塚君はびくともしない。
掴んだ手首を一センチさえも引っ張れない。

「離せよ」

聴いたことのない冷たく低い響き。
本能的な恐怖に直接響くかのような。
杜塚君が左の手首を掴む、中森君の手首を掴む。
中森君が捕まれた手を離そうとするけど、全くびくともしない。
それどころか、ぎりぎりと指が食い込んでいく。
まるでそのまま折りそうな勢い。
杜塚君が中森君に足を引っかけた。
掴んでた手を離す。
引っかけられた中森君は、水浸しの床に背中から倒れる。
床に倒れてずぶ濡れになった中森君を、杜塚君が見下ろす。

「今後一切僕達に近づくなよ。次があったら、殺すぞ」

なんか、杜塚君がそんなこと言ったら冗談に聴こえない。

中森君が青い顔をして逃げた。

残った二人も逃げた。

杜塚君が僕に、手を差し出してくれた。

その手を掴む。チャイムが鳴るまでまだ時間があるから、屋上でいつも予備に持ってた制服と、身体を拭くためのタオルを貸す。

「あ、ありがとう。でも、いいの？」

おろおろと聴いてくる。

「いいから貸してるんだけど」

「ありがとう」

身体を拭き始める。それにしても、未だにトイレに連れ込んで水を浴びせるとか馬鹿なことをするんだな。

そんな小さいことで喜ぶのか。

馬鹿馬鹿しい。

集団じゃないと行動出来ない馬鹿共が。

所詮一人じゃ何も出来ない人間が、偉そうに。

あの時僕を見て、青い顔をして逃げたのは、今までまともに抵抗した人間がいなかったからだろうね。

ほんの少し殺意をぶつけてやっただけで、あんな風に逃げるなんて。

「タオルと制服、洗って返すね」

「別に気にしなくていいけど」

チャイムが鳴った。

「とりあえず、戻ろうか」

「うん」教室に戻り、体操服に着替える。

五限目は体育。きっとマラソンだな。

学校の周囲四キロを二周するっていう。

めんどくさいな。まぁ、教師の下手な説明聴いてるよりはマシだけど。

校庭に向かう。

「お、来た来た。珍しいな。俺より後に来るって」

「ちょっとね」

「それにしても走んのやだな～」

「まぁ、めんどくさいよね」

薪沢が驚いたという感じで、僕を見る。

「珍しいな。杜塚がそんなこと言うって」

「僕だってそれくらいは思うよ」

「お前って全部の教科で成績いいから、そんなこと思わないのかと

思った」

何それ。一応僕だって人間なんだから、それくらいは思うよ。
思わなかったら機械だよ。
先生が来た。四キロか。めんどくさい。「はぁ…はぁ、おま、なんで、そんな涼しい顔してんの？」

薪沢と二人で計八キロを完走。
少し暑いけど、それくらいだ。息切れとかもない。

「薪沢、体力ないんじゃない？」

「いや、それは違うと思うぞ？」

まぁ、これよりも重労働なことしてるからね。
あれよりは走る方が楽だけど、別に好きで走ってる訳じゃないから、めんどくさい。

「お前の身体って、謎だよな」

「何？謎って」

「あれだけの量をペロッと食っちまう胃袋だろ。で、あれだけ食べて太らないのも謎だし、別に部活とかで鍛えてる訳でもねぇのにこの体力。謎だろ？密かに家で鍛えてんのか？」

「いや、全くしてない」

きっとあれだろね。大の大人を運んでる訳だからね。
苦にならなくなったし。

それで体力ついたんだろうね。

チャイムが鳴った。五限目終了。
六限目は現国だったっけ。教室に戻り、制服に着替える。
教室の中は流石に暑い。まるで蒸し風呂状態。
扇風機がないんだから終わってるよね。
と、いうより明らかに扇風機を取りつけない、という前提の設計だし。
どう見ても扇風機を取りつけられる場所がない。
天井にでもつけるつもりだったのかな。
熱が逃げずに籠るから、余計に暑く感じる。
結果、集中力が散漫する。
教師の下手な説明に、暑すぎるせいで集中力散漫。
学校設立する時に気づかなかったのかな？
まぁ、僕は説明はまともに聴いてなくても、ノートだけは取るけど。
チャイムが鳴った。
六限目が始まる。

六限目は現国だけど、先生が休みということで、自習になった。
まぁ、自習の方が気楽だ。
薪沢は堂々と寝てるけど。六限目が終わり、帰宅の準備を始める。
薪沢がまだ寝てる。気持ちよさそうに。夢でも見てるのか、表情が緩みきってる。
このままほっといたら起きないな。
仕方ない。首にチョップを叩き込んで、無理矢理起こす。

「ごはぁっ！？」

奇妙な呻き声を上げて起きた。

「ちょ、おま、今本気でやりやがっただろ？マジで三途の川見えるかと思ったわ！」

「薪沢が起きないからだよ。さっさとしないと帰るよ」

「ちょっと待ってくれよ」

五分ほどして、やっと薪沢が帰宅の準備を済ませる。
ドアの方を見ると、藤山　葉月が立ってた。
一緒に帰ろうってとこか。
鞄を持って教室を出る。

「あの、一緒に帰っていい？」

「別に、いいけど」

後ろで薪沢が、置いてくなよ！と叫びながら追いかけてきた。「お？藤山も一緒に帰るか？」

「うん……いいかな？」

藤山　葉月は薪沢にはだいぶ慣れてきたらしい。
おどおどした様子が見られないから。

「おー、いいぞ。なぁ杜塚？」

「うん」

ちらっと三組の教室を見る。
中森　孝とその他二人が、僕と藤山　葉月を見てる。
睨んだら、そそくさと逃げた。
まだ分からないみたいだな。今度来たら、腕の一本くらい折ってやるか。
そうしたら分かるだろう。
まぁ、来る勇気があるかだけど。

「杜塚？どうかしたか？」

「いや、帰ろうか」

「おう」

三人でロッカーに向かう。

ー藤山　葉月の視点ー

三人並んで歩く。杜塚君と薪沢君は、最近のニュースの話題で盛り上がってる。
盛り上がってるというか、薪沢君が楽しそうに話して、杜塚君が適当に相槌を打つって感じだけど。
僕はあまり喋らない。誰かと並んで歩くだけで、幸せだから。

「なぁ藤山、轢き逃げで両親が死んで子供だけが生き残ったって、お前のことか？」

薪沢君が、いきなりそんなことを聴いてきた。
なんで知ってるの？杜塚君以外、話したことないのに。

「うん……そうだけど、なんで知ってるの？」

「ニュースで見たんだよ。後一週間で時効だって」

あぁ……時効か。時効が成立したら、犯人は両親を殺した罪を背負うことなく、社会でのうのうと生きてるなんて。
許せない。両親を奪ったくせに。僕の人生を無茶苦茶にしたくせに。
時効が成立するのを、首を長くして待ってるのを想像すると、怒りと憎しみで涙が出てきそうになる。

「薪沢、無神経すぎ」

「ごめん……」

僕、泣きそうな表情しちゃったのかな。
ちょっと恥ずかしい。

「まぁでも、犯人って以外と身近にいるかもだよね」

杜塚君がいきなり、そんなことを言った。
どういう意味だろう。　犯罪者なんて身近にいるものだよ？
例えば僕とか。この身体を、どれほどの血で染めてきたか。
きっと、殺した数だけの怨念が憑いてそうだよね。
まぁ、そういうの信じてないけど。
そういえば殺人の時効って何年だったっけ？
忘れたな。僕には時効なんて気にするだけ無駄だからいいけど。

最初に殺人を犯したのが二年前として、二年で時効が切れるはずがないしな。
それに殺戮を繰り返す限り、時効なんて関係ない。

「そういえば明日って創立記念日で休みだよな？」

薪沢がいきなり聴いてきた。
確かに明日は創立記念日だ。

「いんや、ちょっと思い出しただけ。じゃあな！」

「じゃあね」

薪沢に手を振る。帰り道が違うから、ここで別れる。

「あの、杜塚君」

「何？」

「携帯の番号、交換しない……？」

僕の反応を伺いながら、話してくる。
それより、藤山　葉月が携帯を持ってたのがちょっと意外。携帯持ってないと思い込んでたから。

「いいよ、別に」

赤外線受信でお互いのアドレスと番号を交換する。

「ありがとう」

「うん」

嬉しそうな顔をしてる。アドレス交換という些細なことでも、藤山葉月にとっては嬉しいことなのか。

「メール、してもいい？」

「そのために交換したんだけど」

「ありがとう。あ、じゃあね」

「うん。また」

藤山　葉月と別れる。さっさと帰ろう。「ただいま」

靴を脱ぐ。その間に母さんが来た。

「お帰りなさい」

「……？」

なんだろう？ちょっと元気がないように見える。

「どうかしたの？元気ないように見えるけど」

「そう見える？情けないわねぇ。最近ね、お父さん帰って来ないし、連絡もなかなかつかないの。やっぱり忙しいのかしら」

あぁ、そういうこと。確かに忙しいのもあるかもしれないけど……。

妻子持ちでも浮気をするような男だ。
母さんに飽きて、また他の女に手を出してなきゃいいけど。
考えただけで吐き気がする。
僕がそんな男の息子だってことも、虫酸が走る。

「とりあえずご飯にするわね。出来たら呼ぶから」

「うん」「ただいま」

部屋の扉を開ける。開けた途端、まだらが足にじゃれついてきた。
しゃがんで頭を撫でる。気持ちよさそうに目を閉じる。
やっぱり猫はいい。自由気ままで。その気紛れなところが好きだ。
まだらほど、僕になついてきた猫はいなかったな。
そろそろお腹すいてるかな。

「ちょっと待っててね」

下に下りる。キッチンに入る。

「鼎？どうしたの？」

「なんでもない。まだらの餌を取りに来ただけ」

「そう。それにしてもあの猫、おとなしいわね。不思議なくらい」

「うん。とても賢いよ」

冷蔵庫を開ける。猫用の缶詰めと水を取り出す。

「僕、部屋に戻るね」

返事を待たずにキッチンを出る。
部屋に戻ると、まだらが目を輝かせてじゃれついてきた。まだらが餌を喜んで食べるのを眺めながら、ニュースを見る。
今日は火災が多いな。僕の住んでる地域の近くでも、火災があったらしい。
一家全員犠牲になったらしい。
まぁ、どうでもいいけど。

「にゃあぁ」

まだらが膝に乗ってきた。喉を撫でてやる。
ニュースが変わった。次は殺人事件。一家全員、皆殺し。ただ、一家全員を適当にめった刺しにしたみたいだ。
犯人はもう捕まってる。
殺人の動機は怨恨。恨み……か。
ただめった刺しにするだけなんてやり方、生温い。
本当に恨んでるなら、本人の目の前で子供、夫か妻を惨殺して、絶望を植えつけた上で本人を殺せばいいんだ。
苦しませ、絶望させた上でいたぶる。
少なくとも僕はそうする。

「鼎ー、ご飯よー」

下から母さんが呼んでる。

「ご飯だって。待っててね」

「に〜あ」

―藤山　葉月の視点―

帰ってる途中だった。

「おい、藤山。よくもやってくれたよな」

「……」

中森君と連れの二人が来た。

……なんなんだよ。しつこい。

きっと杜塚君がいないから、来たんだ。

杜塚君が言ってた。一人になったらきっと来るだろうから、気をつけろって。

もし来ても、抵抗しろって。

抵抗しないから、いつまでもなめられて苛められるんだって。

言われて初めて気づいた。

うん。そうだよね。諦めてばかりいるから、駄目なんだよね。

杜塚君、頑張ってみるよ。

―藤山　葉月の視点―

とは思ってもやっぱり怖い。杜塚君みたいに僕は強くない。

でも、こんな奴らにいいように扱われるのも、もう嫌だ。

杜塚君は助けてくれた。僕のために、厳しくしてくれた。

ぎゅっと鞄を握る。

後は僕の問題なんだ。僕が今までのまま、流されるままだったら駄目なんだ。

ここで何もしなかったら、杜塚君の言葉を台無しにしちゃう。

「おい。こっち来いよ」

腕を掴まれる。その手を振り払う。

―藤山　葉月の視点―

中森君の手を振り払う。暑いのとは関係なく、汗が流れる。
やっちゃった……。でも、これくらいはしないと駄目なんだ。

「おい？やるのか？」

また腕を掴まれる。振り払おうとしたけど、今度はがっちり掴まれて、振り払えない。
どうしよう。どうしたらいいんだろう。

「こっち来いよ」

ぐいっと引っ張られる。二人に背中を押される。
どうしよう。このまま連れて行かれたら、確実に殴られたり蹴られたりしちゃう。
どうしよう。どうしよう。

「う……うわあぁぁぁあぁっ！」

絶叫しながらダメ元で、中森君の顔をグーで殴る。
そしたら顔のど真ん中に、拳がクリーンヒット。
中森君が鼻血を出して倒れちゃった。
他の二人が唖然としてる。

「うわあぁぁぁあぁぁ！」

二人に渾身の体当たりをする。
不意討ちだったみたいで、二人共尻餅をつく。
その間に逃げる！逃げる時に手を踏んづけちゃったみたいだけど、気にしない。

ー藤山　葉月の視点ー

「はぁ……はぁ……」

一旦立ち止まって呼吸を整える。
後ろを見る。追いかけて来ない……。
もう大丈夫かな……。
全速力でこんなに走ったの久しぶり。
心臓がばくばくいって、今にも破裂しそう。
それにしても、ダメ元で殴ってまさか当たるなんて。しかも顔面のど真ん中に。
ちょっとすっきりしたかも。
はぁ……でも、これから家に帰らなきゃな。
帰るのやだな……。

「……」

無言でドアを開ける。リビングの方から、酒に酔った下品な笑い声が聴こえてくる。

おじさんが友達を連れてきてるのか。
おじさんの友達も嫌いだ。
類は友を呼ぶって言うけど、あれは本当みたい。
似たような人ばかりだから。
帰ったのがバレないように部屋に行く。
はぁ……家にいたくない。
どうしようかな。

―藤山　葉月の視点―

「はぁ……」

溜息しか出てこない。学校にも家にも、安心出来る場所なんてない。
居場所なんてない。唯一安心出来るとしたら、杜塚君の傍にいる時。
なんだか、すごく安心出来る。
そういえば杜塚君って、薪沢君以外の人と一緒にいるの見たことないな。
話してるのも見たことない。
大きな笑い声が聴こえてきた。
本当……気分悪い。
ここに来てからいい思い出なんて、ひとつもない。
おじさんもおばさんも、僕を厄介者としか見てないから当たり前なんだけど。
とりあえず、コンビニで買ってきた弁当を食べよう。
おばさんは最近、ご飯さえ作ってくれなくなった。
自分で作ろうと思えば作れるけど、台所に行けばおじさんの顔を見なくちゃいけなくなる。
顔も、見たくない。
ご飯食べてお風呂入って、さっさと寝よう。

ご飯食べた後、風呂に入ってきた。
暑いからうちわで扇ぐ。
おじさん達の声が、より一層大きくなってきてる。
聴きたくないから、もう寝よう。「に～」

顔にぺしぺしと何かが当たる。
目を開けると、目の前にまだらがいた。
今何時だ？携帯を開いて時間を確認すると、一時二十分。
いつの間に寝たんだろう。なんか夢見てたな。
確か、ただひたすら何か食べてたな。もう少し食べたかったな。
いきなりまだらが鼻を舐めてきた。

「うわっ！」

ざらざらとした舌が、かなりくすぐったい。
思わず飛び起きる。くすぐったいの苦手なんだ。
まだらを顔の高さまで両手で支える。

「どうした？」

膝に乗せて背中を撫でる。そしたら膝から飛び下りて、ドアを引っ掻き始めた。
ああ、外に出たいのか。まぁ確かに、外に出たくもなるか。
ここ数日、外に出てないし。
夜だし、気づかれないように外に出たら大丈夫だろう。
まだらを抱き上げる。
足音をなるべく消して、玄関まで行く。

玄関を開けて鍵をかけて、まだらを地面に下ろす。
喜んではしゃぎ始めた。僕の後ろを、まだらがついてくる。
まだらに合わせて、ゆっくり歩く。
本当僕になついてるな。ひたすら僕についてくる。
今更だけど、やっぱりこんなになつくなんて、猫にしては珍しいな。
ふと立ち止まって空を見上げる。まだらも止まる。
雲ひとつない漆黒の空に、三日月が輝いている。素直に綺麗だ。
適当に歩いてるけど、どうしようか。このまま帰るか。
まだらを見ると、首を傾げて月を見上げてる。
自由に外に出してあげられないから、もう少し歩くか。
それか、公園で遊ばせるか。
しゃがんでまだらを抱き抱える。
腕の中で僕を見上げてくる。
頭を撫でる。

公園に着く。そしたら、声が聴こえてきた。
覗いてみると、中森　孝と連れの二人。
物影に隠れて、話を聴く。

「くそ、あいつみてろよ」

「にしてもよ、あいつ今まで何もしてこなかったっつーのに、いきなりどうしたんだ？」

「どうせ杜塚に何か吹き込まれたんだろ」

へぇ……藤山　葉月、抵抗してみせたんだ。
ダメ元で言ってみたんだけどな。意外とやれるんじゃないか。

消極的すぎるんだよ。君は。それにしても、こんな時間に公園で苛めてる相手の悪態なんて、よっぽど暇なんだね。
羨ましいよ、その能天気さが。
あいつらがいるんじゃ仕方ないな。帰るか。

「帰ろうか」

僕がそう言うとにぁ、と鳴いた。
歩き出そうとしたら、後ろから声をかけられた。
勿論、中森　孝に。

「おい、お前」

立ち止まりはするけど、振り返らない。

「お前ホント余計なことをしてくれたよな」

だから何？トイレなんかであんなことをするお前達が悪いんじゃないか。
責任転換するなよ。
お前達には分からないんだろうな。お前達は楽しんでるんだろうけど、いかに無様で格好悪いか。
それを見て見ぬフリをする、教師も教師だけど。
こんな奴らまともに相手出来ないんなら、教師になんかなるなよ。
勉強を教えるだけが脳じゃないだろうに。
本当お前達みたいな低脳を相手にすると、イライラする。

「おい、また無視か？」

ああ、本当うるさい。

振り返って中森　孝を睨む。無言で、ほんの少しの殺意を込めて睨む。
本当、これでどっか行けよな。
これで向かってくる奴は、本当に馬鹿だってことだ。
見逃してやろうとしてるのに。
お前達はどうするんだろうな？

「あん時は油断しただけだ。勘違いするなよ」

なんだ。馬鹿だったか。少しは賢いかと思ったけどな。
仕方ない。お前達が弱いってことを教えてやるか。
所詮集団でないと行動出来ない人間なんか、たかが知れてる。
一人では何も出来ない弱い人間なんだから。
まだらを地面に下ろす。

「ちょっとの間離れてるんだよ」

まだらの方がよっぽど賢いな。言われたことちゃんと分かってるし。
さてと、一瞬で終わらせるか。
振り向くと、中森　孝が近づいてきてる。
もう少しこっちに来い。もう少し。
ああ、これくらいでいいか。
間合い十分。
走って一気に間合いを詰めると、中森　孝が驚いた顔をして怯んだ。
走る勢いのまま、中森　孝の胸ぐらを掴んで背負い投げ。
地面に叩きつけられて、きょとんとしたアホ面で見上げてくる。
綺麗に決まった。
ついでに股関を思いっきり踏んづける。
男ならここが一番こたえるだろう？

「このこと、別に学校に言ってもいいよ?その代わりお前達のやってきたこと、明るみになるけど」

それでもいいなら言ってみろ。
まぁ、お前達には無理だろうな。股間を押さえてうずくまる中森孝を見下ろす。
ふん、いい様。
本当なら腕の一本くらい折ってやりたかったけど、それをやったら流石にマズイからね。
僕の方が悪いってことになる。
まぁ、こいつらが学校に言ったとしても、教師は相手にしないだろうな。
学校にとって都合の悪い生徒は切り捨てるっていうのが、教師のやることなんだから。
まぁそれは、こいつらが一番よく分かってることだろう。

「バイバイ」

それだけ言って、まだらを抱き上げて角を曲がる。
帰ろう。

家に着いた。
喉が渇いたな。水を飲もう。
リビングのドアを開ける。そしたら、母さんがテーブルで腕を枕代わりにして寝てる。
父さんの帰りを待ってて、そのまま眠ったのか。
ソファにあったタオルケットをかける。
悪い予想が現実にならなければいいけど。

冷蔵庫からペットボトルを出して、水を飲む。
ペットボトルを戻して、そのまま部屋に戻る。
ベッドに潜り込むと、まだらも潜り込んできた。強い太陽の光で目を覚ます。
カーテン閉めるの忘れてたな。
眩しくて布団を頭まで被る。

「んー……」

あれ？太陽がさっきより高いな。
時計を見てみる。午後十二時三分。
うわ……滅茶苦茶寝過ごした。
まぁいいか。今日休みだし。
起き上がって布団を捲ると、まだらが気持ちよさそうにお腹丸出しで寝てる。そっとしとこう。
タンスから服を出して着替える。

欠伸をしながら洗面所に向かうと、歯を磨く那奈瀬がいた。

「おはよう」

「おはよう。珍しいな、お前がこんな時間に起きてくるなんて。二度寝か？」

「まぁ、そんなとこ」

那奈瀬が歯を濯ぐのを待ってから、顔を洗う。
今日はどうやって過ごそうかな。「おはよう、母さん」
リビングに入ると、母さんが食器を片付けてる最中だった。
「おはよう。那奈瀬先にご飯食べちゃったわよ」
「うん。分かってる」
椅子に座って、テレビを見ながら黙々と食べる。
今日は平日だから、この時間テレビから流れてるのは勿論ニュース。
轢き逃げがどうとか言ってる。
ん……？轢き逃げ？
見ると、名字は違うけど確かに藤山　葉月の両親が轢き逃げに合って、もうすぐ時効を迎えるみたいだ。
本当に時効迎えるのか。
まぁ、僕には関係ないけど。
「ごちそうさま」
―藤山　葉月の視点―
夢と現実の間で、意識が微睡んでいるのを自覚する。
自覚したと同時に、一気に目が覚める。
「……」
今、何時だろう。携帯を開いて時間を確かめる。
午前十時三十八分。

え?嘘、十時?完璧学校遅刻じゃん!
布団からばっと飛び起きて、気づく。
あ、そうだ。今日創立記念日で休みなんだ。
休み……かぁ。何して過ごしたらいいんだろう。
一日中家にいるなんて嫌だ。
かといって、行くところもない。
でも、家にはいたくない。

いきなり、どすどすと足音が聴こえた。
おじさんだ。
布団を被って寝たふりをする。
乱暴に扉を開く音がした。

ー藤山　葉月の視点ー

寝たふりをしたって、どうせ蹴られて起こされるから無駄だけど、
素直に起きるつもりなんてない。
僕のささやかな抵抗。
おじさんは抵抗とは思ってないだろうけど。

「おい、葉月!いつまで寝とんのや!」

被ってた布団を無理矢理捲られて、ついでのように蹴られる。
背中をおもいっきり蹴られたらから苦しい。
しばらくの間咳が止まらない。

「いつまで寝てやがる!さっさと起きて買いもん行ってこい!」

また蹴られる。なんで、こんな暴力受けた上でお前の命令きかなきゃならない？
誰が行くか。

―藤山　葉月の視点―

散々僕を蹴りつけた後、満足そうに鼻歌を歌いながら出ていく。
所詮、僕を鬱憤晴らしにしか考えてないのがよく分かる。
ホント、引き取られた先がなんであんな人達なんだろ。
他に引き取ってくれる人がいなかったからかな。
卒業したら、こんな家絶対に出てやる。

布団を片付けてたら、またドアが開いた。
今度はおばさん。汚らわしいものを見るような目で、僕を見る。
何かを投げてきた。よく見ると財布。

「それで買い物行ってきぃや。行かんかったらお前の晩飯ないからな」

僕のご飯がないって、いつものことじゃないか。
何を今更。買ってきたって作る気なんて更々ないくせに。
なんだか分からないけど、何かが込み上げてきて、財布をドアに投げつけた。

―藤山　葉月の視点―

投げつけた財布を見つめる。どれくらい入ってるんだろ。
見てみると五千円入ってる。
買い物には行きたくない。けど、おとなしくこの五千円を返すのも嫌だ。
何か他のことに使ってやろうかな……。
そうしよう。そうすれば家にいなくても済む。
顔を洗って服を着替えて、軽めに何か食べて出掛けよう。

顔を洗おうと思って、居間の横を通った時だった。

「しっかし警察つっても大したもんやないなぁ。葉月の親を轢いたのはわしやゆうのに、時効迎えよるで」

「ちょっとあんた、大きい声出しな。葉月はともかく、近所に聴こえたらどうするんよ」

「はん。それがなんや。葉月に聴こえても構わんがな。あんな根性なしの糞餓鬼に何が出来るゆうんや？」

「それはそうかもしれんけど」

何を、言ってるの……？
おじさんが、両親と僕を轢き逃げした犯人……？
震える手で、ドアを開ける。

「今の話……どういうこと……？」

「なんや、聴いとったんかいな。もういっぺん言ってほしいんか？

なんぼでもゆうたるわ。わしが、お前の両親轢いてやったんがな。保険金とか入ってええ思いさせてもろたわ」

目の前が、真っ暗になった気がした。

―藤山　葉月の視点―

頭がくらくらする。呼吸が荒くなってくる。
おじさんが僕達を轢いた犯人？
おじさんが両親を殺した犯人？
こんな……こんな男に両親は殺されたの？

こんな男に！

こんな男のために、両親は死んだっていうのか！
悔しい。憎んだ犯人がすぐそこにいたのに、ずっと気づかずにいたなんて。
握った手が震える。今まで感じたことのない怒りと憎しみで。

「――――――！」

意味のない叫び声を上げながら、おじさんにぶつかっていく。

「なにするんじゃ、この糞餓鬼！」

必死で抵抗したのに、突き飛ばされて蹴られる。

「ふん。お前みたいな弱っちい餓鬼が勝てる訳ないやろ」

「そこ、片付けときや」

弱い……。

涙が出てくる。なんで、僕はこんなに弱いんだろう。

両親を殺した犯人なのに。少しの報復も出来ないで。

「う〝……う〝ぅぅうぅ……」

なんで、なんで。

両親が死んだのも、僕があんな目に合うのも、全部あの男のせいなのに！

視界の隅に、果物ナイフが写る。

さっき、林檎を剥いていた果物ナイフ。

それを、掴む。

「あぁぁぁあぁぁぁあぁっ！」

ありったけの力を込めて、おじさんの背中に、果物ナイフを突き刺した。

ー藤山　葉月の視点ー

ぞぶっと果物ナイフが背中に突き刺さる。

「がっ……！？葉月ぃ、お前何してくれよったんや！？」

「――――っ！」

果物ナイフを引き抜いて、また突き刺す。

殺さなきゃ、殺さなきゃ……！
今手を止めたら、僕が殺される。
両親を殺して、今までのうのうと生きてきたんだ。
復讐して何が悪い！
おじさんの身体と一緒に、床に倒れる。
起き上がってくる前に、身体にナイフを刺す。
次第に動かなくなっていくけど、構わずに刺し続ける。

「葉月、あんた何して……け、警察……！」

おばさんが僕に、恐怖の混ざった視線を向けてきた。
おばさんも知ってて隠してたんだから、同罪だ。
それに、警察なんか呼ばせるもんか。
警察を呼ぼうとするおばさんに、ナイフを突き刺した。

「はぁ……はっ、はぁ……お、おばさん……？」

震える手で、おばさんに触る。
勿論、動かない。喉にナイフが突き刺さって、死んでる。
おじさんも、目を見開いて死んでる。
どうしよう。大変なことしちゃった。

どうしよう、どうしよう……！

―藤山　葉月の視点―

真っ暗な夜道をとぼとぼと歩く。
どうしよう……。どうしたらいいんだろう……。
おじさんとおばさんの死体は、家にそのままになってる。
どうしよう。このままだったら、僕が殺ったって分かっちゃう。
嫌だ、あんな人達のために警察に捕まるなんて。
でも、このままじゃ絶対に捕まっちゃう。
考えなきゃ、どうしたらいいか考えなきゃ……！

そういえばここ、どこだろう……？
人気が全くない。建物も少ないし。
右には小さな山。

「――――――！」

遠くから、微かに悲鳴みたいな声が聴こえた。
気のせいかなぁ。

「――――！」

また、聴こえた。この山の中からだよね。
行ってみよう。勘違いなら、それで済むし。

―藤山　葉月の視点―

少し登ると、廃墟にしか見えない建物が見えてきた。
ここから、さっき聴こえた悲鳴みたいな声、したのかな。
動物に襲われたとかじゃないよね。そもそも、ここ人を襲うような

野生動物いないし。
勘違いじゃなかったらやっぱり、誰かに襲われてるってことだよね……。
建物の前に立つ。でも、僕が行ってなんになるんだろう……。
そもそも、自分のことで精一杯なのに、何してるんだろう。
ドアノブに伸ばしかけた手を引っ込めて、俯く。
その時だった。

「ぎあぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

思わずびくっと身体をすくませた。
聴いたことのない、人間のものとは思えない凄まじい絶叫。
尋常じゃない。
怖いけど、震える手でドアを開ける。
中を覗くと、奥の方だけ薄く灯りがついてる。
足音をさせないように、慎重に歩く。
音をさせないように、少しだけドアを開けて、覗く。

「杜塚君……？」

目の前の光景が、信じられなかった。
杜塚君が女の人の身体に馬乗りになって、血塗れになって笑いながら女の人を刺してる。
女の人は、もう動いてない。それでも、杜塚君は楽しそうに笑いながら、女の人を刺し続ける。

「ふ……ふふ、あはははははははは！」

本当に楽しそうに、笑い声を上げる。
普段あんな無表情なのに、人が死んだのが面白くて仕方ないように、

笑う。
無意識に後退りをする。それがいけなかった。
つまずくものなんか何もないのに、足がもつれて転ぶ。

「誰だ！？」

杜塚君の、狂気に満ちた声。
どうしよう。見つかっちゃう。
でも、いっそ杜塚君に見つかって、殺される方が楽かもしれない……。

ドアが、開く。

「君が、なんで……！？」

杜塚君が、すごく驚いた顔をした。「あ〝あ〝ぁぁあぁぁぁあぁ！」

獲物が心地のいい悲鳴を上げる。
今日の獲物は女。かなり露出した服装をしてる。
胸の谷間を強調した服に、パンツが見えそうなほど短いミニスカート。
何がよくてこんなに露出してるのか、理解出来ない。
まぁ、どうでもいいけど。
腹に刺したナイフを抜いて、その中に手を入れる。
あぁ……ぬるっとした血の感触が気持ちいい。
小腸に触れる。引き摺り出すか、どうしようか。
小腸を掴み、ぎゅっと握る。このまま握り潰してやるか。
一気に力を入れて、握り潰す。
ぶぢゅっと、肉が潰れた音と感触が伝わってきた。

「ぎあぁぁぁあぁぁ！」

本当、気持ちいいよ。
もっと、もっとお前の苦痛を僕に寄越せ。
ナイフを握り直して、腹に刺す。
抜いて、また刺す。それを繰り返す。
最初こそ悲鳴を上げて、苦痛に顔を歪ませてたけど、次第に動かなくなっていって、目の光が消えていく。

「ふ……ふふ、あはははははははは！」

笑いを堪えきれなくなって、思い切り笑う。
その時だった。

ドスンッと、音がした。

「誰だ！？」

ドアを見る。少し開いてる。
誰か見たのか。僕が獲物を殺してるところを。
見たんなら仕方ない。生かしては帰さない。
ドアを開く。

「君が、なんで……！？」

そこにいたのは、藤山　葉月だった。
僕を、震えながら見上げてくる。今にも泣きそうな表情をしてる。
よりによって、知り合いに見られるなんて。しばらくの間、無言で二人共に動かずにいる。
何も喋らずに、じっと見つめ合う。

今にも泣きそうなのは恐怖からなのか、それとも別の理由があるのか、見分けがつかない。

「今の、見たよね？」

俯いて、ゆっくりと頷く。

厄介なことになったな。知り合いじゃなかったら、躊躇なく殺せるのに。

「嫌だろうけど、中に入って」

ドアを開けて、中に入るように促す。

よろよろと立ち上がって、中に入った。

それにしても、なんで逃げないんだろう。普通なら、逃げようとするのに。

まぁ、逃がさないけど。

慌てすぎて無様にこけたりするから、パニックに陥った人間は捕まえやすい。

とりあえず、藤山　葉月をどうするか。

知り合いだし、選択肢をあげることにするか。

「見られたんだから、ただでは帰さない。警察に通報されたら困るからね。でも、君にふたつの選択肢をあげる。ここで殺されるか、今日のことをずっと胸にしまって生きていくか。君はどうする？僕の邪魔をしないんなら、帰してあげる。その代わり警察に言おうとしたら、君を殺す」

藤山　葉月が女の死体を見つめながら、両手を握る。肩が震えてる。

返事を待つ。

どうするのかな。帰ったとしても、今日のことを胸にしまっていけ

るのか。
途中で罪悪感に押し潰される可能性がある。
藤山　葉月が口を開く。
藤山　葉月の返事は、思いもよらぬものだった。

「ねぇ杜塚君、人を殺しても疑われない方法、教えて」「……はっ？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。
思わずすっとんきょうな声を上げてしまう。

「……ごめん。もう一回言ってくれない？」

俯いて、両手を握り肩を震わしながら、はっきりした口調で言う。

「人を殺しても疑われない方法、教えて」

「……何があったの？」

ベッドに座りながら訊いてみる。
藤山　葉月が隣に座る。
持っていた肩掛け鞄から、血塗れのナイフを出してきた。

「それで、誰か刺したの？」

「お……おじさんと、おばさんを……」

そこまで言って、泣き出した。背中をさする。そしたら、抱きついてきて大声で泣き出した。
仕方ない。泣き止むのを待つ。

しばらくしてやっと落ち着いて、事情を聴いた。

「ふぅん、それで刺したんだ」

「うん……」

「教えるのはいいけど、それは僕を巻き込むってことだよ。つまりは共犯。犯人を隠すんだからね。それに、人殺しの罪を隠して生きていくことになる。君は、それに耐えられるの？耐えられないんなら、自首するんだね。まぁ、覚悟があるんなら、手伝ってあげるよ」

藤山　葉月に手を差し出す。

人殺しの罪を背負う覚悟があるんなら、僕の手を取れるはず。

迷いなく、握ってきた。「そういえば、刺したのいつ？」

死後何時間経ってるかで対策が変わってくる。

「えっと……お昼くらい……」

「少なくとも九時間以上経ってるのか……死後硬直してるから無理か……」

ついさっき刺してきたんなら、死亡推定時刻を誤魔化すこと出来たんだけどな。

死後硬直した後じゃそれは出来ない。

仕方ない。他の方法でいくか。

「仕方ないから、直接君の家に行くよ」

「えっ……？教えてくれるだけでいいよ……？」

「それでもいいけど、実際に現状を見て考えた方がいいからね。少しのミスが、命取りになる」

まぁ、警察は杜撰だからミスしたとしても気づかないかもしれないけど。

―藤山　葉月の視点―

「あの……刺した時間が何か問題あるの？」

気になって訊いてみる。

「死後硬直って分かるよね？」

「うん……？」

死後硬直ってあれだよね。死んだ後、身体が硬くなるんだよね。

「死後硬直は死後二時間程度経ってから始まるんだよ。脳から顎、首、全身と広がっていくんだ。全身が硬直するまで半日くらいかかる。死後硬直が始まるまでに死体の筋肉を動かすことによって、死後硬直を遅らせることによって死亡推定時刻を誤魔化すことが出来るんだよ。法医学では死後硬直がどれだけ進んでるかで、死亡推定時刻を割り出すからね。死後硬直が始まってしまったらそれが出来

ないんだよ。だから、他の方法を考える」

杜塚君、詳しいなぁ。それに、人を殺すことに手慣れてそう……。
全身血塗れでいても平気な顔をしてるし。
人が死んでる部屋で、殺した犯人が隣にいるのに平気でいる僕も、
変なのかもしれないけど。

「悪いけど、君の家に行く前にこれを片付けるよ」

これ？
杜塚君が立ち上がって女の人の死体の腕を掴むと、床に落とした。

「その死体、どうするの？」

片付けるって言ってたけど、埋めたりするのかな。

「食べるんだよ」

ー藤山　葉月の視点ー

「ごめん。今、なんて？」

聴こえてはいるけど、理解出来なくて訊き直す。
今食べるって言ったよね？口に入れて、噛み砕いて、飲み下して、
胃で消化するってことだよね？

「だから、食べるんだよ。食べやすい大きさに解体して、残った骨
は砕いて捨てるんだよ」

聴き間違いじゃなかった……。
食べるって、このまま食べるの？

「君には刺激が強すぎると思うから、外にいた方がいいと思うけどね」

「うん……そうする……」

人間の死体を食べるところなんて、絶対見れない。
吐いて気絶するのがオチ。
部屋から出て、ドアを閉めて床に座る。
ドアの向こうから、ガツンっと音が聴こえてきた。最後の一口を口に入れて、噛み砕く。
人間は硬い部分の方が多いから、顎が強くなったな。
口元から顎にかけて垂れた血を拭う。
ふぅ……なんか食べ足りないな。
帰ったらなんか食べよう。
さて、骨を砕くか。
斧を握る。

骨の処理を終わって、ドアを開く。

「終わったよ」

解体する音や人肉を食べる音、骨を砕く音に怯えてた様子はない。
案外、大丈夫だったのかも。

「杜塚君……血塗れのままだけど……いいの？」

「今からシャワー浴びるんだよ。もう少し待ってて」

こくこくと頷いた。

―藤山　葉月の視点―

ベッドに座って杜塚君が来るのを待つ。

それにしても、こんな短い時間で人間を解体して食べて、床を綺麗にするなんて出来るんだなぁ。

このベッド随分茶色い沁みが目立つけど、血の跡なのかな……。

それだけの人がここで殺されたってことだよね。

行方不明になった人のニュースって、一部は杜塚君が殺したとか……。

たまに杜塚君が見せる冷たい瞳は、殺人犯の瞳だったのかな。

そんなことを考えてるうちに、杜塚君が入ってきた。

ジャージ姿だけど、寝間着かな？

手に持っていた服を干す。

「終わったよ。行こうか」

「うん……」二人で無言で歩く。それにしても、こんな形で藤山葉月の家に行くことになるとはね。

元々、行く予定なんてなかったけど。

僕の家とは反対方向に曲がる。

この時間だから、人通りは少ない。

目撃される心配はないな。

藤山　葉月が立ち止まる。

「ここだよ」

「開けて」

鍵を取り出して、ドアを開ける。

中に入って居間を覗くと、男と女が二人、刺殺死体となって転がっていた。

男はめった刺し。女は背後から喉を一刺し。

めった刺しか……。どうするかな。

「杜塚君……？」

藤山　葉月がおろおろと訊いてくる。

「ねぇ、君ならどういう風に工作する？」

「えっと……強盗の仕業に見せかけるとか……」

「強盗か。確かにそれもありだけどね」

それだと、矛盾が出るんだよなぁ。「強盗の仕業に見せかけるとかくらいしか思いつかないけど……駄目なの？」

藤山　葉月が心配そうに聴いてくる。

「駄目ってことはないけど、すぐ見抜かれると思うよ。強盗に見せかけた他殺だって」

「なんで……？」

「君さ、この男背中と胸や腹を何十ヶ所に渡って刺してるでしょ？ただの強盗犯が目撃されただけなら、ここまで刺さないんだよ。ここまで刺すのは、この男に激しい恨みを持ってる証。警察がこれを見逃したら終わってるよ」

「じゃあ、他に方法は……」

「んー、女が男を刺して、女は自殺か逆パターンを考えたけど、それも無理そうだからね」

男が女を刺して自殺とかも考えたけど、男がめった刺しなのがなぁ。しかも女は背後から首を一刺し。

自殺に見せかけるのは諦めるしかないな。「ねぇ、この男と女恨んでる人間っていないの？」

「分からないけど、多分いると思う」

「そう。ねぇ、強盗に見せかけることに賭けてみようか？」

「えっ……？」

意外そうに見つめてくる。いましがた強盗は駄目だって言ったばかりだから、当たり前だけど。

「今の警察は杜撰だからね。すごく運がよければめった刺しなのは無視するかもね。それか、強盗に見せかけた殺人だって分かっても、検討違いの推理をする可能性だってあるしね」

鞄から革手袋を出して、嵌める。

さて、工作を始めよう。まぁ工作といっても、部屋の中をそれらし

く見せるだけだけど。

「今から強盗に見せかけるために最低限部屋を散らかすから、君も手伝って」

「あ、うん。どこを散らかしたらいい？」

「この二人が金を隠してそうな場所と、その周りをちょこっと散らかしたらいいよ」

「分かった」

金を隠してそうな場所はとりあえず探してみた。
これくらいでいいかな。タンスの奥とかＤＶＤのパッケージの中から五万見つけたし。

「あの、終わったけど、これでいい？」

藤山　葉月が散らかした場所を見る。
散らかし方は似てるし、これでいいかな。

「あ、君引っ掻かれたりしてないよね？」

「してないけど、なんで？」

「引っ掻かれたりして皮膚の欠片が爪に挟まってたら、君が犯人だって断定されるから」

「あ、そっか……」

男の手を持ち上げて、爪の間を覗く。
何かが挟まってる様子はないな。さて、後することは……ないかな。
指紋は拭き取る必要ないだろうし。
僕の指紋は残してないし、そもそも強盗なんて入ってない訳だし。

「凶器と血の着いた服、持ってきて」

「あ、うん」

玄関に置いていた鞄を持ってきて、中から果物ナイフと返り血の着いた服を出した。

「これは僕が処分しとくよ」

「え……いいの？」

「うん。それと、僕が帰った後、警察呼んで」

「うん……」

警察と聴いて、自信なさげに俯く。

「警察に何言われても堂々としてるんだよ。目を泳がせたり、おろおろしたりしたら、何か隠してるって見抜かれるからね」

「うん……頑張る」

「頑張るじゃ駄目だよ。絶対にだよ」

「分かった……」

そんな顔しなくても、君ならうまくやれるよ。
気づいてないかな。
僕に隠す方法を教えてって言った時の君、僕と同じ目をしてたんだよ。
僕と同じモノを隠した目をね。「後、アリバイだけど昼は僕と一緒にいたって言うんだよ」

無言で頷く。

「なんで今になって通報したのかが問い詰められるかな……」

不安げに床を見る。そりゃあ、警察は疑ってなんぼだからね。

「そりゃあ疑いにかかるだろうね。家にいるのが嫌だったから、今まで帰らずにいたって言えばいい。で、僕に会ったって言えばいいよ。一旦別れたけど、また会ったって」

こくこくと頷く。緊張してるな。
でも、いざとなったらきっと化けるだろうね。
楽しみだよ。

「最後に言っとくけど、僕達は共犯だ。お互いが秘密を握りあってる。分かるよね？」

藤山　葉月が怯えたように肩をすくませた。
無表情で睨んじゃったからかな。

「うん……」

「君の秘密が暴かれても、僕の秘密が暴かれても、僕達は共倒れになる。どちらかの秘密が暴かれたら、僕達は終わりだよ。殺人罪、共謀罪、いろんな罪を期せられるだろうね」

一旦言葉を区切って表情を伺う。真剣な表情をしてる。

「君は分からないけど、僕は既に沢山の人間を殺しすぎた。少年法が適用されるか知らないけど、責任能力は証明されるだろうから、死刑かもね」

「し、死刑って……」

「可能性はあるよ？君は執行猶予が与えられるかもしれないけど。でも、罪を期せられるのは嫌でしょ？」

それにははっきりと頷く。

「じゃあ秘密を暴れないように、秘密を共有し合おう。既に君も、僕の仲間なんだよ。僕と同じ殺人者。警察なんかに捕まるなんてごめんだよ。二人で、警察を嘲笑ってあげよう」

ああ、僕達は運命共同体なのか。

君じゃ、駄目だな。

「警察だって恨めしいんじゃない？両親を殺した犯人を今まで野放しにしてたんだから」

そう言ったら、目つきが変わった。

「だから、二人で嘲笑ってあげよう。僕達みたいな子供の犯行を見抜けない間抜けな警察を。ねぇ、葉月？」

驚いたように、僕を見た。

―藤山　葉月の視点―

名前を呼ばれて、杜塚君を見る。

今、僕を“葉月”って呼んだの間違いじゃないよね……？

初めて、名前を呼ばれた。今までずっと君だったのに。

杜塚君が氷のように凍てついていて暗くて、でもそれでいて優しい瞳を向けてくる。

その瞳が、僕を掴んで離さない。

僕を闇に堕とそうと、笑ってる。

でも……そっちの方がいいかもしれない……。

きっと僕はどこかおかしかったんだ。

だから、衝動的にでも、人を殺せたんだ。

二人が死んだって、殺したんだって分かった時、恐怖と一緒に喜びが湧き上がってきたんだ。

僕は、人が死んだことを喜んだんだ。

きっと僕は、そっち側の人間なんだ――。

「気づいた？なら、おいで」

杜塚君が、手を伸ばしてくる。

「僕と君は同じなんだよ。僕達は闇の中にいるべきだ」

光なんて、希望なんてただの幻。
現実は、あっさり僕の希望も光も粉々に打ち砕いた。
希望なんて、簡単に裏切られる。
だったら――

杜塚君の、いや、鼎君の手を取った。葉月が僕の手を取った。
最初はこんなことになるなんて、全く想像してなかったのに。
それどころか、死ぬだろうなって思ってたのに。
死ぬとしたら、どんな死に方をするのか観賞してようと思ってたのに。
あの時だって、僕に殺されることを選ぶのかと思ってたんだけど。
それか、自殺とか。
いい意味で裏切られたよ。
まさか、こっち側に自らの意思で足を踏み入れるとはね。
まぁ、人を殺せたって時点でこっち側の人間なんだけどね。
僕はこう考えてる。人を殺せる人間は、それだけのモノを持ってるんだって。世間は狂気って呼ぶけど。
人を殺せない人間はそれを持ってないんだよ。
持ってないから、人を殺せない。
持ってたとしても、爆発させるモノがないから、結局持ってないのと同じ。
葉月は僕のように人を殺せはしないだろうけど、貶めることは得意そうだね。
これからどうなるか、楽しみだよ。

―藤山　葉月の視点―

鼎君が帰るのを見送る。

「あ、言うの忘れてた。あの二人の財布のお金、抜いといてね。強盗なのに財布にお金があったら不自然だから」

「あ、うん」

確かに強盗に入って財布のお金盗まないなんて、おかしいよね。ちゃんと忘れないように抜いとかなきゃ。

「じゃあ僕は帰るけど、後は一人でもうまくやれるよね？」

微笑みながら僕を見据える。

「うん……大丈夫」

一人……ここからは一人でやらなくちゃいけないんだ。

「じゃあね。終わったら電話かメールでもして」

「うん。ありがとう」

僕が手を振ったら、鼎君も手を振り返してくれた。

鼎君も帰った。電話を見る。最後の仕上げをやらなくちゃ。

受話器を取って、警察にかける。

すぐ、繋がった。

「警察ですか！？早く、早く来てください……！おじさんとおばさんが、刺されて、倒れてるんです……！」このまま帰ろうかと思ったけど、警察が来たのを見てから帰ろう。

葉月の家から死角となる建物の影に隠れて、パトカーが来るのを待

つ。
サイレンの音が聴こえてきた。
あれ？こっちから聴こえてきた？
僕に近づいてきてるし。
ここで突っ立ってたら怪しいな。
歩いてただの通行人のふりをする。
パトカーが近づいてきた。
僕の横を通り過ぎる。
通り過ぎる瞬間、一人の警官と目が合った。
見たことない警官だな……。最近移動してきた警官か？
まぁ、どうでもいいけど。あの警官、このままこの事件の担当になるのか？
だとしたら、僕のとこに来ることもあるかもしれないな。
志を無くしたお前達が、僕達を捕まえることが出来るかな？
僕達は簡単にお前達に捕まらない。
お前達を嘲笑ってやる。
僕が頭脳を駆使しなければならないほど、追い詰めてみせろ。
僕達を追い詰めてみせろ。
いつでも、受けてたってやる。
僕を楽しませろ。
少しは手加減したんだから、見抜けよ？家に着いた。鍵を開けて中に入る。
誰も起きてないな。
二階の自室に戻る。ドアを開けると、まだらが足にじゃれついてきた。
まだ起きてたのか。僕が帰ってくるのを待ってたのかな。
抱き上げてベッドに座る。
葉月、うまくやってるかな。期待してるんだから、失敗しないでよ。
そういえば、何を言われても堂々としてろって意味、伝わったかなぁ。

堂々としてろといっても、何も本当に堂々と胸を張って答えろってことじゃない。
そんなことしたら、逆に疑われる。
葉月は人見知りだから、初対面の人間にはおろおろとしやすいだろう？
おろおろとしながらも、冷静さを失わずに必要以上に動揺しちゃ駄目だ。
あまりに動揺してしまうと、それも警察にとっては疑うべき事項になる。
自分が二人を殺したことを隠すために、強盗に見せかけたんじゃないかって。
警察なんか気にせずに、いつもの君でいればいいんだよ。
そうすれば、警察なんか簡単に騙せる。
警察は僕達のような子供の犯行や心理を、見抜けないんだから。

―藤山　葉月の視点―

受話器を置いて、電話を切る。
警察が来るまで十分くらい。それまでにお金、どこかに隠さなきゃ。
おじさんの鞄から財布を出して、お金を抜き取る。
十五万も入ってるし。おばさんのも抜かなきゃ。
二人の寝室に入っておばさんの財布もお金を抜く。
おばさんも五万入ってるし。
二十万もあったら何出来るかな。
今はどこに隠すか考えなきゃ。
きっと家中捜査されるよね。
どこに隠そう……。警察って、タンスの裏まで調べるのかな。
タンスの裏に落としといたら、見つからないかな？
僕の部屋の引き出しから封筒を取り出す。

合計二十八万を封筒に入れて、寝室に戻って大きいタンスの裏に、封筒を落とす。
タンスを退かさないと手の届かない場所に落とした。
こんなところまで調べないよね？
おじさんの傍に立つ。
今までいい思いをしてきたんだ。これくらいの復讐、いいよね？

インターホンが鳴った。

来た。

今から、被害者を演じなきゃ。
僕は加害者じゃない、被害者。
急いで走って、玄関を勢いよく開ける。

「おじさんとおばさんが中に……！早く、助けてください！」

身内が刺されて倒れてるんだから、これくらいの動揺はするよね？

―藤山　葉月の視点―

目の前でドラマでよく見るような現場検証が始まる。
事情を話すために居間のテーブルに座って、今までの経緯を話す。
右に座ってる三十代くらいの人が澱沼　瑛士って刑事さんで、左に座ってる人が最近刑事になったばかりの鎌足（かまたり）　浩信（ひろのぶ）って刑事さん。
二十代前半くらいかな。
どうしよう、怖い。うまくやれるかな……。
うまくやらなくちゃ鼎君まで捜査が回っちゃう。

ぎゅっと手を握る。肩が微かに震えてるのが分かる。

「通報が今の時間になった理由はなんでかな？」

澱沼さんがそう聴いてきた。

「昼は友達の杜塚君と遊んでたんです。五時くらいに別れて、家にいたくなかったから、そのままずっと外を出歩いてたんです。そしたら散歩してた杜塚君に会って、そのまま話し込んでたら遅くなっちゃって、家に帰ったらあんなことになってて……」

なんだか涙が出てきた。俯く。

考えようによっては、あの屑共は死んだことで罪を免れたんだよね。死ぬことが罰なのか、罪を背負って生きることが罰なのか、どっちが最大の罰なんだろう。

―藤山　葉月の視点―

「おじさんとおばさんを恨んでる人っているかな？」

澱沼さんがいきなり、そう切り出してきた。

「え……？なんでですか？」

ゆっくりと澱沼さんを見て、きょとんとした表情を向ける。

危なかった。思わずぼっと顔を上げるとこだった。

過激に反応しちゃったら疑われそうだし。

「深い意味はないけど、念のためにね」

「恨んでる人……多分いると思います……。お金を貸して、それを棚にあげてお金を絞り尽くすようなことしてましたから……」

これは本当。僕は部屋にいたけど、さっさと貸した金返さんか！って怒鳴る声、何回も聴いたから。

僕は知らないけど、沢山の人からお金巻き上げたんだと思う。

あんな酷い外道だから。

強盗に見せかけたってことはバレても、この情報があれば容疑者は沢山出てくるから、僕達がやったってバレないかもしれないよね？

―藤山　葉月の視点―

「葉月君、はっきり言っとくけども、これは強盗殺人ではなく強盗に見せかけた殺人だと断定出来る」

どくんっと、心臓が高鳴った。

息が荒くなりそうになるのを、必死で抑える。

「じゃあ……誰かおじさんとおばさんを恨んでる人が、二人を殺して、強盗に見せかけたってことですか……？」

「そういうことになるね。普通強盗なら調べるであろう場所はほとんど手つかずで、手袋を嵌めていたんだろうが、それでも指紋が残る場合がある。触った場所の指紋が拭き取られていなかった。ミスでなく、わざとだとしたら余程逮捕されない自信がある犯人だね」

にっこり笑いながら、そう言ってくる。

笑ってるのに、怖く感じるのは気のせいじゃない。

僕と鼎君を捕まえるとしたら、この人かもしれない。

―藤山　葉月の視点―

現場検証が終わったのか、警察の人が帰り始めた。
おじさんとおばさんの死体は司法解剖されるみたい。
車の中に運ばれてく。
そういえば、おじさんもおばさんも死んで、これから僕はどうなるんだろう。
住むところとか、お金とか。
今までのままではいられないよね、きっと。
それでも、後悔はしてない。

「それじゃあ、またいろいろ訊きにくると思うけど、今日はこれで帰るよ」

「はい……ありがとうございました」

扉が閉められる。鎌足さんって人、じっと僕を見てきてなんだったんだろう。
僕、おかしい行動してたのかな？
そうだとしたら、聴いてくるよね？
大丈夫。ただ見てただけだよ、大丈夫。
おじさんとおばさんが倒れてた場所を見る。
テープの後がうっすら残ってる。
とりあえず、終わった。
でも、本番はこれからだ。目覚ましの音で目を覚ます。
今日は妙に寝起きすっきりしてるな。
昨日の今日だからか。

葉月、大丈夫だったかな。もう一人の警官があの澱沼　瑛士だから、きっと強盗に見せかけたことは見抜いてるだろうね。
他の警官なら分かんないけど。
あの人は真面目だから、僕がわざと手抜きした場所も見抜いてるだろうね。
手袋をしていても、何らかの理由で指紋が残ることがあるらしい。
手袋をしていても、指紋を拭く手間は省かない方がいいってことだね。
全ての強盗が指紋を拭いていくのか知らないけど。
まぁ、あの人なら見抜くな。
それでも、僕と葉月がやったなんて、思わないだろう？
澱沼　瑛士だって、僕をおとなしい子供くらいにしか認識してないんだから。
でも、あの人は侮っちゃいけないかもね。
厄介な人物を敵に回したかもしれないな。
僕がバラバラ死体を発見したあの事件、解決したのは澱沼　瑛士だから。
犯人は父親だった。最初は恋人だと思われていたけど。
殺した理由は、恋人と結婚させてくれないなら出ていくと言った娘の言葉に、激怒したからしい。
人間、そんな下らない理由で我を忘れられるんだね。
僕達を追い詰めるとしたら、滓沼　瑛士かな。
僕を、楽しませてよ？
いつでも、待ってるから。

さて、ご飯を食べて学校に行こう。「じゃあ、行ってきます」
キッチンにいる母さんに向かって言う。

いってらっしゃいと言う声が聴こえたのを確認して、玄関を出る。
出たら、葉月がいた。

「鼎君、おはよう」

「おはよう。とりあえず、学校行こうか」

「うん」

学生が溢れかえる中、昨日のことを話す。

「それで、どうなったの？」

「澱沼さんと鎌足さんって刑事さんが、事件の担当になるみたい。強盗はバレちゃった。でも、容疑者は沢山いるから、簡単には僕達に辿り着かないと思う。二人を恨んでる人、いっぱいいるから」

やっぱり澱沼　瑛士が担当になるのか。
鎌足とかいうのは、初めて聴いたな。
あの、僕と目が合った男か。
僕のところにも来るだろうな。昨日、葉月と本当にいたのかどうか。
まぁ、実際はいなかったけど。
これについてはアリバイ成立出来る。「ねぇ、鼎君」

いきなり葉月が不安そうに僕を見てきた。

「何？」

「今更だけど、昨日僕と鼎君は一緒にいなかった訳じゃない？その時間、鼎君は家にいて家族と一緒にいたりしたら、警察が来たら家族の人が家にいたって言うんじゃ……」

なんだ、そんなことか。

「それなら大丈夫だよ。出掛けてたから。じゃなきゃ、一緒にいたって言えなんて言わない」

家族だって友達と出掛けたと思ってるはず。
まぁ実際はあの廃墟で読書してたんだけどね。
あそこが一番居心地がよくて安心出来るから。
血の匂いがこびりついたあの部屋だけだ。
本当に安心出来るのは。
葉月は僕を裏切ることはないだろうけど、周りは全て敵。
人間なんて信じるものじゃない。信じたって裏切られるんだから。
何がきっかけで敵となるか分からない。
なら、最初から信じない方がいい。
まぁでも、葉月のことは信じてあげてもいいか。
お互いの命を握りあってるようなものだから。
僕を裏切るということは、自身の破滅も意味してる。

「そうなんだ。なんか、すごくうまく行きすぎてるね」

「まぁ、悪運が強いんだろうね。僕達は」

ロッカーを開けて上履きに履き替える。

「じゃあ、また昼に」

「うん」チャイムが鳴り、昼休みになる。
屋上に行こう。束の間だけど、この不協和音から抜け出せる。
鞄から弁当を出して、教室を出る。
葉月が待ってた。僕を見て、嬉しそうに笑う。

「行こうか。屋上」

「うん」

雲ひとつない空を眺めながら、弁当を食べる。

「そういえば、これからどうするの？」

「どうするのって……何が？」

「だから、住む家とかこれからの生活費とかだよ。どんな人間であれ、養ってもらってたのは確かだからね」

僕もなんだかんだ言って、養ってもらってる訳だからな。
そこは感謝するけど。
また、破綻しそうだよね。

「それなんだけど、生活費も家もなんとかなりそうなんだ。おじさんの通帳に一千万近く入ってたから」

「一千万ねぇ、よく貯めたね」

きっと、巻き上げた金なんだろうね。

「後ね、大家さんが家賃は働くようになるまで払わなくていいって言ってくれて」

嬉しそうに少し笑う。優しさっていうものに触れてこなかったから、嬉しいのか。

「ふぅん……その大家さん、優しい人だね。損をするのは自分なのに」

そういう人ほど、この世の中では馬鹿を見る。

一方で葉月の親戚のような、ろくでもない人間ばかりおいしい思いをするんだ。

世の中は、理不尽。

「うん。優しい人だよね」

言って、少し暗い表情をした。

そんな人を騙してることが心苦しい？

それくらい握り潰さないと、この先もっと辛いことが待ってるかもよ？弁当を食べ終わって、空を眺めながらチャイムが鳴るまで話す。

「そういえば、澱沼さんどうだった？」

「真面目そうな人だった。優しそうだけど、いざというときは怖い人だと思う」

「まぁ、あの人はね。厄介な人を敵に回したかもね。でも、あの人とやり合うなら面白いかもね」

「面白いって、僕達が犯人だってバレること前提？」

ちょっと目を丸くして聴いてくる。

「あの人なら徹底的に調べると思うよ？まぁ、あの人はね。上層部は誰を犯人にするのか知らないけど」

僕らが無事であるということは、誰かの人生を犠牲にするということだ。

誰かを生け贄として、法律という“神”に捧げる。

僕らの犯行が暴かれない限り、生け贄は捧げられる。

例え身の潔白が証明されたとしても、逮捕されたという時点で犯罪者としてのレッテルが貼られる。世間は、その人間を犯罪者として見る。

その人間がどんな人間であれ、犯罪者というレッテルが邪魔をする。

人生の中に、常に犯罪者というレッテルが組み込まれる。

人生を狂わされるということだ。

僕らがしてることは、そういうことだ。

誰かの人生を犠牲にして、平穏を得る。

特に僕は自分の快楽のために、常に誰かを生け贄として、命も人生も食い潰して生きている。

でも、人間そういうものだろう？

人間は強欲なんだから。「そういえばもう一人の警官、なんていうの？」

澱沼　瑛士と一緒にいたんだから、あの警官もこの事件を調べるんだろうな。

移動なのか新人なのか知らないけど、鋭い目つきをしてた。

「鎌足さんって人で、一言も喋らなかった。ただ僕をじっと見てき

て……。僕、疑われたかな」

「疑うのが仕事でしょ、警察は。ただ見てただけなのか、観察してたのかは知らないけど。見抜こうとして、そう簡単に見抜けるものじゃないと思うよ。人の嘘は。見抜こうと躍起になるより、一歩下がってじっくり眺める方がいい時がある」

実際、僕はたくさんの人を殺してるのに、まだ無事なんだから。同じ場所であれだけ人が消えてるのに、未だに警察は僕まで辿り着かない。

連続殺人だから、犯人は前科のある人間だと考えてるのかな。子供がこんなことするはずないと？

そんな思い込みは捨てた方がいいよ。思い込みを捨てない限り、いつまで経っても僕に辿り着かない。

チャイムが鳴った。

意味のない授業に戻ろう。

「戻ろうか。また放課後に」

「うん」

そういえば、もう少しで夏休みだな。「なぁ、藤山」

帰り道、薪沢が複雑そうな顔をしながら、葉月に話しかける。

「……？何？」

葉月はきょとんとした表情で、薪沢を見る。

「ニュースで見たんだけどさ、本当なのか？」

葉月の肩が揺れる。

ニュース？へぇ、ニュースでやってたんだ。

朝にニュースを見なかったから知らなかった。

マスコミも情報が早いな。

考えようによっては、マスコミも不幸がなければ成り立たないよね。

不幸がなければ、誰も相手にしないんだから。

他人（ひと）の不幸は蜜の味ってね。

他人の不幸を見るために、ニュースを見るようなものじゃない？

所詮他人事だから、見てもすぐ忘れる。

誰しも心の中で、他人の不幸を嘲笑って喜んでるんだよ。

「うん……ホントだよ」

「そっか……大変だな」

「助けてくれる人がいるから、大丈夫だよ」

嬉しそうに表情を綻ばせながら、言った。助けてくれる人か。誰のことを言ってるんだろ。

昼に言ってた大家とか？

まぁ誰であろうと本人は嬉しそうだから、いいけど。

「それにしても、最近お前ら仲いいよな」

「そう？葉月、どう思う？」

訊いてみたら、困ったように笑った。

「そう見えるんなら、そうなんじゃない？」

一際嬉しそうに笑う。僕と仲がいいと言われたことが、そんなに嬉しいの？

「杜塚が名前で呼んでる……。俺だって名前で呼ばれたことないのに！」

大袈裟に泣き真似をしながら抱きついてきた。

どうしようかな。ウザイ。

「俺だって一度くらい名前で呼ばれてみたいぞ！」

頭を撫で回すな。髪が無茶苦茶に絡まる。

薪沢、僕より随分背が高いからな。

並んだら僕の頭が薪沢の胸辺りにくる。

改めて自分の身長の低さを痛感する。

葉月だって僕より頭ひとつ分高いのに……。

「薪沢、そろそろ離してほしいんだけど」

「じゃあ名前で呼べ」

「やだ」

更に頭を撫で回された。

「呼ばなかったら鼎ちゃんって呼んでやる！」

「絶対やだ」

「じゃあ名前で呼べ！」

どれだけ名前で呼ばれたいのさ。確かに名前で呼んだ記憶ないけど。
基本的に名前は呼ばないから。

「はぁ……波哉斗、離せ」

「なんか感動したぞ！これからは名前で呼び合おうじゃないか！」

「ちょ、薪沢落ちる！」

「へっ？」

この馬鹿！後ろに田んぼがあるの忘れてるとかあり得ないって！
バランスを崩して、二人もろとも田んぼに突っ込んだ。
うわぁ……最悪。土はぬかるんでるし。
葉月が心配そうにおろおろとしてる。

「二人共、大丈夫？」

「これが大丈夫に見える？」

「杜塚……じゃない鼎ちゃん、顔に土がついてるぞ？」

薪沢がそう言って顔に触ってきた。
更に泥がついたけど。

「だから、ちゃんは余計だって。波哉斗こそ鼻の頭に土、ついてるよ」

言われて鼻を拭う。

「お、ホントだ。ぷ、あはははははは！」

いきなり、薪沢が笑いだした。

「人の顔見て笑わないでよ。……あはははははは！」

なんか分からないけど、おかしくて薪沢に釣られて笑う。近くの公園の水道で、顔と制服の上着を洗う。

身体についた泥はいいよ。洗えばすぐ取れるから。

服についたらなかなか取れないのに。

しかもこれ制服なんだよ……、私服だったらまだしもさ……。

明日土曜で休みだから、まだなんとかなるかもしれないけど。

教科書とかが無事だったのが、せめてもの救いだね。

髪にも泥がついてるから、洗い流す。

びしょ濡れの状態で帰る訳だから、帰ったら母さん驚くだろうな。

こんな状態になって帰ったことないから。

こんなこと初めてだよ。

まぁでも、薪沢も悪気があった訳じゃないし、許してやるか。

「全く……」

「悪い悪い。でも楽しいからいいじゃねぇか」

「まぁ、ちょっとは楽しいかも……だけど」

「鼎君、なかなか笑わないもん。きっと楽しいんだよ。ねぇ、波哉斗君？」

そんなこと言ったら薪沢がつけあがるから、やめてほしいんだけどな。

てゆーかさ、いつ君達はそんな意気投合したの？

「葉月だってそう言ってるぞ。認めろ！」

「あー、はいはい。楽しかったよ」

「すっげー投げやりだな。まぁいいや」

他人を信じちゃいけない。裏切られるに決まってるから。そう思っていても、なんでだろうな。

葉月は別として薪沢だけは、心を許してしまう。

友情とかそんなもの、馬鹿馬鹿しい。いつか廃れてしまう、そう思ってるのに。「とりあえず、帰ろうか」

濡れた上着を腕にかける。

絞りきれなかった水気が、滴となって垂れる。

「おー、そうだな」

薪沢って本当、悩みとかなさそうだよね。

こんなことにでも、本当に楽しそうに笑うんだもんな。

いろんな意味で、純粋なんだろうな。薪沢は。

僕にはないもの。

僕が人殺しだと知ったら、薪沢はどんな顔をするんだろう。

まぁ、考えるだけ無駄か。

「鼎ちゃ～ん？どうしたよ？そんな暗い顔して」

「その頭かち割って脳を掻き回したら、少しはよくなるんじゃないかと思うんだけど、どう思う？」

「すみませんでした。だから頭かち割らないで」

そんな真剣に言わなくても。

頭っていうか頭蓋骨は割りにくいから、しないよ。

「杜……、鼎の冗談て、なんか冗談に聴こえないよな」

なんで言い直すんだろ。いいけど。

実際、人を殺してるからじゃない？

「じゃあな！アディオス！」

「うん。バイバイ」

テンション高いなぁ。まぁ、あれでこそ薪沢だけど。

薪沢の姿が見えなくなった。

学生の“僕”は終わり。これから、また別の仮面を被る。「やっぱり波哉斗君って面白い人だね」

「まぁね。つき合ってて飽きないからね。あいつの明るさは底なし沼なんじゃないかな。そのおかげで、こうなったけど」

葉月が僕を見て苦笑いを浮かべる。

タオルを持ってたからある程度の水気は拭き取れたけど、やっぱり

髪や至るところから滴が滴る。
風邪ひかないかな……。
帰ったら風呂入ろう。

「じゃあ、バイバイ」

「バイバイ。風邪ひかないようにね」

なるべく気をつけるけどね。ひいたらその時だし。
葉月の家とは反対側の角を曲がる。

「……」

家の前に二人の人間。やっぱり来たか。
近づいていくと、思った通りの人物。

「澱沼さん、お久しぶりです」

笑顔で話しかけたら、澱沼　瑛士も笑顔で話してきた。

「やぁ久しぶりだね。ところで、なんでびしょ濡れなんだい？」

「薪沢の阿呆がふざけてきて、田んぼに落ちたんです」

「確かにあの子なら分かるな。災難だね」

「もう災難も災難ですよ。それで、なんで澱沼さんが僕の家の前にいるんですか？」

柔らかな笑顔から一変、真剣な表情になった。

「藤山　葉月君を知ってるかな？」

「ええ。友達ですから」

「昨日の昼から藤山君と一緒にいたっていうのは、本当かい？」「ずっと一緒にいましたけど、なんでですか？」

少し首を傾げて言ってみる。

「なら、一旦別れて夜にまた会ったというのは？」

「ええ。一度六時くらいに別れましたよ。夕食を食べて風呂に入った後に、散歩に出たら、葉月にまた会ったんです」

「そうか。それだけ聴けたら十分だよ」

本当に？聴きに来たってことは、少なからず葉月のことを疑ってるんじゃないの？

「でも、なんでそんなこと聴くんですか？」

「鼎君、藤山君のご両親が殺害されたことを知らないのかい？」

「え！？そうなんですか！？」

大袈裟に驚いてみる。

これで無感動とかおかしいからね。

それにしても、鎌足とかいうこの刑事、気に障るな。
僕のことを見極めようとするように見つめてきて。
僕の深い部分を、誰も理解出来はしない。

―鎌足　浩信の視点―

杜塚　鼎という高校生を観察する。
澱沼さんの質問に淀みなく答える。
一見して、不自然な点はない。
しかし、その不自然がないところが、不自然なように感じる。
まるで、最初から答えを用意していたような。
私の考えすぎなら、それでいいのだが。
あの子は、不思議な目をしている。
荒々しく、何者も深層までは踏み込ませない暗い瞳。憎悪、悲哀が見て取れる。
その奥には何が隠されているのか、私にも分からない。
杜塚君が私をちらっと見てきた。
自分をじっと見る私が気に障ったのかもしれない。

「鼎君、ありがとうな。助かったよ。さて鎌足君、帰ろうか」

「あ、はい」

これでいいのか？澱沼さんが二人の話を鵜呑みにしているとは、到底思えないが。
話がうまく出来すぎてる。
しかし、二人が事件に関与しているという証拠はどこにもない。
現時点では、殺害された二人と金銭トラブルがあった人物が最重要参考人となっている。

澱沼さんが歩き出したから、私も歩く。
杜塚君が玄関の手前で、私達を見つめている。
玄関のドアに隠れて見えなくなる瞬間、笑っているのが見えた。
禍々しく、悪魔のように。「ただいま」

靴を脱いでいると、すぐ母さんが来た。
僕を見て目を丸くしてる。

「鼎、そんなに濡れてどうしたの？」

「薪沢の奴がふざけてきて、田んぼに落ちたんだよ。それで公園で泥を洗ってきたんだ」

上着を母さんに渡す。広げて汚れ具合を見る。

「あらまぁ、クリーニングに出すしかないわね。クリーニングに行ってる間にお風呂入ってきなさい。風邪ひくわよ」

「うん。そうする」

鞄を階段に置いて、風呂場に行く。
蛇口を捻ってお湯をはる。
髪とか身体を洗ってる間にはれるだろ。
脱いだ制服は出来るだけ丁寧に畳んで、袋に入れる。
直に置いたら床が汚れるし。
風呂場のドアを閉めてシャワーを浴びる。
少し色のついたお湯が流れていく。
髪を洗いながら鎌足とかいう刑事を思い出す。
気にくわない。あの瞳。
僕の瞳をじっと見てきて、そこに何が潜んでいるのか見極めようと

してきやがって。
そんな簡単に見極められると思うな。
僕は自分の欲求のために、快楽のために人を殺す。
その行動の本当の意味が分からなければ、僕のことなんて理解出来やしない。
僕は、弱いんだからな。風呂から上がって身体を拭く。
あ……しまった。着替え用意するの忘れた。
仕方ない、部屋で着替えよう。
バスタオルを腰に巻く。
脱衣場を出ると、ちょうど母さんが帰ってきたところだった。
那奈瀬も一緒だ。
なんとなく気まずい。上半身裸で腰にバスタオル巻いただけだし。

「鼎って結構、筋肉質な身体してんだな」

じろじろとからかうように見てくる。

「変態。弟の裸見て何ニヤニヤしてるのさ」

女がするみたいに胸を腕で隠してみる。

「そりゃあ俺はホモだからな！」

うわぁ……笑顔で言うことじゃないよ。その単語を聴いたら鳥肌が立つ。

「冗談に決まってるだろ。そんな顔するなよ。てか、そこまでドン引きするなよ」

母さん笑ってるけど、知らないから笑えるんだよ。

ホモにいい思い出なんてない。あってもいらないけど。
本当思い出したら怖気が走るし、鳥肌が半端ない。

「とりあえず着替えてくる」

「ご飯出来たら呼ぶわね」

「うん」部屋の扉を開けると、まだらが待ちかねたようにすり寄ってくる。
抱き抱えようとしてしゃがんだ時、バスタオルがはだけた。
そしてタイミング悪くドアが開く音が、後ろから聴こえる。

「鼎、誰も見てないからって裸で過ごすのはやめとけ。いざって時に困るぞ。てか、部屋では裸族だったんだな」

「違うから！そんな変態な趣味持ってないし！」

「違うのか？残念」

「……弟に何を期待してるのさ？」

「妹的キャラ？可愛さ？」

「そもそも弟に、てか男にそんなもの求めるもんじゃないよ」

「ちっちゃかった時の鼎、めっちゃ可愛かったのに！お兄ちゃ～んって抱きついてきたり可愛かったのに！」

「少なくとも今はしないよ」

なぜか胸に飛び込んでこい、みたいな感じで両手を広げてるから態度で拒否。

「で、そもそもなんの用事？」

「……忘れた。思い出したら言うわ」

そう言って扉を閉める。なんだったんだろう。
タンスから寝間着を出して着替える。
そういえば鎌足　浩信、僕が笑ったとこ見られたかな。
まぁ、見られたって構わないけど。
いつ、辿り着くのかな。

―藤山　葉月の視点―

鍵を開けて、玄関の前に立つ。
扉を開けようとする手が、なぜか震える。
開けるのを、躊躇う。
どうして？あの人達はもういないのに。死んだのに。
僕が、殺したのに。
何を怖がってるの？あの人達が生きてて、また苛められるとでも？
僕は、まだ、あの人達に縛られてるの？
大丈夫。あの人達はもういない。怒鳴られることも、蹴られたり殴られるこも、無視されることもない。
あんな嫌な思いも、惨めな思いもしなくていい。
もう、あの人達に縛られる必要なんてない。
思い切って扉を開ける。
しんとしていて、薄暗い。
ほっとする。

ほら、大丈夫。もういない。
靴を脱いで、居間のテレビを点けてみる。
こんな普通のことさえ、今まで満足に出来なかった。
とりあえず、着替えよ。
タンスから適当に服を持ってきて着替える。
Yシャツを脱いで、ふと腕を見る。
リストカットの醜い傷が残る腕。最近つけた傷がまだ、治りきってない。
リストカットで痛みを感じることで、なんとか自分を保ってた。
もう、自分を保つために自分を傷つける必要はないんだよね。
大丈夫。僕は大丈夫。
僕のことを理解してくれる人がいるんだから。

―鎌足　浩信の視点―

澱沼さんの後をついていく。
あの笑みは、何を示している？
我々を嘲笑うような笑みであるのと同時に、何かを期待するような笑み。
我々を嘲笑いながらも、期待する。
一体、何を。
まさか、自分が犯人だということをか？
自分が犯人だということを、早く突き止めろとでも？
まさか、な。彼には動機がない。
そもそも、殺害された二人とは繋がりがない。
しかし、あの笑みは何かを知っている。
何かの形でこの事件に関与しているのか？
しかし、関与したとしてなんのために？
不利益なことしかないというのに。

そもそも、金銭トラブルによる殺人という考え自体が間違っているのか？
それは考えすぎか。
しかし、あの笑みの意味が分かった時、この事件は解決するのかもしれない。

「澱沼さん、あの子……」

「ん？鼎君がどうかしたか？」

「いえ、普段どういう子なのかと……」

「とてもいい子だよ。成績も優秀なようだしな。でも優しくて傷つきやすい目をしてるのに、それを押し込めて強い自分を造り上げて、本来の自分を否定してるようにしか、俺には見えないんだよ。でも、母親が死んでしまって落ち込んではいたけど、今の母親とうまくやれてるようだから安心だよ」

あの子の目を見て、私とは違うものを見ているんだな。
いずれにせよ、容疑者を割り出すことが最優先事項だ。
あの子達が関わっていないことを、祈る。そういうことがあって、今に至る。
やっぱり警察は馬鹿だ。アリバイがないって理由で、相原（あいはら）　謙二（けんじ）という無職の男が逮捕された。
勿論その男にも動機はある。
金を散々搾り取られた挙げ句、無職になって金がなくなっても催促されてたんだから、恨みは強い方だろう。
そして、殺人犯。人生踏んだり蹴ったりと絶望してたりして。
まぁ、他人がどうなろうと知ったことじゃないけど。

「鼎君、どうかした？」

葉月が僕の顔を覗き込んできた。

本当、明るくなったな。初めて見た時は、今にも消えそうなほど、弱々しい存在感しかなかったのに。

「いや、逮捕された偽犯人、今頃何を考えてるんだろうって」

それを言ったら、暗い顔をした。

「やっぱり、罪悪感感じる？」

「ちょっと……」

「それくらい踏み潰さないと、この先大変だよ？」

「うん……頑張る」

そう、頑張ってもらわないと。

君と僕は、この先離れられない運命を共有してるんだから。

七月二十八日　夏休みにて・失踪事件

この物騒な世の中、犯罪に巻き込まれないという保証はどこにもない自分だけは大丈夫だと過信していると、痛い目に合うかもよ?

犯罪は、人を選ばない「暑い」

なんとなく呟いてみる。

……暑さが増しただけだった。

暑いのは苦手だ。かといってエアコンを点けるのもな……。

この部屋のエアコンの風、嫌いなんだ。

扇風機をさっきから点けてるけど、生温い風しか送られてこない。

この暑さだから仕方ないけど。

まだらもお腹を上にしてぐで〜っとしてる。

全身毛で覆われてるから、暑くて当然だろうな。

夏休みの課題を昨日までに終わらせてよかった。

これからまだまだ暑くなるのに、課題とか集中出来ない。

「暑い」

仕方ない。那奈瀬の部屋に行こう。

エアコン点けてるはずだから。

まだらを抱いて、那奈瀬の部屋にノックなしで入る。

すごい涼しい。まさに天国と地獄。

「鼎、どした?」

「暑いから涼みに来ただけ」

「自分の部屋にあるだろ、エアコン」

「今は点ける気分じゃないから、兄さんの部屋で涼む」

「気分かよ」

那奈瀬が諦めたように苦笑いをした。

―杜塚　那奈瀬の視点―

テレビゲームをしながら、ちらっと鼎を見る。
我が弟ながら不思議だ。
いつも顔は笑ってるけど、目は笑ってない。目だけは無表情。
ここ数年、きっと鼎は本当の意味で笑ってない。
それに、母ちゃんや父ちゃんは気づいてないだろな。
少なくとも父ちゃんは気づいてないだろな。
あの人は俺達のことなんか見てないから。
鼎はいつ、笑わなくなったんだろ。
心当たりがあるとしたら、本当の母ちゃんが死んだ時。
母ちゃんが何をしてたのかは知ってる。鼎が寂しい思いをしてたのも。
でも、あの頃の俺はそれを省みなかった。
そして母ちゃんは浮気相手に殺されて、鼎は変わった。
母ちゃんが死んでも涙ひとつ見せなかった。
優しくて寂しがり屋で涙もろいあいつが、だ。
母ちゃんとの間に何があったのかは分からない。
でも、確実に言えるのは、今の鼎は弱い部分を押し込めて、強い自

分を造り上げてるってことだ。
鼎は自覚してないかもしれないけど。

ー杜塚　那奈瀬の視点ー

「何？」

鼎がきょとんとした表情で見てくる。
こういうちょっとした時の一瞬の表情は変わらないんだよなぁ。

「お前、見てるだけで楽しいか？」

「見てるだけでいいんだよ。兄さんこそ、課題とかあるんじゃないの？」

「んなもん後回し。こんな暑い時にやってられっか」

「そんな適当でいいの？」

欠伸をしながら言われたくないぞ。

「そういう鼎は終わったのか？」

「昨日終わった」

「はや！」

「兄さんは適当過ぎるから、彼女にふられるんだよ」

ニヤリと笑いながら俺を見てきやがった。

「なんで知ってんだよ!?彼女いたことすら言ったことねぇぞ!」

「趣味は人間観察だから」

「その中にストーカーが入ってんだろ」

「そうそう。兄さんが人目を気にしながらスタバでキスしてたとことか、実に面白いもの見させてもらったよ」

「ちょ、お前、マジでストーカーかよ!」

ふざけてストーカーって言っただけなのに、何やっちゃってんのこの子!?

「兄さんって見てたら飽きないんだよね」

笑顔で言うことじゃねぇ。

知りたくない弟の趣味を垣間見た気分……。

―杜塚　那奈瀬の視点―

まさかの弟のストーカー趣味発覚。お兄ちゃんは泣きそうです。

「まさか、気になる女の子ストーカーしてたりしてねぇだろな?」

そう言ったら真顔ではぁっ?って顔された。

いや、だって、普通そう考えね?

「別に女興味ないし」

「彼女ほしいとか思わねぇの？」

「女に現を抜かすくらいなら、猫を見てる方が断然いい」

女より猫の方が上って……。

お前の価値観が分かんねえよ。

「てかさ、お菓子でもいいから食べる物ないの？」

「……確かさ、さっき寿司百五十貫くらい食わなかったか？」

久しぶりに父ちゃんが帰ってきて、寿司の出前取って、百五十貫くらい涼しい顔して食ったよな。

食べてる時は本当幸せそうな顔するよなぁ。

「あれくらい普通でしょ。まだ足りないくらい」

どんな胃袋してんだよ。あれだけ食ってまだ足りないとか。なんで太らねぇんだろ。

ある意味羨ましい体質だよな。

「……」

寝息がして横を見る。

我が弟は寝るのも異常に早い。ちょっと目を離した隙に熟睡。

猫も鼎の腕の中で気持ちよさそうに寝てる。

ここ、俺の部屋なんだけどな……。

―藤山　葉月の視点―

「あ～、暑～い」

買い物から帰ってきて玄関を開ける。
家の中が蒸し風呂状態。
買ってきた物を冷蔵庫に入れて、すぐさま居間のエアコンを点ける。
すぐさま涼しい風が送られてきた。
今年の夏は涼しく過ごせるからいいな。
僕の部屋、エアコンないから扇風機で今までやり過ごしてたんだ。
涼しい居間で過ごしたかったけど、おじさんとおばさんがいるから。
今は天国。
嫌いな人がいなくなると、気持ちって変わってくるんだね。
手首のリストカットの痕、前まではすごく見られるの嫌で隠してたのに、今は見られても平気になってきた。
自殺しようって思うほど、落ち込むこともない。
前は毎日自殺しようかなって考えてたのに。
今は、気分が明るい。
嫌いな人でも、殺したことに変わりはないのに。
そこまで、あの人達に対する気持ちがなかったのかな。
今更、考えるだけ無駄だけど。
テレビを点ける。ニュースが流れてきた。

「子供ばかりが失踪かぁ……」「また誘拐事件？」

「みたいだな」

最近多いな。子供が失踪するの。

失踪と言われてるけど、誘拐だよな。間違いなく。
しかもこの近くなんだよな。失踪した子供が住んでるの。
失踪したのも勿論、この近く。

「何？」

「鼎も誘拐されないように気をつけろよ？」

「そんな間抜けじゃないよ」欠伸をして上半身だけ起こす。
うん。いい夢見れた。夢であろうと食べ物は偉大だよね。
まぁ僕の場合、お腹膨らんでもなぜか満腹にならないんだけど。
で、いくら食べてもこれ以上太らない。
我ながら不思議な体質。
それにしてもこの近くで誘拐か……。
男も女も関係なく、子供であれば誘拐されてるみたいだ。
きっともう殺されてるんだろうな。
特別な理由がない限り、生かしておく理由はない。
子供をいたぶること、そのものに快楽を覚えるなら尚更。
僕は子供に興味はないけど。
子供の泣き叫ぶ声は嫌いだ。そこに恐怖が混じってようとも。
殺るなら、大人。
ここ一週間殺してないから、そろそろ殺ろうかな。

ーとある誰かの視点ー

痛い痛い痛い

なんで蹴られなくちゃいけないの？
なんにもしてないのに。
奏太（かなた）、おじさんに何かした？
ただ、おじさんの横通っただけだよ？
そしたらおじさんが奏太の口を塞いで、車に入れたんだよ？
奏太はなんにも悪いことしてない！

目を開けたら、おじさんが怖い顔して奏太を見てる。

「何見てやがる糞餓鬼ッ！」

お腹を蹴られて、頭を叩かれた。
目の前が、真っ暗になった。

……。

―とある誰かの視点―

動かなくなった餓鬼を蹴る。
ちっ。死にやがったのか。つまらねぇ。
まだ鬱憤を全部出してねぇのに。
餓鬼はあんま抵抗してこねぇからいいけど、弱いんだよな。
当たり前なんだけど、くそ、イライラする。
なんなんだよ、部長の野郎。
上司の自分より俺の方が出来るからって、てめぇのミスを俺になすりつけやがって。
思い出したら余計にイライラしてきやがった。

餓鬼を蹴ってみる。
なんも反応しねぇ。
ちっ……ホントもうちょいもてよ。
でも、だからって大人は抵抗してくるからな。力も強いし。
やっぱり鬱憤晴らしには餓鬼か。
どの餓鬼も長くもたなかったけどな。

「おい、こいつ捨てとけよ」夜道を一人歩く。
勿論血の染み込んだ制服を着て。夜だから、血とは気づかれにくい。
手には袋で隠したバット。
かれこれ一時間半は獲物を探して歩いてるけど、見つからない。
こういう日は本当に見つからないんだよな……。
どうしようか……。もう少しで十一時だし、見つけたとしても全て終わらせるのに、今からなら三時半くらい。
今見つかるか分からない。
帰るのが五時とかになったら流石に怪しまれる。
仕方ない。今日は諦めるか……。

「はぁ……」

廃墟で着替えて、仕方なく帰る。
こういう日はよくある。
元々人気の少ないところだし、仕方ないけど。

突然、土を掘るようなざくっ、ざくっという音が聴こえてきた。

周りを見渡す。すると、

ごめんね、ごめんね、とぶつぶつ呟きながら土に穴を掘る男がいた。
二十代前半くらいかな。見た感じ気弱そう。
穴を掘り終えたのか、そこに子供らしき物を投げ込む。
子供……？まさか、誘拐された子供か？
そうだとしたら、今まで誘拐された子供はやっぱり殺されてることになる。

男の行動に気を取られて気づかなかった。
後ろに、別の足音が迫っていたことを。
気づいた時にはもう遅かった。

振り返った瞬間、後頭部を殴られる。

―とある誰かの視点―

「ごめんねごめんねごめんねごめんねごめんねごめんねごめんねごめんねごめんね」

これで何回目だろう。子供を埋めるのは。
何も植えられてない畑の中に、今まで何人埋めたんだろう。
兄さんが死なせた子供を埋めるのは、僕の役目。
仕方ないんだ。僕は兄さんに養ってもらってるから。
他人とどうしてもうまくつき合えない僕は、要領も悪いし仕事したってクビ。
僕は養ってもらって身なんだから、これは仕方ないんだ。
僕には兄さんしかいないんだ。
兄さんに見捨てられたら、どうしたらいいか分からない。

だから、子供には悪いけど、埋める。
子供が誘拐されたってニュースになってるけど、気にしてられない。
親が取材受けて悲しんでる姿見るけど、子供なんてまた産めばいいじゃないか。
穴の中に子供を入れて、埋める。

後ろから何かが倒れる音が響いた。
びっくりして後ろを振り向く。

「兄さん……？」

「全く、何やってんだよ。餓鬼に見られてたぞ」

地面を見ると、高校生くらいの男の子が倒れてる。

「この子、どうするの？」

「決まってるだろ。連れて帰る」

この子も、埋めることになるのかな……。

―杜塚　那奈瀬の視点―

「ふぁ～」

欠伸をしながらベッドを出る。
カーテンを開けると雲ひとつない見事な快晴。
太陽が眩しい。随分高いな。今何時だ？

十一時四十七分。随分寝過ごした。十時に起きる予定だったのに。
まぁいいか。
部屋を出て下に下りて洗面所で顔を洗う。
鏡を見ると寝癖がひでぇ。

「母ちゃんおはよー」

リビングに入ると、母ちゃんが心配そうな顔をしてうろうろとしてた。

「ああ那奈瀬、鼎知らない？」

鼎？鼎がどうかしたのか？

「鼎がどうかした訳？」

「鼎、帰って来ないのよ。電話しても出ないし」

昨日確か、あいつ散歩行ってたよな。
それから帰ってきてないのか？
遅くなっても必ず帰ってくるあいつが？
部屋に戻って鼎の携帯に電話してみる。

「……」

出ないし。こんなこと今までなかったのに。
リビングに戻る。

「鼎、出た？」

「いんや、出なかった」

―杜塚　那奈瀬の視点―

「やっぱり出ねぇか」

携帯を閉じる。あれから何回かかけてるけど、やっぱり出ねぇ。
本当どうしたんだ？
あいつが連絡なしで帰って来ないなんて考えられねぇ。
薪沢っちや藤の家に行ってるとか？
それでも、連絡してくるはずなのに。
一応、電話してみるか。
薪沢っちの番号にかける。
すぐに出た。一秒かからなかったぞ。

《もしもし、珍しいんじゃね？お兄ちゃんから電話なんて》

「悪いないきなり。そっちに鼎行ってねぇか？」

《来てないけど、鼎ちゃ……杜塚がどうかした？》

今、確実に鼎ちゃんって言ったよな。
どんな呼ばれ方してんだよ。
まぁ……確かに鼎って小さい頃は女の子によく間違われてたけど。

「いや……あいつ、昨日散歩に行ったきり帰ってこねぇんだよ」

《もしかしたら葉月ん家に行ってるとかねぇかな？》

「あ～、そしたら藤も律儀に電話してくる気がするけどなぁ……。
一応かけてみるわ」「うっ……」

酷い頭痛で目を覚ます。
視界が霞んでる。誰かいるけど、視界が霞んでるせいでよく見えない。
その前にここはどこだ？
僕の部屋じゃない。
なんで自分の部屋以外で寝てたんだ？
起きようとして、起きられないことに気づく。
手首を縛られてる？
きつく縛られてるみたいで、簡単にはほどけない。
足もきつく縛られてる。
段々と記憶が戻ってくる。
殴られて、気を失ってる間に連れてこられたのか。

「き……気がついた？」

視界がさっきよりよくなってきて、ようやく人影が誰なのか分かった。
昨日の子供を埋めてた男。
随分と気が弱そうだな。
何かに怯えてるかのような表情をしてる。
殴ったらそれで済みそう。
くそ、足さえ縛られてなければどうにか出来るのに。
縛られてるか……。嫌なことを思い出す。
思い出しそうになると、呼吸が荒くなってくる。
ああ、本当、嫌になる。

「君が悪いんだ……。見たりするから……」

男がそう言ってきた。睨むと、びくっと身体を竦ませた。
くそ……、僕の貴重な休みを……！
せっかくの休みが、こんな下らないことでぶち壊しになるなんて……！とりあえず、現状打破には手足のロープをどうにかするしかないな。
そういえばもう一人はどうしたんだろう。
まぁどうでもいいか。

「君……怖くないの？」

怖い？僕が？

「怖い？何を怖がる必要があるの？それよりも、夏休みの一日を潰される方が腹立つ」

「兄さんが帰ってきたら……、そんなこと言えなくなるよ」

兄さん？じゃあ兄弟で共犯なのか。
兄が子供を殺して、弟である目の前のこの男が、子供を埋めるってところかな。
でも、埋める時にごめんねって言ってたってことは、少なからず罪悪感があるからかな。

「ねぇ、埋める時になんでごめんね、なんて言うの？罪悪感？子供に恨まれたくないから？」

そう訊いたら、表情が強張った。「ねぇ、答えられないの？」
ただうじうじとして、視線を泳がせるだけでイライラする。

口を開いても、結局何も言わないし。

「ねぇ、お兄さんに言われるから、子供を埋めるの？自分の意思？」

まぁ、答えは分かってるけど。

こんなうじうじした奴が、自分の意思で埋めるはずがない。

今までの人生さえも他人任せなんじゃないのか？

「……そうしないと、兄さんに見捨てられるんだ……。仕方ないじゃないか……」

見捨てられる？仕方ない？

そんなものに怯え続けて、なんになる？

人間、裏切りは付き物だろう。

「お前、見てるとイライラする」

「えっ……？」

「イライラするって言ってんだよ。うじうじうじうじと。埋めないと見捨てられる？都合よく使われてるだけじゃねぇか。警察にバレてみろ。お前あっさり見捨てられるぞ」

今にも泣きそうな目で僕を見る。

「そ、そんなこと……」

「あるに決まってんだろうが。都合がいいから傍に置いてんだろ。危なくなったら罪を全部お前になすりつけて逃げるために。それくらい気づけよ」

―とある誰かの視点―

男の子が睨んでくる。いきなり口調ががらりと変わった。
目が、怖い。
じっと僕を見つめてくる。
嫌だ。怖い。あの目が。

「警察にバレないと思ってんの？」

そんなの分からないよ。僕は兄さんの言うことだけ聴いてたらいいんだ。
兄さんが僕を警察に売るなんて考えちゃ駄目だ。
兄さんは今まで僕の面倒をみてくれたじゃないか。
なのに、なんで、そうかもしれないなんて思うんだよ。

「お前達が犯人だってすぐ分かる。あんな粗末なやり方じゃ」

なんでそんなことが言えるんだよ。
そもそも監禁されてるのに、どうなるか分からないのに、なんで平然としてられるんだよ。
見つめてくる。僕の目を。
耐えきれなくなって、部屋を出る。本当に粗末だ。縄で縛るにしても、もっと厳重に縛るべきだ。
それに、ポケットに携帯入ったままだし。
何を考えてるんだろう。携帯をそのままにしてるとか。
手を使えないから、何も出来ないとでも？
ただきつく縛っているだけだから、外そうと思えば外せる。
面倒だから外すのは後でいいか。

腕を曲げて、ポケットから携帯を取り出す。
後ろ手で開きにくいけど、開いて葉月の携帯の番号をかけようとして、見えないからアドレス帳からは時間かかるな。
番号を直接打ち込む。
通話ボタンを押して、身体を捩って携帯に耳を当てる。
葉月に電話かけたのは、家族だと動揺しまくって伝えたいことが伝えられずに見つかる可能性がある。かといって警察は時間かかりそうだし。
出ろ。早く出ろ。

《もしもし、鼎君!?》

かなり動揺した様子で、葉月が出た。

「葉月、落ち着いてよく聴いて」

《う……うん》

「その様子だと、僕が失踪したっていうのは知ってるよね?」

《うん。だからすごい心配したんだよ》

「落ち着いてよく聴いてよ。この電話を切った後、警察に電話してほしいんだ」

《警察?》

「うん。警察に名塚町の手をつけられてない畑の中に子供が埋められてるって伝えて。犯人は兄弟で一緒に住んでるって」

《分かった……鼎君、大丈夫だよね？》

「僕は大丈夫。あんな奴らに殺られないよ」

「おい」

がらりと襖が開けられ、さっきと違う男がそこにいた。くそ……見つかったか。というか、帰ってくるの早くない？仕事してるはずなのに。

まぁそれはどうでもいい。

男には聴こえないように小さな声で伝える。

「兄は短めの髪に眼鏡に吊り目。頬に何かで切ったような傷痕がある。弟は長めのぼさぼさの髪に狐目。結構痩せてる」

「おい！何ぶつぶつ言ってやがる！」

携帯に向かって手が伸びてくる。

ここまでか。

「頼んだよ」

返事を聴く前に取り上げられる。伝わったか分からない。伝わったと信じよう。

「この糞餓鬼！どこにかけたか知らねぇがナメた真似しやがって！」

かなりいきり立った様子で、腹を蹴ってくる。

「ぐっ……！」

容赦なく蹴ってきたから、反射で咳が出る。
その後も何回か蹴られる。
くそ……、いたぶる立場の僕がいたぶられるなんて……！

「ちっ……なんなんだよお前。泣けよ！やめてって命乞いしろよ！つまらねぇだろうが！」

知るかよ。そんなの。
僕自身でさえ、どんな時に泣くのか、分からなくなったのに。

「くそ……つまらねぇ」

どすどすと足音をさせながら、部屋から出ていく。
怒鳴り声が聴こえてきた。

―藤山　葉月の視点―

《おい！何ぶつぶつ言ってやがる！》

《頼んだよ》

それを最後に電話が切れる。

「鼎君……？鼎君！？」

名前を呼んだところで、無機質な音が返ってくるだけ。

どうしよう。今の犯人だよね。見つかったってことは、今頃鼎君酷いことされてるんじゃ……。
考える前に警察に電話しよう。
鼎君がせっかく危険を承知で連絡してくれたんだ。
僕がしっかりしないと。
そうだ、澱沼さんならすぐ来てくれるかも。
よかった。澱沼さんの携帯番号聴いといて。
澱沼さんの携帯にかける。
この時間がもどかしい。お願い、早く出て。

《もしもし、どうしたんだい？》

「澱沼さん助けてください！鼎君が、鼎君が殺される！」

《殺される？じゃあ、失踪は本当だったのか……。落ち着いて順番に話してくれ》

深呼吸をする。落ち着け。落ち着いてちゃんと伝えなきゃ。

「今鼎君から電話がかかって来たんです。名塚町の手のつけられてない畑の中に、子供が埋められてるって。犯人は兄弟で一緒に住んでるみたいです」

《そうか……ありがとう。今から探しに行くよ》

「はい……お願いします……」

電話を切る。あ……兄弟の特徴言うの忘れた。
確か……兄は眼鏡に吊り目、弟は……。
あれ……？なんだか、見覚えがある気がする……。

まさか……。

―とある誰かの視点―

僕は馬鹿だ。なんで油断したんだろ。両手を縛ったんだから大丈夫だと思ってたのに。

あんな子見たことがない。

監禁されてるのに、泣きもしなければ怯えもしない。

逆に威嚇してくる。

あの目。あの目が怖い。無感動なのに、奥に暗い炎を静かに燃やしている目。

なんだか、怖い。あの子を監禁したのは間違ってたんじゃないかって。

あの子に子供を埋めるところを見られた時点で、僕と兄さんは破滅を迎えたんじゃないかって。

あの子は、始末しなきゃ。

兄さんはあの子に興味をなくしたから、きっと今日はやらない。

僕が、始末して、埋めなきゃ。

その時、インターホンが鳴った。

びくっと身体が竦む。急いで玄関に出る。

「葉月……どうしたの？」

近所に住んでる藤山　葉月がいた。

「こんにちは祐介さん。大した用事はないんですけど……僕の友達で身長が百六十センチくらいで、髪が肩にちょっとかかるくらいの男の子見ませんでした？」

いるよ……。奥の部屋に。

「いや……見なかったけど……」

その時、僕のポケットに入れていた携帯が鳴った。
思わず取り出す。うっかりしてた、あの子のなのに。
那奈瀬、とある。
見ると、葉月の顔色がみるみる変わっていく。
友達の携帯だから、知ってて当然か。
葉月が後退りする。仕方ない……かな。
逃げようとするのを、背後から捕まえて羽交い締めにする。

ー藤山　葉月の視点ー

知り合いの、三嶋さんの家の前に来た。
鼎君が言った犯人の特徴、三嶋さん兄弟の特徴そのもの。
三嶋さんとは、六年前に引っ越してきた時からの知り合い。
二人共、優しい人なのに。
違うよね？たまたま似てるだけだよね？
僅かに震える指で、インターホンを押す。
弟の祐介さんが出てきた。

「葉月……どうしたの？」

なんだか、雰囲気がいつもと違う気がする。
気のせいならいいけど。

「こんにちは祐介さん。大した用事はないんですけど……僕の友達で身長が百六十センチくらいで、髪が肩くらいの男の子見ませんでした？」

「いや……見なかったけど……」

祐介さんのポケットから携帯が鳴った。
この着信音……聴き覚えある……。
祐介さんがポケットから携帯を取り出す。
鼎君の携帯を。

「――――！」

嘘だ……。祐介さんとお兄さんが犯人なんて……！
なんで、二人共優しい人なのに。
でも、鼎君の携帯を持ってることが犯人だって証拠だ。
逃げなきゃ。ここにいたら危ない。
祐介さんが僕を見る。

ぞっとするほどの、暗い瞳で僕を見る。

マズい……マズい！
逃げようとして腕を掴まれて、首を腕で締めつけられる。
叫ぼうとして口を塞がれる。
暴れるけど、適わない。
扉を閉められる。しかも、お兄さんが来た。

「兄さん、手伝ってよ」

びっくりした様子で僕を見る。

「バレたのか？」

「うん。だから、手伝って」

二人相手にどうすることも出来ずに、縛られた。

―藤山　葉月の視点―

「……」

「……」

痛い。鼎君の視線がものすごく痛い。

すごいじっとりと見てくる。いや、睨んでくる。

「なんで君がここにいるの？」

怖い。鼎君の声音が怖い。

「はぁ……」

溜息吐かれちゃった……。

「ごめん……」

「それはいいよ。もう仕方ないんだし。でも、なんで捕まった訳？」

「祐介さんと祐大さんは知り合いなの……優しい人なのに……。鼎君が言った犯人の特徴が二人の特徴そのものだったから、確かめようと思って……」

「だからって……下手したら殺されてたんだよ？迂闊すぎる。これからだってすごく危険なのに……特に弟の方が。何をするか分からない」

祐介さんの方が？でも、言われてみればそうかもしれない……。

「でも、警察にはちゃんと言ったよ？」

「この馬鹿！」

怒鳴られてびくっと身体が竦む。

鼎君が身体を捩って近づいてくる。「この馬鹿！」

犯人が近くにいるっていうのに、そんな大きな声で「警察にはちゃんと言ったよ」なんて言う奴があるか！

身体を捩って葉月に近づく。小さな声でも会話出来る距離まで。

とはいえ、かなり目の前まで近づく。

「襖の向こうでどちらかが話を聴いてる。警察に連絡したってこともきっと聴かれてる」

さっきから気配を感じる。僕達の話を聴いてる。

どうして捕まったのかは別に聴かれても問題ないけど、警察に連絡したっていうのはまずい。

すぐにでも僕達を始末して逃げようと考えても、不思議はない。
くそ……時間はないな。縄を急いで外さないと。

「ご、ごめん……僕のせいで……」

「それはもういいよ。責めたって仕方ない。でも、早くしないと時間がない」

手首の縄を外し終わる。次は足の縄。

「鼎君すごい……」

これくらい外せなくてどうするのさ。実にほどきやすい縛り方だったから助かった。
葉月の縄もほどかないと。

葉月の腕の縄を外し終えた時、がらりと襖が開いた。

弟が、包丁を持って立っている。

一三嶋　祐介の視点一

葉月をあの子と一緒に奥の部屋に監禁する。
襖を開けたら、あの子が睨んできた。葉月を見て、驚いた目をする。

「葉月……！？」

「ごめん……」

「二人共、おとなしくしててよね……」

襖を閉める。

葉月はともかく、この子は危険だ。

知り合いとはいえ、仕方ない。この子と一緒に始末しよう。

兄さんは出かけた。今日はきっと帰ってこない。

僕だけで、二人を始末しよう。

大丈夫。縛ってあるから抵抗されない。

抵抗されても、うまく殺れるよ……。

「なんで君がここにいるの？」

話声が聴こえてくる。襖の前に立って、二人の話を聴く。

どうして捕まったのか聴いてるみたいだ。

「でも、警察にはちゃんと言ったよ？」

衝撃が走った気がした。

警察にはちゃんと言ったよ？

そうか。さっきの電話の相手は葉月だったんだ。

そして葉月は、警察に連絡した後にここに来たんだ……。

警察に連絡したんなら、いつ僕達が犯人だってバレるか分からない。

すぐにでも逃げた方がいいかも……。

今からでも、あの子達を始末して、兄さんを連れて逃げよう……。

台所から包丁を持ってきて、襖を開ける。

縄をほどいたあの子が、驚いた目で見つめてくる。弟が、包丁を持って立っている。
僕達を見つめてくる。狂気に染まった暗い瞳で。
包丁を持ってゆらり、と近づいてくる。
くそ……！ほどききる時間がない。
ある程度緩めて、弟に突進する。不意をつかれたのか、弟は僕と一緒に倒れる。
包丁を持つ手を押さえつけて、叫ぶ。

「逃げろ！」

ちらっと振り返ると、縄をほどいた葉月がおろおろとしてる。

「で、でも、鼎君は……」

「僕は大丈夫だから、早く逃げろ！逃げて、警察を！」

「わ、分かった……！」

僕と弟の横を走っていく。
これで葉月は大丈夫だ。後は、この弟をどうにかしないと。

「ぐぅ……っ！」

腹を蹴られた。その反動で床に倒れる。
弟が素早く起き上がって、僕にのしかかってくる。
その瞬間、腹に、衝撃が走った。

「はっ……」

見ると、腹に、包丁が刺されている。

「……っ！」

精一杯の力で殴って、その隙に逃げる。
血が、押さえていても、どんどんと流れていく。
後ろを見ると、弟が追いかけてきている。

血塗れの包丁を持って。逃げないと。刺されたこの身体じゃ、狂気に満ちた人間には適わない。
思うように走れない。思ったより深く刺されてるみたいだ。
押さえた指の間からぽたぽたと、血が溢れていく。
足がもつれる。足から力が抜けて、転ぶ。
起き上がろうとして、襟首を掴まれて無理矢理立たされる。
そこに、

「ぐっ……！」

深く、刃の部分が見えないくらい深く、突き刺される。
血が逆流してきて、吐き出す。

「君が悪いんだ……見たりするから……」

僕の耳元で囁く。
ずるっと、包丁が抜かれる。支えがなくなって、その場に倒れる。
血が、流れていく。皮肉だな……。今まで散々獲物に同じことをしてきて、それが還ってくるなんて。
傷口は熱いのに、身体は寒い。

このままだったら、失血死だろうな……。

「はは……あはははは……」

こんなことになって気づくなんて。

なんだ。僕はまだ“人間”だったのか。

“人間”を捨てようとしたのに、まだ捨てきれずにいるなんて。

情けない。やっぱり僕はまだ“弱い”。

“弱い”まま、終わるのか？

「死にたくないなぁ……」

意識が、途絶える。

八月十九日　喪失＝回帰

僕は誰だ?

“僕”は誰だ?

僕は“僕”を否定した

“僕”は僕を否定する

本当のペテン師はどっちだ?

僕か?　“僕”か?

僕には分からない

“僕”にも分からない

本当の『僕』はどっちだ?

僕か?　“僕”か?

僕には分からない

“僕”にも分からない

君には分かる?誰かが、“僕”の首を絞めている。

暗くて、顔が見えない。

ただ、泣きながら“僕”の首を絞めているのは分かる。

“僕”に馬乗りになって、泣きながら首を絞めている。

力が全く入ってないけど。

その時、周りが明るくなって顔が見えるようになった。

ああ……お前か。

“僕”と同じ顔をしたお前。

“僕”とお前じゃ違うのに、根本的には“同じ”なんだ。

“違う”けど“同じ”。

“僕”が悪なら、お前は善。

“僕”が狂気なら、お前は優しさ。

“僕”はお前、お前は“僕”。

だからお前には“僕”を殺せないけど、“僕”にもお前は殺せない。

僕は“お前”を否定する。

“僕”もお前を否定する。

信じられるものもきっと存在する。

信じられるものなんか存在しない。

そんなことはない。

所詮全て偽りだ。

どうしてそう言える？

お前は裏切られたのを忘れたのか？

忘れた訳じゃない。

なのに、どうして信じようとする？

全てを疑うなんて寂しいじゃないか。

どうせ裏切られるなら疑う方が、信じない方がマシだ。

そうやって全てを否定して、傷つくことから逃れるのか？

それの何が悪い？“僕”もお前も、全てを呑み込めるほど強くはない。

それでも全てを否定してなんになる？

なんにも。ただ否定するだけだ。

虚しくないのか？

虚しい？むしろ清々しい。そう言うお前は、全てを信じられるのか？

……。

答えられないだろう?所詮そんなものさ。世界は。人間は。
お前の“目”だけで見てみろ。“僕”は眠っておいてやる。

そんな夢を見た。目を覚ますと、白い天井が見えた。
ここは……?周りを見てみると、点滴が腕に繋がってる。そして、
呼吸器。
なんで病院なんかに……。思い出せない。
起き上がろうとすると、腹に激痛が走った。
諦めてベッドに戻る。

「鼎?」

声が聴こえて、ドアの方を見る。

「鼎ー!心配したぞこの野郎!母ちゃん、鼎が起きた!」

走る音が聴こえてきて、女の人が泣きながら僕の頬に触ってきた。

「鼎、よかった……!心配したんだから!」

この人達、誰だ……?そもそも鼎って、誰だ?
僕の名前か……?
分からない。思い出せない。
どうしてここにいる?この人達は誰だ?

僕は誰だ?

思い出せない、思い出せない。

「鼎……？」

女の人が返事をしない僕に、流石に心配そうな目を向けてくる。
この人達は、家族なのか？
そうだとしたら、

「すみません……どなたですか……？」

この人達にとって残酷な言葉を、僕は浴びせかけた。

―杜塚　那奈瀬の視点―

鼎が刺されてから三週間が経った。
三週間経ったけど、まだ鼎は目を覚まさない。
この病院に運ばれた時点でかなり酷い状態だったらしい。
呼吸停止の上に、更に心臓停止。
助からないことも覚悟しておけ、とも取れることも言われた。
一応一命は取り留めたけど、目を覚ますまで油断は出来ない。
鼎、早く目を覚ましてくれ。母ちゃんの悲しみ様が見てられない。
薪沢っちや藤もすごく心配してるぞ。特に藤は自分のせいだって、
手がつけられないくらい泣いてたぞ。
父ちゃんは、あの人は鼎が死んでもなんとも思わねぇのかな。
鼎が一命を取り留めたことだけ確認したら仕事に戻って、それ以来
病院には来ない。

「トイレ行こ……」

「鼎？」

トイレから戻ってきたら、鼎が目を覚ましてた。
ぼんやりとした目を向けてくる。

「鼎ー！心配したぞこの野郎！母ちゃん鼎が起きた！」

お茶を買いに行ってた母ちゃんが丁度戻ってきて、大声で呼ぶ。
母ちゃんが驚いた顔をして走ってくる。

「鼎、よかった……！心配したんだから！」

泣きながら鼎の頬を触る。
なんだ？鼎の様子がおかしい。困惑したような目で、俺と母ちゃんを見てくる。
まるで、初対面の人間を見るような。

「鼎……？」

母ちゃんが心配そうに聴いた後だった。

「すみません……どなたですか……？」

何言ってんだ？嘘だろ？「鼎……何行ってるの？お母さんとお兄ちゃんよ？分からないの？」

涙を流しながら、悲痛な声で言ってくる。
分からない。この人達が誰なのか分からない。
この人達がそう言うんだから、家族なんだろう。

でも、思い出せない。
自分の名前すら分からない。思い出せない。
ここで目覚める前に何をしていたのか、どうして病院にいるのか、
自分がどんな顔をしているのか、自分がどんな人物だったのか、分
からない。
僕は誰だ？

記憶の全てが空っぽ。曖昧にぼんやりと残ってさえいない。

「本当に分からないの？」

「ごめんなさい……自分の名前さえ、分からないんです……」

そう言ったら、更に悲しそうな顔を……。

「ごめんなさい……」あの後、先生が来て色々と聴かれた。
身体の調子は勿論だけど、何か覚えてることはないかとか。
本当に、何も覚えてない。自分の名前すら聴くまで分からなかった
のに。
僕は杜塚　鼎というらしい。十七歳で高校二年。
一応名前は分かったけど思い出した訳じゃないから、しっくりこな
い。単なる情報でしかない。
この病院で目覚める前、僕は誘拐された挙げ句に刺されたらしい。
一時は本当に死ぬ寸前だったとか。
なんで、思い出せないんだろう。
無駄にしか思えない知識なら、覚えてるのに。
例えば記憶について。
記憶には手続き記憶、プライミング記憶、意味記憶、短期記憶、エ
ピソード記憶があるとか。

そんなことは覚えてるのに、なんで自分のことについてや、家族のこと、過去を全て忘れたんだろう……。
何か、忘れたいことでもあったのかな……。

―藤山　葉月の視点―

携帯を眺める。電話、かかってこないかな……。
鼎君が刺されてから三週間。まだ、目を覚まさない。
僕のせいだ。僕があの時、あんなことを言ったから。
だから、鼎君は刺されたんだ。
助かったからよかったけど、もし助かってなかったら、僕はどうしたら……。
祐介さん達はまだ捕まってない。
血塗れで倒れてた鼎君を見つけたのは僕。
祐介さんの家から一番近い大家さんの家に行って、事情を説明して電話してもらって、鼎君が気になって戻ったら、鼎君が血塗れになって倒れてた。
かなりの血が出てて、ぴくりとも動かなかった。
一番近くにあった家に駆け込んで、救急車を呼んでもらって今に至る。

いきなり携帯が鳴って、思わず机に落としちゃった。
お兄さんからだ。鼎君、起きたのかな。

「もしもし」

《もしもし、俺だけど》

「はい」

《鼎な、起きた》

「本当ですか!?よかったぁ〜……」

安心して涙が出てきた。

《ただな……記憶なくしてんだ》

お兄さんの言葉に、衝撃が背筋を駆け抜けた気がした。

《鼎、何も覚えてないんだ。俺達のこともだけど、自分のことすら、忘れてるんだ。薪沢っちにはさっき電話した。今日は目覚めたばかりだから、明日来てやってくれねぇか?》夜になった。

面会時間はとっくに過ぎてるから、あの人達は帰った。

今更だけど個室って、お金かかるのかな。

かかるとしたら、金持ち?

まぁ、どうでもいいけど。

今日は何も食べてない。いきなり食べたら胃痙攣起こす可能性あるし。

出されたとしても、お腹すいてないから食べないけど。

覚えてないけど、二ヶ所刺されてるらしい。全治二ヶ月。

二ヶ月は病院。退屈だな。

なんとなくベッドから出る。なるべくお腹の傷に響かないように。

窓から月が見えた。星が沢山輝いてる。

トイレに入って、鏡に写った顔を眺める。

男にしては、線が細い気がする。髪も肩まであって、ちょっと長め。

あ、睫意外と長い。

それにしても身長……低い気がする。

……自分の顔見ても何も思い出さない。
今日はもう寝よう。朝の検診が終わって、朝食にお粥食べた後に寝てた。
気づいたら、あの人達が来てた。

「おはよう鼎。調子はどう？」

女の人が笑顔で話しかけてくる。僕のために笑顔を作っているのが、一目で分かる。

「……大丈夫です」

敬語で他人行儀だったのがショックなのか、表情が少し曇った。
思い出せないから、家族と言われても実感が持てない。

「なら大丈夫ね。今日友達が来てくれるわよ」

友達……？やっぱり思い出せない。
どんな人だろう。

「よう鼎！薪沢　波哉斗さんが来てやったぜ！」

「鼎君久しぶり」

一人は滅茶苦茶テンション高い。両腕突き出しながら入ってきた。
Tシャツの『ヤらないか？』の文字はなんだろう……。
もう一人はおとなしめ。なんだか、似てる気がする。雰囲気が。
こっちが藤山　葉月か。

薪沢　波哉斗という人が僕を見ながら残念そうな顔をすると、床に膝をついた。

「なんだ……？お前の毒舌がないと物足りないぞ……？俺ってMだったのか？」

真顔でそんなこと呟き始めた。

面白い……。「しっかし、お前が誘拐とか刺されたとか聴かされただけでも心臓口から飛び出すほどだったつーのに、記憶喪失とか目玉ぼーん！レベルだぞ」

目玉ぼーん！って……。

「僕のせいなんだ……。僕を逃がすために鼎君は残って刺されて……」

今にも泣きそうな表情で話す。

刺される前の状況は聴かされた。倒れてた僕を発見したのはえーっと、葉月らしい。

覚えてないことで泣かれるとか、勘弁してほしいな。

「自分のせいとか、僕は助かったんだからもう気に病むことはないと思うけど。記憶なんてそのうち戻るだろうし」

「う……うん」

「てかさ、本当に何も覚えてねぇの？」

「うん……。名前もまだ、自分のものなのか実感が持てなくて」

「そこまで酷いのか。この俺様を忘れるなんて、薄情な奴め！」

両腕を突き出して、抱きついてきた。

勢いがあったから、ベッドに倒れ込んだ。

「馬鹿！痛いって！傷開く！」

「すんません」

こっちは本気で痛いのに……！へらへらと笑ってるからなんかムカついたから、顔面にパンチを食らわせといた。「チョー痛え。記憶なくしても力は相変わらず強いな」

「それは関係ないでしょ」

頬を押さえてるけど、そんな強く殴った覚えないし大丈夫でしょ。

「なぁ、頭殴ったらぽんっと記憶戻らねぇ？」

真顔で聴くことか。それ。

「戻っても戻らなくても頭かち割ってやる」

「すんません。でもさ、記憶なくすって頭打ったのか？」

「頭に外傷はないから、はっきりとは分からないけど、脳に十分近くくらいは酸素行かなかったから、そのせいで脳が何らかのダメージを受けたんじゃないかって言ってた」

「ふーん……聴いても分かんねぇや。早く記憶戻るといいな」

「うん。やっぱり記憶ないと不安だから、早く戻ってくれると助かる」

なんだろう。葉月が僕の記憶が早く戻ってほしいって言葉に、一瞬複雑そうな顔をした。

「鼎君、僕の顔がどうかした？」

「いや、何も」

笑顔に戻った。一瞬だったけど、なんだか苦しそうな、悲しそうな表情はなんだったんだろう？

ー杜塚　那奈瀬の視点ー

薪沢っちと藤が来た。鼎が二人を食い入るように、頭からつま先まで見る。下手したら睨んでる。

本人は多分気づいてないけどな。

やっぱり思い出せなかったんだろうな。ちょっと残念そうな表情を滲ませた。

薪沢っちは相変わらずだな。

邪魔にならないように病室をでる、

「鼎、楽しそうだな」

「そうね。薪沢君とは私が結婚する前から仲よかったんでしょ？」

「そうだなぁ。幼稚園くらいからかな」

「やっぱりまだ、家族になりきれてないのかしら……」

ちょっぴり悲しそうに笑う。

鼎は本当の母ちゃんとの間に、きっと何かあったんだろうな。

だから、母ちゃんのことが信じきれないのかもしれない。

不謹慎だけど、これがきっかけになったらいいな。

―藤山　葉月の視点―

家に帰ってきた。鍵を開ける。

記憶がないせいかな、ちょっと不安そうな顔してたけど、鼎君元気そうでよかった。

鼎君、楽しそうに笑ってたな……。完璧な作り笑顔じゃない、楽しそうに。

笑ってるけど、笑ってない笑顔じゃない。

本当は、きっとあんな風に笑うんだ。

記憶をなくしたってことは、僕との秘密も忘れてるんだよね。

自分が沢山の人を殺した、殺人鬼ってことも。

記憶を取り戻した時、鼎君はどうなるんだろう。

記憶をなくす前の鼎君に戻る？

罪悪感に押し潰される？

それとも、

そう思ったら、素直に記憶が戻ることを喜べなくなった。
過去に何があって、どうして殺人鬼になったのか、知らない。
でも、殺人鬼に走らせたほどの何かがあったんだよね。
僕の罪まで、半分背負って。
思うんだ。

このまま、記憶が戻らない方が、鼎君は幸せなんじゃないかって。
「今日は楽しかった？」

「うん。楽しかった」

女の人がそう聴いてきた。
敬語じゃなかったのが嬉しいのか、笑った。
まだ実感は持てないけど、家族なんだな。
僕の言葉ひとつで嬉しそうに笑ってくれる。
なんだか、こんな気持ちになるのは久しぶりだ、と思うのはなんでだろう。
考えてみても分からないけど。
波哉斗と葉月から聴いたけど、僕は勉強が得意で凄まじい大食いらしい。
勉強が得意かどうかは分からないけど、大食いはそうかも。
病院食じゃ全然足りない。悲しいくらい足りない。
だから、常に空腹状態。でも、病院じゃこれ以上食べちゃいけないし、我慢。
帰ったら気が済むまでたらふく食べてやる。

「そろそろ時間ね。じゃあ母さん帰るわね。また明日来るから」

「うん。ありがとう。無理はしないでね」

「無理なんてしてないわよ。おやすみなさい」

「おやすみ」

一三嶋　祐介の視点一

なんとなく、家に帰ってきた。入らないけど。
兄さんは、どうしてるんだろう。
あの日から兄さんとはぐれて、連絡がつかない。
大丈夫かな……兄さん。新聞とかで捕まったって書いてないから、大丈夫だとは思うけど。
どうして連絡くれないんだろ……。
あの子の言ってた通り、僕はただの便利な道具でしかなかったって言うの？
自分だけ安全な場所に逃げて、僕はどうなってもいいの？
そうだとしたら、酷いよ。
僕は、兄さんのために子供を埋めたのに。
兄さんのために、あの子を刺したのに。
あの子は死んだのかな……。
あの日、警察がまだ来なかったから気になって戻ってみたら、救急車であの子は運ばれて行った。
遠目から見ても分かるほど、顔が青白かった。
あの時はただ夢中で殺さなきゃと思ってたけど、冷静になってきた途端に怖くなった。あの子は、大丈夫かな……。
死んでないよね？生きていてほしい。
ごめんなさい。ごめんなさい。

葉月の家に来てみた。
なんで、のこのこと来たんだろう。
僕は、葉月まで殺そうとしたのに。
自分の罪は分かってるのに、警察に行く勇気はないんだ。
なんて、図々しくて臆病なんだろう。

「祐介さん…？」

驚いて振り向いたら、葉月がいた。

ー藤山　葉月の視点ー

今日も波哉斗君と一緒に、鼎君の見舞いに行ってきた。
行ったら気持ちよさそうに爆睡してたけど。
三十分くらい待ってたら起きて、波哉斗君がふざけて抱きついて殴られてた。
波哉斗君は面白い人だよね。
鼎君は、僕達以外には友達いないみたい。
僕と友達になるまでは、波哉斗君以外いなかったってことだよね。
それだけ、他人が信じられなかったってことなのかな。
誰も信じるな、この僕のことも、全てを信じるな。最後まで信じていいのは自分だけだ、本当に信じられるのは自分だけだ。って鼎君は言ってた。
でも、それは本当に鼎君の心からの言葉なの？
本当にそう信じてるの？
人間は、自分さえも偽ることが出来るんだよ？
自分の心にさえ、嘘をつくことが出来るんだよ？
今の鼎君を見てたら思うんだ。

だって、あんな風に笑うんだもん。
善意すらも否定することで、他人を信じないことで、自分を守ってたんじゃないかって。
他人を傷つけることで、自分を守ってたんじゃないかって。
それで、鼎君は満足なの？
それで、幸せになれるの？

家の前に、祐介さんがいた。
俯いて、悲しそうな顔をしてる。

「祐介さん……？」

思わず声をかけた。祐介さんが振り返ってくる。
今にも泣きそうな顔をしてる。

―三嶋　祐介の視点―

葉月が、見つめてくる。
どうしよう。どうしよう……！

「あっ……」

葉月が、口を開く。
怖い、怖い。見つめないで。
怖くて、身体が動かない。
何を言われても仕方ない。自分のために、殺そうとしたんだから。
その事実は変わらない。

葉月は、僕を信じてくれてたのに。それを、裏切ったんだ。
何を言われても仕方ないって分かってるのに、責められるのが怖い。
僕は本当に、どうしようもないほど臆病だ。

「はづ……き…、ご、ごめ……」

情けない。涙が出てきた。
泣きたいのは、怒りたいのは葉月なのに。

「祐介さん、僕はもういいです。謝るなら、鼎君に謝ってください」

そう、穏やかな顔で、僕に笑ってくれた。

ー藤山　葉月の視点ー

「葉月……いいの？上がり込んじゃって」

「いいんです。外で話すのもあれですし。外は危険でしょう？」

もしも警察に見られたら捕まっちゃう。
鼎君に言われるだろうなぁ……。

君、馬鹿なんじゃないの？殺されかかったのに、匿うとか。甘すぎる。

なんか、鼎君が言いそうなことすごい想像出来る……。
記憶が戻って匿ったことがバレたら、絶対言われそう……。

「とりあえず座ってください。お茶でもいります？」

「気を使わなくていいよ……。それよりも、あの子はどうなったの……？」

「鼎君はなんとか助かりました。……でも、記憶喪失になったんです」

助かったと聴いてほっとした表情をしたけど、記憶喪失の言葉に唖然とする。

「記憶……喪失……？」

「はい……。僕のことも家族のことも、自分のことさえも忘れてるんです」

「僕のせいで……」

頭を抱えながら、俯く。泣いてるのを隠したいのかな。

「祐介さん、お兄さんはどうしたんですか？」

「兄さんと連絡つかないんだ。電話しても出ないし……。あの子の言う通り、僕は兄さんにとって便利な道具だったのかな……」誰かが僕の上に馬乗りになって、首を絞めている。

僕のことを呆れたように見下しながら、力の入ってない手で首を絞めてくる。

おいおい、何都合よく全部忘却してんのさ？“僕”が引っ込んだからって、全て忘れて“僕”まで捨てようなんて、都合よすぎないか？

何を言ってるのか分からない。

まぁ、分からなくても仕方ないか。お前は“僕”を忘れてるんだからな。“僕”はお前さ。お前の心の一部。お前の“本質”。

とんとんと、僕の胸をつついてくる。

今のお前は“僕”を否定したがるだろうけどな。思い出したら、否定出来なくなるさ。むしろ、今まで以上に“僕”を増幅させるかもな。だから、

顔を近づけて、耳元で囁く。

だから、さっさと思い出せ。さっさと認めろよ。ゆっくりと目を開ける。

記憶をなくしたまま目覚めたあの日から、毎日見る夢。

僕と同じ顔をした“僕”。

殺すつもりはないのに、首にかけられた手。

見下したような笑み。

狂気を、狂喜を宿した瞳。

楽しそうな、笑い声。

夢の終わり、必ず耳元で囁く声。

早く思い出せ。早く認めろよ。

そこで、いつも目を覚ます。
思い出せ？何を？
認めろよ？何を？
夢に出てくる“僕”が僕の本質なのなら、僕は……。
僕はどんな人間だった？
僕は何をしていた？
胸の中で何かが渦巻いているのが分かる。
解放される瞬間を、舌なめずりしながら待ってるのを。
記憶が戻った時、きっと解放されるんだ。
記憶は戻ってほしい。
でも……、

記憶が戻った時、僕はどうなる？

十月十九日　回帰＝狂気＝増幅

血塗れで笑う僕
寂しさで涙を流す僕
どちらが本当の僕なんだろう
どっちも僕なんだろう
ただ、狂気が勝った（まさった）だけの話だ
僕は、昔の弱い僕には戻らない
戻らないために、殺す
“僕”を生み出したのは“お前達”だ
おとなしく、死ね

泣き叫べ

死ね今日、退院して帰ってきた。
腹の傷はまだ完全に治った訳じゃないけど、入院し続けるほどでもなくなったから、退院。
しばらくは通院になる。
そういえば、僕の父さんだという人は一回しか来なかったな。
仕事が忙しいらしい。
病院にいる間、何も思い出せなかった。物の見事に。

いっそ清々しいほど思い出せなかった。
部屋を眺める。
机とテレビと本棚とパソコンとベッド。
基本的な物以外置いてない。
ある意味殺風景。
余計な物を置きたくない性格だったのかも。
膝に乗せた猫が甘えたそうに鳴いた。
まだらと、僕が名づけたらしい。
元は野良猫で僕が拾ってきたとか。
嬉しそうに僕にじゃれてくる。
抱き上げて、顔の高さに持ち上げる。

「ごめんな。お前のことも覚えてないんだ」

―藤山　葉月の視点―

鼎君の見舞いから帰ってきた。
今日は土曜で学校休みだから朝から波哉斗君と病院に行って、鼎君の家の前で別れて帰ってきた。

「あ、おかえり」

「ただいま。何もなかった?」

「大丈夫だよ」

あの日以来、祐介さんと一緒にいる。
僕を殺そうとした犯人と一緒に暮らしてるなんて、おかしな話かもしれないけど。

でも、いいんだ。
祐介さんには僕が二人を殺したことを話した。鼎君のことは伏せて。
なぜか、話したくて。
話してる間、じっと黙って聴いてくれた。
話し終わって、ふと思ったんだ。
僕がしてるのは犯人隠匿。
目の前にいる人物が犯人だと分かってるのに匿うのも、犯罪。
祐介さんが捕まれば、いずれ僕が匿ったことがバレる。
そして、僕が警察に通報しても祐介さんの証言がなくても、きっと僕が匿ったことがバレる。
祐介さんは警察に捕まりたくないし、僕だって捕まりたくない。
お互いにお互いの命を握ってるような状態。
だから、通報はしない。元から通報する気ないし。
それに、僕は鼎君との秘密だってある。
絶対に、捕まりたくない。

一三嶋　祐介の視点一

掃除も洗濯も全て終わった。
後は葉月が帰ってくるのを待つだけ。
あの子は、優しい。こんな僕に、行くところがないならいてくださいって。
その好意に甘えてる僕は、本当にダメな人間だ。
両親を自分が殺したって言われた時は、流石にびっくりしたな……。
正確には両親じゃないけど。
でも、気持ちは分かる。
誰でも両親を轢き殺した人間に、挙げ句に虐待されてたら殺したくなるよね。
僕なら、殺してるな……。

玄関が開く音がした。

「おかえり」

そう言うと、笑顔でただいま、と言ってくれる。
兄さんは、いつからあんな風になったのかな……。

「ただいま。何もなかった？」

「大丈夫」

そう、大丈夫。何もなかった。
僕達の生活は誰にもバレちゃいけない。
けど、あの子には一度会って、謝らなきゃ。
記憶取り戻してからの方がいいかな。
今日退院したばかりなんだから、もう少し後の方がいいよね。
許してくれとは言わない。ただ、謝りたい。まだらと一緒にベッドに寝転がっていた時だった。

「鼎ー！暇だ！付き合え！」

ドアを勢いよく開けて、兄さんが入ってきた。
寝返りを打って、背中を向ける。

「無視すんなよ！」

「……ウザい」

振り返りもせずに言う。テンション高すぎてウザい。

「……あ、ゴキブリ」

「――――――っ！」

意味不明な叫びを上げて飛び上がる。

まだらがびっくりして何かに向かって威嚇する。

ゴキブリ大っ嫌いなんだ。あの黒光する身体に楕円形。すばしっこい上に飛ぶなんてマジあり得ない。

「ゴキブリ嫌いなのは変わんねーな」

笑いながら言ってくるのがムカつく。

「ゴキブリ……どこ？」

「嘘だ」

「……。ところで、それ何？」

脇に抱えてる本を指差す。まぁ、どう見てもアルバムだけど。

「見るか？俺と一緒に」

「アルバムは見る。兄さんはいらない」アルバムを眺める。

鹿を指差しながら兄さんにしがみついて泣いてるのは、どう考えても僕だな。

兄さんが横に座って、訊いてもないのにその時の状況を話してくれる。

「それなぁ、お前が鹿せんべいやりたいって言うもんだからやった

ら、鹿に追いかけられて泣きながらしがみついて来たんだよ。小さい頃は可愛かったのに」

「悪かったね。今は可愛くなくて」

「いや、今も女装したら充分可愛い！」

「変態」

誰が女装なんてするか。

「昔は素直で可愛かったのになぁ……。女の子の服も素直に着てくれてたのになぁ……」

落ち込み具合が本気だし。僕に何を期待してんだろ。

「その前に弟に女装趣味持たせようとしないでよ」

「いいじゃねぇか！女装してメイド服着た可愛い弟が兄にご奉仕！夢見たっていいじゃねぇか！」

「変態！何想像してんのさ！ド変態！」

うわ……メイド服着た自分を一瞬想像しちゃったし……。

「はぁ……。ところで、この女の人誰？」

小さい僕を笑顔で抱いてる女の人。

母さんじゃない。誰だろう。

「あー……俺達の本当の母ちゃんだよ」本当の母さん……？つまり、僕の産みの親ってことか。
じゃあ、母さんは義理の母親なんだ。
この人、父さんと離婚したのか、死別したのかどっちなんだろ。

「この人はどうしたの？」

「あー……死んだんだよ」

「死んだ？病気か何かで？」

「隠したって仕方ないから言うけど、浮気相手に殺されたんだよ」

殺された……浮気相手に……。
それは違う。あの女が悪いんだ。あの女が。
血に染まりながらも、最後まで恨み言を残して。
僕に、どうして死んでくれないのって。

……えっ？

何？今の記憶？それに湧き上がってきた怒り。
血に塗れた女の人。血塗れのナイフを持った僕。

殺して何が悪い、と笑う僕。

「鼎？どした？」

「ううん。なんでもない」ただひたすらにアルバムを眺める。
後ろで兄さんがいびきかいて寝てるけど。
いびきうるさい。蹴って起こしてやろうかな。

それよりもさっきの……なんだったんだろう。
写真の中で笑ってる女の人が、恨めしそうな顔をしてナイフを僕を刺そうとしてくる。
そして、血塗れで倒れながら僕に手を伸ばしてくる女の人。
それを、血塗れで涙を流しながら眺める僕。
涙を流しながら血塗れの両手を見つめて、笑う僕。

殺して、何が悪い。

「う〝……ううぅうぅぅ……」

髪の毛を両手で掴んで、膝に頭を埋める。
この記憶は何？どう考えても僕の記憶なのは分かる。
でも、この記憶が本当なら、僕は本当の母さんを殺したんだ。

怖い。

僕が何をしたのか思い出すのが怖い。
暢気に寝る兄さんを見る。
兄さんは、きっと僕が何をしたのか知らないんだ。
思い出すのが怖い。

殺して何が悪い。

それは、つまり、人を殺すための言い訳。
僕は、消えない十字架を、重い罪を背負っている？
記憶を取り戻したら、僕は、人を殺し続けるの？ふと思う。
本当の母さんを殺したかもしれない。
それで、なんで誰かを殺したことに繋がるんだろう。
直感？

でも、なぜか分かる。僕は殺したんだ。
机の引き出しを調べよう。
記憶の手がかりが見つかるかもしれないから。
開けてみたら、ガムや飴の袋が出てきた。
中身は入ってる。
その奥に、大量の免許証や生徒手帳。
これ、まさか、僕が殺してきた人から取った物とか？
そう考えたら、僕はこれだけの人を……？

「う～……」

兄さんが起きた。
慌てて免許証を引き出しの奥に隠す。

「今何時？」

「四時半」

「二時間も寝てたのか」

欠伸をしながら起き上がる。
寝起きの顔間抜けだな。
足にまだらがじゃれついてくる。夕食までの間、ベッドにごろごろとして過ごす。
今日は父さんが久しぶりに帰ってくるらしい。
だから母さんが喜んでた。
張り切って料理作ってる。
父さんのこと、好きなんだなぁ……。

車の止まる音が聴こえた。

父さんかな?窓から覗いてみる。
車から降りる父さんと……女。
女……。
楽しそうに話してる。
仕事の部下と考えても、楽しそうに話してる。
部下じゃない?
ねぇ……、その女、何?
楽しそうに話しながら、キス。
部下じゃないよね。キスするとか……。
これと同じ様な場面、見たことあるな……。
母さんがいるのに他の女とキスなんて、浮気だよね。

お前はまた、僕達を裏切ったのか。

また……?考えても無駄だな。今は直感で感じるしかないから。
でも、これだけは確実。

浮気なんて、許さないよ……?父さんの仕事の話を聴きながら、ご飯を食べる。
僕の皿に盛りつけられてる料理だけ、量が半端ない。
食べれるから問題ないけど。
さっき違う女とキスしてたのは、なんとも思わないんだね。
母さんを騙してるのに。
それにさっきから自分の話ばかり。
母さんや兄さんの話は聴いてあげないの?
僕は記憶をなくしてるから、大した話は出来ないけどさ。
母さんなんて父さんの帰りずっと待ってるのに。
寂しそうな表情を微塵も見せずに、嬉しそうに父さんの話を聴いて

る。
裏切られたことを知ったら、どうするのかな？
父さんに制裁を下す？
女に制裁を下す？

「鼎は大丈夫なのか？」

「うーん……大丈夫だけど記憶はなかなか」

「そうか。早く戻るといいな」

言い訳みたいに聴いてきた。
本当に心配なんてしてるのかな。
見舞いなんてろくに来なかったくせに。
女と会ってたりして。
笑ってるけどさ、僕は知ってるんだよ。父さん。
あの女のこと、調べてみよう。肩まで湯船に浸かる。
今日はたらふく食べれて幸せ～。
病院の一ヶ月間は本当ひもじかった。
あれだけ食べても満腹になんないのが不思議だけど。
あれだけ食べてよく太らないな。
代謝がものすごくいいとか？
まぁ気にしなくていいや。
父さんは今日は家で休むみたい。
あれを見た後じゃ、体裁を保つためとしか思えない。
そういえば母さん、父さんとの間に子供産んでないんだな。
僕が考えることじゃないけど。
そろそろ出よう。

服を着て水を飲んで、部屋に戻る。
なんとなく鞄の中を調べる。学校の鞄。
中身を全部出してみる。
まぁ、調べたところで変わった物は何もない。

「んっ？」

底に何かある。底敷きを抜くと、袋にくるまれた何か。
袋から出してみる。

「……」

血塗れの、ナイフ。僕の首を絞める“僕”。
また……あの夢か。

やっと少しずつ思い出してきたか。

嬉しそうに笑いながら、話しかけてくる。

僕は、母親を殺したのか……？

そうさ。殺したのさ。でも、“僕”もお前も悪くない。あの女だって、“僕達”を殺そうとしたんだからな。正当防衛さ。

……。“お前”は、家族を信じてるか？

んー……、まぁ、信じてやってもいい。那奈瀬と母さんはな。

僕も、同じだ。

……まぁ、早く全部思い出せ。思い出して、父さんに近づくあの女、殺してやろうぜ。

あの人を？

今までだって殺してきたじゃないか。今更怖くなったのか？そんなはずないよな？思い出して、早くこっち側に来いよ。

殺す……あの女を。放っておいたら、また他人に家族を滅茶苦茶にされる。そんなの、許さない。

そうさ。母さんは父さんを本当に好きみたいだから見逃すけど、あの女はそうとは限らないだろう？金目当てかもしれない。どっちにしろ、また家族を壊される。

だから、

だから、殺してやろう。今まで母さんを信じてこなかった“僕達”が、信じようとしたモノを守るために。「じゃあ行ってきます」

「いってらっしゃい。気をつけてね」

「うん」

母さんから弁当を受け取って家を出る。

「あ、鼎君おはよう」

「おはよう葉月。別に迎えに来なくてよかったのに」

今日から学校に行くことになった。
葉月が迎えに来るって言うから断ったけど、本当に迎えに来た。
別に本当に迎えに来なくてよかったのに。
学校までの道は分かってるし。
まぁいいか。一人で行くのもつまんないし。
昨日は部屋の中を調べてた。
そしたら本の中から浮気現場を写した写真とか、ベッドの下から数種類のナイフが出てきたりした。
更にはスタンガンに、いつ誰を殺したか、を記録した日記帳。
見つからないように隠したけど。
もう、僕が殺人鬼だったのは確実だな。
ついでに父さんの会社の従業員を調べてみた。
個人情報見るためにね。顔写真だって載ってるし。
そしたら、あの女は従業員じゃないと分かった。
どうやってあの女、追い詰めてやろうかな。「じゃあ、また後で」

「うん、じゃあ」

葉月と教室は別だから、別れる。

「俺も昼一緒していいか？」

「別に。いいよ」

波哉斗が頭を撫でながら言ってくるけど、何がしたいんだろう？
ホント、波哉斗の行動って意味不明。
周りを見る。僕を嫌そうに見る人間がほとんどだ。
なるほどな……。
チャイムが鳴った。

席につこう。

新学期が始まってから教育実習生が来ているみたい。
一限目は数学。どんな実習生だろう。
チャイムが鳴って、教育実習生が入ってくる。

「……っ！」

息を、飲んだ。
父さんとキスをしていた、浮気相手であろう、あの女。じっと女を見る。
名前は、里宮（さとみや）　春海（はるみ）。
黒板に読みにくい字を書いていく。
あの女、僕には気づいてないのかな。
杜塚　鼎って名前、杜塚って名字も鼎って名前も、どうか分からないけど珍しいんじゃないかと思うけどな。
杜塚って名字を見て、もしかしたら息子じゃないかって思わないのかな？
気づいてないとしたら、馬鹿だね。
それもだけど……父さんも見境ないね……。
父さん、四十代後半のはずなのに二十代に手を出すなんてね。
恥ずかしくないのかな？
恥ずかしくないんだろうね。
本当……イラつく。
ねぇ、父さんと最後までヤったの？
罪悪感とかないの？
人の母親から、家族から父親を取って？
罪悪感とかないから、一人の夫であり父親である男を、取れるんだ

よね？
ひとつの家族を潰してもいいと考えてるから、付き合えるんだよね？
家族がいたなんて知らなかったなんて通用しない。許さない。

許さない。

お前なんかに、家族を潰させない。
潰される前に、僕がお前を潰してやる。結局、授業が終わるまで僕に気づかなかったみたい。
気づいてたかもしれないけど、無視したのかも。
何も知らないと思って。
父さんに近づいたのは、本当に好きだから？
金のためじゃないの？
僕は、浮気なんかで得た偽りの愛なんて、信じない。
結局金目当てなんだろう？
絶対、許さない。

「なぁ、鼎さぁ、ちょっとピリピリしてね？」

昼休み、屋上で葉月と波哉斗と一緒に弁当を食べる。

「そう？気のせいじゃない？」

「そうか？ならいいけどよ」

ピリピリしてるならあの女のせいだ。
あの女にどう近づくか、考えないと。

「何かあったら、遠慮なく言ってね」

「うん。ありがと」

でも、今は言う気が起きない。

ー藤山　葉月の視点ー

鼎君を見つめる。

笑ってるけど、たまに翳りがよぎる。

その翳りが気になる。

何か、思い出したのかな……？

それで、ピリピリしてるのかな。

なんだか、記憶をなくす前の目に似てる気がする。

気のせいならいいけど。

「ねぇ、なんで僕の頭撫で回すのさ？」

「なんかさ、お前の髪って触り心地いいなーって」

「ボサボサになるからやめて欲しいんだけど」

「やだ。手櫛でなんとかなるだろ」

はぁ、と諦めたような深い溜息を吐いた。

やっぱり仲いいなぁ。僕にはそんなスキンシップ出来ないもん。

鼎君もなんだかんだ言いながら、波哉斗君なら許してるし。

他人を信じるなって言ってたけど、波哉斗君なら信じられるんだろなぁ。

僕も、もっと鼎君に信じられるようになりたいなぁ。「お。チャイム鳴ったな。教室戻るか」

「そうだね。戻ろうか」

弁当箱を持って立ち上がる。ゆっくり歩きながら教室に戻る。

「じゃあ、帰りに」

「うん。後でね」

黒板の文字を写すけど、授業には集中出来ない。
まぁ、先生に説明されなくても理解出来るのが本音なんだけどな。
あの女がどうしても頭をよぎる。
よぎって、イライラする。
今日父さんが帰ってくるって言ってたな。
帰ったら、母さんや兄さんがいない場所で問い詰めてやる。

授業が全て終わって、三人でロッカーに向かう。
その途中で、あの女が男子と笑顔で話しているのが見えた。
その笑顔の裏で、何を考えてるんだろね？「じゃあ、また明日な！」
薪沢が手を振ってきたから振り返す。

「うん。バイバイ」

「じゃあね」

ホントあいつ、朝からよくあれだけ元気でいられるなぁ。
ある意味感心だよね。

「鼎君さ、やっぱり何かあったの？」

気まずそうな顔をして、でもはっきりと聴いてくる。

「どうして？」

「だって、鼎君暗い目してるから」

暗い目か。そうかもしれない。言ってみようかなぁ……。

「実はね、父さんの浮気現場見たんだ。キスしてたところ」

言ってみたら、流石に驚いた顔をした。
そりゃあそうだよね。何か思い出して落ち込んでると考えてたかもしれないのに、まさか父さんの浮気とは思わないよね。

「もし何かあったら遠慮なく言ってね。僕なんかに何も出来ないけど、聴くぐらいは出来るから」

「うん。ありがとう。またね」

「うん。また明日」

一通り話した後に、別れる。
愚痴を言うだけ言いまくって、少しすっきりしたかも。
家が見えてきた。父さんの車が見える。

「鼎じゃないか、おかえり」

「ただいま。父さんもおかえり」

笑顔で話してくるけど、何考えてるの？
他の女と遊んでるくせに。

「ねぇ父さん、里宮　春海とどんな関係？」「ねぇ父さん、里宮　春海とどんな関係なの？」

単刀直入に訊いてみた。表情ひとつ変えない。それがイラつく。
慣れてるんだろうね。表情を作るのが。

「春海のことをどこで知ったかは知らないが、鼎が思ってるような不埒な関係じゃないぞ」

ふーん……。不埒な関係じゃない……ねぇ。
異性を下の名前で呼ぶってさ、それだけ親密じゃないの？

「キスしてたのは、不埒な関係じゃないの？」

「ただの挨拶だよ」

キスが挨拶ねぇ……。外国なら挨拶でも通るかもしれないけど、ここ日本だよ？
挨拶って、どんな言い訳だよ。

「母さんは、何も知らないんだね」

「母さんに私の交友関係の全てを言う必要あるか？」

「母さんに聴かれたら、そう答えるの？」

そう聴いたら、黙り込んだ。まぁでも、母さんにも同じように言うんだろうね。

何も知らないんだね、という言葉に、交友関係を言う必要あるか？なんて、里宮　春海と特別な関係だって言ってるようなものだと思うのは、僕だけかな。

「大人の付き合いに子供が口出しする必要はない」

そう言って、強引に会話を終わらせて家の中に入った。

てかさ、何？子供が口出しするなって。

都合が悪くなったらそう言うんだね。

母さんには言わないよ。僕が口出しするようなことじゃないから。

まぁいいさ。子供だと思ってなめるなよ。

お前の大切な愛人、滅茶苦茶にしてやる。ご飯を食べながら父さんの話を聴く。

相変わらず自分の話ばかりだけど。早く終わらないかな。

はっきり言ってどうでもいいし。

本当に罪悪感とかないんだな。

あんなので僕をあしらえると思わないでよ。

里宮　春海だけじゃない。お前にも、痛みを味わわせてやる。

痛みだけじゃない。屈辱も。

うまくいけば、だけど。

里宮　春海は生かしておきはしない。

風呂に入ってきた。ちゃんと拭いたのに、髪から滴が滴る。
机に広げた写真を見る。浮気を写した写真。
そこに、握りしめたナイフを、思いっきり突き刺す。

「許さないよ……他の誰かが家族を壊そうとするなんて許さない。内側から全てをぶち壊しにしようとするお前も許さない。後悔させてやる」

まだ誰かを殺した記憶は戻らない。
けど、脳の記憶と身体の記憶は別物。
いくら脳が忘れていても、身体に染みついたモノはきっと忘れない。
最近気になるんだ。葉月の複雑そうなあの目。
僕の秘密を知ってるのかもしれない。
明日、訊いてみよう。ザシュ、ザシュ、とナイフを突き刺す音が響く。
刺して、抜く度に上がる悲鳴。
刺して、抜く度に跳ねる身体。
刺して、抜く度に飛び散る血。
ああ、なんて、気持ちのいい感触なんだろう。
なんて、鮮やかな赤。
なんて、楽しいんだろう。
夢だと分かっていても、気持ちよくて楽しくてたまらない。

「あはは……あはははは！」

自然と笑い声が漏れる。
ああ……僕は人殺しの性から逃げられないんだな。

気持ちいいだろ？楽しいだろ？

うん。気持ちよくて楽しくて、仕方ないんだ。

そうだろなぁ。どんなに逃げようとしたって、結局お前は殺人鬼なんだよ。快楽殺人者。これからも、殺して殺して殺しまくるのさ。

“僕”は所詮お前の一部。“僕”を爆発させたのはお前。

ここまで“僕”を大きくさせたんだ。戻れると思うなよ。

殺して殺して殺しまくる……それでもいいさ。やっと、思い出してきたんだからな。

殺してやるよ。

でも、それでも、“母親”って存在はお前にとって大きいんだな。

少しでも、未練を残すほど。

気づいてるか？母さんで埋め合わせてるの。母さんに執着し始めてるの。

……。

分かるよ。“僕”はお前。お前は“僕”。母さんを裏切ってほしくないんだろ？

だから、思い知らせてやれ。

言われなくとも。葉月と一緒に学校に向かう。

「ねぇ葉月、君は僕が人殺しだって知ってるの？」

単刀直入に訊いてみる。葉月って反応分かりやすいなぁ。

驚いた顔して見てくるなんて、知ってるって言ってるようなものだよ。

「何か、思い出したの？」

「思い出した訳じゃないよ。でも、僕が殺人鬼だって確信はある」

「そう……。隠してて、ごめん……」

俯いて、今にも泣きそうな顔をする。

「いいよ。葉月のことだから、記憶をなくしてる訳だし傷つけないために言わなかったんでしょ」

「誰か、殺すつもりなの？」

「昨日、言ってた浮気相手のあの女だよ。昨日は言わなかったけど、浮気相手は里宮　春海なんだ」

それを言ったら、言葉が出なかったらしい。
口をぱくぱくとさせて、目を見開いてる。

「ホントに？あの人を、殺すの？」

「そうだよ。奪われる前に、殺す」

「そう……じゃあ、学校終わったら、鼎君が人を殺してた場所、教えるね」

「うん」

薪沢が笑顔で手を振ってくるのが見えた。

―藤山　葉月の視点―

授業中だけど、机に突っ伏す。集中出来ない。
鼎君……何か思い出したんだ。
また、人を殺すんだ。目の前で数式を説明してるあの人を。
鼎君のお父さんの浮気相手だって言ってた。
そんな人には見えないのに。
人は、見かけで判断しちゃいけないってことなのかな。
鼎君、浮気については本当に許せないみたい。
過去に、何か出来ることはないのかな……。
僕に、何かあったんだろうなぁ……。
人を殺すこと以外に出来る、解決法。
お母さんには浮気のことは知られたくないって言ってた。
でも、お父さんはきっと罪悪感なんてないに決まってる。僕が何を言っても聴く耳なんか持たないに決まってるって。
だから、あの人を殺すの？お父さんを苦しめるために？
僕が言えたことじゃないけど、鼎君は、本当にそれでいいの？
ただ殺して問題解決なんて。
そんなのじゃ、またお父さん浮気するんじゃないかな。
鼎君、何か考えてるのかな。
僕には、見てるだけしか出来ないけど。教科書を鞄に詰める。やっと帰れる。
葉月は、本当は僕が人を殺すことで全てを解決しようとすることに、思うところがあるんだろね。
でも、僕は殺すよ。許さないから。
僕の疵（きず）を掘り返したんだ。疵に触れたきた人間は、容赦しない。

全てをぶち壊しにされる前に、全てをぶち壊しにしてやる。
それにしても、どうして葉月は僕が殺人鬼だって知ってるんだろう。
僕が話すしかないけど。
秘密を話すってことは、よっぽどのことがない限り話す訳がない。
何があったんだろう。まぁ、そのうち思い出すか。

「鼎ちゃーん！帰ろうぜ！」

波哉斗……相変わらずハイテンションだね。

「だから、ちゃんはいらないから」

「いいじゃんかよ。つーか葉月が待ってんぜ？」

「分かってる」

「……」

無言で歩く。波哉斗がとてつもなくウザい。
なんで歩きながら抱きついて頭撫で回すんだろ、こいつ。

「波哉斗、離れろ。ウザい」

「ウザいなんて酷い！鼎ちゃんがちょうど腕にすっぽり収まる身長なのがいけないんだ！」

「悪かったなちっちゃくて！波哉斗がでかすぎなんだよ！身長のことは言うな！すっごい気にしてるんだよ！」

「鼎はこれでいいんだって。これ以上大きくなんなくていい！ぐべらっ！」

なんかムカついたから、肘を腹に食らわせた。鳩尾に入れたかったな。

葉月が笑い出した。「はぁ……まだ腹痛ぇ……」

わざとらしく腹を撫でながら言う。

「波哉斗が抱きついてこなきゃいいんだよ」

「いいじゃんかよ。ちょっとしたスキンシップじゃねぇか。まぁ、今日はここら辺でアディオス！」

抱きつかれる方からしたら、すごくうざいんだけどね。

けど、本当、波哉斗は憎めないなぁ。

でも、僕は波哉斗を騙してることになるんだな……。

波哉斗には、知られたくないな……。

「うん。また明日」

苦笑いをしながら手を振る。

さて……。

「じゃあ葉月、案内して」

「……うん」

人気のない道を歩く。田んぼや畑と、小高い山しかない。
その、小高い山に入っていく。
しばらく歩いていくと、いかにも廃墟という建物が見えてきた。
見た目はボロボロ。
でも、なんだろう……。なんだか懐かしい……。
扉を開けて、中に入る。中に入る。当然、薄暗い。
奥に進む。奥に進むにつれ、匂いが強くなる。
ああ……懐かしい、血の匂いだ。
気分が高揚する。この匂いが、たまらない。
奥の部屋の扉を開ける。一番、この部屋の匂いが強い。
部屋を見渡す。壁に染みついた血の跡。床についた斧による傷。床にうっすら残る血の跡。
ああ……蘇ってくる。
この机の引き出しに一番愛着のある愛用のナイフがあるんだ。
引き出しを開ける。銀色に鈍く輝く、沢山の人間の血を吸ったナイフ。
そのナイフを手に取り、光に翳す。
あぁ……綺麗だよ、とても。
ナイフを口に近づけ、刃を舐める。
ナイフを舐めるのは、僕の癖。
僕の脳が勝手に錯覚してるんだろうけど、血の味がする気がする。
ベッドを見る。血が染み込んで変色したベッド。白い部分が見えない。
そのベッドにうつ伏せになって寝転んでみる。ナイフを握ったまま。
ベッドの匂いを嗅ぐ。いろんな、血の匂いがする。
ここで、殺したんだ。容赦なく、このナイフで。
ああ……ここだ。ここが、僕のいるべき場所だ。
帰るべき場所だ。

「ただいま」

―藤山　葉月の視点―

鼎君が中に入った。僕も中に入る。
あの日、一度来ただけの廃墟。
この建物に染みついたこの匂い、血の匂いだよね。
一度嗅いだだけなのに、慣れたのかな。なんとも思わない。
鼎君が奥の部屋のドアを開けて、鞄を置いた。
懐かしそうな笑顔で、部屋を見渡す。
机の引き出しからナイフを出して、笑顔で見つめる。
そしてうっとりとした笑顔を浮かべて、ナイフの刃を舐める。
まるで、子供のように無邪気に。
そして、ナイフを握ったまま、ベッドに寝転ぶ。
一度顔をベッドに押しつけると、大きく呼吸したのが分かった。
顔を右に向けて、ナイフを見つめる。

「ただいま」

笑顔で呟いた。うっとりとした笑顔で、無邪気にナイフを見つめて。

「ねぇ葉月、思い出したよ。ここで殺したこと。葉月との秘密。全部」

「え……ホントに……？」

「ねぇ葉月。僕もね、親を殺したんだよ。母親を」寝転んだまま、葉月を見つめる。自然に、唇が笑みを形作る。

「殺したって、本当に……？」

「本当だよ。でも、あっちだって僕を殺そうとしたんだから、正当防衛だよ」

そう、あれは正当防衛だ。あっちから殺意を持って襲いかかってきたんだから。

未だに右腕に残る傷痕。消せるものなら消し去りたい。

「じゃあ、今のお母さんって……義理の？」

「そう、義理の母さん。記憶をなくして初めて思ったけど、本当の母親より母親らしいよ。僕がこんなこと思うなんてね」

本当、不思議だ。今まで信じてこなかったのに。

記憶をなくして違う視点で見ることで、価値観が変わるものなんだな。

浮気だけは、どうあっても許さないけど。

「あの人、殺すの？」

そう言って、俯いた。

「そうだね。殺すよ」

どう痛めつけて、苦しめて、殺すのか、もう決めてある。

「僕に何か出来るなら、手伝うよ」

何か決意したような瞳で、僕を見る。

「どうして？葉月、本当は僕が人を殺すの、嫌いなんでしょ？」

「本当のことを言うと、反対だったよ。でも、今度は僕が鼎君の罪を半分背負うから」

そう。その覚悟、あるんだ。

僕と君は運命共同体。どこまでも、共に堕ちていく運命。ナイフを置いて手を伸ばす。

その手を、葉月は笑顔で取った。「ただいま」

母さんが笑顔で来た。僕も笑顔を返す。

あの後、葉月と別れてそのまま帰ってきた。

「おかえりなさい。今日は遅かったわね」

「うん。ちょっと本屋に寄ってたんだ」

勿論、嘘だけど。僕が殺人鬼だなんて知られたくないから。

もし、僕が殺人鬼だって知ったら、どんな顔をするんだろう。

まぁ、その時はその時か。

「そうそう。来週ね、同窓会があるんだけど、母さん行ってもいいかしら？」

楽しそうに両手を合わせながら、聴いてくる。

「勿論いいよ。そんなの僕に聴かなくていいのに」

「だって、何も言わずに出かけたら駄目でしょ？夜遅くなると思うし」

「あ～そっかぁ。でも行っていいなんて聴かなくていいよ。楽しんできて」

「ありがとう。後ね、明日お父さん帰ってくるって」

父さんが……。最近やけに帰ってくるな。
僕があんなこと訊いたからかな。

「ねぇ母さん」

「なぁに？」

「もし、父さんが浮気なんてしたら、どうする？」

そう訊いたら、表情が曇った。
当たり前か。

「大丈夫よ。お父さんはいい人だから」

笑顔でそう言い切った。可哀想な人だな。信じてるのに、騙されて。

「母さん、父さんのこと好き？」

「勿論、好きよ。鼎も那奈瀬もね」

―藤山　葉月の視点―

「おかえり」

祐介さんが笑顔で出迎えてくれる。

「ただいま」

出迎えてくれる人がいるっていいな。
両親が死んだあの日から、出迎えてくれる人なんていなかったから。
帰りを待っててくれる人がいるだけで、心が軽くなるなんて。
でも、祐介さんにも、これからやることは言えない。
もしかしたらバレるかもしれないけど、バレないように頑張らなきゃ。
僕は隠し事が下手だから。
とりあえず、鼎君から頼まれた物、用意しなきゃ。
釘と金槌と消毒用アルコール。
こんな物、何に使うんだろう？でも、必要な物なんだよね。
鼎君が誰かを殺すのは反対だった。
でも、僕だって人殺しで、挙げ句は鼎君まで巻き込んで。半分僕の罪を背負わせて。
だから、今度は僕が鼎君の罪を背負うよ。
僕は偽善者だ。
偽善者でもいい。鼎君のために、どんなことにでも手を染める。
それが、人殺しでも。

―杜塚　那奈瀬の視点―

ご飯を食いながら、ちらっと鼎を見る。
なんだろうな……。いつもと同じように見えるのに、なんか、違う。
何が違うのかって聴かれたら、困るけど。
でも、なんか違うんだ。
なんというか、雰囲気が記憶をなくす前に戻った？
そうだとしたら、あいつ、もしかして記憶が戻った？
でも、戻ったんなら言うよな？
気になるんだ。本当の母ちゃんの写真見せた時のあの反応。
写真を見た時の、あの暗い顔。
俺のせいで、何か思い出させちまったのか？
なぁ鼎、お前、変なことしてねぇよな？
見ちまったんだよ。ベッドの下に隠されてたナイフ。
そして、ノート。名前と日時と、殺害方法。
あれは、なんなんだ？どういうことだ？
それに、机に写真をばらまいて、そこにナイフを突き立てて。
何か言ってたけど小さくて、許さないよしか聴こえなかった。
ドアが少し開いてて、見ちまったんだよ。
お前、何を隠してんだ？ちらっと、バレないように兄さんを見る。
朝から、僕を見る目が変だ。
もしかして、部屋に隠してる写真とか見たのか？
だとしたら、厄介だな。まだなんとも言えないけど。
後で部屋を調べよう。兄さんが何か見たのなら、動いてるはずだから。
でも、兄さんが気づいたとして、どうする？
殺すのか？危険因子を残さないために？
記憶をなくす前の僕なら、迷わず殺す決断をしてただろうね。
でも、記憶をなくして違う視点で家族と接してしまったことで、気づいたんだ。
母さんと兄さんが、僕のことを大切にしてくれてること。
記憶をなくす前なら、そんなもの信じなかったのに。

気づかなかったらよかった。そうしたら、迷わず殺せたのに。
なんで、気づいたんだろう。そうしたら、こんな訳の分からない葛藤に苛まれる必要なんてないのに。
イライラする。僕は、“人”を捨てるはずじゃなかったのか？
こんなことで、悩んでどうする？

ご飯を食べ終わって、部屋の中を調べる。
机の中の身分証明書や、本に挟んだ写真に動かした痕跡はない。
まさか、一番最悪な物を見られたのか？
ベッドの下から、ナイフと日記帳が入ったケースを出す。
蓋を開ける。

「……」

位置が、違う。順番通りに並んでない。
一番最悪な物を、見られた。
行動を起こせば、気づかれるかもしれない。
……それがどうした。邪魔をする人間は容赦なく殺すんだろう？
なら、殺せばいいじゃないか。家族だろうが、関係なく。
今まで、そう思ってきたじゃないか。

その時、ドアが開いた。

「鼎……？」

兄さんが、無意識にナイフを握りしめている僕を、見る。「兄さん……」

兄さんが、握りしめたナイフを見つめる。
最悪だ。疑われているっていうのに、こんなナイフを握りしめているところを見られるなんて。

「鼎、お前、それなんなんだ?」

そう言って指差すのは、ナイフと日記帳。

「ノートの中身……見たの?」

「見たから、訊いてんだよ」

ドアを閉めて、僕の横に立つ。

「そのノートに、父ちゃんの会社の人の名前書いてあったよな?」

「うん」

「腕や足の骨を折り砕いて、ナイフでめった刺しってどういうことだよ?」

いいや、言っちゃえ。どうせ疑われた時点で終わりなんだ。
このままバラしちゃえ。

「そのままだよ。斧の刃じゃない部分を使って、殴って折り砕くんだよ。楽しめなくなってきたら、ナイフで死ぬまでめった刺しにして殺したんだよ」

握りしめたナイフを見つめる。

「本気で、言ってるのか？」

声がちょっと震えてる。

「そうだよ。このノートに書いてる人全員、僕が殺したんだよ」

「嘘……だろ？」

「嘘じゃないよ。僕が、殺したんだ。僕は、殺人鬼なんだよ」

「……」

「ねぇ兄さん。母さんを殺したのも、僕なんだよ」

兄さんを見上げて、微笑む。

―杜塚　那奈瀬の視点―

「ねぇ兄さん。母さんを殺したのも、僕なんだよ」

そう言って、俺を見上げて微笑んだ。

子供のように無邪気な笑顔なのに、禍々しい闇を孕んだ笑み。

なのに、泣きそうに見えるのは、なんでだろう。

「母ちゃんを、お前が……？浮気相手に殺されたんだろ……？」

「違うよ。母さんはね、浮気相手に誑かされて、僕を殺そうとしてきたんだよ。だから、殺した。でも、正当防衛だよ」

怒りを露わにして、ナイフを握りしめて、吐き捨てるように言う。
俺は、何も言えない。

「母さんを殺して、その罪を浮気相手に擦りつけるために、浮気相手も殺したんだ」

何も、言えない。

「ねぇ兄さん、ちょっと外に出ようよ」

母ちゃんに鼎とコンビニ行ってくるって出てから、歩いて十五分。公園に着いた。夜だから誰もいない。
鼎がなんもない地面に、しゃがみ込んだ。

「ここでね、殺されそうになって、母さんを刺したんだよ」

淡々とした声で話す。氷のような冷たい瞳をして。

「母さん、最後にどうして死んでくれないのって言って死んだんだよ。僕に、死んでくれないのって」

お前、母ちゃん好きだったもんな。そんなことが、ホントにあったのか？

「お前、ホントに殺したのか？だって、お前は優しい奴じゃねぇか。虫も殺せないくらいの。なのに、なんで……」

お前は優しい奴だろ？よく笑って、よく泣いて。

それなのに、どこで狂っちまったんだ？

「うる……さい」

かろうじて、聴き取れるくらいの小さな声。

「うるさい！」

叫びながら、俺に掴みかかってきた。

いきなりの不意打ちに、押し倒されて馬乗りになる。

「昔の僕はもういないんだよ！捨てたんだよ！もう戻れないんだよ！僕がこうなったのも、全部お前達のせいじゃないか！」

―杜塚　那奈瀬の視点―

「二年前、僕がどんな思いをしたか考えたことがあるのか！寂しくて苦しくて、なのに、お前達は話すら聴いてくれなかったじゃないか！」

怒りを込めて、泣きながら叫ぶ。

鼎の涙を見たのは、いつ以来だろ……。

「父さんは仕事仕事って、話すら聴いてくれなかった。自分の話ばっかりで。話したって、僕の気持ちなんて分かってくれなかった」

胸ぐらを掴んでいた力が弱まる。

俺の胸に、顔を押しつけてきた。

「兄さんは、家に帰りすらしなかった。帰って来ても、金金って。兄さんの嫌味に、僕がどれだけ傷つけられたか知らないんだろう？」

「……」

何を言っていいのか、分からない。

俺の言葉が、鼎を傷つけてるのは分かってた。でも、俺は、そんなこと知るかって、省みなかったんだ。

「母さんは、毎日毎日どこかに出かけて。口を開けば、聴きたくない父さんの悪口ばかり。浮気だなんて信じたくなかった。でも、やっぱり裏切られて。挙げ句は、浮気相手と一緒になるために、死んでって」

俺は、今更何を言ってやればいいんだ？

「だから、信じられなくなった。何もかも、家族も、敵だって。それなのに……」

顔を上げて、俺を見つめる。

「記憶なんてなくさなかったらよかった。記憶なんて取り戻さなかったらよかった。そしたら、兄さんも迷いなく殺せたのに」

鼎が立ち上がる。そのまま、背を向けてどこかに行こうとする。

「鼎！？」

「このことを警察に言うかは、兄さんの好きにしたらいい。犯人を知ってるのに隠すのも、犯人隠匿罪になるよ？証拠になる死体は見

つからないだろうけど。僕が食べて証拠隠滅したから。兄さんが決めたらいい。でも、邪魔するなら兄さんは敵だ」

さっきまでの悲しそうな表情は完璧に失せた。
変わりに、敵意を露わにした目を、向けてくる家までの道を、僕も兄さんも何も言わずに歩く。
兄さん、どうするのかな。
いっそのこと、警察に言ってくれればいいのに。そしたら、敵としてなんの迷いもなく殺せるのに。
警察に捕まるのは嫌だから、逃げるけど。
そうなったら、葉月も連れて行かなきゃな。
いずれ、葉月のことも明るみに出る。
葉月、どう思うかな。今までの生活を壊されることになるから、責められるかな。
でも、葉月だって僕と運命を共にする覚悟はあるはず。
だって、僕と一緒に人を殺すことを選んだんだから。
ああ、そうだ。どうせ警察に言うなら、里宮　晴海を殺した後に言ってほしいな。
今警察に言われたら、里宮　晴海を殺せなくなる。
兄さんが警察に言う前に、里宮　晴海を殺そう。
兄さんのことだ。悩みに悩んで、時間がかかるはず。
予定変更だ。葉月に頼んでいた物が揃ってたら、明後日に決行だ。
そうだ……兄さんの目の前で里宮　晴海を殺すってどうだろう？
ふふ……とっても楽しそうだ。
兄さんに口出しさせないために、兄さんにも殺させるって手もあるな……。
まぁ、これから考えようか。

―藤山　葉月の視点―

「葉月、お風呂終わったよ」

「うん。もうちょっとしたら入るね」

祐介さんに先にお風呂に入ってもらって、鼎君に頼まれた物を鞄に詰めた。

釘と金槌と消毒用アルコール、本当に何に使うんだろう？

釘と金槌は少しは想像つくけど……身体のどこかに打つとか。

アルコールは……分かんないや。

「葉月、携帯鳴ってるよ。あの子から」

「は～い」

急いで出る。なんだろ。

「もしもし？」

《葉月？頼んでた物、揃った？》

「うん。大丈夫だよ？」

揃ったか聴くってことは、計画実行？

《明後日、殺るから》

「うん、分かった」

《それとね、兄さんにバレた》

バレた……？まさか、人殺しが？

「ホントに？」

《うん、バレちゃった。兄さんが警察言うかもしれないから、そうなった場合、僕と一緒に逃げる覚悟、しといてね》

「うん。分かってるよ。僕は、鼎君と一緒だよ」

携帯の向こうで、鼎君が笑ったのが分かった。

《そう。じゃあ、また明日》

「うん。またね」

携帯を閉じる。お兄さんにバレちゃったんだ……。

お兄さん、どうするのかな……。

どっちにしても、逃げる覚悟はしないと。

逃げるなら、祐介さんも連れて行かなきゃ。説明しなきゃいけないし、鼎君にもちゃんと話さなきゃ。

「祐介さん、話したいことあるんだ。落ち着いて聴いてね」

一三嶋　祐介の視点一

眠れない。布団に入って二時間くらい経ったけど、眠れない。

少し顔を上げて、葉月を見る。ぐっすり眠ってる。

眠れないのは、つい四時間前くらいに聴いた話のせいだ。

あの子は人殺しで、今までに沢山の人を殺してて、葉月のおじさんとおばさんの事件の隠蔽を測って、記憶を取り戻して父親の浮気相手を殺そうとしてるなんて。
葉月は、浮気相手殺しを手伝うつもりみたいだ。
頼まれた物を準備して、あの子が望むなら、人を殺すって。
そして、そのことがあの子のお兄さんにバレてしまったから、警察に通報されたら逃げるって。
僕だって捕まりたくない。本当は罪を償うべきなのは分かってる。
子供を埋めて、あの子と葉月を殺しかけたんだから。
でも、捕まりたくない。
僕は、どうしたらいいんだろう。
二人が人を殺そうとしてるのを分かってるのに、それをただ黙って見てるなんて。
本当なら警察に言うべきなのは分かってる。
でも、僕にはその勇気がないんだ。
僕は、臆病だ。とんだ卑怯者で、人間失格だ。
我が身可愛さに、葉月とあの子が血に手を染めるのを、黙って見てるんだ。後十分で授業が終わる。早く、早く終われ。
明日に向けての準備をしないと。
後十分なのに、やたら長い。と言うより、今日は長かった。
今日でこんなに長く感じたんだから、明日はもっと長く感じるだろうな。
はぁ……つまんないなぁ。しかも、数学で説明してるのあの女だし。
教師を目指してるくせに、よく浮気とか出来るよね。
後、五分。

「あ、ごめん。忘れ物した。先に行ってて」

「ほぇ？忘れもん？珍しいな鼎が。待ってるから行ってこいって」

「うん、ごめん！」

そう言って教室に戻る。忘れ物は、嘘だけど。

あの女、教室にいるかな。

いたら、問い詰めてやる。

教室に入ると、あの女がいた。

生徒名簿を眺めて、何を考えてるんだろうね。

「杜塚君、どうしたの？」

「先生に訊きたいことがあるんですよ。僕の父さんと、どんな関係ですか？」

単刀直入に訊いたら、流石に驚いた。

「なんの話？」

「僕の父さん、杜塚（もりづか）　剛（つよし）っていうんです。知ってるでしょう？父さんとどんな関係だって訊いてんだよ」

里宮　晴海を睨む。そしたら、身体を竦ませた。

「何も……ただの友達よ？」

「へぇ……ただの友達がキスとかするんですね」

「餓鬼がうるさいわね。餓鬼は黙ってろよ」

作り笑顔をやめて、ウザそうな顔を向けてくる。

「父さんと別れる気、ないんですね」

「当たり前でしょ？ねだれば金をくれるんだもの」

やっぱり、金目当てか。欲しかないんだな。

「餓鬼だと思ってなめんなよ。お前なんかに、父さんは渡さない。父さんを手に入れられると思うなよ。お前を、僕は許さない」

くるっと背を向けて教室を出る。

里宮　晴海、僕の父さんに手を出したことを後悔させてやる。

明日が楽しみだ。

十月二十四日　里宮　晴海

釘を一本
また一本
三本
四本
五本
六本
七本
八本
九本
まだまだ刺すよ
痛い？知らないよ
十本「じゃあ、行って来ます」

いってらっしゃいという声を確認して、ドアを閉める。
母さんに記憶が少しずつ戻ってると話したら、すごく喜んだ。まるで自分のことのように。

ふと思う。母さんが本当の母親だったなら、僕はこの手を血に染めることはなかったんだろうかって。
まぁ、そんなこと考えたって仕方ないけど。
考えてしまうんだ。
僕は、僕を止めてくれる誰かを求めてるんじゃないかって。
止めてくれる誰かなんか、いらないけど。
僕が殺戮をやめる時、それは僕が死ぬ時だ。

「おはよう、葉月。覚悟は出来た？」

「おはよう。うん、大丈夫だよ」

いつも通りの笑顔を向けてくる。僕が見る限り、躊躇いはない。

「放課後、決行だよ。昨日電話で話した通りにね」

「うん。うまくやるからね」現国の授業を聴きながら、シャーペンをノートの上で転がす。
何度もカチカチと押すのを繰り返す。
相変わらず読みにくい字だな。
時計を眺める。後一分。
後一分で、計画が始まる。
先生を眺める。
三……二……一。
チャイムが鳴った。

「なんだよー、俺は一人寂しく帰るのかよー。今度休み付き合えよ！」

大袈裟に人差し指をビシッと伸ばしながら向けてくる。

「分かってるよ。ちゃんと埋め合わせはするから。葉月も付き合ってよ」

「えっ……、僕も？」

「なんだ、嫌なのかこの野郎！」

薪沢が葉月に抱きついて、頭をわしゃわしゃと撫でる。

相変わらず、ウザいな。僕達がやろうとしていることを知らない笑顔。

そのまま何も知らずにいてくれたらな。

何も知らなかったら、兄さんのように悩まずに、苛まれずに済む。

「じゃあ俺は寂しく一人で帰るわ。じゃあなー！」

一人で寂しくとか言いながら、すごい元気だけど。

あいつのあのエネルギーはどっから湧くんだろう。

「さて、殺ろうか」

葉月の目つきが変わる。

ー藤山　葉月の視点ー

「あ、先生ちょっといいですか？」

帰ろうとした先生を呼び止める。
勿論、里宮先生を。

「何か用？」

「ちょっとこっちまで来てください」

先生を手招きする。あまり表に出さないようにしてるけど、めんどくさそう。
子供の相手がめんどうなら、教師なんて目指さなきゃいいのに。
教師って給料いいのかな？
先生達の車が止めてある場所に入る。
ここなら、誰かに見られる心配ない。
そもそも生徒はほとんど帰ったし、いたとしても部活とかで皆忙しいし。

「どこまで行くの？」

先生がイライラしてるのを、隠しきれてないのが声で分かる。
鼎君に指示されたポイントはここだよね。
一際大きなイチョウの木がある場所。

「先生、ここ見てください」

地面を指差す。勿論何もないけど。
なんだかウザそうに地面を見る。
後ろから、小さく火花が散る音がする。
先生はまだ気づかない。
ちょっと気を引くだけでいいんだ。

「何よ？何もないけど？」

鼎君が、背後からスタンガンで気絶させるから。
スタンガンを押しつけらて、呆気なく倒れる。
鼎君が氷のような瞳で、先生を見下ろす。

「さぁ、詰めようか」

鼎君が大きな黒い鞄を出す。
先生を鞄に詰めて、廃墟まで運ぶみたい。
僕が鞄を広げて、鼎君が先生を鞄に入れる。
鼎君器用だなぁ。入るのかと思ったけど、うまく手足を折り畳んで入っちゃった。

「誰かが来る前に行こう」

「うん」里宮　晴海の手足を縛り終える。手は後ろ手に。
里宮　晴海を詰めてた鞄を畳んで、学校の鞄にしまう。
葉月にはこんなのでいいの？って言われたけど。
綿密に計画したところで、どこかでぼろが出る可能性があるんだ。
綿密に計算した計画ほど、ぼろが出たら呆気なく崩れる可能性が高い。
硝子が割れるよりも呆気なく。
なら、最初から間抜けな計画の方がうまくいくかもしれないだろう？
実は簡単な答えなのに、深く考えすぎて答えを見失うことはよくあることだ。

「これからどうするの？」

「今日は殺しはしないよ。しばらくは飢えと渇きにしんでもらうん

だ。苦しませて、楽しむんだよ」

楽しむ方法はいくらでもある。

「ただ傷つけるだけが苦しませる方法じゃないからね」

食欲は本能。本能を満たせないのは苦しいだろう？

里宮　晴海がもぞもぞと動く。起きるな。

「あんた達……私を縛りやがって……許さねぇからな！」

随分威勢がいいな。それがいつまで持つか。

楽しみだな。

「葉月、帰るよ」

「え？あっ、うん」

慌てて葉月がついてくる。

「待ちやがれ！見てろ、許さねぇからな！」

「だからあの時言ったのに。僕はお前を許さないって。隙がありすぎるよ。じゃあね、せいぜい後悔しなよ」

嫌みでとびっきりの笑顔を向ける。

ふふ、これからが本当に楽しみだ。

ドアを閉める。頑丈に縛ってあるから、女の力で外れるはずがない。

逃げられる恐れはない。

外に出た時だった。

「あ、あの……鼎君、話したいことがあるんだけど……」

気まずそうに俯いて話す。

なんだろう？僕に話したいことって。「……」

「……」

「……」

葉月の説明が終わった途端、三人共黙ってしまって静かになる。

今は葉月の家にいる。家に電話して遅くなるとは伝えといた。

兄さんはもしかしたら、僕が人を殺すつもりだと思ってたりして。

間違ってないけど。

説明の内容は、僕が入院してる間に僕を刺した犯人と会って、匿ってたってこと。

まさか、自分を殺しかけた犯人を匿って、犯人は殺しかけた子供の家に入り込むとはね。

どっちもある意味、神経図太いな。

「あ、あの……ごめんなさい！」

いきなり大声を出して土下座し出した。

「何が？」

「え……？だって君を刺して殺しかけたから……」

「確かに死にかけたけどね。包丁があと一センチずれてたら、心臓に刺さって死んでたらしいよ。まぁ、助かったから許してあげる」

二人が驚いたように僕を見る。
許さないと言ったところで、こいつをどうすることも出来ないし。
こいつを殺したら、葉月はきっと怒るだろうな。
それに警察に突き出したところで、匿ってたことがバレたら元も子もない。

「許してあげる代わりに、君は黙っててよ。僕が何をしようと、君には関係ない。共犯になりたいなら別だけど、黙るにしろ関わるにしろ、良心の呵責に悩むのは自分の中だけにしろ。この意味、分かるよね？」

唇に人差し指を当てる。
僕の言う通りにしてる間は何もしない。
けど、牙を剥くんなら話は別だ。
まぁ、しばらくはその心配はないだろうけど。「そういえばさ、愛しのお兄ちゃんはどうしたの？」

笑顔で頬杖をつきながら、嫌みたっぷりに言ってみる。
みるみる目に涙が溜まっていく。
なるほど。やっぱり捨てられたんだ。

「だから言ったのに」

「うん……、君の言う通りだよ……。連絡なんて勿論来ないし、電話しても出ないし……」

「まさか、電話は携帯からしてないよね？」

「う、うん……？」

「ならいいけど。携帯は使わない方がいいよ。携帯の位置情報とかで電話した場所が分かるんだから。これからは兄には電話しない方がいい。捕まりたくないでしょ？警察を欺くんならそういうところから気をつけないと」

まぁでも、気づかない警察も間抜けだけど。

今までであれだけの人数がほぼ同じ場所で、同じような時間帯に失踪してるのに僕に辿り着かないんだから。

「なんで……僕を許してくれるの？」

いきなりそんなことを聴いてきた。

なんで？本当の意味で許しはしないよ。

ただ、今回は見逃すだけだ。

次はない。

「今回は見逃すだけだよ。次はないけどね。それよりも、君の兄さんはどうするの？」

「……どうしようもないよ。連絡もないし、行くところも分からないし……」

「何その貧弱な思考。君の兄さんは君を捨てて逃げたんだよ？利用するだけ利用して。報復しようと思わないの？」

必ず、三嶋　祐介にも復讐心はある。僕だってあの男に恨みがある。

それを利用したら、あの男に報復する時より面白くなるかもしれない。

「で、でも……兄さんなのに……」

「家族とか関係ないよ。利用されて捨てられた時点で、敵だ」

僕は、必ず報復するよ。「ただいま」

「おかえり。ご飯出来てるからね」

母さんが笑顔で来た。兄さんがリビングのドアの前で、複雑そうな顔をしてる。

「うん、ありがとう」

兄さんの前を、素通りしてリビングに入る。

夕食を食べて風呂に入って、自室でくつろいでいた時だった。

兄さんが、いきなり部屋に入ってきた。

「鼎、ちょっといいか？」

「何？」

敢えて、笑顔を浮かべて兄さんを見る。

「お前、今日遅かったのは、まさか何かしたんじゃ……」

「だとしたら、どうするの？警察に言う？」

「……っ！」

「言うなら早い方がいいよ？僕が父さんの浮気相手を殺す前に」

「なん……だって？」

「だから、父さんの浮気相手、殺すつもりなんだよ。言うなら今だよ？」

挑発してみる。でも、何も言ってこない。辛そうな顔をするだけで。

「兄さん、なんで警察に言わないの？言ったら、罪悪感なんて感じなくて済むだろうに」

そう、言えば罪悪感なんて消えるはずだ。

それとも、兄さんのことだから通報することが、警察に僕を“売る”っていうことに繋がるのかもな。

僕に人を殺させたくない。でも、僕がこうなったのは過去の自分達が犯した罪のせいかもしれない。

兄さんはきっとそう考えてるんだろうな。

ねぇ兄さん、分かってるよ。兄さんが警察に言えないこと。もしかしたら、があるかもしれないけど。

でも、きっと言えない。

大丈夫だよ兄さん。そんな罪悪感、僕が消してあげるから。里宮晴海を監禁して三日経つ。

最初は騒がしかった里宮　晴海も、空腹と渇きでおとなしくなった。

里宮　晴海の目の前で、空腹と渇きに喘ぐ女を眺めながら、コンビニで買ってきた牛カルビ弁当とオムソバ、おにぎりみっつにプリンとエクレアにどでかいティラミスを食べる。

里宮　晴海が物欲しそうに見る。

そりゃあ欲しいよね。食べたいよね。
腹が空腹を訴えて仕方ないだろう？
でもあげないよ。お前にやる食料なんかひとつもない。
葉月が、部屋の隅で一部始終を眺めている。

「お願い……何か食べさせて……もう死にそうよ……。ごめんなさい……謝るから……許して……何か飲ませて、食べさせて……」

誰が許すかよ。苦しんで死ねばいいんだ。

「ふーん、何か飲みたいの？」

バケツを持ってきて、その中に一・五リットルのペットボトルの水を入れる。
そして、その中に洗濯用の粉洗剤を入れる。

「はい。飲みたいなら飲めば？」

「こんなもの……飲める訳ないじゃない！」

「そう、じゃあ我慢すれば？」

椅子に座ってまた食べる。女を苦しませながら食べる食事は、なんて美味しいんだろう。

「ごめんなさい……許して……食べさせて……なんでもするから……警察になんて言わないから……」

許さないさ。お前が死ぬまで。それにしても服を全部脱がしてよかったな。

一昨日、ふと女の痩せ細っていく姿が見たくなって服を剥ぎ取ったんだ。
何を勘違いしたのか、抱かれてもいいからなんて言ってきたけど。
想像しただけで気持ち悪い。何考えてんだか。
でも、肋骨（あばらぼね）が浮き出た上で上下する胸は、綺麗だ。美しい。
やっぱり、人間は死にゆく姿が美しい。
浮き出た肋骨。食料と水を求め跳ねる喉。栄養を求め喘ぐ肉体。
いつ、脳は全ての細胞に自殺命令を出して、責任放棄をして活動停止するんだろう。
まぁその前に、ちょっと痛めつけるから、それで死んじゃう可能性もあるけど。
弱ってきてる身体だから、ショック死しちゃうかなぁ？
まぁいいや。死んだらその時だ。
鞄から釘の入った瓶と、金槌を取り出す。

「それで、何するつもりよ……！？」

「何って分かんない？これを足に、ね……？」

釘を一本、つまんで金槌で足に打つ真似をする。

「いや……！ごめんなさい！謝るから……警察になんて言わないから……！許して……許してください！」

釘を一本、足に打ちつける。

響く悲鳴。滴る赤い雫。釘を一本、また打ちつける。
その度に弱った肉体から、不思議なほどの絶叫が上がる。
大袈裟だなぁ。足に釘を打ったくらいで。

これから、これより痛いことをするのに。

「ひっ……ごめんなさい……ごめんなさい……もうやめて……ホントに死んじゃう……」

死んでもいいんだよ？いつでも。

お前は僕がナイフで強制的に死なせたりしない。あくまで、お前自身で生命活動を停止させて死ぬんだ。

釘を、また一本。

十一

十二

十三

悲鳴が心地いい。

十五

十六

十七

十八

滴る血が、量を増していく。

二十。

ふと、葉月を振り向く。僕をじっと見てくる。
釘と金槌を持って、
「君もやってみなよ」
驚いた顔をする。仕方ないか、そんなこと言われると思わなかったんだろう。
近づいてきて、少し震える手で釘と金槌を受け取る。
「ほら、ここに釘をあてがって、金槌を振り下ろすだけだ。簡単だよ」
君にも出来るはずだけどな。僕と堕ちる覚悟があるなら。
唇をきつく噛み締めて、釘を打ちつけた。
次の釘を笑みを浮かべて渡す。それを受け取ってまた打ちつける。
やれば出来るじゃないか。葉月が狂ったように、釘を打ちつけていく。
そう、それでいいんだよ。狂って狂って、狂いまくればいいんだ。
どこまでも、暗い暗い闇の淵に堕ちていけばいいんだ。
でも、“狂ってる”訳じゃない。
最初からこうなんだから、今まで気づかなかった部分を解放するだけだ。
さて……もうそろそろいいかな。
「葉月、もういいよ」
手を掴んでやめさせる。

「あ……」

呆然と、己の手を見る。返り血の着いた己の手を。

「まだ死なれちゃ困るんだ。これから一番いい悲鳴を上げてもらわなきゃ」

「……」

そんな顔しなくても大丈夫だよ。すぐ慣れる。

鞄から消毒用アルコールを出す。

蓋を開ける。

「さて、これを傷口に垂らすとどうなると思う？」

「ひっ！や、やめて！ごめんなさい、ごめんなさい！」

「ふふ、やめないよ。アルコールって、ものすごーく沁みるよねぇ」

釘を打ちつけたのは、皮膚の深いところまでアルコールを沁み込ませるため。

ちょっとした切り傷でもアルコールはすごく沁みるんだから、皮膚の深い部分まで達したら、さぞかし痛いだろうなぁ。

アルコールを垂らす。アルコールを垂らす。アルコールが皮膚に触れた途端、

「あああぁぁあぁあああっ！」

凄まじい悲鳴を上げる。少しでも痛みから逃れようとするかのように、身体をくねらす。

釘がベッドに当たって、更に皮膚に食い込む。

「やっ……もういや……帰して……許して……ごめんなさい……」

許さないって言ってるじゃないか。何度も。
死なない限り許さない。生きてる間は許さない。
安心しろよ。お前にとって最高のシナリオを用意してあるから。
どうせ死ぬんだ。さっさと諦めた方が楽じゃないか。
里宮　晴海の死ぬ瞬間が見れなかったら意味がない。
死ぬ瞬間こそが一番の醍醐味なのに見れなかったら、全てが水の泡だ。
だから、僕が見てる前で死ね。僕が見てる前で、その命を終わらせろ。
それ以外の結末なんて、許さない。

「葉月、帰ろうか」

「え？……うん」

ゴミを片づけて、鞄を持つ。

「待って……お願い……何でもするから、助けて……」

うるさいなぁ。助けて助けてって。
僕が欲しいのは命乞いなんてものじゃない。苦痛に喘ぐ姿、悲鳴、痛めつけた先に待ってるお前の命だ。

「うるさいなぁ。許さないって言ってんだろ。なんでこうなったか思い返してみろ。僕に見られたお前が悪いんだ。運が悪かったって諦めろ」

葉月を先に出して、扉を閉める。
啜り泣きが聴こえた。
けど、そんなものに僕の心は動かない。

―杜塚　那奈瀬の視点―

ベッドに寝転んで、天井に向かって手を翳してみる。
鼎は、今日も誰かを傷つけてるのか？
俺は……俺は……どうしたらいいんだ？
どうするべきかは分かってる。
あいつがこれ以上、誰かの命を奪う前に警察に言うべきだって。
もし、捕まったとしたら、あいつはどうなるんだ？
あいつの口振りを信じるなら、あいつは沢山の人間を殺したんだろうな……。
少年法が適用されるのか分からねぇ。
最悪、死刑。
それだけの人間を殺したんなら、成人してなくてもきっと死刑だ。
それで、執行されるのかは別として。
あいつの瞳が忘れられない。頭から離れない。
なんで、あんな瞳をするんだよ。
なんで、今になって。
何もかも、今更すぎる。
俺がこんなことになって悩むのも、遅すぎる。

下から母ちゃんと鼎の声が聴こえてきた。
しばらくして、二階に上がってくる音がした。

廊下に出てみると、ちょうど鼎が部屋に入ろうとするところだった。

「鼎……」

鼎は何も言わずに俺を見て、人差し指を唇に当てて笑った。
つまり、見て見ぬ振りをしろってことだ。
そのまま、部屋に入った。
きっと鼎は分かってるんだな。
俺が、警察に言えないことを。言えるんなら、最初から言えたはずなんだ。
俺は、どうしたらいいんだ?

―里宮　晴海の視点―

痛い、痛い、痛い。
なんで、私がこんな痛い目に合ってんの?
誘ってきたのはあいつからなのに。
私は、ただ誘ってくるから、付き合ってただけなのに。
なんで、なんで、どこでこうなったんだろ?
誘いを断らなかったから、いけなかったの?
あいつの方から私に、いろいろと言ってきたのに。
私はただ、楽しければそれでよかったのに。
何かを壊そうとか、何かを奪おうとかなんて思ってない。
ただの、遊びのつもりだったのに。
それが、いけなかったの?
ごめんなさい。ごめんなさい。
いくらでも謝るから。
喉から血が出るくらい謝るから。
でも、それじゃ許してくれないんでしょ。

どうしたら許してくれるの？
ごめんなさい、ごめんなさい。
死ぬのは嫌、死ぬのは嫌。
帰りたい、家に帰りたい。
ごめんなさい、ごめんなさい。

「うぅぅ……」

―藤山　葉月の視点―

「はぁ……はぁ……はぁ……！」

湯船に浸かりながら、身体をさする。
抜けない。あの感触が抜けない。
釘を打った時の感触が抜けない。
人体に釘を打ちつける、あの生々しい感触。
いつの間にか、我を忘れて釘を打ちつけてた。
鼎君が止めてくれるまで、ただひたすらに釘を打ちつけてた。
鼎君があの時言ってたのは、このことだったんだ。

君と僕は同じなんだよ。

きっとそういうことなんだ。
釘を打ちつける鼎君、綺麗だったな……。
帰り道で鼎君に、ああいうのは無理そう？って聴かれた。
大丈夫だよ鼎君。
僕は、鼎君のためにどんなことでもするよ。「母さん、明後日確か
友達と出かけるんだったよね」

ご飯を食べながら、母さんに話しかける。

「そうなんだけどね、お父さんが帰ってくるって言うし、どうしようかしら」

「遠慮しないで行ってきたら？料理くらい僕がするよ」

兄さんが僕を見る。

ああ……僕が何かするつもりだと思ってるんだね。

するつもりだから、ご飯作るって言ってるんだよ。

「でも……いいの？」

「当たり前だよ。母さんもたまには息抜きしておいでよ。たまには楽しまないと」

「そうねぇ……じゃあ、お願いしていい？」

「うん。兄さんにはやらせないけどね」

「それどういう意味だよ」

「だって、兄さんにやらせたらキッチン酷いことになるよ」

兄さん、料理とか下手くそだからな。

「じゃあ、明後日お母さん、行ってくるわね」

「うん。僕もちゃんとするから」

そして、明後日に最後の仕上げをするよ。
ごめんね母さん。母さんを利用することになって。
これが終わったら、僕の計画通りになったら、母さんに辛い思いをさせることになる。
ごめんね。自分の部屋で、膝で寝てるまだらを撫でながらナイフを見つめる。
母さんの血痕が付着していたナイフ。
このナイフを見つけた翌日に、血痕を綺麗に洗い流した。
今にして思えば、何に執着してたんだろう？
憎い女の血痕が付着したまま、袋に包んで鞄に入れて持ち歩くなんて。
どこかで執着してたんだろうな。でも、もうお前に執着する必要はなくなった。
憎しみはどうあっても消えない。でも“母親”として執着する理由は、もうない。
ねぇ“母さん”、いいこと思いついたんだよ。
うまくいったら、さぞかし傑作だろうなぁ。
“お前”は、物語を顛末を地獄の淵で眺めてろ。
たった一人の十七歳の高校生の創った物語に、振り回される人間達を。

さぁ、兄さん。今度は兄さんが物語を形成する駒になる番だ。

十月二十六日　物語＝ゲーム

さぁ、始めようか
新たな物語を
新たな予定調和を
物語が狂ったなら、自分の手で元通りにすればいいだけの話だ
新たな駒を加えて
新たな犠牲者を加えて
物語を戻そう　「じゃあ、行ってくるわね」

「うん、いってらっしゃい」

母さんを玄関で見送る。久しぶりに友達と会うからか、楽しそうだ。
母さんはそれでいいんだよ。
母さんだけは何も知らずに笑っていて。
ごめんね。母さんに対する想いは、嘘偽りない想いだから。だから、
母さんを騙す父さんを許さない。
……僕も母さんを騙していることに変わりはないけど。

母さんは出かけた。兄さんは大学。
父さんは仕事かな？里宮　晴海のことでも心配してたりして。

さて……仕上げといこうか。扉を開けると、里宮　晴海が随分と衰弱した様子で寝てた。
もしかして死んでる？
うわ、死んでたら本当最悪。計画通りにいかなくなるじゃないか。
首に指を当てて、脈を確かめる。
弱いけど、まだ確かに脈はある。よかった。
驚かすなよ。一瞬本当に焦ったじゃないか。
里宮　晴海が微かに開いた目で、僕を見上げてくる。
あぁ、可哀想に。あんな男に捕まりさえしなかったら、僕に殺されることはなかったろうに。
僕も、お前を殺すことはなかったろうに。
哀れんでやるよ。お前の運のなさを。

「葉月？」

じっと僕を見てる。
あぁ、里宮　晴海を見ると思い出すんだね。釘を打ちつけた感触を。
大丈夫だよ。僕と君はそういう意味では同じ。
時期に、なんでもなくなる。
それとも、あの感触が忘れられなくて、また味わってみたいとか？
まぁ、それはまだないか。
携帯を取り出して時間を確かめる。
午後三時五十三分。兄さん、大学出たかな？
電話をかけてみる。兄さんに電話をかける。コールが鳴る。
一回……二回……三回……四回……出た、意外と早かったな。

《鼎……？》

「やぁ兄さん」

明るい声で話しかける。

《お前……今何してんだ?》

「決まってるじゃん。今から女を殺すんだよ」

嘘だと思わせないために、わざと釘を捻って肉に食い込ませる。

勿論、悲鳴が上がる。傷つけられ、衰弱した肉体からは想像出来ないほどの。

携帯の向こうで、息を呑む気配がした。

「ね?」

《お前……もうそんな馬鹿なことはやめろ……!》

声が震えてるのが分かる。

やめろ?なんで?お前は好き勝手やったくせに。

そんなお前が、なんで僕に、やめろなんて言うんだ?

「やめろ?なんで?」

《そりゃあお前……!》

「人殺しはいけないって?なんで、殺しちゃいけないのさ?他の生き物は、簡単に殺すくせに。同じ命なのに、何が違うんだろうね?」

屁理屈?違う、正論さ。

「僕を止めたいんならおいでよ。昔、僕と兄さんの二人で見つけた廃墟にいるから」

返事を聴く前に、電話を切る。

「鼎君……いいの？」

「何が？」

「だって、お兄さん……」

「いいんだよ。兄さんにも、僕のちょっとした復讐を味わってもらうだけだから」

そう。これは復讐だ。過去に対する。
兄さんも苦しみを味わったらいい。
僕は、痛みから逃れるために殺人鬼になった。
兄さんも人殺しの業を背負えばいいんだ。
里宮　晴海に、最後の最後でとどめを刺すのは兄さんだ。
そのために、里宮　晴海を殺さなかったんだ。
僕が見てる前で死んだなら、それはそれでよかった。
でも、今日まで生き延びた。
お前には、復讐の道具として死んでもらう。

―杜塚　那奈瀬の視点―

課題が終わって、大学を出た時だった。
携帯が鳴った。この着信音は、鼎だ。
携帯をポケットから取り出して、見つめる。
今日は母ちゃんがいなくて、父ちゃんが帰ってくる日。
鼎がいきなり、自分から飯作るってどういう魂胆だ？

何も知らなかったら、ただ単に母ちゃんを楽しませるためだって思える。
でも、あれを知った後じゃ、何か魂胆があるとしか思えねぇよ。
意を決して、電話に出る。

「鼎……？」

《やぁ兄さん》

電話の向こうで、いつも通りの明るい声が聴こえてくる。

「お前……今何してんだ？」

《決まってるじゃん。今から女を殺すんだよ》

女の凄まじい悲鳴が聴こえてきた。人間のものとは思えない、凄まじい悲鳴。
思わず、耳から携帯を離す。

《ね？》

「お前……もうそんな馬鹿なことはやめろ……！」

《やめろ？なんで？》

「そりゃあお前……！」

《人殺しはいけないって？なんで、殺しちゃいけないのさ？他の生き物は、簡単に殺すくせに。同じ命なのに、何が違うんだろうね？》

鼎、お前本当に人を殺すことに何も感じないのか？
誰よりも優しかったお前が、どうして誰かを傷つけてるんだよ？
鼎をそんな風にしたのは、俺達なのか……？

《僕を止めたいんならおいでよ。昔、僕と兄さんの二人で見つけた
廃墟にいるから》

「鼎……？鼎！？」

プツンと、無機質な音が鳴る。
来いってことだよな……。お前、俺に何をさせたいんだ？
それとも、俺を殺したいのか？
鼎が分からない。でも、行くしかないんだ。
俺のためにも、鼎のためにも。携帯を閉じる。兄さん、来るかなぁ？
来るよ。必ず。心配しなくても。
兄さん、どんな表情するのか楽しみだなぁ。
想像するのが楽しくて、口元が緩む。

「鼎君……まさかお兄さんを……」

「あはは、違う違う。そんなつもりはないよ」

あまりに真剣な顔するから、笑っちゃったじゃないか。
こう思ってるんだろう？兄さんを殺すんじゃないかって。
大丈夫、殺さないよ。殺すつもりなら、今までの間に殺してる。
それに、殺しちゃったら面白くないじゃないか。
殺してしまったらそこまで。
他人は知らない人間だから、簡単に終わらせられる。
でも兄さんは家族で、よく知ってる人間だ。
簡単に終わらせるのは、もったいない。

どんな苦しみ方をして、どんな行動をするのか、見てみたいじゃないか。

「あ……違うの……？よかった……」

葉月はやっぱり正直だな。僕と違って。

外の扉が開いた音がした。

ああ……来た。

「待ってたよ、兄さん」

泣きそうな顔をしてる兄さんに、笑いかける。

―杜塚　那奈瀬の視点―

「はぁ……はぁ……」

着いた。昔、小さい頃に鼎と二人で見つけた廃墟。

よく、ここで遊んでたんだ。

ドアに手を伸ばして、開けるのを躊躇う。

ここを開けたら、もう後戻りは出来ない気がする。

……なんで躊躇ってるんだ？覚悟したんじゃなかったのか？

意を決してドアを開ける。

そしたら、むっとする匂いが襲ってきた。

なんだ……この匂い？鉄臭いような……。まさか、血の……？

奥から、鼎の声が聴こえてきた。誰かと話してる……？

誰と？なんか、聴き覚えのある声だ。

考えても始まらない。奥の部屋のドアを開ける。

「待ってたよ、兄さん」

鼎がいつも通りの笑顔を、向けてきた。

「案外早かったね。もう少しかかるかと思ったけど。……兄さん？」

唖然とベッドを見る。正確にはベッドに座る藤を。

なんで？なんで藤がいるんだ？

「あぁ……葉月も僕と同じなんだよ。同じ人殺し」

藤が……？この状況を見るなら、共犯者……？

「この話は長くなるから、また後で話すよ。まぁ、生きてたら……ね」

鼎が笑顔で近づいてくる。右手にナイフを持って。

やっぱり……俺を殺したいんだな。

左手で俺の腕を掴んで、ナイフを腹に押しつけてくる。

「ねぇ、兄さん。このナイフであの女を殺してほしいんだ」

「なん……だって？」

「兄さんにも共犯になってもらおうと思って。ナイフをあの女の腹に突き刺すだけだ。簡単だよ」

なんで……そんな残酷なことを笑顔で言えるんだよ？

「……出来ないの？出来ないんなら殺すよ？兄さんを殺すことなんて簡単なんだ。このナイフに力を込めたらいいんだから」

―杜塚　那奈瀬の視点―

「……ねぇ、出来ないの？ナイフを突き刺すだけじゃないか。こう、力を込めるだけだ」

ナイフが俺の腹に食い込んでくる。
皮膚を破って、血が滲む。
なぁ、なんでそんな顔をしてるんだ？
泣きそうな、すがるような顔。
俺を、殺したいんじゃないのか？

「ねぇ、殺してよ？僕のために。兄さんだって死にたくないでしょ？」

そりゃあ出来れば死にたくねぇよ……。

「もういいよ。自分だけで出来ないんなら、僕が手伝ってあげる」

ぐいっと引っ張られる。女の人の傍に。
ナイフを右手に握らされる。
心臓が、高鳴る。

「ほら、こう……」

鼎がナイフを握らせた右手に、自分の手を重ねて握ってくる。

そして、

鼎にされるがまま、ナイフを女の人の胸に突き刺した。

呆気なく、ナイフは皮膚の下に潜り込む。

「――――っ！」

「ほら、簡単だよ。これで、この女は死んだよ。これで、この女への報復は済んだ。これで、許してあげる。ずっと許して許してって言ってたからね。死んだから、許してあげる」

笑顔を浮かべたまま、俺を見てくる。

「これで、兄さんも僕と同じだよ。……ね？」

右手に握ったままのナイフを見つめる。

俺は、俺は……？

これが、鼎の望んだことなのか……？カランッと何かが落ちた音がした。

振り向くと、ナイフが落ちてた。兄さんの震える手の中から滑り落ちたみたいだ。

そんなに震えて、怖いの？

僕が平気でこの女を殺してって言ったから？僕が平気で人を殺すから？

それとも、自分の意思じゃないとはいえ、人を殺したから？

ねぇ兄さん、僕には分からないんだ。

どうして殺人がいけないのか。

どうして人殺しを怖がるのか。

どうして僕のような人間を狂ってるって言うのか。

分からないんだ。

ただ僕は殺したいだけだ。この女はたまたま理由が出来ただけ。
殺して殺しまくりたいだけ。
理由はない。僕の自然な欲求だ。
ナイフを拾う。

「兄さん、怖いの？」

なんとなく、ナイフに着いた血を舐める。
うん。不味い。

「お、おま、血……！」

「ん？これくらい普通だよ」

ナイフに着いた血を舐めるくらいで、なんでそこまで怖がるかなぁ。
今から、この女をバラバラにするのに。
ああ、その前に取り出さなきゃな。
女の手首を縛ってたロープをほどいて、仰向けにする。
胸にナイフを突き刺して、心臓が取り出せるくらいの穴を開ける。
これくらいでいいかな？当たり前だけど、心臓も個人個人で大きさが違う。
まぁ女だから、これくらいでいいでしょ。
穴に手を入れて、心臓を掴む。
まだ温かい、弾力が返ってくる心臓。
この女のものじゃなかったら、美味しそうだよね。
まぁ、この心臓を食べるのは僕じゃないからいいけど。
心臓を引きずり出す。無理矢理引きずり出したから、血管がぶちぶちと切れる感触と音がする。
ちらっと葉月を見る。流石に心臓を引きずり出すのは、衝撃を受けたみたいだ。

まだ繋がってる血管をナイフで切り離す。

「鼎、お前……それで何すんだよ……？」

「……？何って、この心臓を父さんに食べさせるんだよ」

「なん……だって？」

葉月も驚いた顔をしてる。

「今日、僕がご飯作るって言ったでしょ？ハンバーグを作ろうと思ってるんだけど、父さんのだけにこの心臓を混ぜて、食べさせるんだよ」

愛しい愛人の心臓を、自分の中に入れるんだ。
父さんだって本望だろう？愛してるんだから。

「心配しなくても兄さんに食べさせるつもりはないよ。あくまで父さんだけだ」

父さんに愛人の心臓を食べさせる。それが第一の報復。
第二の報復がうまくいくか分からないけど、心臓を食べさせるのは簡単だ。さて、心臓が駄目になる前に持って帰って調理しないと。
それに、父さんだって早めに帰ってくる可能性がある。
さっさと解体するに越したことはない。

「兄さん、帰るなら帰っていいよ？解体するところ、兄さんには刺激が強すぎるだろうから」

悲しそうな、責めるような瞳で僕を見てくる。

「それとも、終わるまでここにいる？」

「……いるよ。お前がしてること全部見るって、決めたんだ」

「ふぅん……いいの？まぁ、もう兄さんも逃げれないから、どっちでもいいけど」

心臓を袋に入れる。

そう、もう逃げれない。自分の意思じゃなくとも女を刺した時点で、いや、ここに来た時点でもう戻れないんだ。

部屋の隅に置いてある斧を握る。

「鼎君……心臓以外は食べるの？」

「いや、この女は食べないよ」

食べちゃったら、計画が駄目になるからね。

「食べる……？食べるって……」

「ん？いつもは食べるんだよ。所謂カニバリズム」

そんな顔を青くして、そんなに怖いの？

「兄さん、僕が怖い？平気で人を殺して、平気で人を食べて、平気で人を人に食べさせて、平気で家族も共犯にする僕が」

答えないけど、きっと怖いんだろうね。

だから、言ったじゃないか。

「だから、あの時言ったんだ。昔の僕はもういないって。昔の僕は、もう死んだんだよ」そう、昔の僕は死んだんだ。僕自身が、殺したんだ。
引っ込み思案で寂しがり屋で泣き虫で、弱虫な僕はいない。
優しさなんて、必要ない。あるだけ無駄だ。
助け合いとか、反吐が出る。
家族じゃない他人のためにとか、馬鹿馬鹿しい。
所詮、人間は自分のためだけに生きてるのに。
さて……解体を始めようか。
女を床に落とす。
右肩の関節目掛けて、斧を振り上げる。
少し狙いが外れて皮膚を少し掠めて床に当たって、ガツンと音を立てる。

「そ、その死体……どうすんだ……？」

「何って……バラバラにして鞄に詰めて、捨てるんだよ。わざと見つかりやすいようにして」

「見つかったら、お前ってバレるんじゃ……」

「それは大丈夫だよ。捕まるんなら、とっくに捕まってる。それよりいいの？兄さん？」

「……何が……」

「兄さん、僕のことを止めたいんじゃなかったの？」

「それ、は……」

ああ、可哀想に。そんな苦しい顔しないでよ。
秘密を見た兄さんが悪いんだ。

「いいの？僕を止めなくて？止めないんなら、まだまだ僕は殺すよ？人殺しは僕の自然な欲求で、生活の一部なんだから。それとも、自分も当事者になっちゃったからバレるのが怖くて、言えなくなったの？」

「俺、は……」

「可哀想にねぇ、兄さん。僕みたいな弟持って」

でも、僕はお前達のせいで変わったんだ。

「俺には……お前が人殺しだって分かってんのに、言えない……」

うん、知ってるよ。分かってるよ、兄さんのことは。

「この女の死体があるから、怖いんだね。大丈夫だよ。すぐ処分してあげるから」斧を振り上げる。肉に食い込んで、骨に当たる。
斧を引き抜く。
あぁ……切断面に血が滲んで、綺麗だ。
切断された筋肉の断面。脂肪も筋肉も少ない。
やっぱりこの女も、無駄なダイエットしてた口かな。
食べないでダイエットとか、女は自殺願望とか強いのかな。
でも最後に食べ物のありがたみが分かって、よかったじゃないか。
まぁ、もう死んだから食べれないけど。
斧を振り上げる。骨が簡単に砕けた。
なんだ、骨が脆かったのか？骨粗しょう症とか？骨が丈夫な人間な

ら、四回は斧を振り下ろさないといけないのに。
きっとダイエットの影響で脆くなったんだろうな。
必然的に骨を形成するカルシウムや栄養が不足するから。
女は多いんだよね。
まぁ、骨が脆いんなら、それだけ解体が早くなる。
いつもは細かく解体するけど、どうせ捨てるから大雑把でいいや。
左腕を切断して、次は足。

「……兄さん、大丈夫？」

壁に寄りかかりながら目に涙を溜めて、口を覆って。
だから、言ったのに。

「……大、丈夫」

「そうには見えないけど」

葉月を見る。葉月は大丈夫そう。

「兄さん、これを人間だと思うからいけないんだよ。人間と思うから、罪悪感が湧くんだ。確かにさっきまで生きてた人間だけど、死んだらそれまで。死んだ肉体は物と同じ。物と思えばいいんだよ。これはもう人間じゃない、物だ」

「そ、そんなこと簡単に思えるかよ」

「僕は思わなくても、最初から罪悪感なんてなかったけど」

なんで、怖がるのかなぁ。
まぁいいさ。さっさと片づけよう。「ねぇ兄さん。兄さんは虫を殺

したりしたことあるよね？空腹を満たすために豚や牛や、いろんな物を食べるよね？」

「何が……言いたいんだ？」

「僕が人を殺す感覚は、それに似てるんだよ。蚊やハエを殺すのと同じ感覚で、人を殺す。本来は証拠隠滅のために食べるけど、空腹を満たすために食べるんだよ。豚や牛を食べるのと同じ感覚で、人も食べるんだよ」

なんで、そんな化け物を見るような瞳で、見てくるんだろう……？人を殺すのも虫を殺すのも、同じことなのに。

「虫と人間を同じ感覚で見れるかよ！人間なんだぞ！？同じ人間なんだぞ！？」

ああ……イライラするなぁ……そういう言葉。
兄さんも愚鈍な奴らと同じこと言うのか。
虫だから、人間より下なのか？人間だから、どの生き物より偉くて特別なのか？
そういう人間は上だ、みたいな言葉嫌いなんだ。
何が上なんだ？同じなのに。

「だから、何？同じ人間だから、何か問題あるの？虫も人間も、同じじゃないか。何が違うのさ？まぁ、どうでもいいけど」

足を切断し終わる。胴体を踏みつけながら、斧を短く持って首に当てる。
振り下ろすと、肉が断ち切られて血が顔に着いた。
何度か振り下ろすと、骨が砕けた。

残った肉を切り離す。「……」

バラバラにした死体を眺める。足の釘はそのままにしておこう。
でも、それ以外はぱっとしないな……。
そうだ……。
兄さんの近くに落ちてるナイフを取ろうと近づいたら、びくっと身体を震わせた。
僕に殺されるかもって？
あはは、殺さないよ。殺す訳ないじゃないか。面白味がなくなる。
まぁ、家族だからね。
ナイフを取って、兄さんを無視して女に戻る。
頭を掴む。顔をナイフで切りつけていく。
刺し貫いて、切り裂いていく。

「な、何してんだ……？」

「ん？ほら、どうせなら派手な方がいいじゃん？」

誰かがこれを見つけた時どんな反応するのか、想像するとぞくぞくする。
これだけ傷ついてたら、話題になるかな？
なんとなく、目玉をくり貫いた。
視神経らしき物も出てくる。

「う゛っ……」

吐きそうなのか、兄さんが口を押さえてる。
まぁ、これくらいにしとくか。
部屋の隅に置いてた鞄を持ってくる。
……やっぱり、腹も切り裂いて内臓出そうか。

もう一度ナイフを持って、腹を切り裂く。
そこに手を入れる。ぬるっとした血の感触……気持ちがいい。
内臓を掴んで引きずり出す。
これだけしてれば、インパクトありそうだよね。バラバラにした死体を鞄に詰めていく。
どうやって詰めようかな。
……うん、決まり。綺麗に飾りつけよう。
手を入れて、その次に足を。手足手足と、交互になるように。頭を入れて、内臓の大部分がはみ出た胴体。内臓を螺旋状にして、目玉を乗せる。
うん、完璧。綺麗だ。
これをどこに飾ろうかな……？
ただゴミ箱に飾ったんじゃ、味気なさすぎる。
あぁ……そうだ、通学路に飾るなんてどうだろう……。
子供が鞄に興味を持って中身を見たら、無惨に傷つけられてバラバラにされた死体。
きっと話題になるだろなぁ。
そして、違う犯人を仕立て上げるんだ。
一見害のなさそうな高校生が起こした殺人だと知らないで。
これがどんな結末を迎えるのか、楽しみだなぁ。
さて、手と顔を洗おう。今日は派手に血を浴びてないから、ちょっと洗うだけで済む。

「兄さん先に帰っててていいよ。疲れたでしょ？僕はまだやることあるから」

「その死体を、捨てるのか……？」

「うん。これだけ傷つけてるから、ニュースになるかもね。でも、結局僕には辿り着かないんだよ」

人間は思い込みに騙されるから。

―杜塚　那奈瀬の視点―

扉の向こうから水の流れる音が微かに聴こえてくる。
鼎が、血の着いた手や顔を洗ってるのか……。
死体をバラバラにしてる時や、死体を鞄に入れてた時、楽しそうに笑ってた。
まるで玩具で遊ぶ子供みたいだった。
言ってたな……人を殺すのは、虫を殺すのと同じことだって。
なんで……こんなことになったんだろう……？
殺人はどうしようもない罪だ。
でも、そうさせたのは紛れもない俺達なのか……。
許してくれって言って、許してもらえるはずがねぇな……。
今更、なんになるんだ？
鞄を見る。指が若干飛び出してて、気持ち悪い。
鼎が人を殺して、その死体をバラバラにしたところを目の当たりにしたのに、俺には言えない。
鼎のためなのか、自分の保身のためなのか、分からねぇ。
間違ってるのは分かってる。けど、けど……。

「藤は……これでいいのか……？」

いきなり声をかけたから、藤が驚いた顔をした。
鼎がバラバラにしてる間、平気な様子で見てたな……。

「……僕は、鼎君のためになんでもするつもりですから……」

そっか……。少し身体と制服を洗った後、着替える。
今何時かな。早く捨てて帰って、作らないと。それに、氷を当てる訳じゃないから心臓が心配だ。
痛む前に調理しないと。
それに、帰ってないと思うけど父さんが帰ってたら最悪だ。
計画が全部頓挫してしまう。水の泡になる。
兄さんに、先に帰ってもらうか。
シャワー室を出て、奥の部屋に戻る。
扉を開けると、兄さんが少しびっくりした顔で見上げてきた。

「兄さん、まだいたの？」

「だ、だって……」

一人でいるのが怖いの？死体があるとしても、葉月がいるから少しは気分的に楽だったのかな？

「兄さん、悪いけど先に帰っててくれない？」

「えっ……」

「だって、父さん帰ってきたら困るから。兄さんも協力してくれるよね？」

笑顔でそう言う。

「……分かったよ…」

「分かってくれて嬉しいよ。僕と葉月はあれをどこかに持って行くから、すぐ準備してね」

まぁ準備と言っても、荷物を持つくらいだけど。
これで、兄さんも手に入れた。計画通り。「じゃあ兄さん、僕が帰るまで家のこと頼むね」

「……ああ」

山の入り口の前で兄さんと別れる。兄さんは右に、僕と葉月は左に。
ちょっと歩いて兄さんを振り返ってみる。
足取りはいつもと変わらないように見える。
それでいいんだよ。終わったことを嘆いても、いくら後悔したって仕方ない。
時間の無駄だ。
いつまでもうじうじしてるのは、馬鹿のすることだ。人生を無駄にしてるだけ。
人は死ぬために生きてるんだから、楽しまなきゃ。
この瞬間だって、死に近づいてるんだからね。
悩むことも当然あるさ。生きてるんだから。
でも、悩んでも仕方ないじゃないか。悩んだって時間は戻らないんだから。
人生なんてたかだか百年だ。実際はそれよりも少ないんだ。
だったら、自分なりに楽しもうじゃないか。
僕は、その楽しみを殺人に求めただけだ。
僕が悪いんじゃない。常識に縛られすぎる世間が悪いんだ。
常識を正義とする世間が悪いんだ。
常識なんて個人個人違うのに、大衆の常識を個人の常識にすり替えるなんて、それこそ悪だ。
ねぇ兄さん、人殺しの何がいけないのか答えられなかったね。
ただ漠然と人殺しはいけないと、常識というモノに縛られてるからだよ。

これが逆に人殺しが常識だったら、人殺しがいけないって方が常識外れになる。
僕は僕の常識で動くだけ。
僕の領域を侵す者は殺す。
これから、兄さんの常識をゆっくりと犯してあげるよ。
気づいた時には戻れないところまで、ゆっくりと。
毒のように、ゆっくりゆっくり……ね。葉月と二人で無言のまま歩く。

「鼎君、それ持とうか？」

「ん？別にいいよ」

「でも、重くない？」

「これくらい大丈夫だよ。四十二キロくらいだし。男ならもっと重いし。慣れてるから大丈夫」

獲物を運ぶ際に担ぐから、体重がどれくらいかとか分かるようになったな。
これも慣れか。

「じゃあ、持ってみる？」

はいって葉月に渡してみる。案の定、持った途端地面に落としたけど。

「ご、ごめん……！」

慌てて持とうとするけど、持ち上がらない。

普段から人間と同じくらいの物を持たないと、なかなか持てないよ。

「だからいいって言ったのに」

ちょっとだけくすりと笑うと、恥ずかしそうに顔を赤くした。

「ごめん……」

「いいよ。葉月はこれを置いてる間、見張ってくれたらいいから」

「うん……」

これを置いてる間に誰かに見られたら、それこそ最悪だ。
この辺りで一番通行量の多い場所は……やっぱり学校の近くか。
ちょっとリスク高いけど、一番発見されやすくて置いてあったら衝撃的な場所だよね。
学校の校門前に置いてやろう。さて、と……校門前に来たのはいいけど、教師か単なる通行人か知らないけど邪魔だな。
女二人でよくあれだけ喋るな。
早く退けよ。どんどん遅くなるじゃないか。
本当、すごいイライラする。
イライラしてるのが伝わったのか、葉月がちらっと見てくる。
五分くらい待ったかな。ようやくその場を離れた。
全く……話が長すぎる。聴いてるとどうでもいいことばかり。
何はともあれ誰もいなくなった。さっさと置いて行こう。

「行くよ」

先に歩き出すと、慌ててついて来る。
周りに誰もいないか目を凝らす。

誰も見えないし、気配も感じられない。大丈夫だ。
校門の隅に鞄を下ろす。暗がりでは分かりにくい場所に。
朝に見つけてもらいたいからね。
チャックを少し開けておく。最初に見つけるのは教師だろうけど、
大騒ぎだろうなぁ。

「そういえば、釘って大丈夫なの？」

「……？何が？」

「指紋とか、そういうの」

「ああ、大丈夫だよ」

だから指紋が着かないように革手袋をしてるんだから。
鞄にも僕や葉月に繋がる痕跡を残さないように気をつけたけど、残
ったらその時だ。
確かに手袋をしてても指紋が残る場合があるみたいだけど、着いた
としても極一部だし大丈夫でしょ。
革手袋を外す。

「帰ろうか」

「うん」あの後、葉月と別れて帰ってきた。
車がない……ってことは父さん、帰ってきてないな。よかった。
ドアを開けて中に入る。

「ただいま」

返事はない。それとも、気づいてないのかな？

靴を脱いでリビングのドアを開ける。
テレビも点けずに椅子にもたれかかって、何か考え込んでるみたいだ。
まぁ何を考え込んでるのか、考えなくても分かるけど。
足音をさせずに兄さんに近づく。
両肩に手を置いて、

「ただいま、兄さん」

「――――っ!!」

びっくりした顔をして僕を見上げてくる。

「びっくりした?」

「驚いたに決まってんだろ……。心臓止まりそうだったよ……」

そんなに驚いたの?考え込んでたから余計かな。
鞄から袋に入った心臓を取り出す。

「今から、これで晩御飯作るよ。大丈夫。兄さんのには入れないから」

「ホントに……やるのか……?」

「当然だよ。父さんは知らない間に人を食べるんだ。愛人のね」

正当な報復だ。何が悪いのさ?
兄さんは黙ってなよ。何かしたら、その瞬間から兄さんは敵だからね?

「何も言わないでね？兄さん？」

「……分かった…」手を洗う。

とりあえず、先に心臓をハンバーグに混ぜても分からないように細かくしないと。

考えてみると、例え一部でも人肉を調理するの初めてだな。

水で血を洗い流して心臓を綺麗にする。

綺麗に洗ったまな板の上に置く。

包丁を持って、ちょっと刺してみる。

刺して、引く。

ぶちゅっと、血が流れ出す。

ああ……いい感触だ……。肉を刃物で刺す感触、ナイフとまた違う感触が返ってくる。

中に残ってた血が溢れて、まな板に残った水と混ざり合ってなんだか綺麗だ。

心臓をぶつ切りにしていく。

そして、更に細かく。

楽しむのは今はよそう。後でまだ楽しみが残ってるじゃないか。

これくらいなら、また捕まえれば味わえる。

さっさと作ってしまおう。

「……出来た」

うん。うまく出来た。ちゃんと野菜も添えたし完璧。

ふと振り返ると、兄さんが複雑そうな顔で見つめてくる。

「うまく出来たよ、兄さん」

笑顔で話しかける。

「そうか……」

玄関が開く音がした。父さんに間違いない。

……いよいよだ。

口元が歪んだのが分かった。「おい、帰ったぞ」

父さんが呼んでるけど、兄さんは俯いたまま動こうとしない。

仕方ない。僕が行こう。

「おかえり、父さん。母さんいないからご飯は僕が作ったよ」

「そうらしいな」

それだけ……ね。まぁ、お前に感想なんか求めてないから、いいけど。

僕に見向きもせず、素通りする。

そういう態度が、気に入らないんだよ。

僕達の前と、浮気相手の前じゃ全然態度が違うんだろうね。

本当、今一番殺したいのはお前だよ。ひと思いに、その背中にナイフを突き刺してやりたい。

でも、それをやってしまったら全てが壊れる。

一番可哀想なのは、母さんだな。

でも、絶対それはしない。家族を特別な理由がない限り殺さないのは、僕が自らに課したルールだ。

リビングに戻る。

「……」

兄さん、勝手なことしてくれてるね。
何勝手にハンバーグすり替えてんの？
僕が気づかないとでも？気づかない訳ないじゃないか。
自分が代わりに食べて、罪悪感を消したかったの？
兄さん、何もしないって言ったよね？これもルール違反だよ。
まぁ、今回だけは許してあげるよ。最初だしね。
兄さんが戻ってきた。ハンバーグを元に戻す。
兄さんが見てる前でわざと。

「うまく出来たから、食べてもらわないとね」

兄さんに向かって笑う。父さんの自慢話を聴きながら、たまに相槌を打ちながらご飯を食べる。
兄さんは複雑な顔をして、黙々と食べる。
自分が心臓の混ざったハンバーグを食べずに済むのに安心して、でも自分は知ってるのに父さんが知らないまま食べることに、罪悪感を感じるのかな？
父さんはまだ手をつけてない。話に夢中で。僕が作った料理なんか食べたくないのかな？
本人は自慢と思ってないかもしれないけど、自慢にしか聴こえない話をしてばっかり。
たまに金のない負け犬はさっさと出て行け、みたいな愚痴を行ってるけど。
後、出来の悪いあいつをさっさと辞めさせるか、とか。
確かに負け犬だとしても、出来が悪いとしても、お前みたいな外道に言われたくないよね。
お前みたいな外道こそ、この世界からいなくなるべきだ。
それは、僕もだけど。
金と性欲が全ての人間が、金も何もかも失ったら面白いよね。

確かに世の中は金だ。この世界で金こそが全て。
愛とか絆とかほざく人間は馬鹿だ。
愛も絆も、金の前では無力。
簡単に呆気なく、粉々に壊れて崩れ去る。
金は、簡単に人を変えるんだから。
現に、成功して金を手にして父さんは変わった。
お前なんか、大嫌いだ。
だから、金も嫌いだ。十分に生活出来るくらいの金があれば、それでよかったのに。
父さんがご飯に手をつけ始めた。
ハンバーグに手を伸ばす。
箸で千切って、掴んで、口に持っていく。
そう……そう……。そのまま、口に入れて噛んで飲み込むんだ。
愛しい愛人なんだろう?消化してひとつになってあげなよ。
肉を口に入れた。そして、飲み込む。
あぁ……食べた、食べた。うまくいった。
知らなくても、父さんも犯罪の一端を担ったんだよ。
兄さんを見ると、僕を見つめてくきた。
うまくいったよ、兄さん。ご飯を食べ終わって、食器を洗う。
父さんは今風呂に入ってる。さっき入ったばかりだ。
今なら携帯を見れる。
食器をさっさと片づけて、椅子に置いたままの父さんの鞄から携帯を取り出す。
メールを見ようとしたら、ロックがかかってた。
面倒なことを……。母さんに見られたらまずいから、ロックかけてるの?まぁ、母さんが携帯覗くようなことしないだろうけど。
暗証番号、まさか女の誕生日とか?あの女、誕生日いつだったっけ……十一月十一日だ。
打ち込んでみたら、ロック解除。
……単純だな。まぁ助かったけど。

開いてみると、知らない女の名前ばかり。
なんだ。浮気相手は一人じゃなかったんだ。
それとも遊びなのかな？どっちにしろ一緒だけど。
メールの内容は、いつ何時にどこで会おうって内容のものばかり。
メールしてる女と全員、関係持ったの？
だとしたら気持ち悪い。どれほど女が好きなんだか。
もういいや。分かったし。

「鼎？何してんだ？」

「ん？ちょっとね」

携帯を鞄に戻す。

「兄さん、ちょっと話があるんだ」

そう言ったら、びくっと身体を震わせた。何を言われるか分かってるんだ。

「ねぇ、なんであんなことしたの？何もしないって言ったよね？」

腕を掴んで引き寄せる。兄さんの腹に指を当てる。ナイフで少し傷つけた場所に。

「今度あんなことしたら……ね？今回は許してあげるけど、やっぱりちょっとは罰をあげないと分かんないでしょ？」

父さんが上がってくるかもしれないし、ここでは具体的に話せないな。

「二階に上がろうか？」

兄さんの腕を掴んだまま引っ張る。二階に上がって、兄さんの部屋で話す。

ドアを閉めて壁に寄りかかりながら、身体をぴったりと合わせて兄さんの腹の傷を指でなぞる。

「ねぇ兄さん、どうしてハンバーグすり替えたの？」

「それ……は……」

「自分が代わりに食べて、父さんを犠牲にする罪悪感を消したかったの？自分を犠牲にしようって？」

「そうだよ……何か、悪いか？」

「悪いよ。あいつだって僕達を騙してるんだ。仕事で忙しく見せて、ホントは女と遊んでるんだよ？少しくらい悪戯したっていいでしょ？」

それを、あいつはなんとも思ってないんだ。

きっとこう思ってるんだよ。気づかないあいつらも悪いって。

母さんなんか特に、父さんを疑うことを知らないからいつまでも信じてるだろうね。

可哀想な人だ。純粋すぎる。

僕達は本当の息子じゃないのに、本当の息子のように接して。

あんな男を、愛して。

「悪戯って……人が一人死んだんだぞ……！？」

「それが何さ？あの女が死んで何か問題でもあるの？あの女が死んだところで、何も問題ないよ。ただ世間が勝手に騒ぐだけだ。いずれ、あの女がいたことも忘れるよ」

事件はいつの間にか風化して、あの女が存在していたことは世間から忘れ去られる。

別に存在しても存在しなくてもいい存在。

人間なんてそんなものさ。

「だからって……殺していい理由になんねぇだろ……」

「そうだね。殺していい理由にならないね。でも、だから何？そんなのどうだっていいよ。それより、兄さんの罰だよ」

「……俺に、どうしろって言うんだよ……死ねっていうのか？」

「殺しはしないよ。“家族”だから、ね？兄さんさ、学校で嫌いな人間一人くらいはいるでしょ？そいつを、僕の目の前で殺してよ」

―杜塚　那奈瀬の視点―

「ねぇ、殺してよ？一人殺しちゃったんだ。二人殺すのも三人殺すのも一緒だよ。だから……ね？」

鼎が身体を更にくっつけてくる。

俺を逃がさないように。

笑顔を浮かべてくる。ぞっとするほどの禍々しい笑顔。綺麗なのに、どうしようもなく暗い闇を孕んるせいで余計に禍々しく感じる。

なのに、子供みたいに無邪気なんだ。

「殺してよ？僕の目の前で」

少し小さな声で囁いてくる。

悪魔が囁いてくるみたいだ。知らず知らずの内に、侵蝕されてどうでもよくなって。

あの時の予感は、これだったんだな……。

「ねぇ、どうするの？僕ね、我が儘だから、思い通りにならないものは嫌いなんだ」

腕を掴む手に、力を込めてくる。

「それとも、兄さんの友達を僕が殺そうか？そっちの方が堪えるんじゃない？」

「だ、駄目だ！」

ニヤリと笑ってきた。

ああ……いくら足掻いたって、無駄なんだな。

俺は、鼎に適わない。

「どうする？自分の手で嫌いな奴を殺すか、友達を犠牲にするか。僕はどっちでもいいんだよ？」

誰かを殺すなんて嫌だ。でも、鼎は俺の一番の親友を知ってる。

俺が嫌だって言ったら、鼎は必ずあいつを殺すつもりなんだ。

あいつは関係ない。壊れるのは俺だけでいい。

「どうするの？」

「……あいつは関係ないんだ。だから……」

「じゃあ、僕の目の前で殺してくれるんだね？」

「……ああ」

なぜか、嬉しそうに笑った。

「嬉しいよ兄さん。兄さんもこっちに来てくれて。さぁ、一緒に狂ってしまおうよ、ね？」兄さんから離れる。よかったよ、思い通りになって。

まぁ最初から分かってたけど。

兄さんは優しいからね。友達を犠牲に出来るはずがない。

でも、それでも嫌だって言うんなら、友達を兄さんの前で殺すつもりだったけど。

どっちが面白かったかな？

兄さんが人を殺すところは勿論見たいけど、友達を目の前で殺されて泣き叫ぶ兄さんを見るのも面白そうだよね。

友達を目の前で殺すのは、次に何かあった時に取っておこう。

まぁ、もう逆らわないだろうけど。

「兄さん、嫌いな人間ってもう決まってるの？」

複雑な顔をして、僕から目をそらす。

その様子じゃ、決まってるんだね。

「ねぇ、誰？教えてよ？」

「友達と思ってた奴だよ……。俺に彼女いたこと知ってんだろ？で

も、別れた理由まで知らねぇだろ？」

「うん。そこまでは知らない」

なんだか、面白そうな理由だね。
ドロドロした人間関係は僕の大好物だよ。

「仲のよかった奴なんだ。けど、俺の知らない間に彼女とデキて、彼女はあいつの方がいいって言って、俺と別れたんだよ。あいつを問い詰めたら、さっさと手を出さないお前が悪いって言われたよ」

「へぇ……」

なるほど、よくある話といえばよくある話だ。
でも、好きだよ。そういう話。恋愛感情は人間をおかしくさせる。
一説によれば恋愛感情は脳の異常。
恋愛してる時は、誰もが異常。

「その男も最低だね。結局、その彼女と別れたの？」

「半年でな。彼女はヨリを戻したいって言ってきたけど、俺は彼女への気持ちが完全に冷めてたから、無理だって断ったけど」

「そう。じゃあ、そいつにしようよ？」

そう言ったら、微かに頷いた。一階から玄関が開く音がしてただいま、という声がした。
時計を見ると九時半。早いな。もう少し楽しんでもよかったろうに。

「母さん、帰ってきたね」

「そう……だな」

「行かないの？」

「しばらく、一人にしてくれ」

「そう、分かった。兄さん、これだけは分かっといてね」

もう一度、身体を寄せる。

「僕から逃げられないこと。僕は、絶対に兄さんを離さないよ」

一度捕らえた獲物だ。絶対離さない。

雁字搦めに縛って、逃げようという発想を出来なくさせてあげるよ。

まぁでも、既に逃げる気力をなくしたみたいだけど。

分かるよ。その諦めた目。なるようになれって思ってるんでしょ？

そうだよ。考えるより狂ってしまった方が楽だ。

だから、兄さんも殺してこっちに来ればいいんだよ。

無理矢理にでも、こっち側の人間にしてあげるけど。

「じゃあ、下に下りるよ」

返事はない。

「おかえり、母さん。鞄持つよ」

ちょっと顔が赤い。お酒飲んだんだな。酔っていても、あの女とは

違って下品な感じがしない。
鞄を受け取る。

「ただいま。ちょっと飲みすぎちゃったかも。今日はありがとね、鼎」

「いいよ。一応母さんの分も作ってあるけど、食べる？」

「ごめんね。今お腹いっぱいだから明日食べるわ。お父さんはお風呂？」

「うん。もう少ししたら上がってくると思う」

「お父さんが上がったら鼎か那奈瀬入ってね。母さんは最後でいいから」

「母さん先に入りなよ。僕達は後でいいから」

「そう？じゃあ、悪いけど先に入ろうかしら」

「うん。気にしないで入って」

ごめんね母さん。僕は、母さんが信じてるものを裏切ることになる。でも、後悔はない。風呂から上がって、ベッドに座りながらまだらを撫でる。
しっかり拭いたのに、髪から雫が滴り落ちてまだらの鼻に落ちる。
突然の刺激に驚いて、前脚で鼻を拭う。

「どうしてお前は、僕に懐くんだろうね」

なんとなく、呟く。
きょとんとした目で、僕を見つめてくる。
お前を撫でてるこの手で、僕を見つめてくる。
お前を撫でてるこの手で、沢山の人間を殺したのに。
知ってか知らずか、沢山の血で汚れた手を、舐める。

「僕じゃなくても、大切にしてくれる人間はいるだろうに」

人間を殺して血に塗れた同じ手で、お前を撫でてるのに。

「僕は人を殺したい。いくらでもこの手を血に染めたい」

でも、出口の見えない飽くなき欲求の果てに、何が待ってるんだろう？
いつか破滅が待ってることは分かりきったことだ。
何事も、いつか終末を迎える。
それが遅いか速いかだけの話。
まぁ、いつか迎える終末を考えても仕方のないことだけど。
その破滅でさえも、楽しんでしまえばいい話だ。
杜塚　鼎という人生の、物語の一部として。
破滅でさえも、終末でさえも、新たな始まりにしてしまえばいい話だ。
それまでの間、無様に醜く舞ってやろうじゃないか。

「寝ようか」

にゃあ、と鳴いた。

十月二十七日　表日常

日常の中の非日常
正常の中の異常
何が異常で、何が非日常なのか
その境界線は曖昧だ

世間から見たら、“僕”という危険因子を孕んだ日常は、非日常なんだろう「う～……」

携帯の着信音で目を覚ます。
この着信音……あいつか。絶対出るまで切らないな。
枕に顔を埋めて、手をあちこちにやって携帯を探す。
そしたら、まだらの尻尾を掴んじゃって起こしちゃった。
枕の下に手を入れたら、やっと見つかった。

「もしもし……」

《おはよー鼎ちゃん！なんだまだ寝てたのか？元気か？》

「……波哉斗は無駄に元気だね」

《お前は無駄にテンション低いな》

「朝は低血圧気味なんだよ。起きたばっかりだからね……。正しくは起こされたんだけど。で、何？」

まぁ、分かりきったことだけど。

《今日遊ぼうぜ。たまには俺ん家で。葉月も誘ったぞ》

行動早いな。遊びのことに関しては。

「いいよ……。何時に行けばいい？」

《じゃあ十二時》

「分かった……。じゃあ十二時に」

《おう！じゃあな！》

携帯を閉じる。今何時だ？時計を見ると九時八分。

十二時くらいまで寝るつもりだったのに……。

まぁいいか……。断ったらこっちまで来るし。

とりあえず、起きよ……。「に～」

まだらが餌をねだってくる。起き上がって机の上に置いてるキャットフードを皿に入れる。

喜んで食べ始めた。水も持ってこないとな。

部屋のドアを開けたら、ちょうど兄さんも部屋から出てきた。

僕を見て表情を暗くする。

「おはよう兄さん」

「おはよ……」

無理矢理表情を明るくして言ってくる。
そうだよ。そうやって開き直ればいいんだよ。
兄さんを離すつもりはないんだから、委ねればいいんだ。
堕ちるところまで、堕としてあげるから。
兄弟で殺人者。それも素敵じゃないか。
歪な兄弟愛。そんな形もいい。

「兄さん、一人で考えて答えは出た？」

「まぁ……な……」

「そう。それで、僕と一緒になってくれるの？」

「……ああ」

「そう。嬉しいよ兄さん。自分で僕と一緒になるって言ってくれて」

自分で答えを出したんだ。もう逃げられない。逃がすつもりはない。
とりあえず、今日は快楽殺人者じゃない、普通の杜塚　鼎でいよう。
「おはよう、母さん」

まだらの水を取りにキッチンに入ったら、母さんが洗い物をしてた。
父さんはもう行ったのか。仕事か、女か。

「おはよう鼎。今日は早いわね。あ、薪沢君？」

「そう。波哉斗の馬鹿に起こされた。十二時にあいつの家に集合だって」

「じゃあ、ご飯すぐ用意するわね。あ、そうそう。鼎の作ってくれ

たハンバーグ美味しかったわ。ありがとね」
笑顔で言ってくる。つられて笑う。
「美味しかったんならよかった」
でも、朝からハンバーグってもたれないのかな。
「ご飯食べる前に、まだらに水あげてくる」
「その間にご飯用意しとくわね」
「はーい」
冷蔵庫からペットボトルを取って、二階に戻る。
ドアを開けたら喉が渇いてたのか、まだらが鳴きながら足にすり寄ってきた。
容器に水を入れると、すかさず飲み始めた。
まだ暑いから喉渇くよね。
今日の夜、少し外に出してやろうか。
自分から外に出ようとしないし。たまには出してやらないと。
リビングに戻ったら、朝食が既に用意されてた。
母さんが椅子に座ってニュースを見てる。
僕も座って見てみると、小学校で鞄に入ったバラバラの死体のニュース。
ああ……発見されたのか。第一発見者はジョギングをしてた男。
さぞかし驚いただろうなぁ。

「怖いわね。あんなに傷つけられるようなことしたのかしら。惨いことするわ」

「そうだね」

したんだよ、母さん。あの女は、母さんの愛してる男を奪おうとしたんだよ。

でもね母さん。その惨いことをしたのは、この僕だ。

それを知ったら、母さんはどんな目で僕を見るんだろう。

―杜塚　那奈瀬の視点―

一晩中眠れなかった。俺があいつを殺す場面をどうしても考えてしまって、眠れなかった。

あいつを、鼎の前で殺す？

確かに憎い。あの時は殺してやりたいほど憎かった。

けど、本気で殺そうなんて思ってなかった。

だけど、あいつを取るか友達のあいつを取るかって言われたら、助けるのは友達だ。

人の彼女に手を出して、挙げ句に奪った裏切り者を助ける義理はない。

けど、俺が選んだのは人殺しだ。

鼎が微笑みながら見てる前で、俺は鼎の指示通りに人を殺すんだ。

普通なら、警察に言うべきなのは分かってる。

でも、どこかで人殺しになってもいいと思ってるんだ。

弟の望む通りに人を殺す兄か。

ははは、それもいいかもな。傑作だ。

俺も、鼎のこと言えねぇな。

俺も、どこかがぶっ壊れてんだな。
はは、いいじゃねぇか。兄弟で殺人鬼。
いいさ、鼎。お前の望む通りに殺してやるよ。
お前の言う通り、狂ってやる。
俺を離さないって言ってたな。
絶対離すなよ？お前のものになってやるから。「じゃあ行ってきます」

母さんに向かって笑顔を浮かべる。

「いってらっしゃい。気をつけてね」

「うん」

その後ろで、二階から下りてきた兄さんが僕を見る。
僕を見て、少し笑った。
なるほどね。案外早かったな。
確かに兄さんは僕と違う。けど、僕の兄さんだ。血の繋がった歴とした兄弟。
血は争えないんだよ。血は、とても汚いんだ。
僕達は、あの汚い男の息子だからね。
僕達には、その血が殺人鬼という形で現れただけ。
とてもとても、醜くて穢らわしい形だよね。
でも、僕と兄さんにとっては美しい形になるんだよ。
新しい繋がりを結ぶ形。
誰にも理解出来ない、歪で穢らわしく美しい兄弟愛。
僕達さえ分かればいいんだよ。

「行ってくるよ、兄さん」

「ああ、気をつけてな」「やぁ葉月。昨日はよく眠れた？」
待ち合わせ場所に行ったら、葉月が先に来てた。
「おはよう鼎君。よく眠れたよ？」
「そう。死体、早速発見されたね」
そう言ったら、心配そうに表情を曇らせた。
「うん……大丈夫かな？」
「大丈夫だよ。髪の毛一本も残してない。誰かに見られてもいない。それに、僕達にはあの女に繋がる動機がない。僕達に直接繋がる証拠は残ってないよ」
「じゃあ、大丈夫だね」
「大丈夫だよ。じゃ、行こうか」
「うん」

波哉斗の家に着いた。インターホンを押したらなぜか、何かが落ちた音がしてきた。
波哉斗の奴、二階の部屋から慌てて出てきて階段から落ちたな。
相変わらず学習能力のない奴。
何回落ちれば気が済むんだろう。
玄関のドアが開いて、波哉斗の母親の里奈さんが出てきた。

里奈さん、なぜか誰にでも下の名前でしか呼ばせないんだよね。

「いらっしゃい、杜塚君。藤山君ははじめまして」

「こんにちは里奈さん。今日はお邪魔します」

「ちょ、母ちゃんがなんで出てんだよ！」

「そんなことはいいから部屋を片づけなさい！あんな汚い部屋で二人に失礼でしょ！片づけないんなら、今日はナスのフルコースよ！」

「ごめんなさい！片づけるからそれは勘弁して！鼎、悪いけどちょい待っててくれ！」

慌てて二階に上がっていった。相変わらず賑やかな家族だな。

昔は、無性に羨ましかった。

「ごめんなさいね二人共。ちょっとだけ待っててあげて。片づける間、紅茶でも飲む？」

「はい。いただきます」

里奈さんの紅茶、美味しいだよね。遠慮する理由はない。二階からしてくる騒がしい音を聴きながら、里奈さんが入れてくれた紅茶を飲む。

「ごめんなさいね、毎回毎回。あんな馬鹿に付き合わせちゃって」

「いえ。慣れてますから」

「あの子の親友が杜塚君と藤山君でよかったわ。あんな馬鹿に真面目に付き合ってくれるの、二人だけだもの」

「母ちゃん！馬鹿ってなんだよ！俺は馬鹿じゃない！アホなだけだ！」

どっちも一緒だろ。なんだよ、またそのふざけたTシャツ。
前には『なぁなぁ、教えてくれないか？何を？』

「波哉斗、回れ右」

「はいよ？」

『ロマンチックな夜を過ごすには、どうテクニックを磨けばいい？』
どう見てもふざけてるだろ。なんで下ネタが多いんだお前は。
まぁ、波哉斗スケベだもんな。
また新しいエロ本、見つかりそうだよね。
それを僕に見せようとしないでほしいよ。
女に興味ないんだよ僕は。

「波哉斗君、セックスうまくなりたいの？」

「ぶふっ！」

里奈さんが紅茶を飲みながら吹いた。
葉月、単刀直入すぎ。

「葉月、そういうこと言うのは僕達の前だけにしなよ」

「え？うん……？」

なんでか分かってないけど、まぁいいや。

「とりあえず俺の部屋行こうぜ」

「うん。里奈さん、紅茶ありがとうございます」

「あ、美味しかったです。ありがとうございます」

葉月が慌てて頭を下げた。

「どういたしまして」「……」

「なぁ鼎ちゃんよ、なんで口を半分開けたまま固まってんだ？」

口を半分開けたまま固まりたくもなるよ。

なんだよこの部屋。どうやったらこんな惨状に仕上がるんだ？

「波哉斗、これがお前の片づけた？」

「？十分片づいてるだろ？」

駄目だ……。これで綺麗なんて、どう見たら言えるんだ？

前よりも汚くなってないか？

ちょっとしたお菓子の紙屑とかは勿論、畳んでない服や教科書、漫画とかゲーム器がベッドの上に山積み。

足下に落ちてた飴を拾ったら、溶けてるし。

「ベッドに山積みが片づけた、ねぇ……」

そこら辺の価値観は、やっぱり合わないな。
これでゴキブリが出てきたら、一発ぶん殴ろう。

「それよりもさ、いとこからＡＶ借りたんだけどさ、見ねぇか？」

「見ないよドスケベ。自分だけ見てイってろ」

「なんだよ、鼎はそういうの見て興奮しねぇのか！？一人寂しくシたりしねぇのか！？」

「そんなの見なくても抜くことは出来るでしょ。女の裸なんて興味ないし」

「薄情者！葉月は！？」

今度は葉月に詰め寄った。なぜか顔を真っ赤にしてる。

「えっと、その……したことすらないの……」

「何を！？」

「ひ、一人でエッチ……」

今にも噴火しそうなほど顔を真っ赤にしてる。
僕でさえたまにするのに……。
獲物の悲鳴を思い出しながら、だけど。

「よし！俺がやり方教え……へぶしッ！」

頭にチョップを叩き込む。

「お前が教えるな。葉月がドスケベになったらどうすんのさ」

「いいじゃねぇか！男はスケベでちょうどいい！」

「黙れドスケベ」

今度は顔面に食らわせる。「……」

負けた。また負けた。なんで、なんで勝てないんだ！
ゲームだけは波哉斗に負ける。それが悔しい。

「ほれほれ鼎ちゃん、さっきまでの威勢はどこ行ったよ？」

波哉斗がニヤニヤ笑いながら見てくる。
くそ……。波哉斗なんかに負けるのがものすごく悔しい。

「鼎君、ゲームは駄目なんだね」

そんなほのぼのした笑顔で言うな！僕にとってはゲームであれ波哉斗に負けるなんて、死活問題なのに！

「俺に勝つんじゃなかったのか？」

「うるさい！次は負けるか！」

「……」

また完敗。ゲームだけは弱いんだな……。

「まだやるか～？」

「もういい……。どうせ負けるし……」

「そんな膝抱えて落ち込まなくてもいいだろ？葉月、一緒にやってみようぜ？」

「え？うん」

僕が使ってたコントローラーを渡して、僕は見つめる。

葉月、意外とうまい。波哉斗と互角にやってるし。

僕が下手なだけなのか……。

「なぁなぁ、鼎。好みの胸って何カップだ？」

「はぁ？」

「そんなすっとんきょうな声、上げなくてもいいだろ。で、何カップだ？俺はDカップ」

そんなの訊いてないし。

「葉月は？」

「え……えっと……、Cカップ……」

なんで、会話が下ネタばかりになってるんだろ……。

「で、鼎は？」

葉月まで僕を見てくる。何気に気になるのか！

答えなきゃいけないのか……？「……」

胸の好み……考えたことなかったな……。

「そんな眉間にシワ寄せて考え込むことか？」

考え込むことだよ。特に好みなんてないんだからさ。

でも、そんな答えじゃ波哉斗は納得しないだろうしな……。

葉月を見ると、ものすごい期待した目で見てくる。

こいつ……ムッツリスケベか。

「で、好みは？」

「そんなに僕の好みが気になるの？」

「うん。気になる」

波哉斗が言うよりも先に、葉月が口を開いた。

……ムッツリスケベ確定だな。

「好みって言われてもなぁ……」

うん、困る。

「ないとは言わせねぇぞ！なかったら男じゃねぇ！」

いや、なくても男はやっていけるし。

はぁ……とりあえず答えないと仕方ないな。
でも好みか……。女の胸を弄ったって、気持ちいいとは思えないしな……。正直、胸がロマンとか言ってるのが分からない。
そう考えたら、胸はあってもなくても同じだし、むしろない方が……。

「……貧乳」

「はっ？」

「だから、敢えて言うなら好みは貧乳！」

「なんだと！？お前、そんな顔してロリコンだったのか！？」

「違うわ！」

顔は関係ないし！断じてロリコンじゃない！

「お前、胸はロマンだろ！それを貧乳！つるぺたの何がいいんだ！？」

「うるさいわ！あんな脂肪の塊の何がいいんだよ！？馬鹿みたいに寄せて！痩せたいんなら胸を小さくすればいいんだ！あんな脂肪の塊に、どうやって興奮するんだよ！」

「お前こそ！胸が揺れてるのを見て興奮しねぇのか！男やめちまえ！」散々言い争って、喉がちょっと枯れてきた時だった。
里奈さんが麦茶を持って入ってきた。

「邪魔してごめんなさいね。大きな声を上げてたから、喉が渇くん

じゃないかと思って」

「母ちゃん、いちいち乱入してくんなよ。鼎が好みの顔してるからって」

「あら、いいじゃない。あんたと違って綺麗な顔してるんだもの。目の保養よ」

「ひでぇ！俺はブサイクってか！？」

「あら？違うの？」

面白い家族だよな。

葉月が笑いを堪えてるし。

「じゃあ、邪魔者は引っ込むわね。波哉斗、貧乳でも女はやっていけるわよ」

里奈さんが胸を押さえて波哉斗に笑いかけながら言い放った。

里奈さん、言っちゃ悪いけどつるぺただもんな……。

「母ちゃんつるぺただから巨乳がいいんだ！」

「今日はナスのフルコースね」

「ごめんなさい！許して母ちゃん！」

不気味に笑いながら部屋を出て行く。

本当、個性のある人だな……。

「僕のお母さんも、似たような人だったんだよね。思い出すなぁ」
葉月がしんみりと、でもほんわかとした笑顔を浮かべる。
「あんな母ちゃん持ってたら苦労するよなー」
「そう？楽しそうだけど」
「楽しくねぇよ！ナスのフルコースなんて誰が食べるか！」
重要なのはそこ？やっぱ、こいつは飽きないなぁ。「……」
波哉斗のベッドの下から何か覗いてると思って取ってみたら、女のビキニ姿が表紙のエロ本だった。
「きゃー！鼎ちゃん、人のエロ本覗くなんてえっち！」
「うっさいドアホ！」
鳩尾に拳を叩き込んどいた。ぬおおぉぉ……とか言いながら腹を押さえてる。しばらくのた打ってろ。
「……皆、こういうの見るんだ」
ぶつぶつ呟きながらエロ本に見入ってる。
多分、皆が皆見てなる訳じゃないよ。多分ね。
てか、ぶつぶつ呟きながら見入ってる姿が不気味なんだけど……。
この僕でさえ不気味に感じるなんて……。
なんか、葉月が分からなくなってきた。

「なぁ葉月！いいよなぁ！？水着姿いいよなぁ！？見えるか見えないかに燃えるよなぁ！？」

「え？う、うん……」

顔を真っ赤にしてる。

今日は、葉月の思わぬ一面を垣間見た日だな。「お邪魔しました」

「いえいえ。また来てね。紅茶用意して待ってるから」

「はい。里奈さんの美味しい紅茶飲みに来ます」

「あらぁ、やっぱり波哉斗の馬鹿とは違うわねぇ。嬉しいこと言ってくれるわ」

「馬鹿ってなんだよ、馬鹿って」

「そのままの意味よ」

「じゃあ、僕達はこれで帰ります」

「おぅ！明日学校でな！」

「うん、またね」

僕達に向かって大袈裟に手を振ってくるから、振り返す。

本当元気な奴。

「葉月、女に興味あるの？」

「え？……う、うん……」

顔を真っ赤にして、想像してんのかな。
女の裸に何も感じない僕の方がおかしいのか……。
見慣れすぎて、感覚がおかしくなってるのかも。

「エッチな人間は長生きするらしいよ」

「そ、そうなんだ。波哉斗君、長生きしそうだよね」

「あいつは百歳くらいまで生きるんじゃない？で、いつまで経ってもドスケベなんだよ」

「あはは……」

……僕もエッチな人間に入るのかな……。獲物が女なら、犯しながら傷つけることはよくあるし。
犯すっていうのは、少なからずエッチだからなんじゃ……。
まぁ、いいや。

「じゃあ、また明日」

「うん、またね」

曲がり角で別れる。
さて……どうなってるかな？「ただいま」

玄関のドアを閉めて声を上げるけど、いつもならドアを開けた時点で出てくるのに、母さんは出てこない。
やっぱり早いな。でも、僕には辿り着かない。

よっぽど悪運が強いのか。
確かに証拠隠滅したり工作するのに妥協は許さない。
でも、少なからず運に助けられてるのも事実。
うまいことアリバイがない人間がいたり、とかね。
まぁ、犯人になった人間が自殺したりしたこともあったけど。
容疑者自殺という形で、いくつかの事件は終わったな。
もしくは、逃亡。やってないのに逃げるなんてね。
リビングを覗いたら、母さんが啜り泣きをしているのが見えた。
母さんが泣くのは分かってたことだ。全部、予定調和の内。

「母さん、どうしたの？」

僕が全て仕組んだのに、全てを知らないフリをして、被害者を装う。

「鼎、帰ってたの？ごめんなさい、気づかなくて」

「それより、どうしたの？母さんが泣くなんて」

「なんでもないの。なんでも。……ごめんなさい。母さんもまだ、何がなんだか分からないの。気持ちが整理出来るまで、少しだけ待って」

「……うん」

ごめん、母さん。でも、母さんも少しは知っておくべきだ。
あいつがそういう男だってこと。
僕には、こういう方法しか思いつかなかった。
こんな、卑怯な手しか。「……僕、部屋に行ってるね。落ち着いたら、話してくれる？」

「……本当は話したくないの。でも、あなた達だって家族だものね……。話しても、お願いだからお父さん嫌いにならないで」

「……うん」

「……今朝、学校でバラバラ死体、ニュースであったでしょう？」

「うん」

「お父さんがね、容疑者の一人として上がってるの。容疑は晴れたみたいだけど。お父さん、その人と浮気してたの……」

「……」

「お願い、お父さんを責めないであげて。嫌いにならないで」

嫌いだよ。大嫌いだ。あんなろくでなし。仕事はちゃんとやってるんだろうさ。

でも、僕達を騙して複数の女と遊んでたんだよ？

母さんの気持ちに付け入って、母さん以外の女を抱いたんだ！

浮気なんて許さない。浮気なんて悪だ。

一生を共にする誓いを立てたくせに、他の誰かを選ぶなんて。

浮気は悪いことじゃない？どんな恋愛でも自由？ふざけるな。

犠牲になる家族の気持ちを知りもしないで。理解出来もしないで。

犠牲になる僕達の気持ちなんて、父さんには伝わらないんだ。

母さんがいくら涙を流したって、あの男には伝わらない。

それでも、あの男を愛してるんだね。

裏切られたのに。それでも信じるんだね。

信じたい気持ちは分かるよ。でも、何度も裏切られるに決まってる。

殺されたって、分かる訳ない。
母さん、母さんも僕のこと、やっぱり理解出来てないんだね。
この僕に、浮気をした父さんのことを嫌いにならないで、なんて。
ねぇ母さん、愛情は簡単に殺意に変わるんだ。
僕は母さんのためを思って、こういうことをした。
でも、母さんは全く分かってくれない。
どうして信じるの？なんでさ？
お願いだから気づいてよ。

僕が母さんに殺意を抱く前に。「……父さん、容疑が晴れて、どうしたの？」

「……仕事」

「そう。こんな状態になっても、仕事が大切なんだね」

仕事なのか、女なのか。どっちもか。
でも、その大切なものに、家族は組み込まれてない。

「……」

母さんは、寂しくないの？ずっと帰りを待ってるのに。
なのに、こんな形で裏切られて。悔しくないの？

「母さんは、寂しくないの？」

寂しくないなんて、嘘。
そんなに肩を震わせて、唇を噛み締めて僕の前では泣かないようにして。

「……母さんだって寂しいよ。あの人だって仕事で忙しくて帰って来れないことで、私と同じように寂しいんだって信じてたから、耐えてこれた。なのに、なのに、あの人は……」

言葉にすることで耐えられなくなったのか、涙が溢れ出した。
でも、僕がいるからなのか、涙を我慢しようとする。

「母さん、泣いてよ。我慢しようとしないでよ。母さんの弱いところ、見せてよ」

僕より少し背の低い母さんが、より小さく見える。
母さんが、顔をぐしゃぐしゃにして抱きついてきた。
あぁ、やっぱりこの人は可哀想な人だ。
優しくて我慢強くて、壊れやすい。
義理とはいえ息子の僕に、抱きついてくるほど。
そうしないと、壊れてしまうんだね。
愛情と殺意は紙一重。どうなるか分からない。
でも、大丈夫。僕が守ってあげるから。
あんな男のために、母さんを犠牲になんてさせない。
僕の中の禁忌を犯した時、それがお前の終わりだ。落ち着くまでソファに座らせて、僕も横に座る。
大分落ち着いてきたけど、まだ大粒の涙を流してしゃくりあげてる。
手を握ってみたら、握り返してきてくれた。
しばらく黙ったままそうしていたら、啜り泣きに変わってきた。

「母さん、落ち着いた?」

訊いてみたら、顔を真っ赤にして俯いた。

「ごめんなさい……これじゃあ、どっちが親か分かんないわね」

涙を手の甲で拭って、ようやく笑顔になった。

やっぱり、母さんは笑ってる方がいい。

涙は、似合わない。

「母さん、ご飯作るわね。夕飯遅くなっちゃう」

「無理しなくていいよ？」

「いいの。ご飯作ってる間は気が紛れるでしょ。作らせて、ね？」

無理矢理の笑顔。あの男は、母さんにこんな表情をさせてることを、これっぽっちも考えてないんだ。

「母さんさ、一度くらい父さんに感情ぶつけてみたら？母さんは我慢しすぎだよ。抱え込みすぎたら、後で後悔するかもしれないよ？」

僕は後悔してないけど。

僕は自ら堕ちたことに後悔はしてない。

でも、ひとつだけ後悔するとしたら、あんな両親の元に生まれて来たことが、唯一後悔することだ。

「そうね……。私がちゃんと意見しなかったことも、いけなかったのかもね……。ありがとう鼎。お父さんと話してみるわね」

「うん」「鼎、こうなることも分かってたのか？」

兄さんがそう聴いてきた。今は兄さんの部屋で涼んでる。

二人で、床に寝転んでる。

「勿論だよ。父さんが疑われることも、警察が母さんのとこに来て父さんの殺人容疑のことを話して浮気がバレることも、父さんにはアリバイがあるだろうから容疑が晴れることも」

「そこまで考えてたのか。俺にゃ無理だな」

「父さんへのちょっとした悪戯だよ。女遊びなんてするから殺人容疑なんてかけられる。そして、従順だった母さんに意見される。屈辱を味わえばいいんだ。まぁ、薄っぺらい頭しか持ってないから、またやるだろうね」

「……」

「それよりも兄さん、僕は今、兄さんが友達を殺すところが見たい」

起き上がって、兄さんの上に馬乗りになる。

「ねぇ、殺してくれるんでしょ？僕の物になってくれるんでしょ？」

あの笑みは、そういうことなんでしょ？

いきなり、僕の手を握ってきた。握った僕の手を、自分の首に持っていく。

「なってやるよ。お前が望む通りに殺してやる。だから、この手を離すなよ？それが、俺の身勝手な罪滅ぼしだ」

罪を重ねることで浄化する、罪滅ぼし。

罪には罪を。

お互いに罪を重ねることで紡ぐ、僕達の絆。

「やっと戻れたね。大好きだよ、兄さん」「ねぇ兄さん、復讐ってさ、ちょっと彩りを加えた方が面白いと思わない？」

「どういう……意味だ？」

馬乗りになったまま、兄さんの心臓の位置に手を当ててみる。
どくんどくんと脈打って、必死に命を維持しようとして。
可愛いねぇ。必死に動いている心臓を止めるのは、とても簡単だ。
ただ、ここにナイフを突き立てればいいんだから。
それだけで心臓は死に、酸素供給が途切れて生命維持が出来なくなった器官から、壊死し始める。
あぁ……そう考えたら器官器官では、死んでもまだ生きてるのか。
完全に個々が死ぬのは、全ての器官が死んでからかもね。
まぁ、強制的に命を終わらせるから、関係ないけど。

「兄さんを裏切ったのは、一人だけじゃないでしょ？」

「ああ……そういうことか……。お前の考えることって、つくづく末恐ろしくて、残酷で、面白いな」

「ふふ。だって、そうでしょ？女だって、兄さんを裏切ったことに変わりない。いたらだけど、女の前で今の彼氏を殺したら、面白いと思うんだけどなぁ」

「やっぱりお前は怖いよ。綺麗な怖さだ。禍々しいのに、綺麗。だからこそ、捕まえられたら、逃げられねぇんだろうな。で、それは俺が殺るのか？」

「勿論だよ」

「……仕方ねぇな。お前の物になるって言ったからな」

「昔から、兄さん僕のこと大事にしてくれたからね」

そして、僕はとどめの一言を放つ。

仲のよかった頃の、まだ無垢でいた頃に、何も考えていなかったけど嘘偽りのない、僕達の大切な言葉。

きっと今も、それは変わらない。

でも、兄さんを雁字搦めに縛ってしまう呪文。

「大好きだよ。兄さん」風呂から上がって、身体を拭いてる時だった。

兄さんが目の前で歯を磨いてる。

弟の裸を見るのが趣味なのか？

「……なんだよ？」

「いや、弟の裸を見るのが趣味な兄も、いるんだなって」

「あ～そうだな。お前結構細いし、顔も女に見えなくもないし、それで胸があったら最高だよな……って、俺はブラコンじゃねぇよ！」

「……僕が女だったら、兄さん禁断の愛に走ってそうだね」

「……否定出来ねぇな」

「否定しようよ、そこは」

なんか、そういう部分で兄さんは分からないな。

「それより、二人、言い争ってるね」

「……そうだな」

僕が風呂に入ってる間に、帰ってきたみたいだ。
母さんが泣きながら、父さんに訴えてるのが聴こえる。
でも、父さんからすまない、の一言さえない。
どころか、女がそんなことに首を突っ込んでくるな、とか言い出した。「関係ないことないでしょう！あの子達のことを考えてあげてよ！」

「俺だって仕事で疲れてるんだ！ただの遊びだ、何が悪い！お前達が暮らせているのは誰のおかげだと思ってる！家庭はお前がしっかりすればいいだろう！」

言葉をなくしたのか、母さんの啜り泣きが聴こえてきた。
あの人は、なんで自分のことだけ考えればいいのに。
そうやっていつも、僕達のことを考えてるのか……。
ああ……そういえば嬉しそうに話してたことあったな。
施設育ちで両親の顔さえ知らなくて、いつか家族を作るのが夢だったって。
その夢の結果が、あんな男に捕まるなんて。

「ねぇ兄さん」

「なんだ？」

「この家族は、最後にどういう結末を迎えるんだろうね」

「……」

「このまま現状維持？離婚？それとも……」

兄さんは複雑な表情をしたまま、答えない。

「僕達の終着点は、どこにあるんだろうね」

十一月十日　復讐と復讐と

目には目を、歯には歯を

やられたらやり返す

知り合いだろうが友達だろうが関係ない

当たり前だろう？あれから数日、学校では短期間の間に先生が二人も行方不明になったから生徒も騒いだけど、すぐに話題は別の殺人事件に移った。

その殺人事件は僕じゃないけど。

ほら、やっぱり身近にいた人間が死んでも、すぐ話題は変わる。忘れられる。

所詮、他人だから。

葉月も兄さんも心配してたけど、目撃者がいたとして記憶に残るほどの印象がなかったら、目撃したとしても意味がない。

ニュースで見てはっと思い出すような記憶なんて、いくらでも捏造されるんだから。

脳がいくらでも捏造しちゃうんだよ。

記憶って確かなようで、意外と曖昧なんだ。

他人の言葉ひとつで、簡単に作り替えられたりするんだから。

それに、誰もいなかったことは確かだ。

証拠は、残してない。絶対の自信がある。

「鼎、楽しそうだな。何かあったのか？」

「別に何もないよ。そういえばあの先生、男遊びが激しかったみたいだね」

「らしいな。同時に四人と付き合ってたんだろ？その中に……まぁ犯人捕まってよかったよな」

波哉斗が言葉を濁した。無理はない。友達の父親が容疑者として上がったんだから。

父さんの会社のイメージ、悪くなったりしないかな。

それを期待したんだけど。屈辱だろうし。

偽の犯人は昨日逮捕された。アリバイがないし、女に恨みがあったから。

当然否定してるけど、有罪になりそうだよね。

馬鹿だよなぁ。

―杜塚　那奈瀬の視点―

「はぁ……疲れたな」

「なぁにが疲れたな、だよ？」

呟いた瞬間、後ろから“友達”の伸晃（のぶあき）に抱きつかれた。

お前に、だよ。お前に“友達”として愛想振りまくの疲れるなって言ってんだよ。

殺すためには、近づいて油断させた方が効率的だって言われたからな。

鼎がどういう殺させ方を考えてるのか、俺は知らない。

「別に……いろいろあったからな」

「ああ～。お前んとこ、マジ大丈夫かぁ？」

ホント、イライラする。
母ちゃんと父ちゃんが離婚でもしたら面白いって、思ってんだろ。
てか、俺に謝りもしねぇよな。
彼女とのことだって、都合が悪くなったら黙りやがるし。
そのくせ、てめぇは彼女作ってやがるよな。
美人でスタイルのいい彼女。かなり入れ込んでるよな。
俺の時と同じように、他人から奪った物だけどな。
お前、他人の物じゃないと好きになれないんだろ？
だから、奪ってしばらく遊んで、飽きたら捨ててまた奪うんだろ？
鼎、こういうの好きそうだよな。
想像力の足しになんねぇかな？
あいつなら、いい具合にグロテスクなモノを創る気がするんだけどな。授業が全て終わって、掃除も終わって、先にロッカーに行ってた葉月と合流する。

「トイレ掃除で思い出した。母ちゃんがパート先でトイレ掃除やった時、下痢の着いたパンツが便器の中にあったらしいぜ」

「……パンツ脱いで、ノーパンで帰ったのかな？」

「さぁ……やっぱノーパンじゃね？」

てかよく、パンツをそのままに出来たよね。
恥ずかしくないのかな。恥ずかしくないからそのままに出来たのか。

「お母さん、そのパンツどうしたの？」

「ん？触るのが嫌だから、そのまま流した」

僕も迷わずそうするな。詰まるとか気にしてらんないし。

「つーか、その時の母ちゃんの愚痴すごかったんだよ。もし犯人が分かったらパンツ剥いでやるとか」

流石薪沢の母さん。やることがぶっ飛んでる。
本当にやっちゃったら猥褻罪になるだろうけど。
丁度僕達の前で信号が赤に変わる。
当然立ち止まる。
車が走り始めた。なんとなく一番目の前にいた車を見る。
その車の助手席に――

「あい、つ――！」

「鼎君？」

「今の車、あの車の助手席に僕を刺した犯人が！」「マジかよ！？俺の鼎ちゃんを刺した犯人だと！？」

「僕がいつ、波哉斗の物になったのさ？気持ち悪いから一度地獄行ってこい」

「冗談じゃねぇか。てか、マジで犯人？」

「言葉が悪かったかな。刺した犯人の兄だよ」

「まだ、この近くにいたんだね。まさかいるなんて思わなかった……」

葉月が、車の走って行った方向を見ながら呟く。

僕だって思わなかったよ。まさかこんな近くにいたとはね。
逃げ回ってるかと思ってたのに、意表を突かれた感じ。
でもこれで分かったじゃないか、近くにいること。
友達の車であろうナンバープレートの番号は覚えた。
友達の情報はきっと、弟の三嶋　祐介が持ってるでしょ。
警察から逃げてることは当然知ってるはず。それでも匿うんだから、
よっぽど親しいんでしょ。
僕に手を出した人間を匿う人間も、同罪。
ふふ、楽しみが増えた。
いつ逃げるか分からないから、三嶋　祐大とその友達を先に終わら
せて、兄さんの復讐はちょっと待ってもらおうかな。
どうしようかな……？
想像するのが楽しくて仕方ないよ。立ち止まってても仕方ないから、
とりあえず歩く。

「なぁ、警察に言った方がよくね？」

全く、波哉斗め余計なことを。
まぁ、それが当たり前か。あの二人をいたぶりたいから、警察に言
うなんて僕にとってはもってのほかだけど。

「確かにそうだけど、一番の手掛かりのナンバープレートの番号、
分からないからどうかな」

「でもさ、言うだけでも違うだろ？」

「……そうだね。帰ったら電話するよ」

「帰ったらかよ。まぁ、ちゃんとしろよ」

「分かってるよ」

「じゃあな～」

いつもの道で別れる。これからは、快楽殺人者の僕の時間。

「鼎君……祐大さん、どうするの……？」

葉月が、不安げに見つめてくる。

「決まってるじゃん。相応の報いは受けてもらうよ」

「そう……だよね」

「……まぁ葉月の知り合いだし、葉月に免じて命だけは取らないであげるよ」

「でも……」

「いいんだよ。葉月は気にしないで」

そう、命だけはね。殺せるのは何も、命だけじゃない。
方法は、いくらでもあるんだよ。
弱い人間は簡単に、壊れてしまうんだ。
使い物にならないガラクタに、してあげよう。「ねぇ葉月。僕はね、三嶋　祐介を許した訳じゃないよ」

「……うん」

複雑そうな顔をして、頷く。

「だから、これからすることは、三嶋兄弟への復讐だよ」

あの二人がいなければ、僕は記憶を無くすことはなかった。
こんな風にはならなかった。
あの二人も、苦しみを味わえばいい。

「明日の夜、葉月の家に行くよ。いいよね？」

葉月は僕に逆らわない。僕に見捨てられたくないから。
僕のことを信じて疑わないから。僕に、全てを委ねてるから。

「……うん」

ほら、僕に嫌われたくないから全て受け入れる。
それを利用する僕は、酷い人間だよね。
君は見捨てたりしないよ。君のことは気に入ってるから。

明日、三嶋　祐介から情報を訊き出して、加担させよう。
三嶋　祐大を壊すのは僕じゃない、三嶋　祐介。
兄にぞっこんなように見えるけど、あんなの形だけだ。
うまく丸め込めば、簡単に言いなりになる。
うまく、兄への憎悪を膨らませてやればいいんだから。「ただいま」

玄関で靴を脱いでたら、いつものように母さんが来た。
いつも通りの笑顔。それが、逆に寂しい。
何かを吹っ切ったような、諦めたような。

「おかえり。久しぶりにチーズケーキ作ってみたの。食べるでしょ？」

「勿論食べる」

着替えるのと鞄を置くために、一旦二階の僕の部屋に戻る。

「ね、美味しい？」

母さんが嬉しそうな顔をして訊いてくる。

「そりゃ美味しいよ。どんな店のより、母さんの作るケーキの方が美味しい」

「ま、嬉しいこと言ってくれるのね」

その後にぽつりと、そういえばあの人に美味しいって言ってもらったことないな、って漏らしたのを僕の耳は聴き逃さなかった。

全く、こういう時に耳がいいって困りものだな……。

「母さん、父さんと離婚とか、考えたことないの？」

思い切って、訊いてみた。

寂しそうな笑顔を浮かべる。

「はっきり言ってあるわよ。でも、そんなことしたら二人と親子じゃなくなって離れ離れになるもの。私、二人のことは息子だと思っ

てる。だから、あの人のことは諦めても、あなた達と親子でいたいの。鼎は、私が母親じゃ嫌？」

「嫌じゃないよ。僕にとっては、母さんが母親だよ」

初めて母さんの本音を聴いて、初めて、僕の本音を言った。「……って、言われたんだよ」

「そっかぁ……」

兄さんの部屋で僕はベッドに寝転びながら、兄さんはゲームをしながら夕食が出来るのを待つ。

「鼎、昔から母ちゃん子だったから、また母ちゃんがいなくなるなんて嫌だろ？」

「うん。嫌だよ。母さんがいなくなるなんて、嫌だ」

母さんのことは、大切だから。
やっと、僕達なりの形が出来上がろうとしてるのに。
それを、壊す者は許さない。誰であろうと。
でも、これからどうなるかなんて分からない。
だから、なるようになればいい。どんな状況になろうが、受け入れるだけだ。
そして、その結果に背いて報いるだけ。
結果に背いて、結果を殺してやる。

「なぁ鼎、お前が好きそうな話あるけど、聴くか？」

兄さんが、意味ありげに笑顔を浮かべる。

「勿論」「へぇ……いいねぇそれ。大好きだよそういうの」

「言うと思った」

嬉しいよ。兄さんがどんどんこっちに近づいてきてくれて。

「人の女を寝取らないと恋愛出来ない男か……。兄さんも災難だね。そんな男と友達になって」

「まさかそんな奴だとは思わなかったんだよ」

「まぁ、人間は見かけによらないからね。僕みたいな人間だっているんだし」

本当、見かけだけで判断したら痛い目見るよね。
それにしても人の女じゃないと恋愛出来ない男か……。
何も復讐は相手を殺すだけじゃない。
精神を殺すのも、立派な殺人。
正常な精神を保てなくなるだけじゃない。日常生活でさえ正常に送れなくなる可能性あるんだから。
下手したら完璧な廃人。
まぁ、どちらにしろ殺すんだけど。
そのために利用するのは女。
可哀想にねぇ。そんな男と付き合ったばっかりに。

「ねぇ兄さん、その男が前に付き合ってた彼女、知ってるの？」

「ん？知ってるも何も、あいつから自慢してくるからな」

「寝取られたことがショックで彼女を作れない兄さんに、自慢して優越感に浸りたいんじゃない？」

「かもな。で、何か思いついたのか？」

「まぁね。でも、僕の復讐相手も見つかったからさ。どっちを先に済まそうか迷ってるんだよね」「それって、お前刺した犯人見つかったのか？」

「僕を刺した張本人じゃなくて、兄の方だけどね」

利用してやるよ、三嶋　祐介。
僕は本当の意味で、お前を許した訳じゃない。
単なる保留に過ぎない。問題の先送り。
それを今から、解決するだけ。
お前は僕を殺しかけたんだ。お前はその事実に、押し潰されかけてる。
僕の言うことにお前は逆らえない。そうだろう？
殺しかけた僕に逆らう勇気も気力も、お前にはない。
だから利用してやるよ。お前の中に確実に存在する、憎悪と狂気。
今はまだ小さな憎悪でも、煽ってやれば大きく成長する。
どんな風に成長するのか、楽しみだな。

「でも、兄の方も子供殺してたんだろ？」

「そうだね。その子供の処理を、弟がしてたんだよ」

「よく分からん兄弟だな……」

「それを言ったら、僕達だって歪な形をした兄弟だよ」

「ま、確かにそうだな。普通に話してることが、殺人計画なんだしな」

「いいじゃん、これが僕達なんだから。兄弟で殺人鬼。歪な兄弟愛。すごく素敵だよ」

「警察にバレた時が怖ぇな」

「その時はその時だよ。一緒に逃げればいい。どこまでも」

僕達はやっと、戻れたんだから。
最後まで、一緒だよ。兄さんだって、一緒でしょ？

「兄さん、本当は僕を刺した犯人の場所、知ってるんだ」「……へっ？」

兄さんが目を見開いて素っ頓狂な声を上げる。
……そんなに驚かなくても。

「知ってんのに、そのまんまにしてんのか？」

あれ？兄さん怒ってる？

「ねぇ兄さん、怒ってる？」

「怒ってねぇよ」

「嘘吐き。僕の勝手な行動に怒ってるくせに」

ふざけて、背後から首に腕を回して抱きついてみた。
昔、よくやってたな。

「なんで、犯人を野放しにしてんだよ？」

「いつか使えるんじゃないかと思ってさ。もし兄を見つけたら、利用してやろうと思ったんだ」

「……で、見つけたから復讐してやろうってか？」

「そういうこと」

「もう、お前の頭の中にはシナリオが出来上がってんだろうな」

「勿論だよ。うまく事が運べばね。最後にどっちが殺るのか、楽しみだなぁ」

兄弟という情に負けて、結局殺れない可能性だってある。
その場合は……ふふ。

「どっちが殺るって？」

「ふふ。内緒」「ねぇ兄さん、とりあえず僕の方を先に終わらせちゃってもいい？」

「そりゃあいいさ。言っただろ？俺はお前の物だって」

「うん。そうだね。大好きだよ、兄さん」

大好き。その言葉がどれだけ兄さんを縛るんだろう？

僕が言うからこそ、兄さんは縛られて僕から逃げられなくなる。
兄さん自身も気づかないところで、どんどん縛られて。
それとも、気づいてるのに言わせてるのかな？
僕が大好きって言った時、必ず一瞬だけ表情が強張るもんね。
僕がこうなったのは自分のせいだって思い込んで、自分を責めてるの？
兄さんやあの女はきっかけで、堕ちたのは僕自身なのにね。
可愛いね、兄さんは。だから、離してあげない。

「ねぇ兄さん、昔みたいに言ってよ」

兄さんも、僕を縛ってみてよ。

「俺も大好きだよ、鼎」

ああ、これだ。ずっと欲しかった言葉。
僕は人間は大嫌いだ。そんな僕でも家族だけは、特別だったんだ。
本当は、あの時に言って欲しかった。
下から、母さんが呼んでる。

「母さん呼んでるね。行こっか」

「そうだな」

十一月十一日　三嶋　祐大・三嶋　祐介

さて、始めようか
復讐を
最後に誰が血に染まるのか
残酷？

知らないよ学校が終わって帰り道、三嶋　祐大を見つけた道の前で、いつものように信号が青に変わるのを待つ。

「なぁ、鼎ちゃんよ」

「……何？」

まぁ聴きたいことは分かってるけど、返事はしておこう。
返事しなかったらウザいし。

「昨日、ちゃんと警察言ったか？」

ほら、やっぱりだ。どうして波哉斗は、そんなに僕の心配するんだろう。高校から部活してないのは、少しでも僕と話すためだろう？
この高校に入ったのだって、僕を追っかけてきたようなもの。
先生にこの高校は無理だって言われてたのに、合格して皆を驚かせて。
お前のことだから、必死に勉強したんだろうな。
お前にとって、僕はそんなに大切な存在価値があるの？

「言ったよ。今頃捜査中じゃない？」

嘘、なんだけどな。

「そっか。ならいいや」

信号が青に変わる。もしかしたら今日も通ったりして、と思ったけど流石にそれはないか。

そう頻繁に出てたら、発見される可能性高くなるし。

でも木は森に隠せ、とも言うし案外事件を起こした地域にいて、目立たないようにしていれば発見されにくいのかも。

警察はこの近くにはいないと思って、捜査してるかもしれないし。

「波哉斗君、元気ないけどどうかしたの？」

「いや、そんなことねぇぞ？」

そんなことあるよ。いつも殴りたくなるくらいウザい奴が絡んでこないなんて、ある意味気持ち悪い。

「風邪でもひいたんじゃない？あ、でも馬鹿は風邪ひかないか……」

「なんでいちいち、俺は馬鹿扱いされなきゃなんねぇんだ！」

「馬鹿だから？」

「えーそうですよー。どうせ俺は馬鹿ですよーだ」

あ、いじけた。面白い奴。

「ま、また明日な」

「うん。また明日」

「じゃあね～」

……やっぱり様子が変、な気がする。
妙に思い悩んだ顔して、あいつらしくない。
波哉斗に、悩む顔は似合わない。あいつは笑ってないと。
今度、問い詰めてみよう。

「葉月、弟にはちゃんと言ってくれた？」

「うん。ちゃんと言ったよ？」

「じゃあ問題ないね」

計画を、本格的に実行に移そう。「それで……何を聴きたいの……？」

オロオロとしながら僕を見てくる。
本当、こうしてたらイライラするくらい貧弱だな。
葉月が、麦茶を出してくれた。

「君の兄の友達のこと。茶髪で口にピアスしてたかな……。背が低そうな感じだった。犯罪者になった友達を匿うくらい仲のいい友達、知らない？」

「……」

その顔、知ってるね。
でもまだ兄の愛を信じてるの？
ある訳ないだろう。こんなに経っても探さないのに。
心配なら、はぐれた時点で探すよ。
どうでもいいから、探さないんだよ。さっさと気づけよ。

「知ってるんでしょ？」

「し、知らない……」

「へぇ、まだ信じてるの？あんなに言ってあげてるのに。さっさと諦めないと、傷つけられるのは自分だよ？信じなければ、傷つけられることもないのに」

「……」

あーあ、手を握りしめて肩を震わせて、可哀想。

「君だって薄々気づいてるんでしょ？見捨てられたんだって。電話の一本も寄越さないのに」

「……」

「もういいや。僕が馬鹿だった。自分でなんとかする。こんなに貧弱な奴だと思わなかった。言っとくけど、僕はあいつに何するか分からないよ。殺すこと前提なんだから」

「ま、待って！」

ふふ、やっぱり食いついた。

「何？何かあるの？」

「こ、殺すって……」

「君の兄を殺すんだよ。僕は許さない。君は、どうして自分を見捨てた奴を庇うのさ？復讐してやろうと思わないの？」

「で、でも……たった一人の肉親なのに……」

「肉親だからって、なんでも許すの？裏切られても？利用されて裏切られたくせに。君がいつまで経っても殺らないから、僕が殺る。文句ないでしょ？恨みは晴らせるんだから」「そ、そんな問題じゃないよ……！」

そんな必死な顔して。そんなに必死で庇うほどの相手かなぁ？そこまで信じてたんなら、尚更許せないんじゃないかと思うんだけどなぁ。

普通なら、肉親という枷の方が勝るのかな。

まぁ、どうでもいいか。

「じゃあ、君はどうしたいの？このまま二度と来ない連絡を一生待ち続けるの？警察に怯えながら？」

悪戯で、立ち上がって三嶋　祐介の顎に指を添えてみる。

見下ろした方が、威圧感は増す気がするから。

「……どうしたいかなんて、分からないよ……。見捨てられたなんて信じたくない自分がいて、兄さんを恨んでる自分がいる。僕

は、兄さんにとって都合がいいだけの存在だったのかな……」

「決まってるじゃん。何回言えば気が済むのさ?」

「僕は、どうしたらいいんだろ……」

「それくらい自分で考えたら?僕より大人のくせに、それくらいも考えらんないの?」

あーあ、遂に泣き出した。自分の中で、何か納得したのかな?

「君の好きにしたら?兄の連絡を待つなり、このままびくびくしながら過ごすなり、移動するなり、いろいろあるでしょ。ただ、僕は復讐する。君が殺らないなら、僕がね」

復讐する、の一言にびくっと身体を震わせる。

「僕は……」

消え入るような声で三嶋　祐介は、僕がやるから、他の人に兄さんを渡したくない、と言った。

僕は笑う。座り直して、話を本題に戻す。

「それで、友達のこと、話してくれるよね?」

ゆっくりと微かに頷く。

住所とかも知ってたら、探す手間省けるのになぁ。

「その人……兄さんの幼なじみの向坂(こうさか)　歩(あゆむ)さん。実は、歩さんも、最初だけ子供殺しに関係してたんだ……」

へぇ……そういうことかぁ。三嶋　祐大が捕まれば自分も捕まる。
だから、匿ってるんだ。
犯人は二人だけだもんね。

「どういうこと？」

「兄さんが子供を攫ってきて殴り殺すのを、僕は怖くて止められなかったんだ……。死んじゃって、慌ててたところに歩さんが来て、埋めようってことになって……」

なるほどねぇ。で、結局埋める役は三嶋　祐介だけか。
一番気弱で貧弱そうで、その実一番危険で狂気を孕んだ人物。
扱いやすくてよかったよ。曲者だったら僕でも無理だ。
こういう人間ほど、何をするか分からない。
服従しているようで、いつ牙を剥いて噛み殺されるか分からない。
三嶋　祐介はそれがないからいい。

「それで？」

「歩さんとはそれ以来、僕は会ってない」

でも、そうやって気軽に会いに来るってことは、近くに住んでるってことだよな。
さしずめ、匿わないと警察に行ってお前のことも言うぞって脅したのかな。

「住所、知らないの？」

「……」「ねぇ、そこまで言って肝心なこと言わないの？君に

訊いた方が早いから、訊いてるだけなんだ。単なる時間短縮だよ。
君から言わないんなら、調べたらいいだけだ。その代わり、君の大好きなお兄さんは僕の物になるよ？」

ただ、その好きは本当に好きなのかな？
好きというより、単なる独占欲のような気がするけど。
唯一の肉親だから、目の届くところに置きたいだけ。
自分の物だけにしたいから、他の誰かに殺させたくない。
そうでしょ？
まぁ、言ったって気づかないんだろうけど。
その性格も、兄の傍にいるためにそういう性格になったとかだったりして。
兄に庇護してもらうために。
何も出来ないんじゃない。わざと失敗してるんだ。
兄に庇護してもらうために、出来ない奴だと思わせて。
けど、本人は気づいてない。
深層心理は、本人でさえ気づけない。

「駄目……兄さんは僕がいないと駄目なんだ……。君に、兄さんは渡さない。誰にも渡さない……」

「じゃあ、話してくれるよね？」

「ここから二駅離れた……」

本当に囚われてたのは、兄か弟か。
庇護しているつもりの兄と、そう仕向けた弟。
弟がいないと、兄は不安かもね。
頼りにしてくれる弟がいないから。
見下せる弟がいないと、不安で不安で仕方なかったりして。

見下してるようで、本当は見下されてるんだよ。
支配してるようで支配されてるのは、三嶋　祐大の方だ。
そして、扱い方を間違って牙を剥かれて噛み殺されるのか。
可哀想に。

―三嶋　祐介の視点―

話し終えて、杜塚君を見る。
満足そうに、微笑んでる。
本当、悪魔みたいだ。言葉巧みに兄殺しの道に引きずり込んで。
でも、僕がやらなかったら杜塚君は本当に兄さんを殺す気なんだろうな……。
他人を使えるところは徹底的に使って、自分が手を汚すところは徹底的に汚して。
どうしてこの子は、そこまで弱さを押し込めてひた隠しにしようとしてるんだろう。
弱い自分を殺すために、こうなるしかなかったのかな……。
随分傷ついた瞳をしてる。狂気の奥に隠した、親に虐げられた子供の瞳。
だとしたら、一番可哀想なのはこの子だ。
どんなことで傷つくかは、人それぞれ。弱いからこそ凶暴で。
弱いからこそ、強い。
でも、可哀想。こうなるしかなかったなんて。
誰かを傷つけてしか、得られない幸福なんて。
僕が、言えたことじゃないけど。
兄さんも、可哀想。
大丈夫。僕が迎えに行くよ。僕が守ってあげる。
他の誰かに渡さないから。
だって、兄さん、僕がいないと駄目でしょう？

いつも、最後には僕に縋るもんね。
ねぇ兄さん、いつものように犬みたいに媚びる兄さんを見せて？「じゃあ葉月、今日は帰るよ。ありがと」

「うん。でも、もういいの？」

「いいんだよ。もう十分、三嶋　祐介の狂気は煽った。後は、僕が何かしなくても自分で動くでしょ」

それを狙ってたんだけどね。今回は、僕が直接手を出さない。いわば傍観者。まぁ、そう仕向けたのは僕だけど。

「でも、祐介さんがそんなこと……」

ああ、分かってないなぁ葉月は。
そんなの、上辺だけの繕った部分しか見てないから分からないんだよ。
三嶋　祐大が死んだら、今度は僕や葉月に庇護してもらおうと思ってるのかな？
同じ犯罪者。僕達に犬のように付き従って。
その実、飼い慣らされてるのは僕達で。
でも、僕は飼い慣らされたりしないよ。
僕は誰かに媚びなきゃいけない犬なんかじゃない。
まぁでも、三嶋　祐介を飼い慣らすのは面白そう。

「出来ると思うよ。案外」

「そう……かな？」

「無害に見える人間ほど、凶暴だったりするからね。三嶋　祐介も

そうでしょ？今はおとなしいけど、兄と会わせたらきっと豹変すると思うんだけどなぁ」

飼い慣らしていたはずの弟は僕という侵入者によって、明確な意思を持った。
飼い慣らしているつもりで飼い慣らされていた兄は、どうするのかな……。
どうすることも出来ないんだろうな。

ー藤山　葉月の視点ー

「祐介さん。鼎君、帰ったよ」

「……そう」

怯えてるような表情は今、してない。
鼎君が来た時は、すごく怯えたような表情してたのに。
鼎君の言う通り、祐介さんは本当は……。

「ねぇ葉月。葉月も兄さんは僕を、捨てたんだと思う？」

俯きながら聴いてくる。表情がよく見えない。

「……祐介さんには悪いけど、やっぱりそうとしか……。連絡だって、来たことないし」

「そっかぁ……。やっぱりそうなんだ……。すごいなぁ、あの子は最初から見抜いてたんだ」

顔を上げる。ぞっとするほどの瞳で、どこかを見つめる。
喜悦？とでも言うのかな。まさしく狂喜。

「もう兄さんは僕なんかいらないんだね。僕を守ってくれないんだね」

本当なら、悲しみながら言うような言葉。なのに、楽しそうに嬉しそうに言う。

「もう僕に、媚びてくれないんだね。無様にすがりついて泣き喚いてくれないんだね」

祐介さんが、怖い。この人は……。

「僕を守ってくれない、僕に媚びてくれない兄さんなんて、もういらない。だから、迎えに行ってあげる。最後に、無様に泣き喚いて命乞いをする兄さんを、見せてよね」

この人は……。

「ねぇ葉月。葉月も見たいよね？あの傲慢な兄さんが泣き喚いて命乞いをするところ？」

否定したら、怖いことになる。
だから、頷いた。「で、うまくいきそうなのか？」

僕の部屋で、兄さんがベッドで寝転がりながら聴いてくる。
まだらが膝から飛び下りて、クッションの上で丸くなった。

「うん。後は弟がいつ動くか待つだけ」

「楽しそうだな」

兄さんも楽しそうだよ？

「楽しいよ？好きなことをやってるんだもん」

予想としては、やっぱり三嶋　祐介が三嶋　祐大を殺すんじゃないかと思うけど、予想外の出来事はいくらでも起きるからなぁ。

最後に誰が、誰を殺すんだろ。

三嶋　祐介は一人じゃ何も出来ない。だから、葉月を連れて行こうとするはず。

そこで、何が起きるか。

楽しみだなぁ。

「俺もどんどんお前に感化されてきてんだろなぁ……。最初はあんな奴とまた友人に戻るなんて嫌だったのに、復讐のためだと思ったら、何も知らないでへらへら笑ってるあいつを見ると、なぁんか面白くなってくるんだよなぁ」

「いいじゃんそれで。僕は嬉しいよ？兄さんがどんどんこっちに来てくれるから」

そして、儀式のように、僕達は二度とお互いを見失うことのないように、言葉という強固な鎖で縛り合う。

「大好きだよ、兄さん」

「俺も大好きだよ、鼎」あれから三日経った。いや、三日待った。

まだ、三嶋　祐介は動かない。

葉月に三嶋　祐介が動いたら知らせてくれって言ってるんだけど、葉月が僕に知らせない訳ないしなぁ。
訊いても、祐介さんは家でいつも通りにしてるよって言うし。
早く動いてくれないかなぁ……。
楽しみが先延ばしにされるの、一番耐えられないんだけど。

「鼎君、どうかした？」

「うん……早く動いてくれないかなぁって」

「……それなんだけどね、一人で行動してたみたいなの……。電車で祐大さんの友達の家まで行って、見張ってたんだって」

「そしたら？」

「祐大さん、友達の家で普通に生活してたみたい」

まぁ、ニュースで流されたのはなぜか似顔絵だけだし、写真じゃないから似てると思うだけで済むかもね。
まさか、身近にいる人間が犯罪者だと思わないだろうし。
日本全国単位では事件が多いと感じても、身近で事件が少ないと思うのは心理でしょ。

「それで、弟は？」

「祐大さん、日曜日だけは絶対外に出ないんだって。だから、日曜日に祐大さんのところに行くって……」

日曜……明後日か。明後日に、結果が分かる。楽しみだな。
それにしても三嶋　祐介、一人でも出来るんじゃないか。

いや、違うか。庇護してくれる人間がいるから、行動出来るのか。
どっちにしろ飼い慣らしてやるよ、三嶋　祐介。
お前は一生、犬でいるんだろう？
お前は僕には逆らえない。
噛みついたらどうなるか、分かってるよな？

―三嶋　祐介の視点―

葉月が学校に行ってる間に、歩さんの家に来た。
歩さんは大学生で一人暮らし。
周りの住人は、まるで生活感を感じない。
ホントに、住んでるのかな。
でも、兄さんはあそこにいるんだね。
兄さん、待っててね。日曜日に、迎えに行くから。
でもその前に、僕から兄さんを遠ざけるような人は、嫌い。
兄さんは僕の物だよ。
ねぇ、そうだよね？兄さん？
いつも威張ってるけど、どうしようもなくなったら、僕に頼るもんね。
外ではいいお兄さんとダメな弟だけど、中では一人じゃ何も出来ない兄さんと、面倒事を全て片づける弟だもんね。
兄さん、本当は心が弱いから、一人じゃなぁんにも解決出来ないもんね。
ほら、兄さんがいじめられた時に解決してあげたでしょ。
ちゃんと取り返してあげたでしょ？
兄さんにはいじめっ子と話し合ったって言ったけど、ホントはぶちのめしたんだけどね。
だから、それ以来いじめられてないでしょ？僕が怖いから。
兄さんは忘れてるかもしれないけど、僕は覚えてるよ？

なのに酷いなぁ、兄さんは。
僕は兄さんのためにいろいろしたのに、捨てるなんて。
子供埋めるの怖かったけど、兄さんのために頑張ったんだよ？
なのに、捨てるんだね。
僕がいないと駄目なくせに。
僕だって、兄さんなんかいらない。
今は、葉月や杜塚君がいるもん。
一人じゃ心細くて仕方なかったけど、あの二人がいるもん。

歩さんが出てきた。
歩さん、可哀想。巻き込まれちゃって。
でも、歩さんだって悪いんだよ～？
兄さんを隠すから。
歩さんだって連絡してくれなかったんだから、許さないからね。

一三嶋　祐介の視点一

歩さん見つけたぁ。
これからどこか行くのかな？
ごめんね？今日はどこにも行かせないよ。
僕に付き合ってもらうからね。
車の運転席に行って、開いた窓から声をかける。

「こんにちは、歩さん」

「ゆ、祐介……！？」

あは、そんなに怯えた顔してどうしたの？

あっ、そっかぁ、歩さんも僕のこと怖いんだ。
僕が面倒事を解決したとこ、見たことあるもんね。
偶然だったけど、歩さん、僕を見て逃げたもんね。

「入って、いいですよねぇ？」

「あ、あぁ……」

あらら、すっかり怯えちゃって。
助手席に座る。折り畳み式のナイフの刃を出して、歩さんの脇腹に突きつける。

「歩さん、人目のつかない場所に行ってください」

「行って、どうするんだよ……？」

「行ってください。ね？」

「分かったよ、分かったから……」

歩さん可哀想。
兄さんのせいで殺されちゃうんだもん。
でも、仕方ないよねぇ。
口は塞いどかないと、後々面倒そうだし。

一三嶋　祐介の視点一

人目のつかない場所って言っても、この近くでは駐車場くらいしかない。

あまり客の入らないスーパーの。一番奥で死角になる場所。
監視カメラもないから、証拠になるような物はこの車だけ。
指紋も後で拭き取らなきゃね。僕に繋がる物は残さないようにしないと。あの子達に迷惑かけちゃう。

「ゆ、祐介……こんなところで何するんだ……？」

「決まってるじゃないですかぁ。口封じですよぉ」

脇腹にナイフを強く押し当ててみる。
歩さんの前に、向き合う形で膝をつく。
そんなに冷や汗流して怖ーい顔しちゃって。
そんなに僕が怖いのぉ？
大丈夫。すぐ、終わらせてあげるから！

「な、なんでこんなこと……」

「兄さんへの見せしめですよぉ。後、あの子達に歩さんの口封じまでやらせるのは忍びなかったんで」

杜塚君はもしかしたら、僕がこうするって分かってるかもね。

「く、口封じって……」

「決まってるじゃないですかぁ。死んでもらうんですよ」

僕を押し退けて逃げようとする歩さんを押さえつけて、左目にナイフを突き刺す。

「あは、初めて殺しちゃった」

歩さん、痛かった？刃の根元まで一気に貫いて、中を抉るようにぐりぐり動かしてみたけど、痛かった？

ま、脳を貫いた時点で終わりだから痛くないよね。

さてと、持ってきたかなり大きめなスーツケースに歩さんを詰めなきゃ。

―藤山　葉月の視点―

「あれ……？祐介さーん？」

おかしいな。いつもなら帰ってきたらいるのに。

祐大さんのところに行ってるのかな……？

なんか、嫌な予感がする。

祐介さん、本当に祐大さんを殺すつもりなのかな……。

きっと、そうなるんだろうなぁ……。

そして、僕はただ見てるだけ。

なんだか鼎君の思い通りに、進んでいくね。

鼎君のシナリオでは僕は最後、どうなるんだろう？

「祐介さんおかえり。どこ行ってたの？」

祐介さんが帰ってきた。大きなスーツケースを持って。

「うん。歩さんのところにね」

やっぱり、そうだったんだ。祐介さん、なんだか楽しそう。

「行って、どうしたんですか？」

「兄さんへの見せしめだけど、歩さん個人にもちょっと腹が立ったから、ね」

スーツケースを少し開けたから、中を覗く。

「……っ！祐介さん、これ……！」

「歩さん。葉月、人間って案外、壊れやすいね」

「え……？」

「兄さんも、壊れやすいのかなぁ？それとも、既に壊れちゃってるのかなぁ？あは。ま、僕が壊れてるのは最初からだけど」

鼎君の言う通りだよ。祐介さんは危険だ。
普段は無害なのに、一度スイッチが入ったら危険になる。
でも、不思議と危機感はない。
僕に襲いかかったくるとかいう危機感は。
もう一度、死体を見る。
僕も、やっぱり壊れちゃってるみたいだ。「う～……」

携帯の着信音で目を覚ます。最近、着信音で起こされるのが多い気がするな……。
この着信音葉月だっけ。珍しいな。こんな時間にかけてくるなんて。

「もしもし……」

「もしもし、鼎君？」

「どうしたの？珍しいね」

「あのね……昨日……」

「へぇ……そっかぁ。見せしめにねぇ。案外さっくり殺れたんだね」

もしかしたら殺れないかもしれないと思ってたけど。

傷つけることはいくらでも出来るけど、いざ殺すとなると怖じ気づくかと思ってた。

で、仕方ないから僕が始末。

まだまだ観察力が足りないな。

もっと分析出来るようにならないと。

「祐介さん、すごく楽しそうにしてるよ」

「そう。ならよかった」

しばらく話して電話を切る。

うまくいってる。ちょっとした誤差はあるけど、予定通り。

明日の結果が楽しみだ。

このまま予定通りにいけば……。

ふふ。

一三嶋　祐介の視点ー

「〜〜〜〜♪」

鼻歌を歌いながら、歩さんの死体を風呂場でバラバラに切断する。
葉月が杜塚君のところに行ってる間に済ませないと。
別にいても大丈夫だろうけど、びっくりさせちゃうからね。
兄さん、今頃どうしてるかなぁ？
歩さんの家で、びくびく震えてるのかなぁ？
大丈夫だよ兄さん。明日、迎えに行ってあげるから。
不安も恐怖も、感じないようにしてあげるからね。
あは。僕って優しー。
さてと、いらない部分は袋に詰めてスーツケースに入れて、埋めよ。
あ、杜塚君ならバレない場所、知ってるかな？
今度訊いてみよ。
それにしても時間かかったなぁ。しかも随分汚しちゃったし。
身体も風呂場も、血だらけ。ちゃんと洗わなきゃ。
明日が楽しみだなぁ……。「葉月、どうしたの？」

いきなり葉月が来てびっくりした。

「うん。特に用事はないんだけど……」

「明日のことが心配？」

「ちょっと……」

心配なんて、何を心配する必要あるんだか。

葉月は成り行きを見てるだけでいいのに。予想外のことが起きなければ。

「なんで心配になるの？」

「なんでかな……分かんないけど、心配っていうか胸騒ぎがするの。だから、鼎君に会ったら落ち着くかなぁなんて」

僕に会ったらって……まぁ、ある意味僕に依存してるようなものだから、仕方ないのか。

「で、落ち着いた？」

「うん」

なんとなく、兄さんにするみたいに背後から首に腕を巻きつけてみた。

「か、鼎君！？」

「心配しなくても大丈夫だよ。何かあっても、僕がいる」

葉月、君はお気に入りだから。君が望んでも、手放してあげないよ。まぁ、僕から離れることはないだろうけど。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3503w/

異常快楽殺人症

2012年1月10日03時51分発行